

大分県文化財調査報告書第150輯

八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 八 坂 の 遺 跡

## Ⅱ

八坂中遺跡

2003

大分県教育委員会

大分県文化財調査報告書第150輯

八坂川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

# 八 坂 の 遺 跡

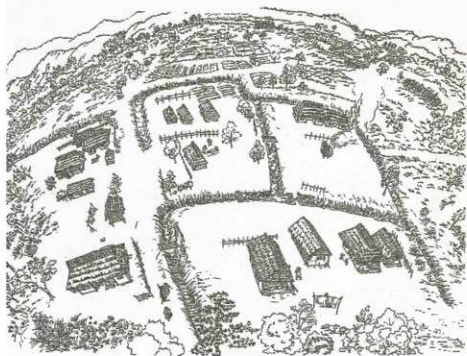
## Ⅱ

八坂中遺跡

2003

大分県教育委員会

# 八坂中遺跡



## 例 言

- 1 本編は、八坂川河川改修事業(金)工区の発掘調査報告書である。
- 2 本遺跡は、杵築市大字中のうち小字市など複数の字にまたがるため、大字名をとり八坂中遺跡とした。
- 3 報告で使用する方位はいずれも真北である。磁北は真北から偏差西 $6^{\circ} 0'$ である。
- 4 遺物の実測には調査員に加え、細川愛(県文化課嘱託)、上野淳也、浦井直幸、岩満聡(別府大学学生)、県文化課整理作業員が行った。
- 5 遺物観察表の作成は堤良子(県文化課嘱託)が行った。
- 6 本編の執筆は、第2章10(4)を清水宗昭、その他は後藤一重が行った。

# 目 次

|                   |     |
|-------------------|-----|
| 第1章 はじめに .....    | 1   |
| 1 調査の概要 .....     | 1   |
| 2 調査の体制 .....     | 2   |
| 第2章 遺構と遺物 .....   | 6   |
| 1 掘立柱建物跡 .....    | 6   |
| 2 井戸 .....        | 123 |
| 3 地下式土壇 .....     | 127 |
| 4 墓 .....         | 137 |
| 5 竪穴 .....        | 183 |
| 6 土壘 .....        | 187 |
| 7 溝と居館 .....      | 365 |
| 8 鍛冶関連遺構 .....    | 466 |
| 9 埋納遺構 .....      | 477 |
| 10 その他の出土遺物 ..... | 482 |
| 第3章 まとめ .....     | 508 |

# 第1章 はじめに

## 1 調査の概要

八坂中遺跡は、大分県杵築市大字中宇市ほかに所在する。

遺跡は八坂川が大きく蛇行する部分の右岸にあり、今回調査された八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡を併せた3遺跡のなかでは、最も上流に位置する。標高は3.5～4.2mを測り、現在は一部集落がみられるものの、大部分は水田となっている。試掘調査は平成8年11月から12月にかけて実施された。その結果、12世紀前後や16世紀代の遺物とともに、柱穴などがかなり広範囲で確認された。今回の八坂川河川改修工事は、蛇行部のショートカットということで、工事予定地内の保存措置をとることが現実的に困難であったため、遺跡の確認された地区全域を木調査することとした。本調査予定地区のうち新河川の築堤部については、平成9年8月の県土木建築部との協議で、調査対象から除外することがすでに決定していた。加えて、現河川に沿う部分についても、30mは安全対策の観点から調査対象外とする方針も確認されていた。しかし、平成9年9月の台風19号に伴う八坂川の洪水被害に伴い、地元住民から河川改修工事や埋蔵文化財調査に対する不満が出された。このため、その時点で未着手だった八坂中遺跡のさらに詳細な調査期間などを明らかにする必要が生じた。県文化課では、平成9年11月に補足のための詳細な試掘調査を再度実施した。それにより得られた遺構の範囲・密度などの細かな情報に加え、再試掘で明らかになった現地の土質データから現河川と調査区との間の控えについても再度検討を行い、木調査範囲（第1図）と平成11年5月末日終了の予定期日を決定した。このことについては、県土木建築部及び別府土木事務所との協議を経つうえで、地元説明会で地元住民に対し説明を行い、住民の理解を得た。

調査は、平成10年1月から開始された。当初の予定では、別府土木事務所が調査区北側に借地をし、その部分に表土剥ぎなどで出る大量の土を置くはずであった。しかし、借地交渉がまとまらず、やむなく表土剥ぎの排土は調査区と現河川の間に置くことになった。この場所は東西に長い調査区の東側にあたり、そのため運搬の距離がかなり長くなった。加えて、耕作土とそれ以外の上を分けて置く必要があったり、土留き場のエリア内に未買収地があるなど、表土剥ぎの作業に予定より多くの時間を費やした。

遺構の掘り下げ作業は、平成10年4月から開始された。河川改修工事に伴う掘削や植樹工事の関係から、調査区のうち農道から北側の地区、及び東半分の地区を優先的に終了し工事に引き渡す必要があったので、その部分から作業を進めた。このうち、東半分の地区は土質の関係から遺構の検出が難しく、何度も検出作業を繰り返した。その結果、多くの遺物とともに溝、土庫裏、掘立柱建物跡などを確認した。平成10年7月5日には八坂本庄遺跡の調査が終了したため、八坂本庄遺跡の作業員も本遺跡に投入し急ピッチの作業を進めた。これにより、平成10年10月2日にはこれらの地区の調査が完了し工事に引き渡した。

その後、ただちに調査区西半分の調査に取りかかったが、平成10年10月17日の台風10号により八坂川が昨年に続き洪水を起こし、調査区も甚大な被害を受けた。調査区は完全に水没し、冠水が氾濫ひいて調査を再開できるまで約10日間を要した。調査を再開しても、調査区内には大量の土砂が堆積しており、厚い部分では50cmほどにも及んだ。そのため、新たに土砂の排出などの作業が必要となり、調査に手戻りが生じることとなった。また、洪水時に現場のシートが流失し周辺の水田まで流れたため、掛け干し中の稲が倒れるなどのご迷惑もかけた。

調査区西半分からは、溝で区画された屋敷地が連続した状態で確認された。これらは、当初の予想よりもはるかに規模が大きく、広範囲に広がっていた。遺構の状況から、調査区の西側にも同様な屋敷遺構が及ぶ可能性が高いと考えられたため、試掘調査を行うこととした。この部分は、平成8年の段階で試掘が行われ、遺構がない地区としてすでに工事に引き渡された所であった。そのため、別府土木事務所と協議のうえ、平成10年11月

4日に試掘調査が実施された。その結果、家屋解体時の擾乱が著しかったものの、溝に囲まれる新たな屋敷遺構は確認されなかった。しかし、すでに検出している溝が調査区外に及ぶため、調査区西側に設けられている工事用の仮設道路に影響のない範囲で、可能なかぎり調査区の拡張を行った。

また、平成10年11月には残存状態の良好な鍛冶炉跡（S X 9）が検出された。周辺には、他の鍛冶炉の残骸や鍛冶関連遺物の廃棄土壌なども確認された。これまで県内で検出された鍛冶炉跡が、基底部のみを残すものだったのに対し、S X 9はほぼ完全な状態で残るものであった。そのため、平成11年1月には大澤正己氏の現地指導を受けるとともに、保存にむけての検討を行った。その結果、鍛冶炉跡の切り取りを行うことが決定され、平成11年3月9日に大分県立歴史博物館の山田拓伸氏の指導で切り取り作業が行われた。

調査は、台風10号の洪水被害による手戻りや大規模な溝遺構の検出で、平成10年10月から11月にかけては調査の進捗状況に懸念が投げかけられていた。しかし、厳冬期にもかかわらず作業員諸氏の献身的な努力があり、平成11年2月に入り遺跡全体の状況がほぼ明らかになってきた。そのため、平成11年2月13日には、八坂中遺跡の現地説明会を開催した。現地説明会には、200名以上の方々の参加があり盛況であった。

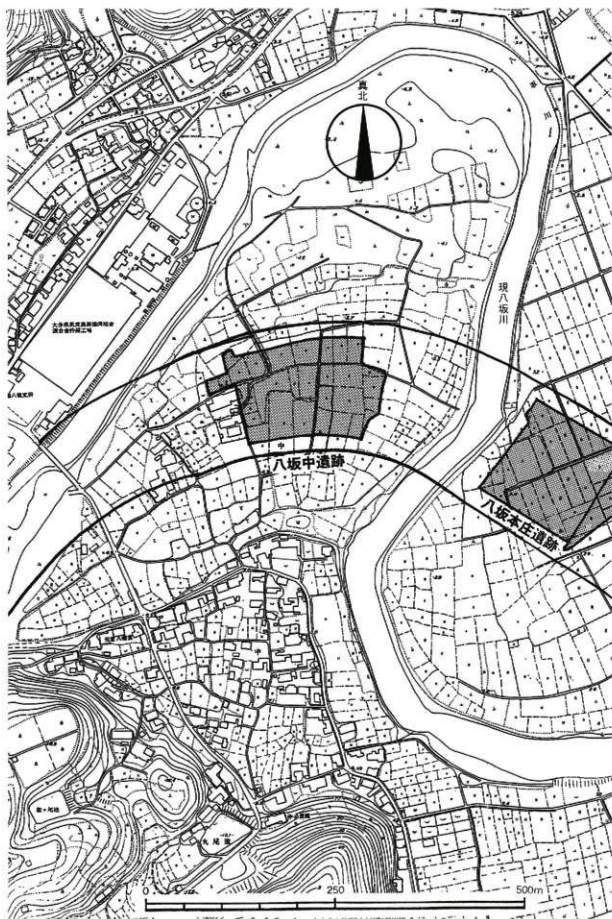
その後、最終的な詰めの調査を行い、平成11年3月26日をもって調査をすべて終了した。当初の予定であった平成11年5月末日よりも、2ヶ月も早い調査の終了であった。

調査面積は約23,000㎡の広大な面積に及んだ。その結果、11～12世紀紀代、13～14世紀代、16世紀代の3時期の遺構・遺物が主として確認された。さらに、このほかの時期の遺構・遺物も少数ながら確認されており、古代から中世における集落の状況が明らかにされたことになる。八坂川河川改修事業で調査された遺跡のうち、八坂久保田遺跡、八坂本庄遺跡は早い段階で水田化されていたが、八坂中遺跡では完全に水田化されるのが近世になってである。このように、八坂中遺跡は八坂地区のなかでも集落地として長く利用されてきており、八坂地区の集落の歴史を解明するには絶好の遺跡と言えよう。特に、16世紀代には方形の溝に囲まれた屋敷地が連続する状況が確認されているが、これはこの地域の中核を担う人々の歴史と考えられ、注目されるべきものである。

## 2 調査の体制

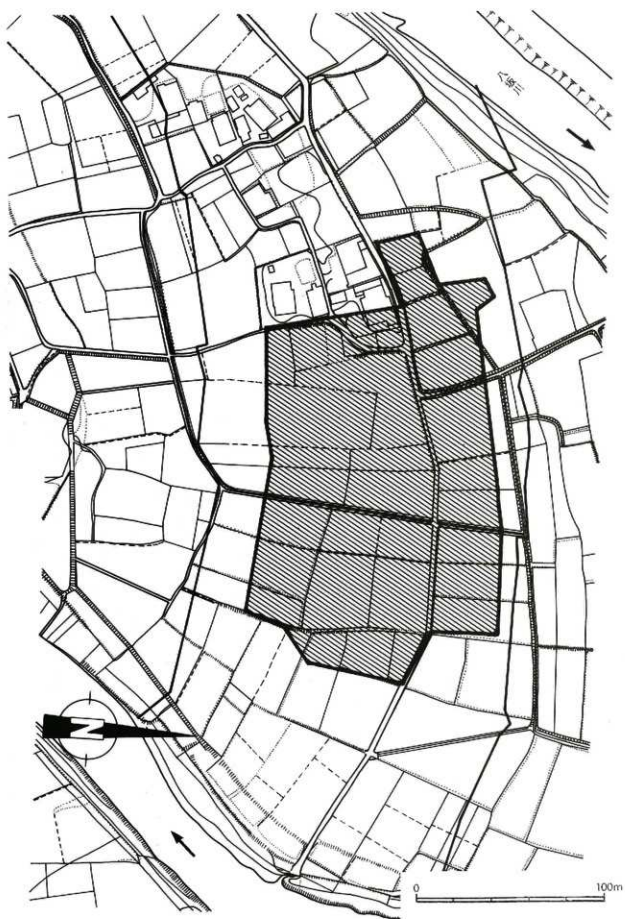
本調査時の調査体制は以下のとおりである（役職は調査時のもの）。

|       |             |           |
|-------|-------------|-----------|
| 調査主体  | 大分県教育委員会    |           |
| 調査指導員 | 別府大学名誉教授    | 賀川 光 夫    |
|       | 別府大学教授      | 後藤 宗 俊    |
|       | 別府大学教授      | 飯沼 賢 司    |
|       | たたら研究会会員    | 大澤 正 己    |
| 調査員   | 大分県教育庁文化課主査 | 後藤 一 重    |
|       | 同 主任        | 綿 眞 俊 一   |
|       | 同 主任        | 木 井 実     |
|       | 同 嘱託        | 濱 田 教 靖   |
|       | 同 嘱託        | 若 杉 竜 太   |
|       | 同 嘱託        | 東 保 存 奈   |
|       | 同 嘱託        | 平 野 真 由 美 |

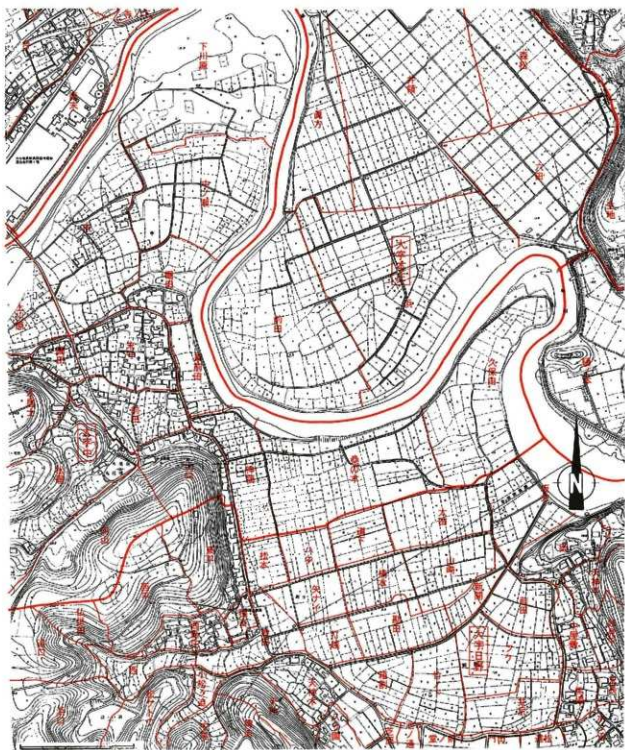


第1図 八坂中遺跡調査区位置図





第2图 八坂中通跡調査区位置图



第3图 调查区周边小学图

## 第2章 遺構と遺物

調査面積は約23,000㎡にも及び、多くの遺構・遺物が確認された。

時代的には、11～12世紀代、13～14世紀代、16世紀代の三つの時期が主体となるものと考えられ、このほか少数ではあるが、他の時期の遺構・遺物も検出されている。調査された部分は、現在全面的に水田化されているが、このような景観になったのは、元禄調査の成果から近世以降のことと考えられる。現在でも、調査区の西側に隣接する部分は屋敷地となっており、江戸時代には庄屋を勤めたという。以上のように、調査区周辺は、八坂地区のなかでは相対的に水田化が遅れた地区と推定される。言い換えれば、長い間集落地として利用されてきた地区として、八坂地区の歴史の一面を色濃く反映するものと推定される。

検出された遺構は、掘立柱建物跡164棟、井戸2基、土塙墓26基、地下式土塙4基、土塙196基、溝16条、鍛冶関係遺構10基などである。これまで県内において調査された同時期の遺跡のなかでは、遺構の質・量ともトップクラスである。これは、ただ単に調査面積が広いとか長い時代にわたるためだけでなく、遺跡の性格が強く反映されたものと考えられる。すなわち、各時代とも上位階層の屋敷地であったと推定され、そのような意味において本遺跡は、まさに八坂地区の中枢に調査のメスをいれたと言える。

出土遺物も多岐にわたり、土師質土器・小皿、土師器椀、内黒土器椀、瓦器椀、青磁・白磁・青花などの輸入陶磁器、各種瓦質土器、鉄製品、瓦などがみられる。その量は、通常の集落遺跡などに比べると圧倒的に多く、畿内や吉備地方からの搬入品もみられるなど、遺跡の性格を考えるうえで示唆的である。

以下、遺構と遺物の概要を述べる。

### 1 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は総計164棟が確認された(付図3)。

建物は、調査区の西端及び北東部など、一部にまったくみられない部分があるものの、ほぼ全体にわたり展開する。時期的には、11、12世紀代から16世紀代にわたるものと考えられる。このうち、調査区東半の地区には16世紀代の土塙などはまったく確認されておらず、この段階には完全に水田化されていたものと推定される。よって、東半の地区の建物は14世紀代を下限とするものであろう。これに対し、調査区西半では16世紀代には溝により画された畝間に連続して造営される。西半の地区には、11、12世紀代から14世紀代の遺構も確認されており、各時期の建物が重複しているものと思われる。建物を構成する柱穴から、時期を推定できる良好な遺物が出していない建物も多く、建物の配置や方位から時期を推定せざるをえないものも多い。

建物は、全体として際立って大型の建物ではなく平均的なものが多い。規模をみても、桁行3間のものが大部分をしめ、桁行4間に及ぶものは極めて少数である。梁行については、2間及び1間のものばかりで、3間の規模を有するものは確認されない。また、庇が付された建物についても非常に少なく、建物139が1棟確認されたのみである。このほか、建物祭祀に係ると推定される柱穴からの完形土器出土も、ほとんどの建物でみることができない。

以上のように、掘立柱建物だけみると、一般的な古代・中世の建物規模に比しても際立った印象は少なく、むしろ平均的な範疇の中にはいる。しかし、本遺跡における各々の時期の遺構・遺物をみた場合、平均的なものというよりは、むしろやや上位に位置付けられる状況が読み取れる。建物規模とその他の遺構・遺物から受ける印象にズレを感じるが、このあたりの状況こそが遺跡の性格を読み取る鍵になるとと思われる。

表1 八坂中遺跡掘立柱建物跡計測表

| 建物   | 主軸方位     | 乗行(m)                                      |  | 楕行(m)  | 身舎面積(m <sup>2</sup> ) |
|------|----------|--|--|--|-----------------------|
| 建物1  | N16° W   | 北側 3.9<br>南側 4.3                           |  | 東側 2.0+2.3+2.1(北から)<br>西側 4.1+2.2(北から)         | 27.52                 |
| 建物2  | N77.5° E | 東側 1.9+2.1(北から)<br>西側 2.2+1.8(北から)         |  | 北側 4.6+2.1(西から)<br>南側 2.15+2.4+2.15(西から)       | 27.47                 |
| 建物3  | N33° E   | 北側 3.7<br>南側 2.9+1.7(西から)                  |  | 東側 (2.7)+2.2+2.4(北から)<br>西側 4.5+2.4(北から)       | 24.42                 |
| 建物4  | N69° E   |  |  | 南側 1.5+2.1+1.8(西から)                            |                       |
| 建物5  | N9° W    | 北側 3.8<br>南側 3.5                           |  | 東側 1.9+2.1+2.1(北から)<br>西側 (4.1)+2.0(北から)       | 23.18                 |
| 建物6  | N27° W   | 北側 3.0<br>南側 3.0                           |  | 東側 2.3+2.4(北から)<br>西側 (2.3)+2.7(北から)           | 14.1                  |
| 建物7  | N68° E   | 東側 3.85<br>西側 3.85                         |  | 北側 2.35+5.65(西から)<br>南側 2.0+2.0+1.9(西から)       | 30.8                  |
| 建物8  | N67° E   | 東側 3.2<br>西側 3.1                           |  | 北側 (2.0)+4.2(西から)<br>南側 2.3+1.75+2.15          | 19.84                 |
| 建物9  | N26° W   | 北側 3.2<br>南側 3.2                           |  | 東側 2.1+1.8+2.0+1.8(北から)<br>西側 2.2+5.4(北から)     | 24.32                 |
| 建物10 | N19° W   | 北側 3.8<br>南側 3.8                           |  | 東側 2.4+1.9+2.2(北から)<br>西側 2.3+2.0+2.0(北から)     | 23.94                 |
| 建物11 | N24° W   | 北側 (2.8)+2.05<br>南側 2.65+2.2               |  | 東側 2.1+1.8+2.3(北から)<br>西側 (3.7)+2.5(北から)       | 30.07                 |
| 建物12 | N71° E   | 東側 3.9                                     |  | 北側 2.15+2.19(東から)<br>南側 2.6+3.3(東から)           |                       |
| 建物13 | N11° W   | 北側 (4.2)<br>南側 4.2                         |  | 東側 2.4+1.8+2.0(北から)<br>西側 (4.4)+1.6(北から)       | 26.04                 |
| 建物14 | N16.5° W | 北側 2.1+1.8<br>南側 4.0                       |  | 東側 2.3+1.9+2.4(北から)<br>西側 2.0+1.8+2.1(北から)     | 25.6                  |
| 建物15 | N10° W   | 北側 3.5<br>南側 3.5                           |  | 東側 (2.6)+2.3+1.9(北から)<br>西側 (5.0)+2.4(北から)     | 25.9                  |
| 建物16 | N46° W   | 東側 2.95<br>西側 2.95                         |  | 北側 1.9+2.3+2.9+2.0(西から)<br>南側 1.9+2.0+4.3(西から) | 24.485                |
| 建物17 | N90° W   | 東側 (4.0)<br>西側 4.0                         |  | 北側 2.1+4.4(西から)<br>南側 6.3                      | 25.2                  |
| 建物18 | N26° W   | 北側 3.9<br>南側 3.0                           |  | 東側 1.8+3.1+1.7(北から)<br>西側 (2.0)+2.0+1.6(北から)   | 19.8                  |
| 建物19 | N74° E   | 東側 2.5<br>南側 2.5                           |  | 北側 (2.7)+2.9(西から)<br>南側 2.3+2.4(西から)           | 11.75                 |
| 建物20 | N58° E   | 東側 3.9<br>西側 (3.8)                         |  | 北側 (3.75)+2.5(西から)<br>南側 1.7+2.2+2.2(西から)      | 24.375                |
| 建物21 | N49° W   | 東側 3.1<br>西側 3.1                           |  | 北側 2.1+2.0+1.8(西から)<br>南側 3.8+2.1(西から)         | 18.29                 |
| 建物22 | N73° E   | 東側 3.1<br>西側 3.1                           |  | 北側 1.9+2.19(西から)<br>南側 2.1+1.95(西から)           | 12.555                |
| 建物23 | N18° W   | 北側 4.0+1.0(西から)<br>南側 3.7+2.0(西から)         |  | 東側 2.2+3.6+2.8(北から)<br>西側 2.2+4.1+2.5(北から)     | 41.36                 |
| 建物24 | N68° E   | 東側 2.2<br>西側 2.2                           |  | 北側 2.1+1.9(西から)<br>南側 1.5+1.5(西から)             | 6.6                   |
| 建物25 | N22° W   | 北側 3.6<br>南側 (3.6)                         |  | 東側 2.8+4.7(北から)<br>西側 2.3+2.0+2.3(北から)         | 24.48                 |
| 建物26 | N22° W   | 北側 4.0<br>南側 4.0                           |  | 東側 1.7+1.7+1.8(北から)<br>西側 1.85+3.25(北から)       | 20.8                  |
| 建物27 | N20° W   | 北側 5.3<br>南側 5.3                           |  | 東側 3.4+2.9(北から)<br>西側 2.8+2.9(北から)             | 34.45                 |
| 建物28 | N15° W   | 北側 3.0<br>南側 3.0                           |  | 東側 2.0+2.3(北から)<br>西側 2.2+2.1(北から)             | 12.9                  |
| 建物29 | N11° W   | 北側 4.4<br>南側 4.4                           |  | 東側 5.2(北から)<br>西側 3.8+1.8+1.8(北から)             | 22.88                 |
| 建物30 | N22° W   | 北側 2.2+1.8(北から)<br>南側 2.1+1.8(北から)         |  | 東側 1.9+2.2(西から)<br>南側 4.1                      | 16.4                  |
| 建物31 | N18° W   | 北側 4.0<br>南側 4.0                           |  | 東側 1.8+2.2+1.8(北から)<br>西側 2.0+1.7+2.2(北から)     | 23.6                  |
| 建物32 | N23° W   | 北側 4.2<br>南側 4.2                           |  | 東側 4.2+1.8(北から)<br>西側 2.25+1.95+1.6(北から)       | 25.2                  |
| 建物33 | N19° W   | 北側 (2.5)+4.2(西から)<br>南側 2.5+2.2(西から)       |  | 東側 5.3+2.3(北から)<br>西側 (2.3)+3.0+2.3(北から)       | 35.72                 |
| 建物34 | N75° W   | 東側 1.8+2.2+1.8(北から)<br>西側 2.0+1.7+2.5(北から) |  | 北側 2.1+2.1(西から)<br>南側 (1.6)+2.2+2.0(西から)       | 25.35                 |
| 建物35 | N15° W   | 北側 4.9<br>南側 2.3+2.5(西から)                  |  | 東側 7.3+2.3+3.1(北から)<br>西側 2.3+2.2+3.2(北から)     | 36.96                 |
| 建物36 | N85° W   | 北側 2.8+3.0(西から)<br>南側 (2.5)+3.1(西から)       |  | 東側 3.8<br>西側 (3.8)                             | 21.28                 |
| 建物37 | N20° W   | 北側 3.9<br>南側 3.9                           |  | 東側 2.3+2.5+2.0(北から)<br>西側 2.3+2.3+2.2(北から)     | 26.52                 |
| 建物38 | N76.5° W | 東側 3.4<br>西側 3.4                           |  | 北側 2.1+2.0+2.1(西から)<br>南側 4.0+2.5(西から)         | 21.08                 |
| 建物39 | N15° W   | 北側 2.8<br>南側 2.8                           |  | 東側 2.0+2.0(北から)<br>西側 2.1+1.8(北から)             | 11.2                  |
| 建物40 | N19° W   | 北側 (1.8)+1.9(西から)<br>南側 (1.9)+1.8(西から)     |  | 東側 2.1+1.4+2.4(北から)<br>西側 (6.3)                | 23.31                 |
| 建物41 | N79° E   | 東側 (3.1)<br>西側 3.1                         |  | 北側 2.0+3.0(西から)<br>南側 1.9+1.9+(2.1)(西から)       | 18.29                 |
| 建物42 | N77.5° E | 東側 3.8<br>西側 3.8                           |  | 北側 4.0+1.8(西から)<br>南側 2.3+2.4+1.8(西から)         | 25.08                 |

| 建物   | 主軸方位     | 奥行(m)                                  | 桁行(m)  | 身舎面積(m <sup>2</sup> ) |
|------|----------|--|--|-----------------------|
| 建物43 | N76° E   |  | 北側 2.2+2.0+2.0(西から)                          |                       |
| 建物44 | N82° E   | 東側 3.8<br>西側 (3.5)                     | 北側 1.9+1.8+1.8(西から)<br>南側 (1.9)+1.7+1.8(西から) | 20.9                  |
| 建物45 | N10° W   |  | 西側 2.0+1.8+1.9(北から)                          |                       |
| 建物46 | N15° W   | 南側 2.6+…(東から)                          | 南側 ( )+1.8+2.1(北から)                          |                       |
| 建物47 | N73° E   | 東側 1.9+2.1(北から)<br>西側 (4.0)            | 北側 (3.3)+2.3+2.0(西から)<br>南側 2.8+1.6(西から)     | 30.4                  |
| 建物48 | N74° E   | 東側 2.2<br>西側 (2.2)                     | 北側 (1.8)+1.8(西から)<br>南側 1.7+1.7(西から)         | 7.48                  |
| 建物49 | N8° W    | 北側 4.1<br>南側 2.0+2.1(西から)              | 東側 1.9+1.8+2.0(北から)<br>西側 1.9+1.8+1.9(北から)   | 23.37                 |
| 建物50 | N13° W   | 北側 2.3+…(西から)<br>南側 2.2+…(西から)         | 西側 2.0+2.1+2.2(北から)                          |                       |
| 建物51 | N10° W   | 北側 3.8<br>南側 3.3                       | 東側 1.8+2.1+2.7(北から)<br>西側 1.9+2.0+2.0(北から)   | 19.47                 |
| 建物52 | N73° E   | 東側 3.8<br>西側 3.9                       | 北側 2.3+2.1+2.0(西から)<br>南側 2.1+2.1+2.2(西から)   | 24.32                 |
| 建物53 | N11° W   | 北側 2.1+1.9(西から)<br>南側 2.0+2.0(西から)     | 東側 2.0+1.8+2.0(北から)<br>西側 2.0+2.2+1.6(北から)   | 23.2                  |
| 建物54 | N84.5° E | 東側 3.3<br>西側 3.3                       | 北側 1.8+3.2+1.8(西から)<br>南側 1.6+2.9+2.0(西から)   | 21.45                 |
| 建物55 | N76° E   | 東側 2.9<br>西側 2.9                       | 北側 4.9<br>南側 2.0+2.2(西から)                    | 12.18                 |
| 建物56 | N74.5° E | 東側 4.7<br>西側 2.0+2.2(北から)              | 北側 2.1+3.8(西から)<br>南側 (4.1)+1.8(西から)         | 27.73                 |
| 建物57 | N75.5° E | 東側 4.1<br>西側 4.1                       | 北側 1.9+2.7+2.7(西から)<br>南側 2.5+2.0+2.3(西から)   | 27.88                 |
| 建物58 | N74° E   | 東側 1.9+2.0(北から)<br>西側 1.8+2.1(北から)     | 北側 2.4+2.9+2.9(西から)<br>南側 2.5+2.7+3.0(西から)   | 31.98                 |
| 建物59 | N85.5° E | 東側 3.7<br>西側 2.1+1.9(北から)              | 北側 1.8+2.2+1.8(西から)<br>南側 1.8+2.1+2.0(西から)   | 23.6                  |
| 建物60 | N80° E   | 東側 3.2<br>西側 2.9                       | 北側 4.3<br>南側 2.8+1.9(西から)                    | 13.76                 |
| 建物61 | N29° E   | 北側 3.9<br>南側 (3.8)                     | 東側 2.1+1.8+2.0(北から)<br>西側 2.3+3.8(北から)       | 22.42                 |
| 建物62 | N6° W    | 北側 3.8<br>南側 3.8                       | 東側 2.4+1.9+2.0(北から)<br>西側 3.0+3.5(北から)       | 24.7                  |
| 建物63 | N7° W    | 北側 2.3+2.2(西から)<br>南側 2.8+1.2(西から)     | 東側 3.0+2.7+2.0(北から)<br>西側 2.2+3.0+3.1(北から)   | 41.5                  |
| 建物64 | N8° W    | 北側 4.3<br>南側 2.1+2.0(西から)              | 東側 2.1+1.9+2.1(北から)<br>西側 4.0+2.1(北から)       | 26.23                 |
| 建物65 | N1° E    | 北側 4.4<br>西側 2.4+2.0(西から)              | 東側 2.1+2.8+2.5(北から)<br>西側 4.8+2.7(北から)       | 31.68                 |
| 建物66 | N8.5° W  | 北側 3.9<br>南側 3.8                       | 東側 2.7+3.9(北から)<br>西側 2.2+2.0+1.9(北から)       | 23.18                 |
| 建物67 | N33° W   | 北側 2.6<br>南側 2.6                       | 東側 1.8+2.0(北から)<br>西側 1.8+2.0(北から)           | 9.88                  |
| 建物68 | N76° E   | 東側 3.3<br>西側 1.4+1.9(北から)              | 北側 1.6+2.6(西から)<br>南側 4.2                    | 13.86                 |
| 建物69 | N84° E   | 東側 3.8<br>西側 3.5                       | 北側 2.0+2.0(西から)<br>南側 2.1+1.9(西から)           | 14                    |
| 建物70 | N8° W    | 北側 2.3+2.2(西から)<br>西側 4.5              | 東側 5.2+2.9(北から)<br>西側 2.8+2.8+2.7(北から)       | 38.45                 |
| 建物71 | N82° E   | 東側 1.3+2.0(北から)<br>西側 (2.2)+(2.7)(北から) | 北側 1.7+1.8+1.7(西から)<br>南側 1.8+1.8+(1.5)(西から) | 20.28                 |
| 建物72 | N84° E   | 東側 1.9+2.2(北から)<br>西側 (4.1)            | 北側 2.2+2.3+1.9(西から)<br>南側 (2.1)+2.8+1.7(西から) | 26.24                 |
| 建物73 | N81° E   | 東側 3.4<br>西側 3.4                       | 北側 1.8+2.0+1.8(西から)<br>南側 4.8+1.9(西から)       | 20.74                 |
| 建物74 | N4° E    | 北側 3.7<br>南側 3.7                       | 東側 2.3+3.7+2.0(北から)<br>西側 2.8+5.5(北から)       | 29.6                  |
| 建物75 | N78.5° E | 東側 2.0+2.0(北から)<br>西側 4.0              | 北側 2.1+1.6+2.2(西から)<br>南側 5.9                | 23.6                  |
| 建物76 | N87.5° E | 東側 3.3<br>西側 (3.2)                     | 北側 2.5+2.5+…(西から)<br>南側 (5.0)                | 16.5                  |
| 建物77 | N18° W   | 北側 2.1+1.9(西から)<br>南側 1.9+2.1(西から)     | 東側 4.2<br>西側 4.2                             | 16.8                  |
| 建物78 | N85° E   | 東側 2.0+1.8(北から)<br>西側 2.0+1.8(北から)     | 北側 5.4<br>南側 4.8                             | 20.52                 |
| 建物79 | N82° E   | 東側 2.0+1.9(西から)                        |  |                       |
| 建物80 | N8° W    |  | 東側 4.0+2.3(北から)                              |                       |
| 建物81 | N10° W   |  | 東側 2.0+2.2+2.3(北から)                          |                       |
| 建物82 | N11° W   |  | 西側 2.9+1.9+2.1(北から)                          |                       |
| 建物83 | N12.5° W |  | 西側 1.9+2.1+2.0(北から)                          |                       |
| 建物84 | N87.5° E | 東側 1.3+1.9(北から)<br>西側 (3.7)            | 北側 (8.5)<br>南側 2.7+2.7+1.2(西から)              | 24.05                 |
| 建物85 | N89° W   | 東側 3.0<br>西側 3.0                       | 北側 2.0+1.6+2.7(西から)<br>南側 2.8+1.9+2.2(西から)   | 18.9                  |
| 建物86 | N2° W    | 北側 2.1<br>南側 2.1                       | 東側 2.1+1.9+2.0(北から)<br>西側 6.0                | 18.6                  |
| 建物87 | N3° W    | 北側 3.5<br>西側 3.5                       | 東側 1.9+1.8+1.9(北から)<br>西側 2.0+1.7+1.9(北から)   | 19.6                  |

| 建物    | 主軸方位     | 梁行(m)                                | 桁行(m)  | 身舎面積(m <sup>2</sup> ) |
|-------|----------|--------------------------------------|--|-----------------------|
| 建物88  | N87.5° W | 東側 2.8<br>西側 2.8                     | 北側 2.5+3.8(西から)<br>南側 2.7+1.8+1.3(西から)       | 17.64                 |
| 建物89  | N89° E   | 東側 3.1<br>西側 3.1                     | 北側 1.9+2.0+2.1(西から)<br>南側 1.9+2.2+1.8(西から)   | 16.6                  |
| 建物90  | N1° W    | 北側 3.1<br>南側 3.1                     | 東側 1.6+3.0+2.2(北から)<br>西側 1.8+2.6+2.4(北から)   | 21.08                 |
| 建物91  | N87.5° E | 東側 3.3<br>西側 3.5                     | 北側 4.2+2.1(西から)<br>南側 2.1+2.2+2.2(西から)       | 22.05                 |
| 建物92  | N66.5° W | 東側 2.9<br>西側 2.9                     | 北側 2.4+2.0+1.9(西から)<br>南側 2.5+3.6(西から)       | 17.69                 |
| 建物93  | N86.5° W | 東側 2.7<br>西側 2.7                     | 北側 2.8+3.4(西から)<br>南側 2.8+2.2(西から)           | 13.5                  |
| 建物94  | N        | 北側 1.9+1.9(西から)<br>南側 2.2+1.6(西から)   | 東側 2.4+3.2(北から)<br>西側 2.2+3.0(北から)           | 23.18                 |
| 建物95  | N70° W   | 東側 4.4<br>西側 2.2+2.2(北から)            | 北側 3.8+2.2(西から)<br>南側 1.9+1.3+2.2(西から)       | 28.4                  |
| 建物96  | N8.5° W  | 北側 2.9                               | 東側 1.9+2.0+…(北から)<br>西側 1.7+2.3+…(北から)       |                       |
| 建物97  | N6° E    | 北側 2.1+2.0(西から)                      | 東側 1.4+…(北から)<br>西側 1.8+…(北から)               |                       |
| 建物98  | N4° W    | 北側 3.3                               | 東側 1.6+2.1+…(北から)<br>西側 1.8+1.9+…(北から)       |                       |
| 建物99  | N70° W   | 西側 1.8+…(北から)                        | 北側 1.8+3.0+2.2+…(西から)                        |                       |
| 建物100 | N85° E   | 東側 2.2+2.0(北から)<br>西側 4.2(北から)       | 北側 2.4+1.9+2.3(西から)<br>南側 2.2+2.1+2.2(西から)   | 27.72                 |
| 建物101 | N18° W   |                                      | 東側 1.3+1.6+1.6(北から)                          |                       |
| 建物102 | N82° E   | 東側 2.0+3.1(北から)<br>西側 (2.0)+2.1(北から) | 北側 (3.7)+2.0(西から)<br>南側 1.8+2.0+1.8(西から)     | 23.37                 |
| 建物103 | N3.5° E  | 北側 3.1<br>南側 3.1                     | 東側 2.4+1.8+2.0(北から)<br>西側 2.3+1.8+2.1(北から)   | 19.22                 |
| 建物104 | N82.5° W | 東側 2.3<br>西側 2.3                     | 北側 1.8+2.3+1.7(西から)<br>南側 1.8+2.2+1.8(西から)   | 13.34                 |
| 建物105 | N1° E    | 北側 3.1<br>南側 3.1                     | 東側 2.3+2.1(北から)<br>西側 4.4(北から)               | 13.64                 |
| 建物106 | N0°      | 北側 4.0<br>南側 4.0                     | 東側 2.3+2.7+3.8(北から)<br>西側 7.8                | 31.2                  |
| 建物107 | N86.5° E | 東側 1.5+1.8(北から)<br>西側 (1.5)+1.6(北から) | 北側 (2.0)+4.0(西から)<br>南側 2.1+2.0+1.8(西から)     | 18.6                  |
| 建物108 | N86° E   | 東側 3.0<br>西側 3.0                     | 北側 1.6+2.1+2.0(西から)<br>南側 3.8+1.8(西から)       | 17.1                  |
| 建物109 | N3.5° W  | 北側 1.8+1.3(西から)<br>南側 1.6+1.6(西から)   | 東側 3.6+2.2(北から)<br>西側 2.3+2.4(北から)           | 15.04                 |
| 建物110 | N87.5° E | 東側 3.4<br>西側 3.4                     | 北側 2.0+2.3+2.0(西から)<br>南側 2.1+2.2+2.0(西から)   | 21.42                 |
| 建物111 | N0.5° E  | 東側 (2.8)<br>西側 2.8                   | 東側 2.3+2.2+1.8(北から)<br>西側 (4.5)+1.8(北から)     | 17.92                 |
| 建物112 | N84.5° W | 東側 2.7                               | 北側 2.1+…(北から)<br>南側 2.0+…(北から)               |                       |
| 建物113 | N82° E   | 東側 2.9<br>西側 (2.9)                   | 北側 2.0+1.7+2.1(西から)<br>南側 (1.7)+2.1+2.0(西から) | 16.82                 |
| 建物114 | N60° E   | 東側 2.1+2.0(北から)                      | 北側 2.1+1.7+…(東から)<br>南側 1.8+…(東から)           |                       |
| 建物115 | N64° W   |                                      | 北側 2.0+1.8+2.2                               |                       |
| 建物116 | N89.5° W | 東側 4.0<br>西側 4.0                     | 北側 1.9+2.1+2.3(西から)<br>南側 1.8+2.3+2.1(西から)   | 25.2                  |
| 建物117 | N73° W   | 東側 3.9<br>西側 (3.9)                   | 北側 2.0+2.1(西から)<br>南側 (2.1)+2.0+…(西から)       | 15.99                 |
| 建物118 | N67.5° W | 東側 2.0+2.0(北から)<br>西側 4.0            | 北側 1.8+2.1+2.2(西から)<br>南側 2.0+1.8+1.8(西から)   | 22.4                  |
| 建物119 | N68° W   | 東側 3.2<br>西側 (1.7)+1.5(北から)          | 北側 (3.5)+2.1<br>南側 1.8+1.8+2.6(西から)          | 17.92                 |
| 建物120 | N11° E   | 北側 1.9+1.8(西から)<br>南側 1.8+1.9(西から)   | 東側 5.2<br>西側 5.3                             | 19.61                 |
| 建物121 | N71° W   | 東側 1.6+1.1(北から)<br>西側 1.6+1.1(北から)   | 北側 1.9+1.9(西から)<br>南側 1.8+2.0(西から)           | 12.92                 |
| 建物122 | N23° W   | 北側 2.2+2.1(西から)<br>南側 4.3            | 東側 3.7+2.0+2.3(北から)<br>西側 3.8+2.2+2.4(北から)   | 36.12                 |
| 建物123 | N71° W   | 東側 (3.0)<br>西側 3.0                   | 北側 (7.8)(西から)<br>南側 2.4+2.9+2.5(西から)         | 23.4                  |
| 建物124 | N51° W   | 東側 4.3<br>西側 1.7+2.8(北から)            | 北側 1.9+4.9(北から)<br>南側 2.2+3.0(西から)           | 27.52                 |
| 建物125 | N39° E   | 北側 2.0+2.0(西から)                      | 西側 2.2+…(北から)                                |                       |
| 建物126 | N72.5° W | 東側 3.0<br>西側 3.0                     | 北側 1.9+2.1+1.8(西から)<br>南側 1.8+1.7+2.0(西から)   | 16.5                  |
| 建物127 | N50° W   | 東側 3.1<br>西側 3.1                     | 北側 1.8+2.1+2.0(西から)<br>南側 2.0+1.8+1.8(西から)   | 19.53                 |
| 建物128 | N50° W   | 東側 3.4<br>西側 (3.4)                   | 北側 2.3+2.6+2.2(西から)<br>南側 (4.0)+2.2(西から)     | 24.14                 |
| 建物129 | N64° W   | 東側 3.3<br>西側 3.3                     | 北側 4.2+1.8(西から)<br>南側 4.0+2.0(西から)           | 19.8                  |
| 建物130 | N66° W   | 東側 2.4+2.3<br>西側 2.2+2.5             | 北側 2.5+1.8+1.8(西から)<br>南側 2.2+1.9+2.0(西から)   | 28.67                 |
| 建物131 | N63.5° W | 東側 1.8+2.1(北から)<br>西側 1.7+2.2(北から)   | 北側 2.3+1.1+1.8(西から)<br>南側 2.2+2.3+1.1(西から)   | 24.18                 |

| 建物    | 主軸方位     | 梁行(m)  | 桁行(m)  | 身舎面積(m <sup>2</sup> ) |
|-------|----------|--|--|-----------------------|
| 建物132 | N66° W   | 東側 2.4+1.1(北から)<br>西側 2.0+2.2(北から)                                       | 北側 2.1+2.4+1.7(西から)<br>南側 1.7+4.8(西から)   | 26.66                 |
| 建物133 | N78.5° W | 東側 1.9+1.9(北から)<br>西側 3.8  | 北側 6.4<br>南側 3.8+2.5+2.1(西から)  | 24.32                 |
| 建物134 | N90° W   | 東側 4.5<br>西側 1.9+1.9(北から)  | 北側 5.3+1.7(西から)<br>南側 2.0+3.6+2.0(西から)   | 26.8                  |
| 建物135 | N88.5° W | 東側 3.4<br>西側 3.4   | 北側 1.8+2.7+1.6(西から)<br>南側 1.9+2.4+1.6(西から)   | 20.06                 |
| 建物136 | N89° W   | 北側 1.5+2.0(西から)<br>南側 1.9+2.0(西から)                                       | 東側 3.4<br>西側 3.4   | 17.18                 |
| 建物137 | N88° W   | 東側 2.3+2.1(北から)<br>西側 2.2+2.2(北から)                                       | 北側 2.0+2.1+2.3(西から)<br>南側 2.0+2.1+2.2(西から)   | 27.28                 |
| 建物138 | N12° E   | 北側 3.3<br>南側 3.3   | 東側 2.0+2.0(北から)<br>西側 2.1+1.9(北から)   | 13.2                  |
| 建物139 | N78.5° W | 東側 1.9+2.2(北から)<br>西側 2.0+2.2(北から)<br>南側 3.5+3.3(北から)<br>西側 3.2+3.0(北から) | 北側 2.2+3.0+2.0(西から)<br>南側 2.2+2.9+2.1(西から)<br>北側 3.2+2.6+3.2(西から)<br>南側 3.1+2.8+3.1(西から) | 30.24                 |
| 建物140 | N74° W   | 東側 4.0<br>西側 (2.0+2.0(北から))  | 北側 (2.7+2.3+2.5+2.4(西から))<br>南側 2.4+2.2+2.4+2.4(西から)                                     | 37.6                  |
| 建物141 | N13° E   | 北側 1.8+1.3(西から)<br>南側 1.5+1.6(西から)                                       | 東側 2.0+2.3(北から)<br>西側 2.0+2.3(北から)   | 13.33                 |
| 建物142 | N84° W   | 東側 3.2<br>西側 3.2   | 北側 1.9+2.0+2.1+2.3(西から)<br>南側 2.0+2.0+2.0+2.2(西から)                                       | 26.24                 |
| 建物143 | N12.5° E | 北側 2.2+2.2(西から)<br>南側 2.3+2.2(西から)                                       | 東側 2.5+2.6+2.8(北から)<br>西側 2.5+5.5(北から)   | 33.88                 |
| 建物144 | N80.5° W | 東側 5.1<br>西側 5.1   | 北側 2.1+1.7+3.4+2.2(西から)<br>南側 1.5+1.9+3.0+1.8(西から)                                       | 41.82                 |
| 建物145 | N88.5° W | 東側 3.2<br>西側 3.1   | 北側 3.8<br>南側 2.1+1.2(西から)  | 12.16                 |
| 建物146 | N16° W   | 北側 1.7+2.1(西から)<br>南側 2.0+1.8(西から)                                       | 東側 4.0<br>西側 4.0   | 15.2                  |
| 建物147 | N68.5° W | 東側 4.3<br>西側 2.1+2.2(北から)  | 北側 1.9+2.4+1.7(西から)<br>南側 2.2+2.2+1.7(西から)   | 25.8                  |
| 建物148 | N2.5° W  | 北側 (3.0)   | 東側 (2.4+4.8(北から))<br>西側 3.5+2.4+2.1(北から)   | 21                    |
| 建物149 | N85° E   | 東側 4.2<br>西側 4.1   | 北側 2.0+2.2+1.8(西から)<br>南側 2.1+2.2+2.0(西から)   | 24.5                  |
| 建物150 | N86° E   | 東側 3.1<br>西側 1.5+1.6(北から)  | 北側 2.2+2.1(西から)<br>南側 2.0+2.3(西から)   | 13.33                 |
| 建物151 | N86° E   | 東側 2.2+2.1(北から)<br>西側 2.2+1.9(北から)                                       | 北側 2.1+1.8+2.2(西から)<br>南側 2.1+4.0(西から)   | 26.23                 |
| 建物152 | N7.5° W  | 北側 3.7<br>南側 3.7   | 東側 2.0+2.0+1.1(北から)<br>西側 2.1+1.2+2.4(北から)   | 22.94                 |
| 建物153 | N90° W   | 東側 2.1+1.9(北から)<br>西側 4.1  | 北側 2.2+2.4(西から)<br>南側 1.9+2.8(西から)   | 18.8                  |
| 建物154 | N89° W   | 東側 3.9<br>西側 2.1+1.8(北から)  | 北側 3.0+2.0+2.3(西から)<br>南側 3.0+2.0+2.4(西から)   | 29.25                 |
| 建物155 | N88° E   | 東側 2.7<br>西側 2.5   | 北側 2.3+2.8+2.4(西から)<br>南側 1.8+2.1+2.4(西から)   | 19.71                 |
| 建物156 | N57° E   | 東側 2.1+2.1(北から)<br>西側 4.0  | 北側 2.4+4.8(西から)<br>南側 6.4  | 26.24                 |
| 建物157 | N85° E   | 東側 3.2<br>西側 2.9   | 北側 2.1+2.5+1.1(西から)<br>南側 2.2+2.1+2.2(西から)   | 18.85                 |
| 建物158 | N90° E   | 北側 3.9<br>南側 3.9   | 東側 (0+2.8+3.5(北から))<br>西側 2.9+2.9+3.5(北から)   | 36.27                 |
| 建物159 | N87° E   | 東側 3.9<br>西側 1.9+(2.0(北から))  | 北側 1.9+1.7+2.1(西から)<br>南側 (1.3)+2.1+2.3(西から)   | 22.23                 |
| 建物160 | N83.5° E | 東側 1.8+1.3(北から)<br>西側 1.8+1.3(北から)                                       | 北側 2.0+2.0+1.8(西から)<br>南側 2.0+1.9+1.8(西から)   | 21.46                 |
| 建物161 | N55° E   | 東側 3.5<br>西側 3.5   | 北側 2.0+2.3+2.4(西から)<br>南側 2.3+2.0+2.2(西から)   | 23.45                 |
| 建物162 | N41° W   | 北側 2.1+1.9(西から)<br>南側 2.0+2.0(西から)                                       | 東側 2.9+2.0(北から)<br>西側 3.0+1.9(北から)   | 19.6                  |
| 建物163 | N1° E    | 北側 2.2+1.7(西から)<br>南側 2.5+1.6(西から)                                       | 東側 1.8+4.1(北から)<br>西側 2.0+4.2(北から)   | 24.18                 |
| 建物164 | N82° E   | 東側 2.9<br>西側 2.9   | 北側 2.1+1.9(西から)<br>南側 2.2+1.8(西から)   | 11.6                  |

### (1) 建物1

建物1(第4図)は、調査区南西隅の居館1の内部に位置する。建物の主軸は、居館1の溝と同様な方位をとる。建物の北側が、建物2と重複する。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N16^{\circ}W$ で、建物規模は梁行1間、桁行3間である。桁行のうち西側については、北から2番目の柱穴がみられない。身舎面積は $27.52m^2$ を測り、本遺跡の竪立柱建物のなかには平均的な規模である。

### (2) 建物2

建物2(第4図)は、建物1同様居館1の南西隅に位置し、居館1の溝と同様な方位をとる。位置的に建物1と重複する。

建物は平面長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N77.5^{\circ}E$ である。規模は梁行2間、桁行3間で、北側桁行の西から2番目の柱穴がみられない。

身舎面積は $27.47m^2$ で、建物1と同様な規模を有する。

### (3) 建物3

建物3(第5図)は、居館1の内部にあり、建物1及び建物2の北側に位置する。建物の主軸は、建物1などとは $45^{\circ}$ 振っており、居館1の溝とは方位を異にする。

建物は平面長方形を呈するもので、南東-北西に主軸をもつ。主軸方位は $N33^{\circ}E$ で、建物規模は梁行1間、桁行3間である。北東隅の柱穴は土層49に切れ、欠いている。また、南西側桁行の北から2番目の柱穴がみられない。身舎面積は、 $24.42m^2$ を測る。

### (4) 建物4

建物4(第5図)は、居館1の中央からやや南に寄った位置にある。建物の主軸は、居館1の溝と同様な方位をもつ。建物の大半が土層49と重複する。

建物は平面プラン長方形を呈するものと推定され、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N69^{\circ}E$ である。建物規模について桁行3間は確認できるが、梁行は土層49により切られているため不明である。また、身舎面積についても明確にすることができないが、残存する南側桁行は建物1や建物2に比べ短い。

### (5) 建物5

建物5(第6図)は、居館1の南東隅に位置する。建物の主軸方位は居館1の溝とほぼ同様な方位をとるが、建物の東側柱筋と溝の間は1mもなく、かなり近い状況である。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N9^{\circ}W$ で、建物規模は梁行1間、桁行3間である。しかし、擾乱のため西側桁行の柱穴の一部が確認できなかった。

身舎面積は、 $23.18m^2$ と推定される。

### (6) 建物6

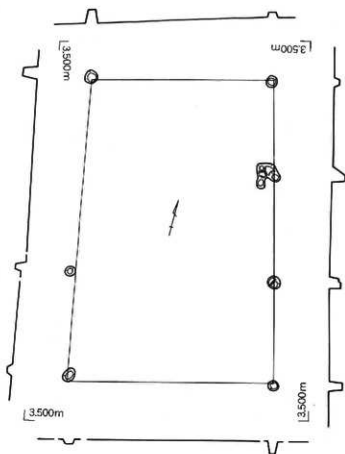
建物6(第6図)は、居館1の中央西よりの位置にある。建物の主軸は居館1の溝と同様な方位をとるが、西側柱筋が溝と近接した状況にある。

建物は平面長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N27^{\circ}W$ で、建物規模は梁行1間、桁行2間である。しかし、北西隅の柱穴については調査区外に及ぶため、確認できなかった。

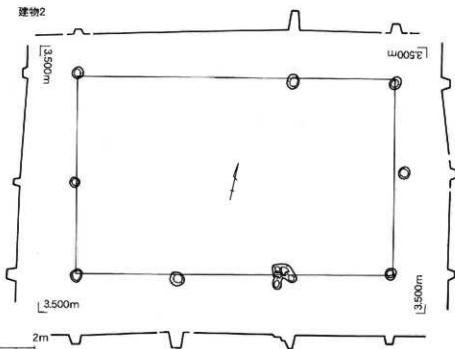
身舎面積は $14.1m^2$ で、本遺跡のなかでも小型の建物である。



建物1

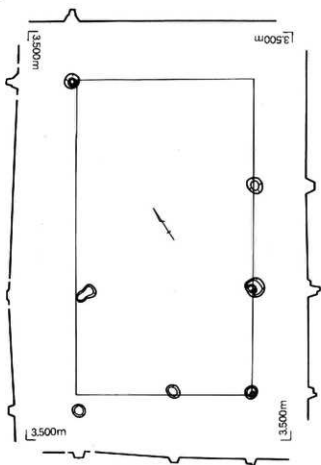


建物2

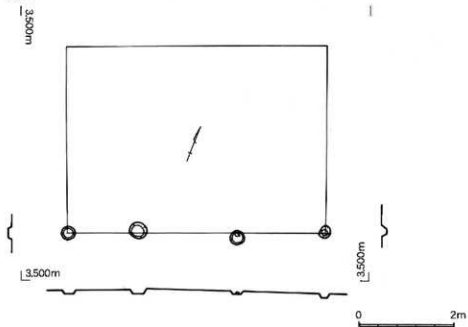


第4図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(1)

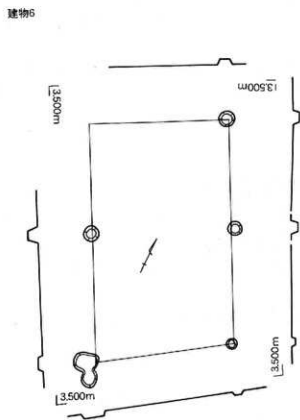
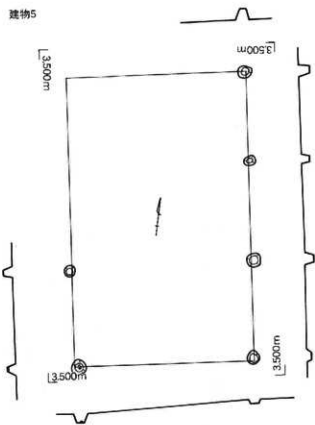
建物3



建物4



第5圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(2)



第6圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(3)

### (7) 建物7

建物7(第9図)は、屈館1のほぼ中央に位置する。建物の主軸は、おおむね屈館1の溝と同様な方位をとる。建物8、建物9、建物10と重複する。

建物は東西方向に主軸をもつもので、平面プランは長方形を呈する。主軸方位は $N68^{\circ}E$ で、建物規模は梁行1間、桁行4間である。身舎面積は $30.8m^2$ を測る。

建物を構成する柱穴から土師質土器小皿が出土した(第7図)。1は復元口径 $9.0cm$ を測るもので、胎土には金ウソモを含む。



第7図 八坂中遺跡建物7出土土器

### (8) 建物8

建物8(第9図)も屈館1のほぼ中央に位置する。建物7と位置的に重複するが、主軸方位は建物7と同様である。

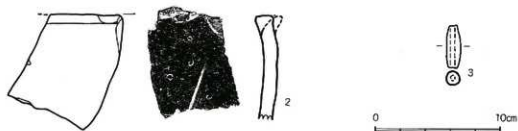
建物は長方形プランを呈し東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N67^{\circ}E$ である。建物規模は梁行1間、桁行3間で、北側桁行の東から2番目の柱穴がみられない。身舎面積は $19.84m^2$ である。また、北側桁行の西から2番目柱穴から「永楽通寶」が1枚出土した(詳細は「9 埋納遺構」参照)。

### (9) 建物9

建物9(第10図)は屈館1のほぼ中央にある。建物7、建物8の東側に位置し、建物7及び建物10と重複する。建物の主軸方位は、おおむね屈館1の溝と同様な方位である。

主軸方位は $N26^{\circ}W$ を測るもので、南北方向に主軸をもつ。建物規模は梁行1間、桁行4間で、身舎面積は $24.32m^2$ を測る。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第8図)のうち、2は陶質の鉢である。口縁部は片H状を呈し、外面には自然釉がかかる。3は紡錘形の土糸である。

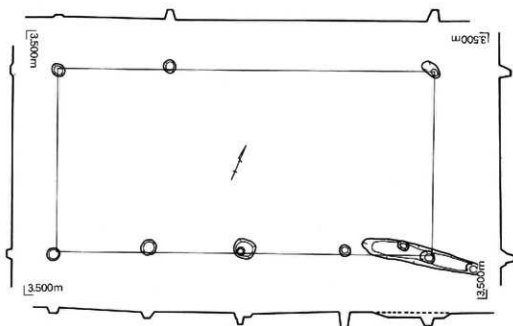


第8図 八坂中遺跡建物9出土土器

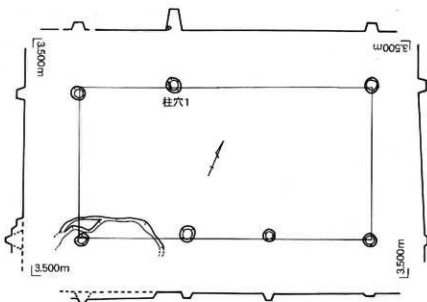
### (10) 建物10

建物10(第10図)は、屈館1のほぼ中央に位置し建物9と重複する。南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N19^{\circ}W$ である。建物規模は、梁行1間、桁行3間である。建物を構成する柱穴から出土した遺物(第11図)は、4の土師質土器小皿である。口径 $7.5cm$ を測るもので、体部の立ち上がりはシャープである。体部はやや内湾気味に口縁にいたる。底部中央には、径約 $1cm$ ほどの穿孔がみられる。

建物7



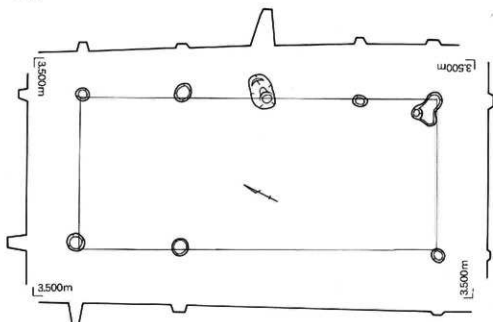
建物8



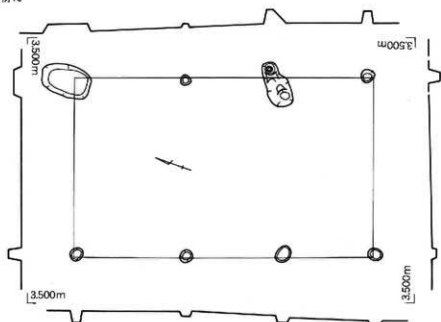
0 2m

第9圖 八板中遺跡掘立柱建物跡(4)

建物9



建物10



0 2m

第10圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(5)



#### 第11回 八坂中遺跡建物10出土土器

##### (11) 建物11

建物11(第12図)は、屈館1の中央からやや北よりの位置にある。南北方向に主軸をもつもので、屈館1の溝と同様な方位をとる。建物規模は梁行2間、桁行3間で、主軸方位はN24°Wである。西側桁行のうち、北端と北から2番目の柱穴が確認できなかった。

身舎面積は30.07㎡である。

##### (12) 建物12

建物12(第12図)は、建物11と重複した位置にある。東西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN71°Eである。西側が調査区外に及ぶ可能性もあるが、梁行は1間である。

東側の梁行ラインが、建物12の南に位置する建物8の東側梁行ラインと一致しており、両者が同時に存在した可能性がある。

##### (13) 建物13

建物13(第13図)は、屈館1の中央からやや北に寄った位置にあり、建物11、建物12の東側にある。平面プラン長方形を呈するもので、南北方向に主軸をもち、主軸方位はN11°Wである。主軸方位的には、建物11や建物12などに比べやや東に振る。

建物規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は26.04㎡である。建物13の北側に位置する建物19は、方位をほぼ同じくし、建物13の両桁行ラインの延長上に、建物19の両梁行ラインがある。このことから、建物13と建物19は同時に存在した可能性が高い。

##### (14) 建物14

建物14(第13図)は、建物13などと重複する位置にある。南北方向に主軸をもつもので、屈館1の溝とおおむね方位を同じくする。

建物は長方形プランを呈し、N16.5°Wの主軸をもち、規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は25.6㎡である。南側梁行の中央の柱穴がみられない。

##### (15) 建物15

建物15(第14図)は、建物13、建物14と重複した位置にある。建物は南北方向に主軸方位をもつが、方位的には建物13にちかい。

建物規模は梁行1間、桁行3間で、主軸方位はN10°Wである。また、身舎面積は25.9㎡である。

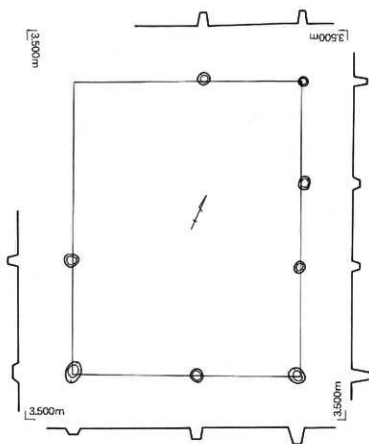
##### (16) 建物16

建物16(第14図)は、建物13、建物14、建物15と重複する位置にある。建物の主軸方位はN46°Wで、他と大きく異なり南東-北西にとる。身舎面積は24.485㎡である。

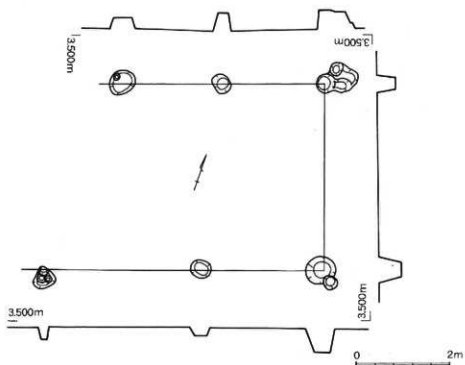
規模は梁行1間、桁行4間であるが、梁行の長さには桁行が長く、細長い印象をうける。このように細長いものは、本遺跡ではあまり類例がない。

本建物と同様な主軸方位をもつものは、屈館1の中では建物3、建物21で、屈館1とは明らかに時期を異にするものであろう。

建物11



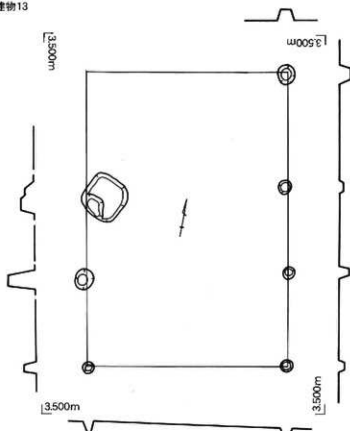
建物12



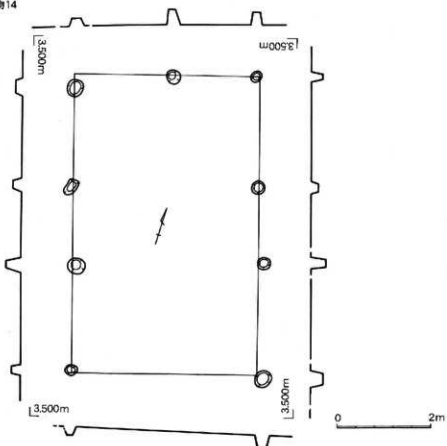
第12図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(6)



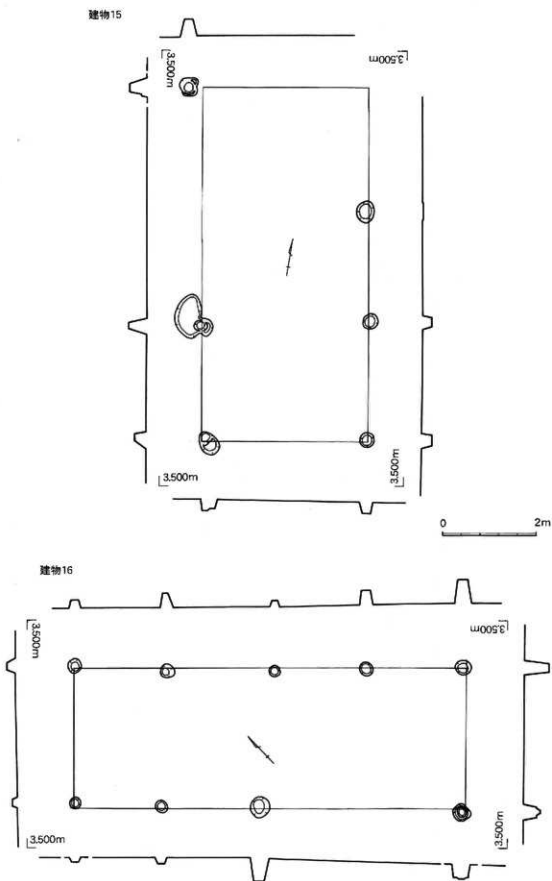
建物13



建物14



第13図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(7)



第14図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(8)

### (17) 建物17

建物17(第16図)は、建物15、建物16と重複して位置する。東西方向に主軸をもつ梁行1間、桁行3間の建物で、北側桁行の一部が土壌155により切られる。

南側桁行のうち、西から2番目の柱穴がみられない。

### (18) 建物18

建物18(第16図)は、居館1の北隅近くに位置する。規模は梁行1間、桁行3間で、南北方向に主軸方位をもつ。両桁行とも、中央の柱間の長さがやや広い柱配置をとる。

本建物の西側桁行ラインの延長が、居館1中央の建物11東側桁行ラインにほぼ一致することから、両建物は同時に存在した可能性が高い。

### (19) 建物19

居館1の北東隅近くにある建物19(第17図)は、東西方向に主軸をもつもので、梁行1間、桁行2間の規模を有する。身舎面積は11.75㎡と小型の建物である。

本建物の南に位置する建物13と方位をほぼ同じくし、建物13の西側桁行ラインと本建物の西側梁行ラインがおおよそ一致することから、同時期に存在した可能性が高い。

### (20) 建物20

建物20(第17図)は、居館1の北端に位置し、建物18とわずかに重複する。東西方向に主軸をもつものであるが、西側が調査区外に及ぶ。

### (21) 建物21

建物21(第18図)は、居館1の北東隅に位置する。南東-北西方向に主軸をもつもので、主軸方位はN49°Wである。建物の規模は梁行1間、桁行3間で、南西側桁行の北西から2番目の柱穴がみられない。身舎面積は18.29㎡である。

本建物は、居館1と方位を大きく異にすることから、居館1と時期を異にするものと考えられる。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第15図)は、5の瓦器碗である。底部は平底で糸切り痕が残り、内湾気味に口縁にいたる。東国東型瓦器碗で、13世紀後半~14世紀初に位置付けられる。

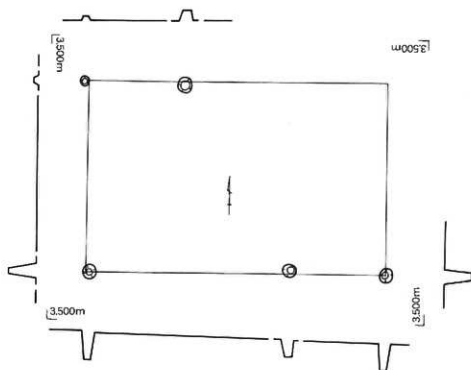


第15図 八坂中遺跡建物21出土土器

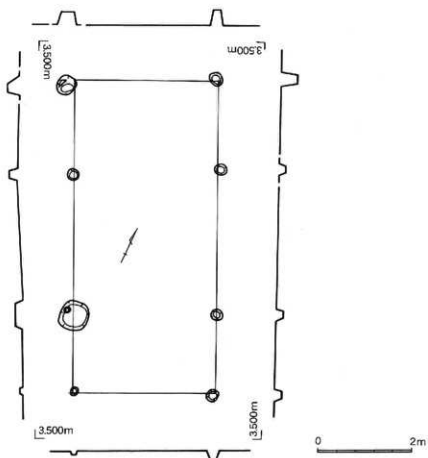
### (22) 建物22

建物22(第18図)は居館1の北東隅に、建物21と重複してみられる。東西方向に主軸をもつもので、梁行1間、桁行2間の規模をもつ。身舎面積は12.555㎡で、小型のものである。

建物17

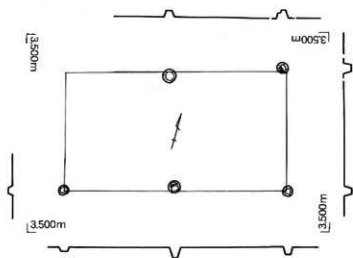


建物18

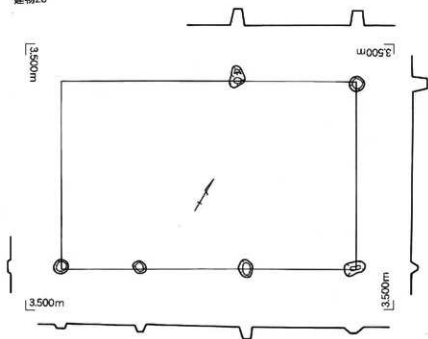


第16圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(9)

建物19



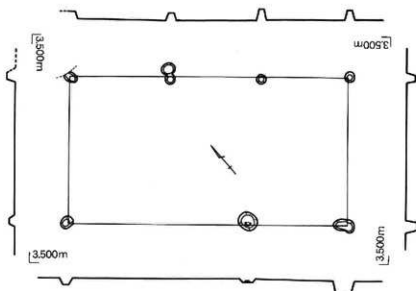
建物20



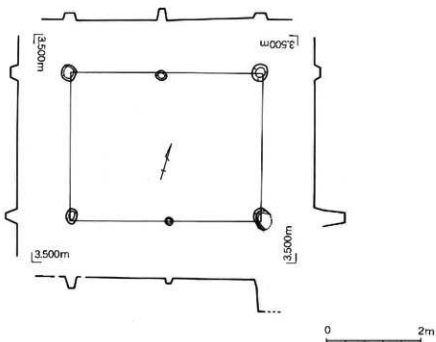
0 2m

第17図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(10)

建物21



建物22

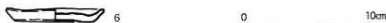


第18図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(11)

### (23) 建物23

建物23(第20図)は、居館1の北側10mに位置する。居館1及び居館3を画する溝の北側については、溝に沿い東西方向に幅5~10mほどの比較的遺構密度の薄い部分がある。この部分は道の可能性が強いと考えられる。建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN18°Wである。おおむね居館1と方位を同じくする。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は41.36㎡と本遺跡においては比較的大型のものである。両梁行とも、中央の柱穴が東側から近い位置にある。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第19図)は、6の上師質上器小皿である。口径は8cmに満たず、短い体部が斜方向に立ち上がる。



第19図 八坂中遺跡建物23出土土器

### (24) 建物24

建物24(第20図)は、建物23の南西に位置する。この位置は、居館1などが存在した時の道の可能性が考えられる部分で、道とは時期を異にするものであろう。

建物は、東西方向に主軸を持つもので、梁行1間、桁行2間の規模をもつ。身舎面積は6.6㎡で、小規模なものである。

### (25) 建物25

建物25(第21図)は、建物23の約15m東に位置する。建物26と重複し、土壕26と切りあい関係にあり、南東隅の柱穴が切られている。

建物は、南北方向に主軸をもつもので、身舎面積は24.48㎡を測る。

### (26) 建物26

建物26(第21図)は、建物25の北東側に位置し、一部が重複する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN22°Wである。規模は梁行1間、桁行3間である。桁行の柱間距離は、梁行に比べるとかなり短い。西側桁行のうち南から2番目の柱穴がみられない。

また、身舎面積は20.8㎡を測り、やや小規模な建物である。

### (27) 建物27

建物27(第22図)は、建物26と3mほどの距離をもち、やはり南北方向に主軸をとりみられる。このあたりに位置する建物は大部分が南北方向のもので、居館1と居館3の北側をとる道と考えられる部分との関係が注目される。

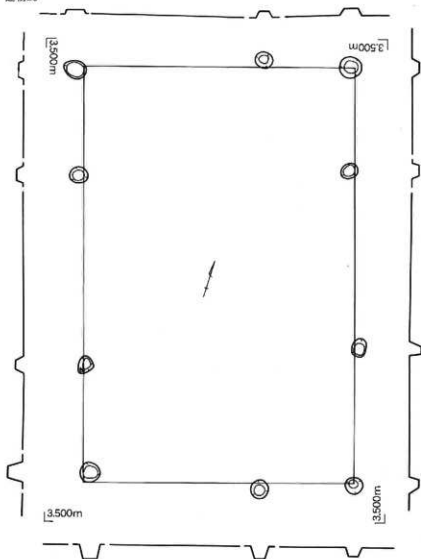
建物は平面プラン方形にちかいため、わずかに南北方向に長い。

### (28) 建物28

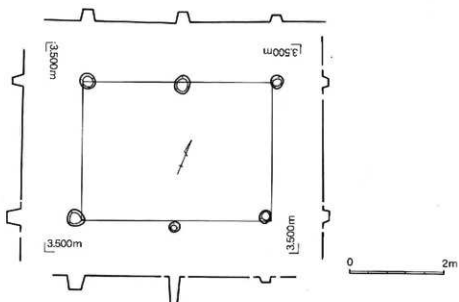
建物28(第22図)は、建物27のすぐ東に位置し、建物29と重複する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN15°Wである。規模は梁行1間、桁行2間の小型のもので、平面形がやや不定形気味である。

建物23



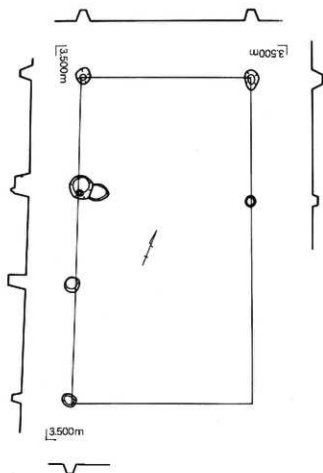
建物24



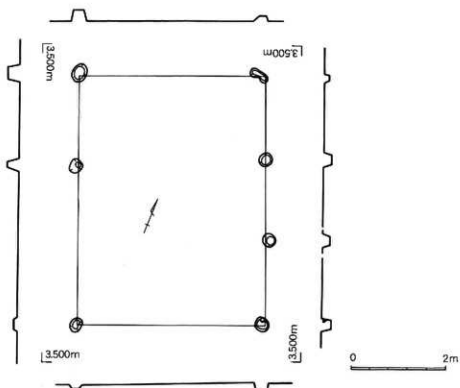
第20図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(12)



建物25

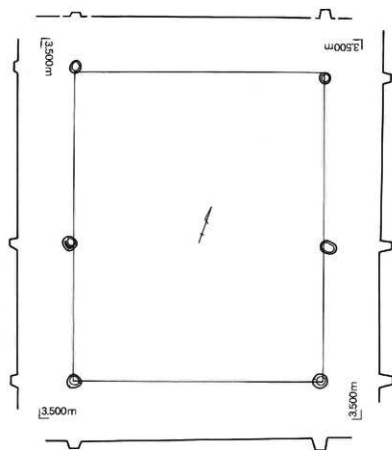


建物26

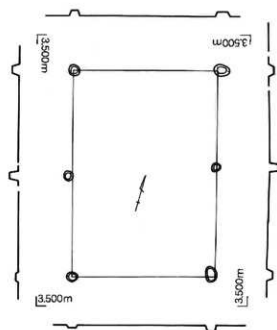


第21圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(13)

建物27



建物28



0 2m

第22図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(14)

### (29) 建物29

建物29(第23図)は、建物27の東側に位置し、建物28及び建物30と重複する。

建物の平面プランは方形気味であるが、南北方向がわずかに長い。主軸方位はN11°Wを測る。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は22.88㎡である。本建物は平面形態が方形を呈するなど、他の建物とやや異なった様相をもつ。また、柱穴配置についても西梁行の長さが長いことや、東側桁行が両端の柱穴のみであるなど他にみられない点もある。

### (30) 建物30

建物30(第23図)は建物29の南側にあり、一部建物29と重複する。

建物は平面プラン方形を呈する。各辺の長さはほぼ等しく、基本的に各辺2間で構成されている。このうち、南側柱筋の中央の柱穴がみられない。

本建物の北側柱穴ラインが、本建物の北西に位置する建物27の南側柱穴ラインと一致することから、両建物は同時存在した可能性をもつ。

### (31) 建物31

建物31(第24図)は、建物28、建物29、建物30の東側に位置する。ほぼ同位置で、同規模の建物である建物32と重複する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN18°Wである。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は23.6㎡である。

### (32) 建物32

建物32(第24図)は、建物31とほぼ同位置で重複する。

建物の主軸方位はN23°Wで、南北方向に主軸をもつものである。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は25.2㎡である。

柱穴のうち、東側桁行の北から2番目の柱穴がみられないが、これはこの部分で土壇41と重複しているためと考えられる。

### (33) 建物33

建物33(第25図)は、建物31、建物32の南側に位置する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位はN19°Wである。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は35.72㎡である。本遺跡のなかでは、建物規模が大きいものにはいる。

柱穴のうち、北西隅の柱穴がみられない。梁行や桁行の途中の柱穴がみられないものは他に慣例があるが、コーナー部の柱穴については、これを欠くと建物が建てられない。本建物については、礎石などを置き柱穴を立てたものであろうか。また、東側桁行の北から2番目の柱穴は、壁穴1に切られている。

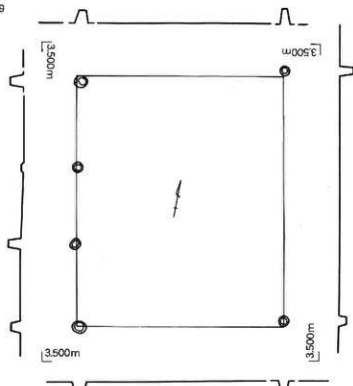
### (34) 建物34

建物34(第25図)は、建物33の北東側に位置する。建物33とは、一部が接するように重複する。

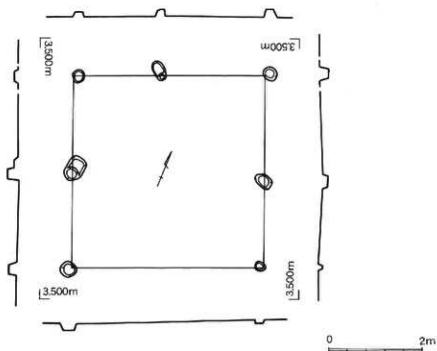
建物の主軸方位はN75°Eで、東西方向に主軸をもつものである。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は25.35㎡である。

南西隅の柱穴が壁穴1に切られている。

建物29

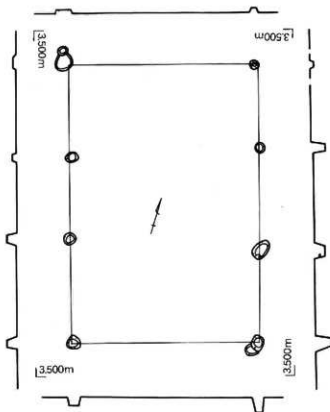


建物30

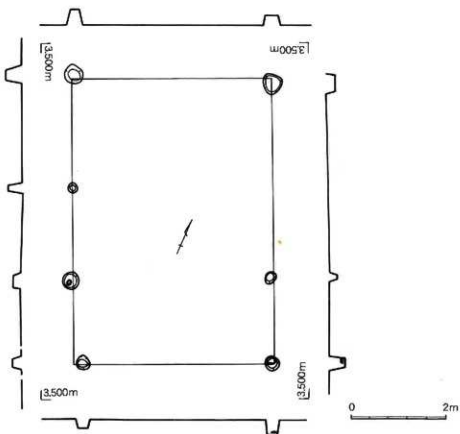


第23図 八坂中道跡掘立柱建物跡(15)

建物31

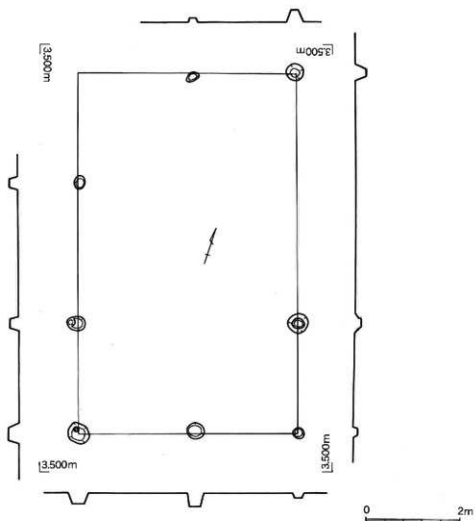


建物32

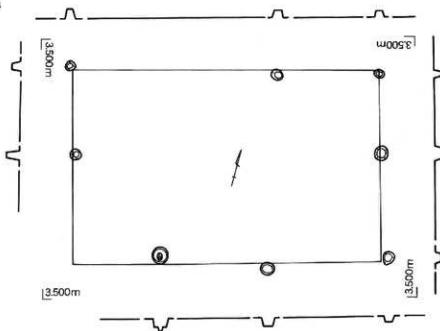


第24図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(16)

建物33



建物34



第25図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(17)

### (35) 建物35

建物35(第27図)は、建物34、建物37と重複する。

建物の主軸方位は $N15^{\circ}W$ で、南北方向に主軸をもつものである。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $36.96m^2$ である。

柱穴配置をみると、北側梁行の中央の柱穴がみられない。また、桁行については、両桁行とも最も南側の柱穴間の距離が長い。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第26図)のうち、7は瓦器碗である。外面には幅広いヘラミガキが横方向に一定の間隔で施される。高台は断面方形のものが、外開き気味に付される。



第26図 八坂中遺跡建物35出土土器

### (36) 建物36

建物36(第27図)は、居館3の北西隅に位置する。この部分は、居館3の周圍を巡る溝が切れており、居館3の出入り口に相当するものと思われる。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N85^{\circ}E$ である。居館3の溝とは方位を若干異にする。規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $21.28m^2$ である。

### (37) 建物37

建物37(第28図)は、建物34、建物35と重複する。

建物の主軸方位は $N20^{\circ}W$ で、南北方向に主軸をもつものである。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $26.52m^2$ である。

### (38) 建物38

建物38(第28図)は、居館3の北西隅に位置する。北側には建物36があり、部分的に本建物と重複する。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N78.5^{\circ}W$ である。居館3の溝と方位をほぼ同じにする。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $21.08m^2$ である。南側桁行の西から2番目の柱穴がみられない。

### (39) 建物39

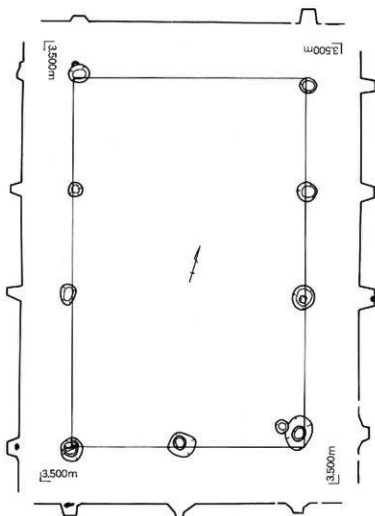
建物39(第29図)は、居館3北側の道と推定される場所に位置する。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N15^{\circ}W$ である。規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $11.2m^2$ である。

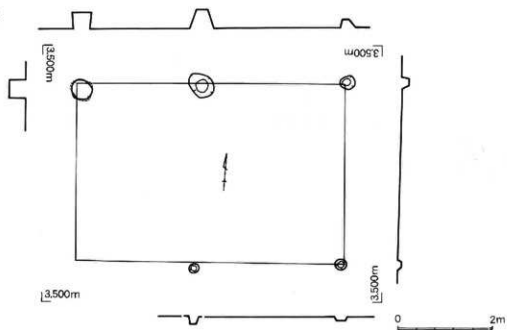
### (40) 建物40

建物40(第29図)は、居館3の北西隅に位置する。居館3の溝と方位をほぼ同じにする。建物の主軸方位は $N19^{\circ}W$ で、南北方向に主軸をもつものである。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.31m^2$ である。

建物35



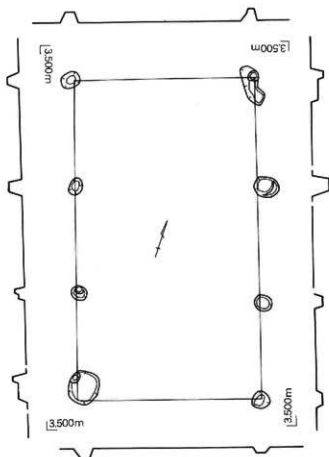
建物36



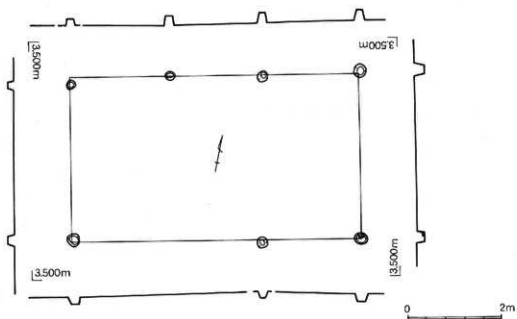
第27図 八坂中通跡掘立柱建物跡(18)



建物37

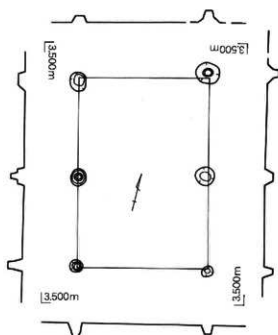


建物38

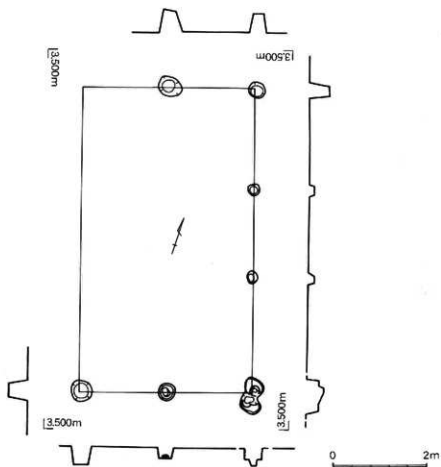


第28図 八坂中退跡掘立柱建物跡(19)

建物39



建物40



第29図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(20)

#### (41) 建物41

建物41(第31図)は、居館3の中央西よりに位置する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつものである。居館3の溝とは方位をほぼ同じくしており、居館3に伴う建物である可能性が高い。

建物の主軸方位は、 $N79^{\circ} E$ を測る。建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $18.29m^2$ である。建物規模としてはやや小型である。

柱穴配置をみると、南西隅の柱穴がみられない。コーナー部の柱穴がないと建物が建たないと思われるので、この部分については礎石を据えるなどしたのであろうか。

#### (42) 建物12

建物42(第31図)は、居館3の中央からやや西に寄った位置に、建物41と一部重複してみられる。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつものである。建物41と同様に居館3の溝と方位をほぼ同じくしており、居館3に伴う建物である可能性が高い。

建物は長方形プランを呈し、主軸方位は $N77.5^{\circ} E$ を測る。建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $25.08m^2$ である。

土壌71と切り合い関係にあり、北側桁行の西から2番目の柱穴が土壌71に切られる。

#### (43) 建物43

建物43(第32図)は、建物42のすぐ南に位置する。

建物は東西方向に主軸をもつもので、平面プランは長方形を呈する。建物41などと同様に居館3の溝と方位をほぼ同じくしており、居館3に伴う建物である可能性が高い。

建物の主軸方位は、 $N76^{\circ} E$ を測る。規模は梁行1間、桁行3間であると推定される。南側桁行が明らかでないため明確な身舎面積は不明であるが、おおよそ $21m^2$ と推定される。

本建物は上層84や土壌146と重複するが、南側桁行の柱穴がこれらに切られる。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第30図)は、土鏝である。ともにほぼ円筒形を呈するもので、長さ8が $4.7cm$ 、9が $4.5cm$ である。



第30図 八坂中遺跡建物43出土土鏝

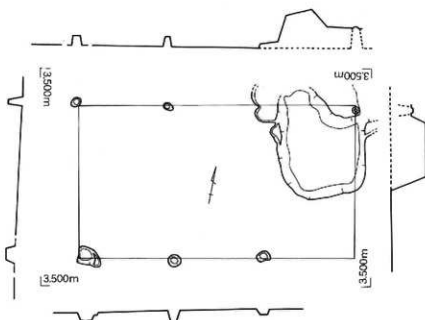
#### (44) 建物44

建物44(第32図)は、居館3の南西コーナー部に位置する。

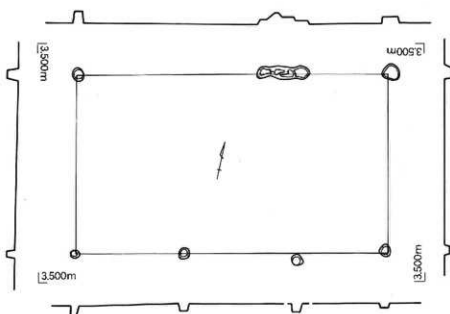
建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつものである。主軸方位は、 $N82^{\circ} E$ を測り、規模は梁行1間、桁行3間である。身舎面積は $20.9m^2$ である。

柱穴のうち、南西隅の柱穴が居館3の溝に切られている。

建物41



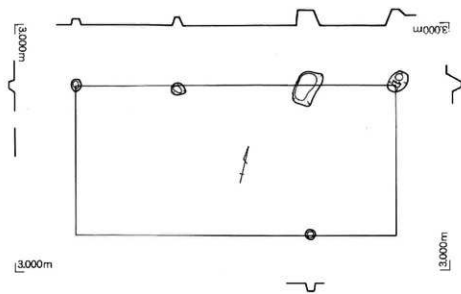
建物42



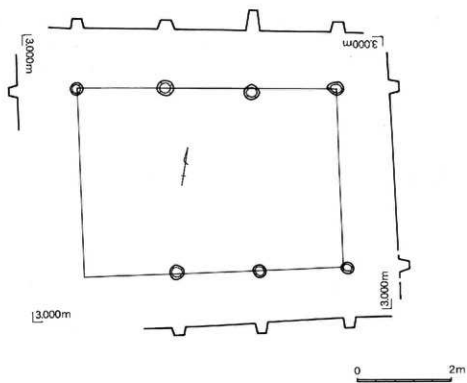
0 2m

第31圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(21)

建物43



建物44



第32図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(22)

#### (45) 建物45

建物45(第33図)は、中央北よりに位置する。居館3を両する溝のうち、北側は西までのびることなく中程過ぎて止まる。北西側の溝の切れた部分は、居館3の出入りに相当するものと考えられる。本建物は、北側の溝が止まる部分にあわせてように位置する。

建物は土壇100に切られているため全形が不明だが、南北方向に主軸をもつものと推定される。規模について、梁行は不明だが、桁行は3間である。桁行も西側だけしか残存しておらず、身合面積などは不明である。主軸方位は、N10°Wを測る。

#### (46) 建物46

建物46(第33図)は、居館3の内部にあり建物45のすぐ東に位置する。やはり土壇100と切り合っており全体は不明であるが、建物方位は居館3の溝とほぼ同じ方位を示す。

建物の平面形は長方形で、南北方向に主軸をもつ。他に比べ、やや長細い印象をもつ建物である。建物の主軸方位は、N15°Wである。規模は、梁行1間、桁行3間と推定される。

本建物は土壇100に切られる。

#### (47) 建物47

建物47(第33図)も居館3の内部にあり、建物46、建物52と重複するような位置にある。

建物の平面プランは長方形を呈すると思われ、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は、N73°Eである。規模は梁行2間、桁行4間と推定され、身合面積は30.4㎡である。全形が不明であるが、桁行4間のものは本遺跡では類例が少ない。

本建物も土壇100に切られる。

#### (48) 建物48

建物48(第34図)は、居館3の内部にあり、建物47の北隣に並ぶように位置する。一部土壇100と重複する。建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。建物の主軸方位は、N74°Eである。規模は、梁行1間、桁行2間と推定され、身合面積は7.48㎡である。建物規模としては非常に小規模である。

本建物の東側梁行と、南に隣接する建物47の東側梁行のラインが一致することから、両建物は同時に存在した可能性が高い。

本建物も、土壇100に切られる。

#### (49) 建物49

建物49(第34図)は、居館3の北東隅に近い建物17、建物48の東側に位置する

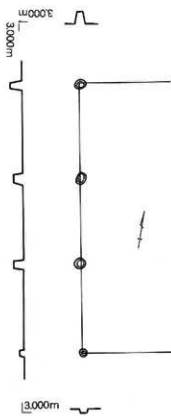
建物の平面形は長方形で、南北方向に主軸をもつ。建物の主軸方位は、N8°Wである。規模は、梁行2間、桁行3間で、身合面積は23.37㎡である。建物を構成する柱穴のうち、北側梁行の中央の柱穴のみはみられない。

#### (50) 建物50

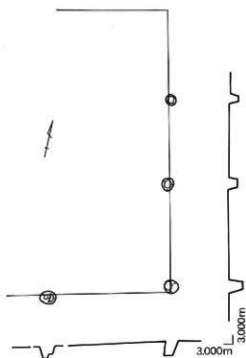
建物50(第34図)は、居館3の北東コーナー部に位置する。

平面プラン長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は、N13°Wである。建物の規模は、梁行2間、桁行3間と推定されるが、建物の東半分は居館3を巡る溝に切られているため、想定を越えてない。

建物45

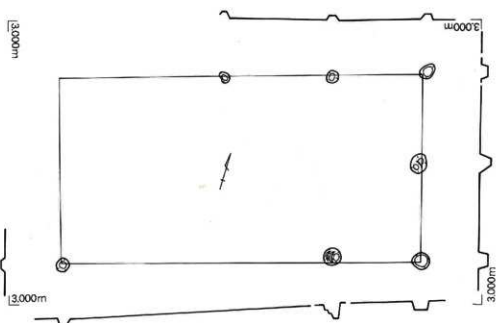


建物46

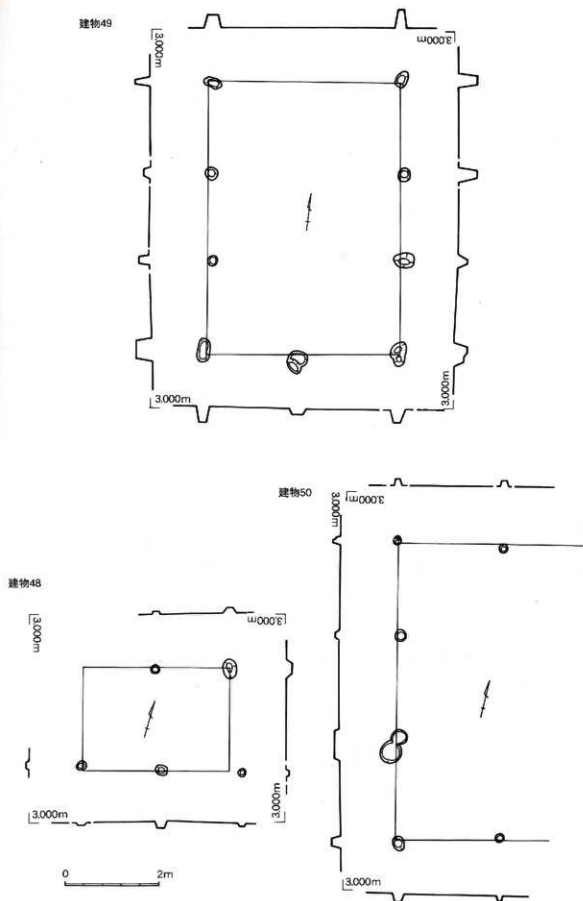


0 2m

建物47



第33圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(23)



第34図 八坂中遺跡屈立柱建物跡(24)



#### (51) 建物51

建物51(第35図)は、居館3の北東隅近くに位置する。建物49、建物50、建物52、建物53と重複関係にある。

平面プランは長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N10^{\circ}W$ で、居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。

建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $19.47m^2$ である。

#### (52) 建物52

建物52(第35図)は、居館3の中央からやや北東に寄った位置にある。建物49、建物51、建物53、建物54と重複関係にある。

平面プランは長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N73^{\circ}E$ で、居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。

建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $24.32m^2$ である。

#### (53) 建物53

建物53(第36図)は、居館3の東側の溝に沿ったほぼ中央の位置にある。建物51、建物52、建物54と重複関係にある。

平面プランは長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N11^{\circ}W$ で、居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。

建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.2m^2$ である。

#### (54) 建物54

建物54(第36図)は、居館3の中央から東に寄った位置にある。建物52、建物53、建物55と重複関係にある。

長方形の平面形をなし、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N84.5^{\circ}E$ で、居館3の溝とは方位をやや異にするようである。

規模は梁行1間、桁行3間である。柱穴の配置をみると、両桁行とも中央の柱間の長さが長い特徴を有する。身舎面積は $21.45m^2$ である。

#### (55) 建物55

建物55(第37図)は、居館3の中央からやや東に寄った位置にある。建物54、建物56と重複関係にある。

建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N76^{\circ}E$ で、居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。

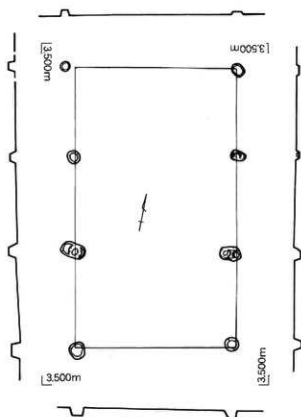
規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $12.18m^2$ である。建物55は、本遺跡のなかでも小規模に位置付けられるものである。

#### (56) 建物56

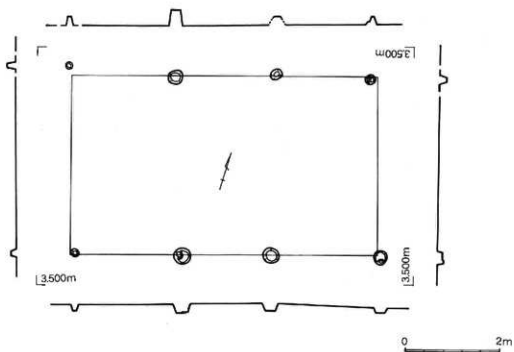
居館3のほぼ中央に位置するのが建物56(第37図)である。土壇85と重複関係にあるが、直接の切り合いはない。

東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N74.5^{\circ}E$ である。居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $27.73m^2$ を測る。

建物51

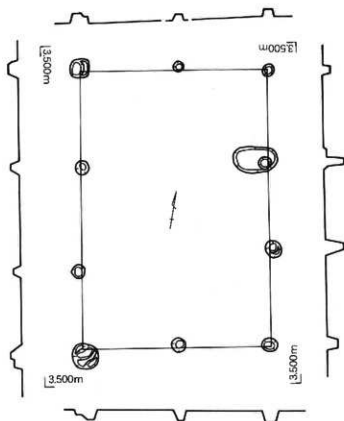


建物52

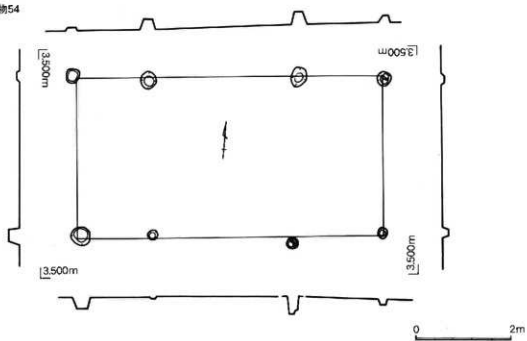


第35図 八板中遺跡掘立柱建物跡(25)

建物53

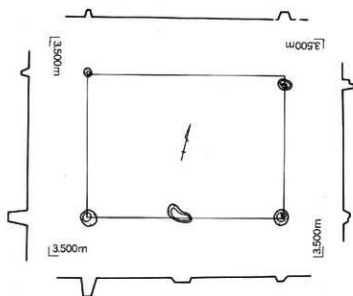


建物54

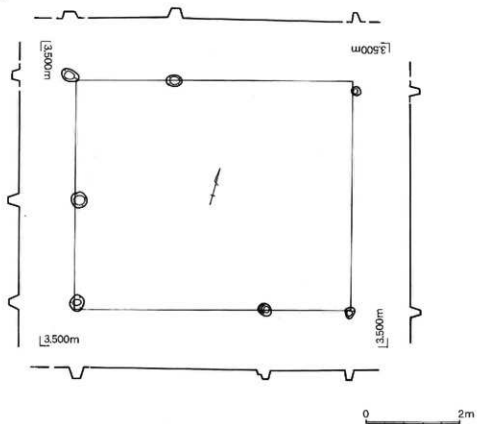


第36図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(26)

建物55



建物56



第37図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(27)

### (57) 建物57

居館3の中央から南東によった位置にあるのが建物57(第39図)である。

東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N75.5^{\circ} E$ である。居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $27.88m^2$ を測る。北東隅の柱穴が土壇97から切られる。

建物を構成する柱穴から出土した遺物(第38図)は、10の上鈿である。



第38図 八坂中遺跡建物57出土土器

### (58) 建物58

建物58(第39図)は、居館3の南側の溝に沿った、やや東寄りに位置する。

長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N74^{\circ} E$ で、居館3の溝と方位的にはちかい関係にある。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $31.98m^2$ を測る。本遺跡のなかにあってはやや大型の建物で、他に比べ細長い感を受ける。

### (59) 建物59

居館3の南東隅に位置するのが建物59(第40図)である。

東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N85.5^{\circ} E$ である。建物の方位と居館3の溝との方位はやや異なるが、溝コーナーと建物の位置関係をみた場合、同時存在と考えるとそれほどの違和感はない。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.6m^2$ を測る。

### (60) 建物60

建物60(第40図)は、居館2の北西隅に位置する。

主軸方位は $N90^{\circ} W$ で、東西方向に主軸をもつ。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $13.76m^2$ を測る。建物の方位と居館2の溝との方位はほぼ同じで、溝コーナーと建物の位置関係をみた場合、同時存在と考えるとそれほどの違和感はない。

### (61) 建物61

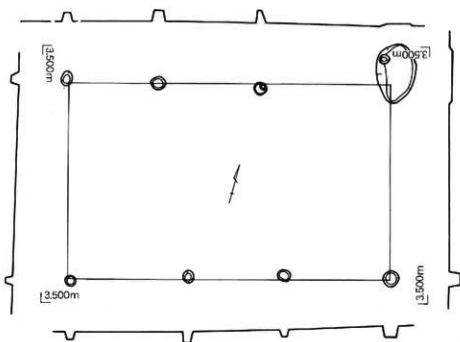
建物61(第41図)は居館2の北西隅に位置し、土壇108により切られる。

建物の主軸方位は $N29^{\circ} E$ で、居館2の溝方位と大きく異なる。居館2とは確実に時期を異にするものである。建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $22.42m^2$ と推定される。

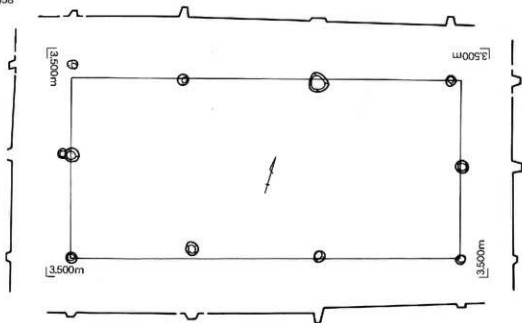
### (62) 建物62

建物62(第41図)は、居館2の北西隅近くにある。南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N8^{\circ} W$ である。基本的な建物規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $24.7m^2$ を測る。本建物の東側桁行ラインが、建物63の東側桁行ラインと一致することから、両建物は同時存在した可能性が高い。

建物57



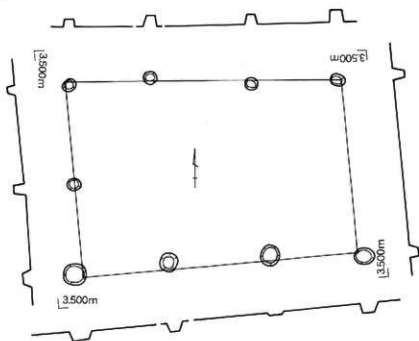
建物58



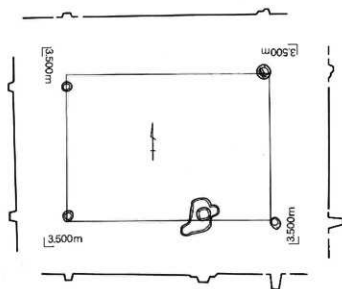
0 2m

第39図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(28)

建物59

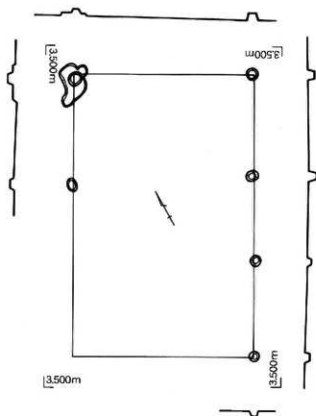


建物60

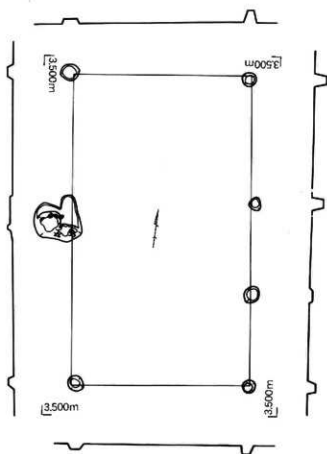


第40図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(29)

建物61



建物62



0 2m

第41図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(30)



### (63) 建物63

建物63(第42図)は、居館2の中央からやや西に寄った位置にある。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N7^{\circ}W$ である。居館2の溝の方位とほぼ一致することから、居館2に伴うものと考えられる。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は41.5㎡を測る。建物規模は、本遺跡でも大きい方に位置付けられる。

本堅穴は、居館中央をはさみ本堅穴と対称的な位置にある建物70と同時に存在したと思われる。また、居館中央に位置する建物66とも、両者の南側梁行ラインが一致しており、同時に存在した可能性がある。加えて、前述したように建物62とも同時存在したことが考えられる。

建物63の内部には、SX5、SX6、SX9、SX10がある。いずれも鍛冶炉などの鍛冶関連遺構である。このうち鍛冶炉であるSX6、SX9は、建物の中央をはさみ対称的な位置にあり、本建物に伴い計画的に配置されたものと推定される。また、SX6、SX10については、鍛冶炉に伴う廃棄土壌と思われ、やはり本建物に伴うものであると判断される(詳細は第2章 8参照)。

### (64) 建物64

建物64(第43図)は、居館2の南西隅にややよった位置にある。建物63と一部重複する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N8^{\circ}W$ である。居館2の溝の方位とほぼ一致することから、居館2に伴うものと考えられる。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は26.23㎡を測る。

建物の内部に鍛冶関連遺構であるSX3がみられるが、建物の南西隅に寄っており建物64には伴わない可能性が高い。

### (65) 建物65

建物65(第43図)は、居館2の中央からやや南に寄った位置にある。

建物の主軸方位は $N1^{\circ}E$ で、居館2の溝の方位と大きく異なる。居館2とは時期を異にする可能性が高い。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は31.68㎡である。柱穴の配置をみると、西側桁行の北から2番目の柱穴と北側梁行の中央の柱穴がみられない。

### (66) 建物66

建物66(第44図)は、居館2のほぼ中央にある。

建物は南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N8.5^{\circ}W$ である。居館2の溝の方位とほぼ一致する。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は23.18㎡を測る。柱穴の配置をみると、東側桁行の南から2番目の柱穴がみられない。

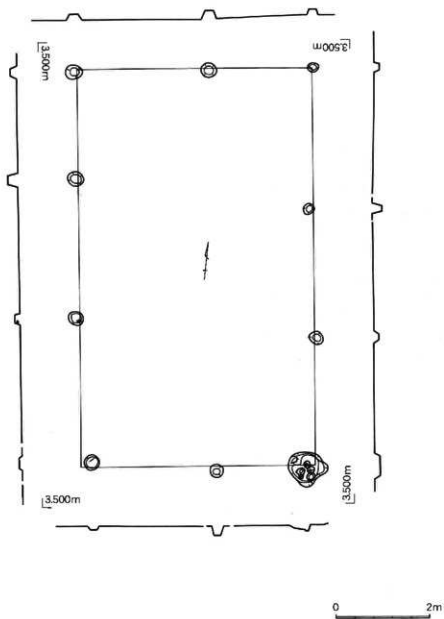
建物の位置関係から、建物63、建物70などと同時存在したものとと思われる。

### (67) 建物67

建物67(第44図)は、居館2の中央からやや南に寄った位置にある。建物65及び建物68と重複する関係にある。

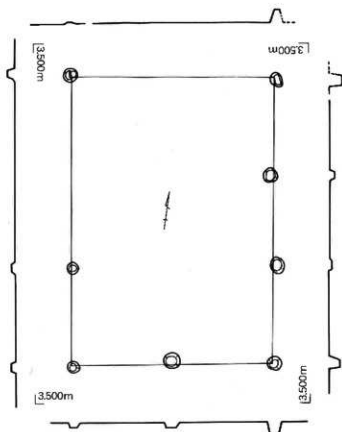
建物の主軸方位は $N33^{\circ}W$ で、居館2の溝の方位と大きく異なる。居館2とは時期を異にするものであろう。本建物と同様な方位をもつものは、居館2内部では建物61がある。おそらく時期を同じくするものと思われる。建物の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は9.88㎡と小型のものである。

建物63

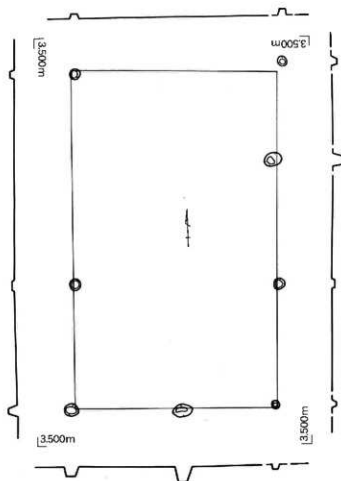


第42図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(31)

建物65



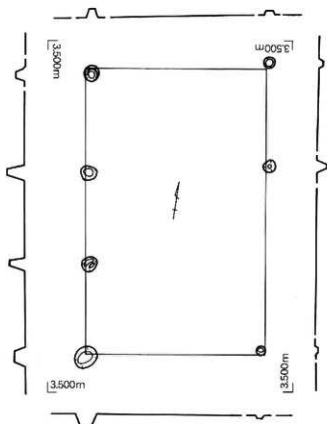
建物64



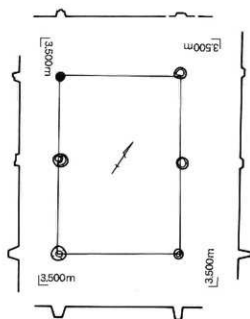
0 2m

第43図 八板中道跡振立柱建物跡(32)

建物66



建物67



0 2m

第44図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(33)

### (68) 建物68

建物68(第45図)は、居館2の中央からやや南に寄った位置にあり、建物67と重複する。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N76^{\circ} E$ である。居館2の溝方位と異なるため、居館2とは時期を異にする可能性が考えられる。

規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $13.86m^2$ を測る。柱穴配置をみると、南側桁行の中央の柱穴がみられない。

### (69) 建物69

建物69(第45図)は、居館2の北東隅近くに位置する。

建物の平面プランは方形にちかい長方形である。東西方向に長軸をもつもので、主軸方位は $N84^{\circ} E$ である。居館2の溝と方位をほぼ同じくすることから、居館と同時存在したものと考えられる。

規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $14m^2$ を測る。建物としては小規模のものである。

本建物の南側梁行のラインは、居館北西隅に位置する建物62の南側梁行ラインに大きくは一致する。また、本建物の西側梁行ラインは、建物70の西側桁行ラインと一致する。以上から、建物62及び建物70と同時存在したものと考えられる。

### (70) 建物70

建物70(第46図)は、居館2の中央からやや東に寄った位置にある。

南北方向に長軸をもつもので、主軸方位は $N8^{\circ} W$ である。居館2の溝と方位をほぼ同じくすることから、居館と同時存在したものと考えられる。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $36.45m^2$ を測る。柱穴配置をみると、東側桁行の北から2番目の柱穴と南側梁行の中央の柱穴がみられない。

### (71) 建物71

建物71(第46図)は、居館2のやや南東隅に寄った位置にある。

東西方向に長軸をもつもので、主軸方位は $N82^{\circ} E$ である。居館2の溝と方位をほぼ同じくする。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $20.28m^2$ を測る。

### (72) 建物72

建物72(第47図)は、居館2の南側の溝沿いにあり、中央からやや東に寄っている。建物73と位置的に重複する。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N84^{\circ} E$ で、居館2の溝と方位をほぼ同じくする。建物の規模は、規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $26.24m^2$ を測る。

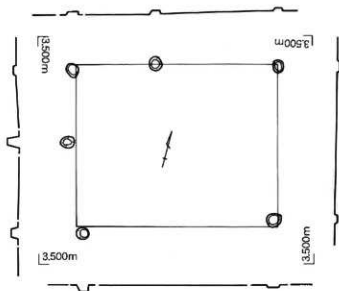
本建物の西側梁行ラインは、居館中央にある建物66の西側桁行ラインに一致する。また、東側梁行ラインは、建物70の西側桁行ライン及び建物69の西側梁行ラインにおおむね一致する。以上から、建物72と他の建物の同時存在が推定できる。

### (73) 建物73

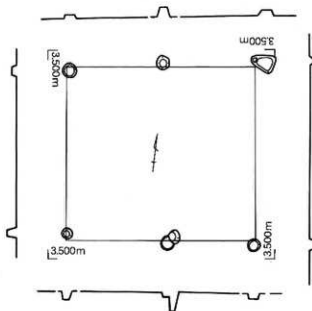
建物73(第47図)は、居館2の南東コーナー近くにある。

建物は東西方向に長軸をもつもので、主軸方位は $N81^{\circ} E$ である。居館2の溝と方位をほぼ同じくする。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $20.74m^2$ を測る。

建物68



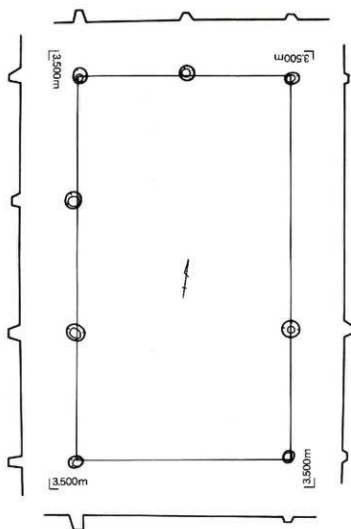
建物69



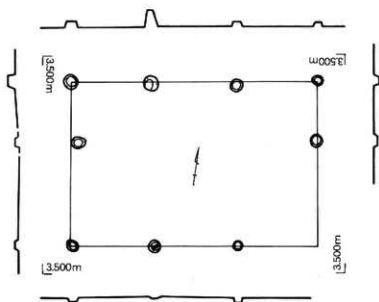
0 2m

第45図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(34)

建物70



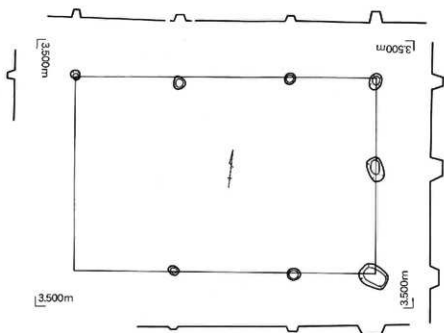
建物71



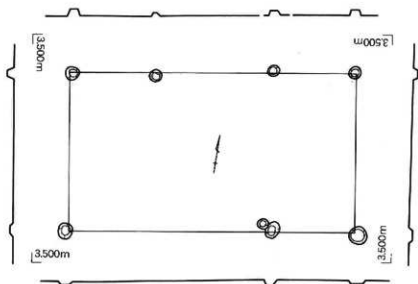
0 2m

第46図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(35)

建物72



建物73



0 2m

第47図 八坂中遺跡獨立柱建物跡(36)



#### (74) 建物74

建物74（第49図）は、居館2の南東コーナー部にある。しかし、建物の端が、居館2を二重に巡る溝のうち内側のものよりも外に出る。

建物は南北方向に長軸をもつもので、主軸方位は $N4^{\circ}E$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $29.6m^2$ を測る。全体的にやや細長い印象を受ける。

#### (75) 建物75

建物75（第49図）も居館2の南東コーナー部にある。

平面形は長方形を呈し、東西方向に長軸をもつ。主軸方位は $N78.5^{\circ}E$ で、居館2の溝の方位とやや異なるので、居館2に伴わない可能性が高い。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $23.6m^2$ を測る。

#### (76) 建物76

建物76（第50図）は居館2の南東コーナー部にあり、建物73、建物74と重複する。本建物も建物74と同じように、居館2を二重に巡る溝のうち内側のものよりも外に出る。

建物は東西方向に長軸をもつもので、主軸方位は $N87.5^{\circ}E$ である。規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $16.5m^2$ を測る。

#### (77) 建物77

建物77（第50図）は、溝9の東側にある。

平面プランはほぼ方形を呈し、わずかに南北方向に長い。主軸方位は $N18^{\circ}W$ である。規模は梁行2間、桁行1間で、身舎面積は $16.8m^2$ を測る。

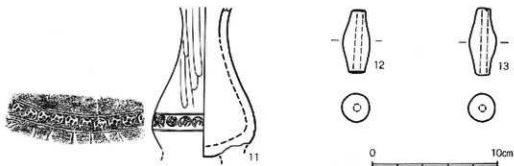
本遺跡の建物としては、小型のものである。

#### (78) 建物78

建物78（第51図）も溝9の東側に位置する。このあたりは、居館内など他の建物が建つ地区に比べると建物はまばらである。

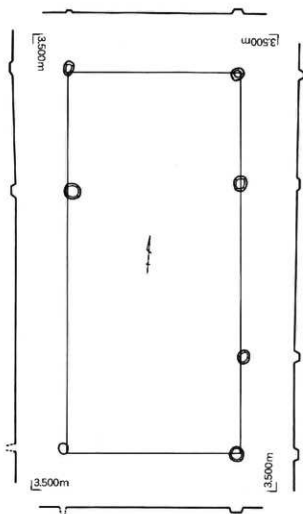
平面プランはやや長方形気味で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N85^{\circ}E$ である。規模は梁行2間、桁行1間で、身舎面積は $20.52m^2$ を測る。

建物を構成する柱穴から遺物が出土している（第48図）。11は瓦質土器の仏花器である。口縁部と脚部を欠くもので、下膨れの体部下半から緩やかにくびれながら口縁部にいたる。体部下部に2条の沈線を入れ、その間にスタンプ文を配する。12、13は上錐で、新錐形を呈する。時期的には16世紀代のものか。

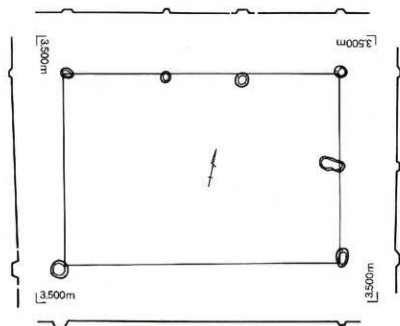


第48図 八坂中遺跡建物78出土土器

建物74



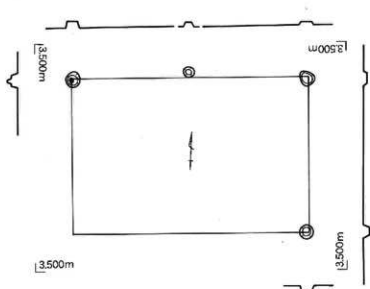
建物75



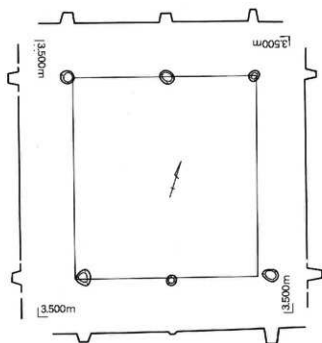
0 2m

第49図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(37)

建物76



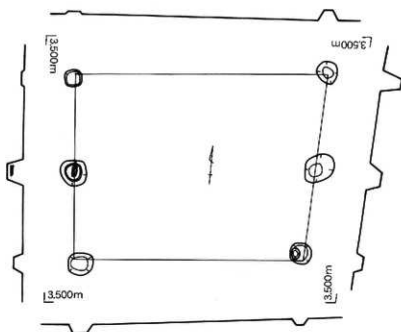
建物77



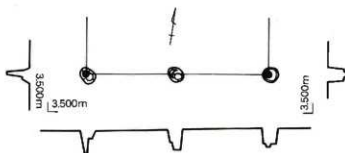
0 2m

第50図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(38)

建物78



建物79



0 2m

第51図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(39)

#### (79) 建物79

建物79(第51図)は、溝9の東側に位置する。

西側が調査区外におよぶため全形は不明であるが、柱間2間分の柱六列を確認している。これが梁行と桁行のどちらになるかは明確でないが、周辺に位置する建物77や建物78が方形にちかい平面形を呈することから、それほど規模の大きなものにはならないと推定される。

#### (80) 建物80

建物80(第52図)は、居館2内部の西側溝に沿いみられる。

建物の大部分が居館2の溝に切られているため全形は不明である。現状で、東側桁行と思われる南北方向の柱列がみられるのみである。柱列は3間分あると思われるが、北から2番目の柱穴がみられない。桁行の長さだけみた場合、本遺跡の平均的なものである。

#### (81) 建物81

建物81(第52図)も居館2内部の西側溝に沿いみられる。

建物80と同様に、建物の大部分が居館2の溝に切られているため全形は不明である。建物80の柱列とほとんど重なるように、東側桁行と思われる南北方向の柱列がみられる。桁行は3間あり、建物80とほぼ同規模の長さである。

#### (82) 建物82

建物82(第52図)は、居館3内部の東側溝沿いみられる。

西側桁行と思われる南北方向の柱列がみられるのみで、東側が居館3の溝に切られているため全形は不明である。桁行は3間分あり、長さだけからみた場合、本遺跡のなかでも平均的なものとしてとらえられる。

#### (83) 建物83

建物83(第52図)も建物82と同様に、居館3内部の東側溝沿いみられる。厳密には溝内部の斜面にあたり、溝により切られている。

位置的には、建物82の柱列とほとんど重なるように、西側桁行と思われる南北方向の柱列がみられる。桁行は3間あり、建物82とほぼ同規模の長さである。

この規模の建物の場合、東側桁行の柱列が、溝の外側付近にみられるはずであるが、それが全く確認されていないので、建物でない可能性もある。

#### (84) 建物84

建物84(第53図)は、居館2の北東コーナー部東側の外に位置する。

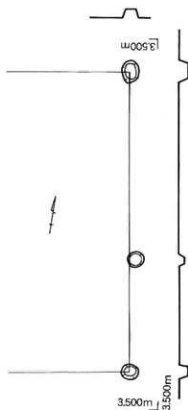
建物は長方形プランを呈し、主軸方位は $N87.5^{\circ} E$ である。方位的には、居館2の溝と同様な方位をとる。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $24.05m^2$ を測る。

#### (85) 建物85

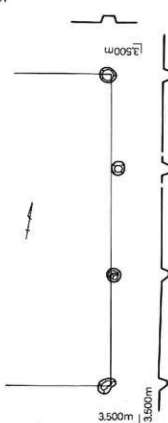
建物85(第53図)も、建物84同様に居館2の北東コーナー部東側の外に位置する。建物84と重複しており、主軸方位的にもほぼ同様である。

建物は長方形プランを呈し、主軸方位は $N89^{\circ} W$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $18.9m^2$ を測る。

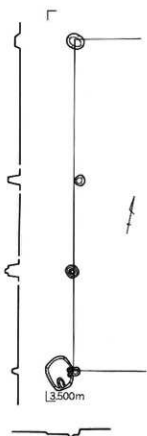
建物80



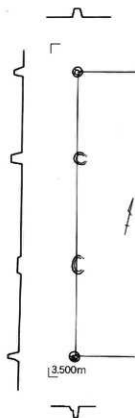
建物81



建物82



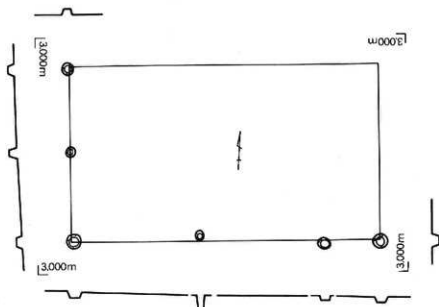
建物83



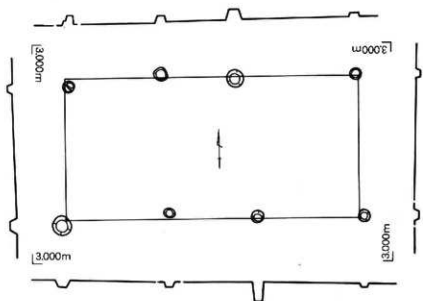
0 2m

第52圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(40)

建物84



建物85



0 2m

第53圖 八板中遺跡掘立柱建物跡(41)

### (86) 建物86

建物86(第55図)は、居館2の東の外側に位置する。

長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N2^{\circ}W$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $18.6m^2$ である。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第54図)。14は土錘である。



第54図 八坂中遺跡建物86出土土器

### (87) 建物87

建物87(第55図)は、居館2の東の外側に位置する。

南北方向に主軸をもつもので、長方形プランを呈する。主軸方位は $N3^{\circ}W$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $19.6m^2$ である。

### (88) 建物88

建物88(第56図)は、居館2の東の外側に位置する。建物87と重複する。

長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N87.5^{\circ}W$ で、方位的には居館2の溝とやや異なった方位をとる。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $17.64m^2$ である。

### (89) 建物89

建物89(第56図)は、居館2の東の外側に位置する。建物90など多くの建物と重複する。

東西方向に主軸をもつもので、長方形プランを呈する。主軸方位は $N89^{\circ}E$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $18.6m^2$ である。

### (90) 建物90

建物90(第57図)は、居館2の東の外側に位置する。建物91など多くの建物と重複する。

長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N1^{\circ}W$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $21.08m^2$ である。

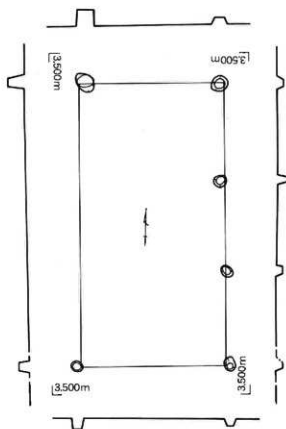
### (91) 建物91

建物91(第57図)は、居館2の東の外側に位置する。建物90など多くの建物と重複する。

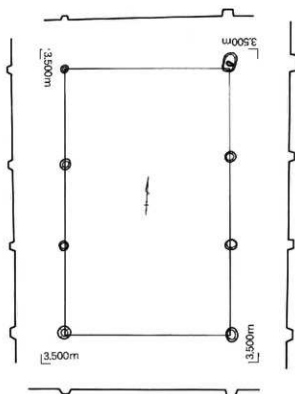
東西方向に主軸をもつもので、長方形プランを呈する。主軸方位は $N87.5^{\circ}E$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $22.05m^2$ である。



建物86



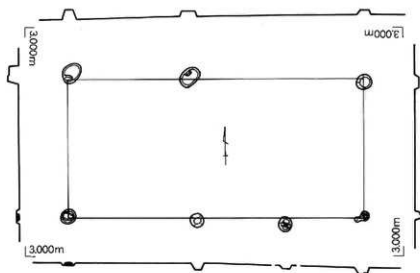
建物87



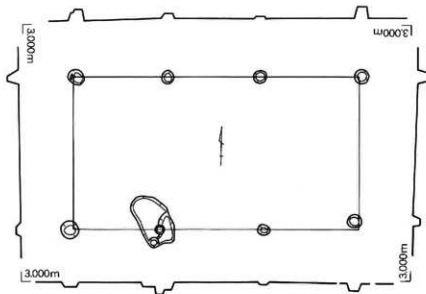
0 2m

第55図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(42)

建物88



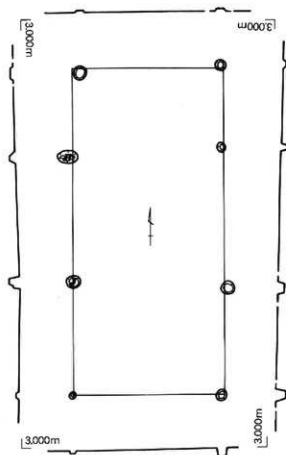
建物89



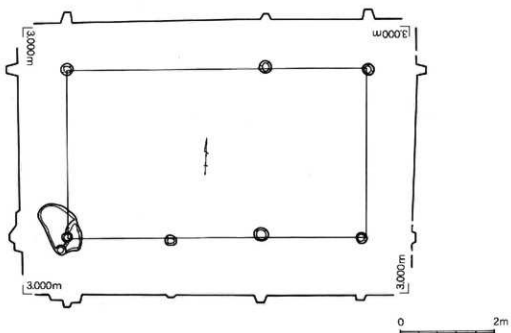
0 2m

第56図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(43)

建物90



建物91



第57図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(44)

## (92) 建物92

建物92(第59図)は、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。多くの建物が重複しており、複雑な様相を示す。

長方形プランを呈し、主軸方位は $N66.5^{\circ}W$ である。南東-北西方向に主軸をとり、居館2の溝や周辺にある建物90などは大きく方位を異にする。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $17.69m^2$ である。

## (93) 建物93

建物93(第59図)も、建物90などの多くの建物が重複し複雑な様相を示す。居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をとる。主軸方位は $N86.5^{\circ}W$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。

規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $13.5m^2$ である。建物規模としては、小規模である。

## (94) 建物94

建物94(第60図)は、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。多くの建物が重複しており、複雑な様相を示す。

長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N$ で、方位的には居館2の溝と同様な方位を示す。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.18m^2$ である。

## (95) 建物95

建物95(第60図)は、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。長方形プランを呈し、主軸方位は $N70^{\circ}W$ である。南東-北西方向に主軸をとり、居館2の溝や周辺にある建物90などは大きく方位を異にし、建物92とは同様な方位をとる。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $26.4m^2$ である。西側梁行の中央の柱穴が、外側に飛び出すやや特異な形態を示す。

柱穴を構成する柱穴から遺物が出土した(第58図)。15は土師質土器小皿で、13世紀代の所産か。



第58図 八坂中遺跡建物95出土土器

## (96) 建物96

建物96(第61図)は、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。

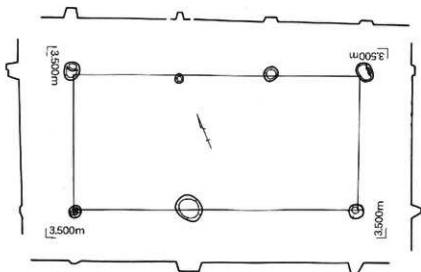
建物の南側が調査区外のおよぶため全形は不明だが、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N8.5^{\circ}W$ で、方位的には居館2の溝と若干異なる。規模は梁行1間、桁行3間と推定される。

## (97) 建物97

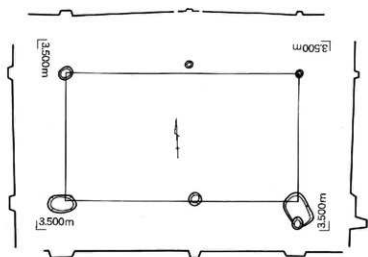
建物97(第61図)も、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。

南北方向に主軸をもつものと考えられるが、南側が調査区外におよぶ。主軸方位は $N6^{\circ}E$ である。建物規模は、梁行2間、桁行2間以上である。

建物92



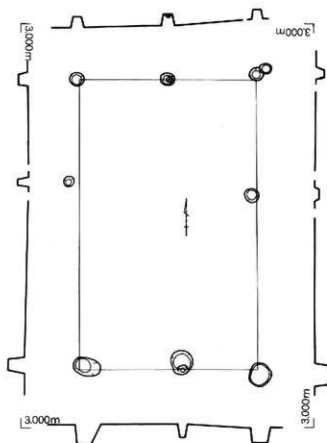
建物93



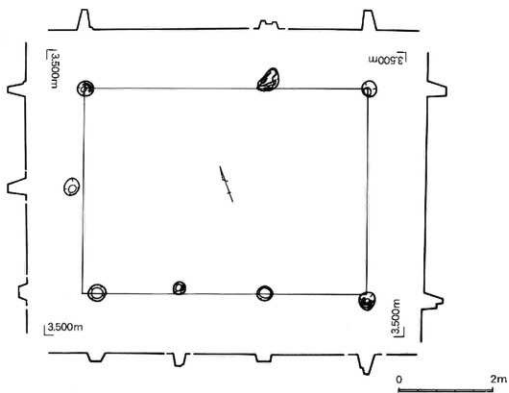
0 2m

第59図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(45)

建物94

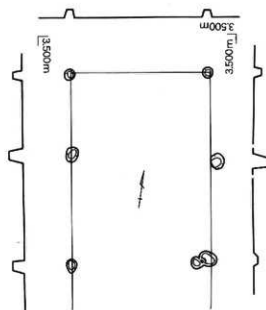


建物95

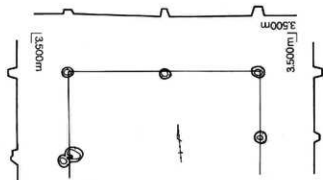


第60図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(46)

建物96



建物97



0 2m

第61圖 八坂中通跡掘立柱建物跡(47)

#### (98) 建物98

建物98(第62図)は、多くの建物が重複し複雑な様相を示す、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。これらの地区は、柱穴などが密集する部分で多くの掘立柱建物が復元されている。居館2からみれば、その外側に相当するが、東側や北側をみれば溝1と溝5があり、これらに区画された部分ともとらえることが可能である。建物方位をみても、いくつかの方位のものがあり、時間的にも複雑な状況であったことが想定される。

建物98は、南側が調査区外におよぶが、平面プラン長方形を呈するものと考えられる。南北方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N4^{\circ}W$ である。方位的には、居館2や溝1、溝5と同様なものである。建物規模は、梁行1間、桁行3間以上である。

#### (99) 建物99

建物99(第62図)は、柱穴などが密集し多くの掘立柱建物が復元されている、居館2南東コーナー部の東側の外に位置する。

建物は南半分が調査区外におよぶが、長方形の平面プランを呈し、主軸を南東-北西方向にとる建物であることが分かる。主軸方位は $N70^{\circ}W$ である。建物方位からみると、建物92、建物95と同様な方位をとることが分かり、時間的にも同様な時期の所産であろう。

規模は梁行2間以上、桁行4間である。桁行の柱穴配置をみると、中央の2間分の柱間が両側の柱間に比べ短い状況である。

#### (100) 建物100

建物100(第63図)は、居館3の東の外側に位置する。この部分は居館3からみれば外側に相当するが、溝5と溝6・溝7・溝8に挟まれた地域にあたり、柱穴などが密集する。時間的にも複数の時期の建物が存在するものと考えられる。

建物は溝5に平行するようにみられる。平面プランは長方形を呈し、主軸を東西方向にとる。主軸方位は $N88^{\circ}E$ である。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $27.72m^2$ である。比較的整然とした状況で柱穴が配される。両桁行をみると、中央の柱間が両側の柱間に比べ短い状況である。

#### (101) 建物101

建物101(第63図)は、居館3の東側の外に位置する。

建物は、居館3を隔する溝のうち、外側の溝に切られており全形は不明である。南北方向に主軸をもち、主軸方位は $N18^{\circ}W$ を測るが、居館3の溝とは方位を異にする。

規模は桁行3間を確認できるのみである。桁行の長さをみてみると、他の建物に比べると短いようで、小型の建物であったことが分かる。

#### (102) 建物102

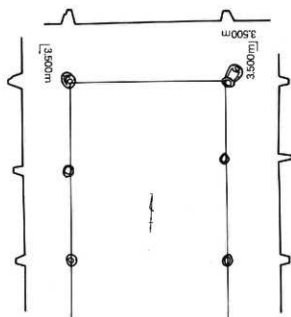
建物102(第63図)も居館3の東側の外に位置し、いくつかの建物と重複する。

建物は、平面プランが長方形を呈し、主軸を東四方向にとる。主軸方位は $N82^{\circ}E$ である。建物方位は居館3の溝や溝5ともほぼ一致する。

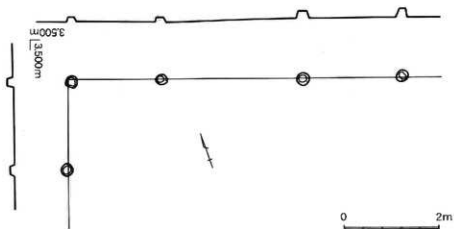
規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $23.37m^2$ を測る。土壇122から切られるため、西北隅の柱穴を欠いている。



建物98

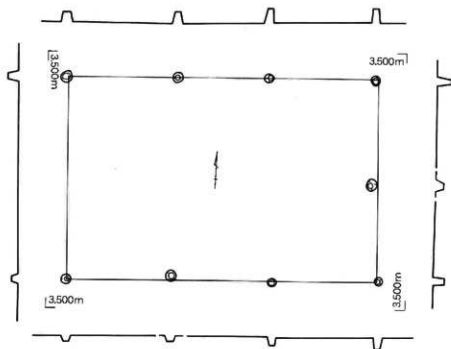


建物99

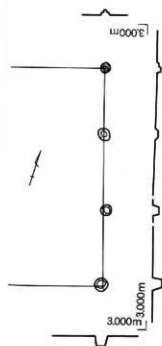


第62圖 八坂中遺跡竪柱建物跡(48)

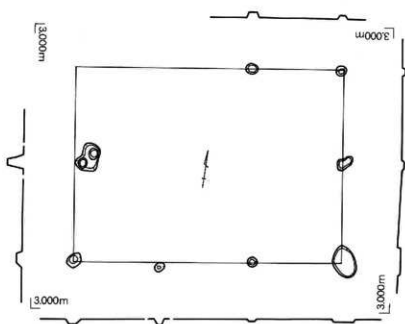
建物100



建物101



建物102



第63図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(49)

### (103) 建物103

建物103(第65図)は、居館3の東側の外に位置する。このあたりは遺構が密集しており、建物102、建物104などと重複する。

建物は長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N3.5^{\circ}E$ で、建物方位は居館3の溝や溝5ともほぼ一致する。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $19.22m^2$ を測る。

### (104) 建物104

建物104(第65図)も居館3の東側の外に位置する。

長方形プランを呈する建物は、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N82.5^{\circ}E$ で、本建物の南側に位置する建物102と同様な方位をとる。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $13.34m^2$ を測る。本建物は、桁行に比し梁行の長さが短く、他の建物に比べやや細長い印象を受ける。

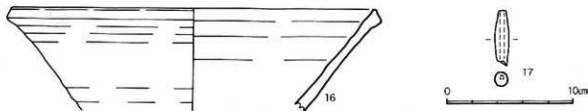
### (105) 建物105

建物105(第66図)は、居館3の東側の外に位置する。

建物は長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N1^{\circ}E$ で、建物方位は建物103と同様な方位をとる。

規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $13.64m^2$ を測る。建物規模は小規模である。柱穴の配置をみると、両桁行とも北側の柱間が南側の柱間より短い配置をとる。

建物を構成する柱穴より遺物が出土した(第64図)。16は束播系こね鉢である。口縁部はわずかに肥厚するのみで、端部を上方向につまみあげる。12世紀代のものであろう。17は土錘である。中央がわずかに膨らみ、新錘形を呈する。



第64図 八坂中遺跡建物105出土土器

### (106) 建物106

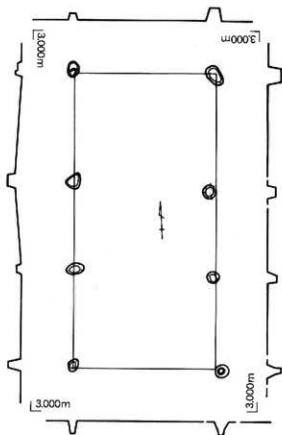
建物106(第66図)も居館3の東側の外に位置する。このあたりは遺構が密集しており、建物107、建物108などと重複する。

長方形プランを呈する建物は、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N$ で、建物109、建物110などと同様あるいは直交する方位をもつ。

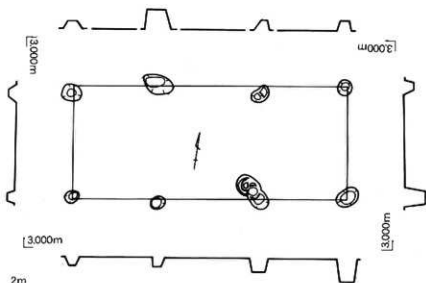
規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $31.2m^2$ を測る。柱穴は配置をみると、西側桁行は両端の柱穴は確認できるが、その間の柱穴については検出できなかった。これらについては、礎石などを利用したものであろう。

居館3の東側における建物のうち、建物100の西側梁行、建物106の西側桁行、建物110の東側梁行の以上が同一のライン上にほぼのることから、これら建物については同時に存在した可能性が高い。

建物103



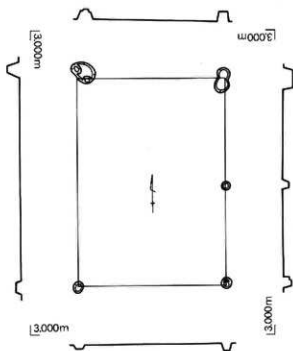
建物104



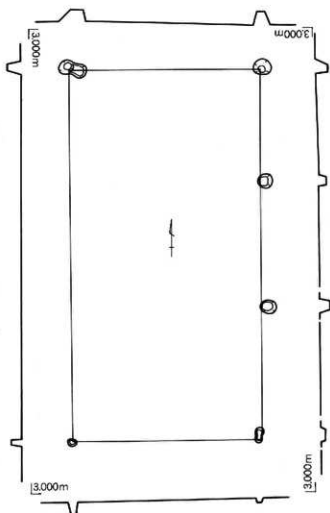
0 2m

第65図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(50)

建物105



建物106



0 2m

第66圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(51)

### (107) 建物107

建物107(第68図)は、居館3の東側の外に位置する。

長方形プランを呈する建物は、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N86.5^{\circ} E$ で、建物108、建物109などと同様な方位をもつ。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $18.6m^2$ を測る。柱穴は配置をみると、北側桁行のうち西端の柱穴と西から3番目の柱穴がみられない。

### (108) 建物108

建物108(第68図)は、居館3の東側の外に位置する。このあたりは建物が密集しており、建物105、建物106、建物107などと重複する。

東西方向に主軸をもつ長方形プランの建物である。主軸方位は $N86^{\circ} E$ で、建物107、建物109などと同様あるいは直交する方位をもつ。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $17.1m^2$ を測る。

### (109) 建物109

建物109(第69図)は、居館3の東側の外に位置する。

長方形プランを呈する建物は、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N3.5^{\circ} W$ で、建物107、建物108などと同様な方位をもつ。

規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は $15.04m^2$ を測る。建物規模的には小規模である。

建物を構成する柱穴から遺物が出上した(第67図)。18は土師質土器小皿である。口径は $8cm$ 以上で、13世紀代のものか。



第67図 八坂中遺跡建物109出土土器

### (110) 建物110

建物110(第69図)は、居館3の東側の外にあり、溝6に沿うように位置する。

東西方向に主軸をもつ長方形プランの建物で、主軸方位は $N87.5^{\circ} E$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $21.42m^2$ を測る。

### (111) 建物111

建物111(第70図)は、居館3の東側の外にあり、溝6に直交して跨ぐように位置する。

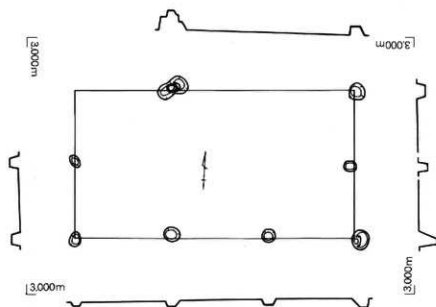
長方形プランを呈する建物は、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N0.5^{\circ} E$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $17.92m^2$ を測る。桁行に比し梁行が短く、縦長く感じる建物である。

### (112) 建物112

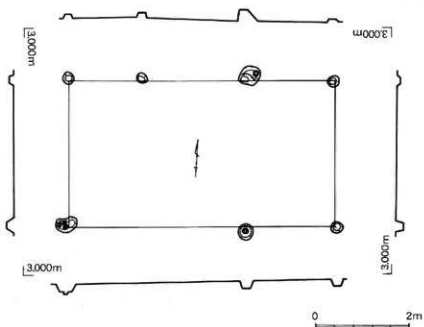
建物112(第70図)は、居館3の東側の外に位置する。東西方向に主軸をもつ建物であるが、居館3を両する溝のうち、外側の溝に切られる。

建物は長方形プランを呈し、主軸方位は $N84.5^{\circ} W$ である。居館3の溝とは明らかに方位を異にする。規模は梁行1間、桁行2間以上である。

建物107

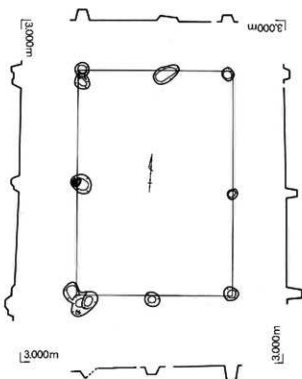


建物108

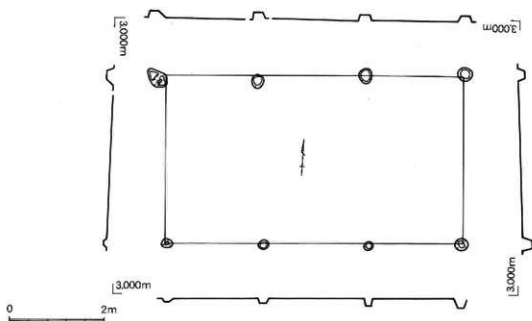


第68図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(52)

建物109



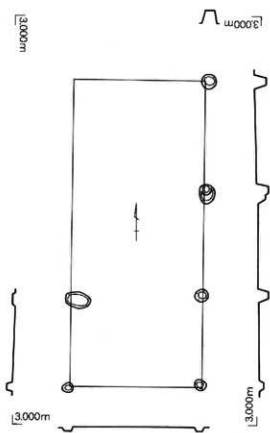
建物110



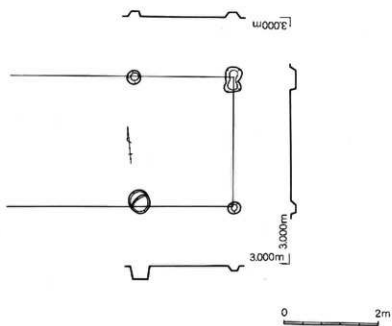
第69圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(53)



建物111



建物112



第70図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(54)

### (113) 建物113

建物113(第72図)は、居館3の東北コーナーの外側に位置する。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N82^{\circ}E$ である。建物のすぐ南側に溝8がみられ、これに沿うように位置しているともみられる。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $16.82\text{m}^2$ を測る。桁行に比し梁行が短く、縦長く感じる建物である。南西隅の柱穴が、居館3を区画する溝に切られる。

### (114) 建物114

建物114(第72図)は、居館3の東北コーナーの外側に位置する。前述した建物113と同様な位置で重複している。

長方形プランを呈する建物は、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N80^{\circ}E$ である。建物113とはほぼ同様な方位を示す。

規模は梁行2間、桁行3間以上と思われる。

### (115) 建物115

建物115(第73図)は、居館2南東コーナー部の東の外側に位置する。このあたりは多くの建物が密集し、建物98、建物99と重複する。

建物は南半分が調査区外におよぶが、長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N84^{\circ}W$ で、西側に隣接する建物97と同様な方位をもつ。

建物の規模は、梁行1間以上、桁行3間である。桁行の長さから判断して、それほど規模の大きなものではないと推定される。

### (116) 建物116

建物116(第73図)は、建物115同様に居館2南東コーナー部の東の外側に位置する。建物92、建物93、建物94などと重複する。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N89.5^{\circ}W$ である。方位的には居館2の溝と同様な方位をもつ。

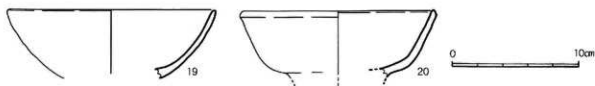
規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $25.2\text{m}^2$ を測る。

### (117) 建物117

建物117(第74図)は調査区の東端に位置する。

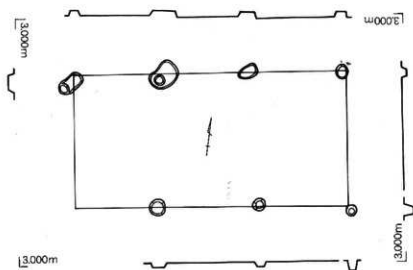
建物は平面プランがほぼ方形を呈し、主軸方位は $N73^{\circ}W$ である。方位的には、周辺の建物も若干の差はあるが同様な方位を示す。規模は1間×2間で、南西隅の柱穴が土簾184により切られる。身舎面積は $15.99\text{m}^2$ を測る。建物規模的には小規模なものである。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第71図)。19、20とも瓦器碗である。20は腰の張る体部を呈し、器高は低い。本来的には高台が付くものである。19は底部を欠くが、東国東型瓦器碗と思われる。底部の状況が分からないので明確ではないが、14世紀まで下る可能性が高い。

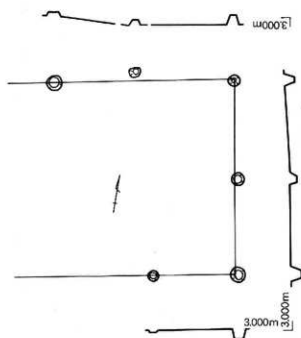


第71図 八坂中遺跡建物117出土土器

建物113

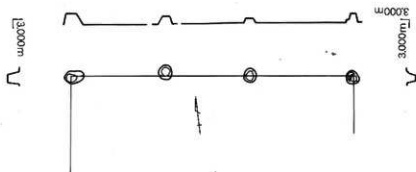


建物114

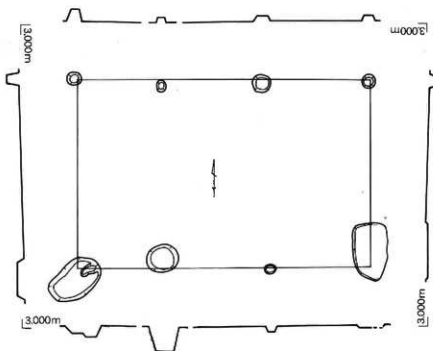


第72図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(55)

建物115



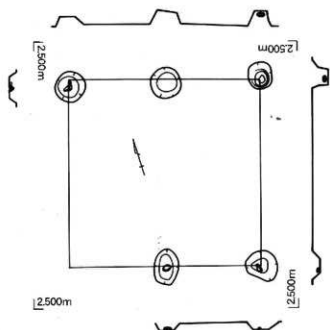
建物116



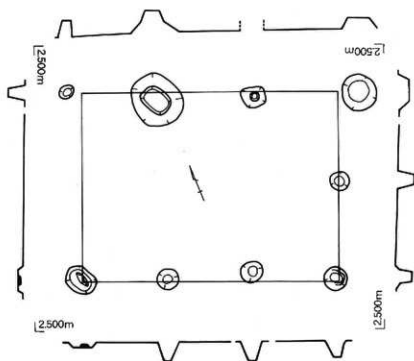
0 2m

第73図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(56)

建物117



建物118



0 2m

第74図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(57)

### (118) 建物118

建物118 (第74図) は、調査区の東端付近に位置する。

建物は長方形プランを呈し、主軸を東西方向にもつ。主軸方位は $N67.5^{\circ} W$ で、建物119とは同様な方位を示す。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は22.4㎡を測る。

建物を構成する柱穴から、完形の土師質土器小皿が出土した (第75図)。本建物の地納祭祀に係わるものである。21は口径8.5cmを測るもので、13世紀後半のものか。



第75図 八坂中遺跡建物118出土土器

### (119) 建物119

建物119 (第77図) も調査区の東端付近に位置する。この付近は建物が密集しており、本建物も建物118と重複する。

長方形プランを呈する建物は、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N68^{\circ} W$ で、建物118とほぼ同様な方位を示す。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は17.92㎡を測る。土塼164と重複しており、西北隅の柱穴が切られる。また、東側梁行のうち、中央の柱穴がみられない。

### (120) 建物120

建物120 (第77図) は、建物117、建物118、建物119などの南西に位置する。溝3と重複するようにみられるが、方位は異なる。

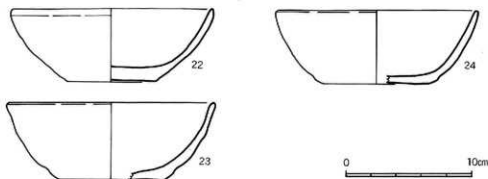
建物は長方形プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N11^{\circ} E$ を測る。規模は梁行2間、桁行1間で、身舎面積は19.61㎡を測る。梁行の柱間距離が短いに対し、桁行の柱間距離が長い特徴を有する。規模的には比較的小規模なものである。

### (121) 建物121

建物121 (第78図) は、調査区の東端付近に位置するもので、建物118の南側にある。

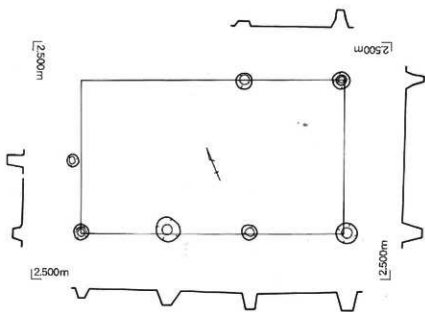
長方形プランを呈する建物は、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N71^{\circ} W$ で、建物117とほぼ同様な方位を示す。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は12.92㎡である。柱穴の配置はやや特異で、両桁行とももつとも西側

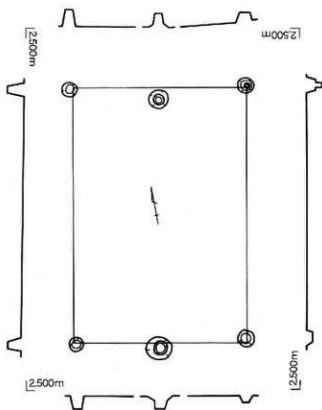


第76図 八坂中遺跡建物121出土土器

建物119

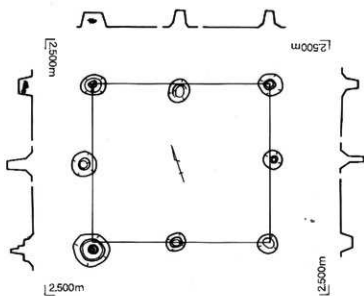


建物120

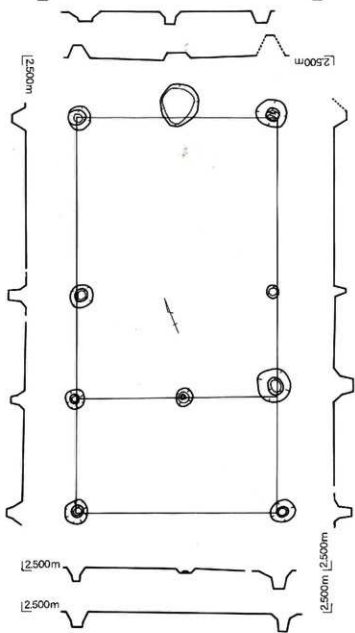


第77図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(58)

建物121



建物122



0 2m

第78図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(59)



の柱間が長い。残り2間分の柱間については、梁行の柱間と同様な長さである。今回は1軒の建物としてとらえたが、可能性として東半分のみが梁行2間、桁行2間の建物であることも考えられる。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第76図)。いずれも同一の柱穴から出土したもので、すべて瓦器類である。22は平底を呈するもので、底部は糸切りである。体部は内湾気味に口縁にいたる。23も平底で、底部は糸切りのち板状圧痕がみられる。底部からの立ち上がり部については、やや円盤状高台のような形態を有し、体部は内湾気味に口縁にいたる。24もやはり平底を呈し、底部糸切りである。底部は23のような形態をなす。体部は内湾気味に口縁にいたる。

以上の土器は東国東型瓦器類で、13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。

### (122) 建物122

建物122(第78図)は、調査区南東部に位置するものである。ちょうど溝2が切れるあたりにあり、溝2とは方位を異にする。

建物は長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位はN23°Eで、隣接する建物123とほぼ同様な方位を示す。

規模は梁行2間、桁行4間で、身舎面積は36.12㎡である。柱穴の配置をみると、西側桁行では北から2番目の柱穴がみられず、南側梁行では中央の柱穴がみられない。

### (123) 建物123

建物123(第80図)は、調査区南東部に位置する。建物122の南側にあり、一部が位置的に重複する関係にある。

建物は長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位はN71°Eで、隣接する建物122とほぼ同様な方位を示す。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は23.4㎡である。柱穴配置をみても、北側桁行が両端の柱穴をのぞいてみられない。

### (124) 建物124

建物124(第80図)は、調査区の南東部に位置する。溝2が建物のすぐ西側にあり、本建物と同様な方位をもつ。両者は同時に存在した可能性が高い。

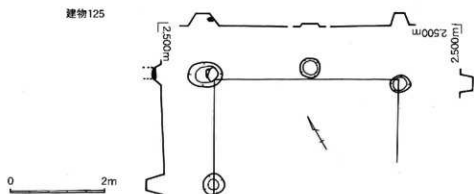
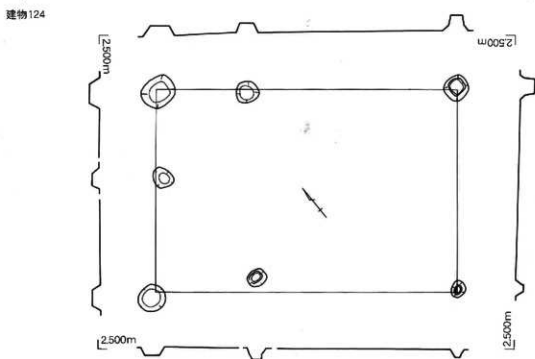
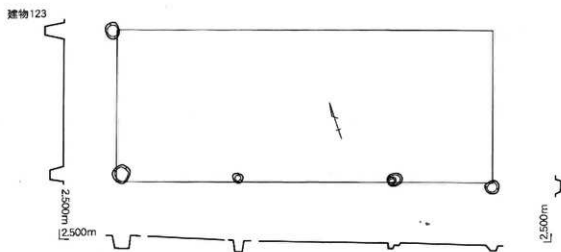
建物は平面プラン長方形を呈し、主軸方位はN51°Wである。

規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は27.52㎡である。柱穴配置をみても、両桁行とも西側の柱間が東側の柱間よりも短い。また、東側梁行の中央の柱穴がみられない。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第79図)。25は形態的には瓦器類の形態である。ただし、色調は暗橙褐色を呈し、焼成も土師質土器にちかい。底部は平底であるが、残存部分が少なく底部切り離しは不明である。底部は円盤高台状を呈し、体部は内湾気味に口縁へむかう。口縁部ちかくでわずかにくびれ、口縁端部は尖り気味である。時期的には13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。



第79図 八坂中遺跡建物124出土土器



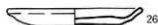
第80図 八板中遺跡掘立柱建物跡(60)

### (125) 建物125

建物125(第80図)は、調査区の南東部に位置する。建物の大半が調査区外におよぶため、建物の全形は不明である。

建物は長方形プランを呈するものと思われ、おおよそ南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N39^{\circ}E$ で、隣接する建物124や溝2とわずかに方位が異なる。規模は、梁行2間、桁行2間以上である。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第81図)。26は土師質土器小皿である。底部糸切りで、口径は10.6cmである。时期的には11世紀のものか。



第81図 八坂中遺跡建物125出土土器

### (126) 建物126

建物126(第82図)は、溝2のすぐ西側に位置する。

建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N72.5^{\circ}W$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は16.5 $m^2$ である。

建物の南に柱穴3本からなる横列があり、これが建物と同様な方位をとる。

### (127) 建物127

建物127(第82図)は、溝2のすぐ西側に位置する。建物126や建物128と重複する関係にある。

建物は長方形プランを呈し、おおよそ東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N50^{\circ}W$ で、隣接する建物128や溝2とほぼ同じ方位である。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は19.53 $m^2$ である。

### (128) 建物128

建物128(第82図)は、溝2のすぐ西側に位置する。建物126や建物127と重複する関係にある。

建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N50^{\circ}W$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は24.14 $m^2$ である。柱穴配置をみると、南側桁行の西から1番目と2番目の柱穴がみられない。この部分は礎石などを利用したものか。

### (129) 建物129

建物129(第83図)は、調査区の端に近い部分の溝2の西側に位置する。

東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N64^{\circ}W$ である。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は19.8 $m^2$ である。柱穴配置をみると、北側桁行の西から2番目の柱穴がみられない。

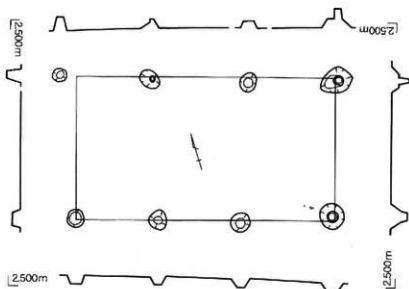
### (130) 建物130

建物130(第83図)は、建物129の西側に位置する。

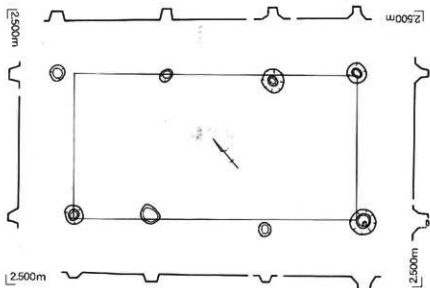
建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N68^{\circ}W$ で、建物の東側にある溝2とは異なった方位を示す。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は28.67 $m^2$ である。

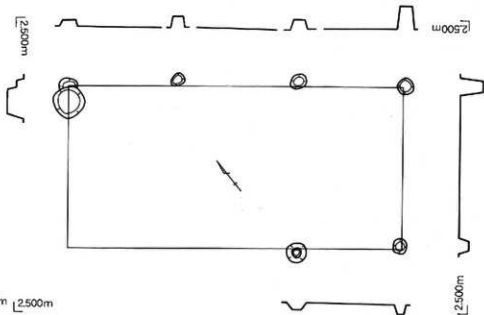
建物126



建物127

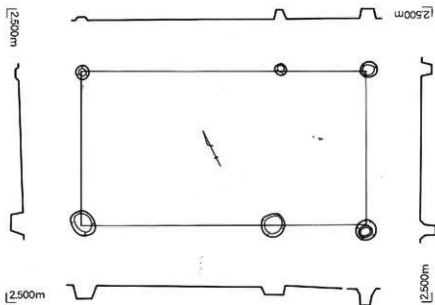


建物128

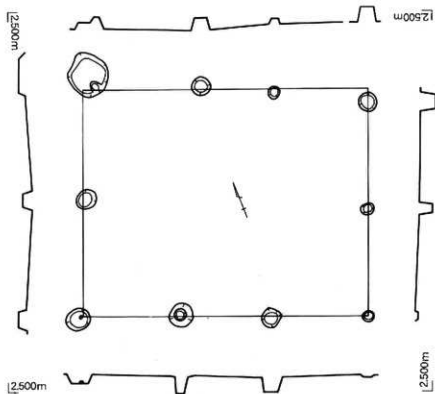


第82図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(61)

建物129



建物130



0 2m

第83図 八坂中遺跡彫立柱建物跡(62)

### (131) 建物131

建物131(第85図)は、調査区南端の溝1南側に位置する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N63.5^{\circ}W$ で、建物の北側にある溝1とは異なった方位を示す。また、北側桁行のラインは、建物131の東側に位置する建物129の北側桁行ラインとほぼ一致しており、同時期の建物である可能性が高い。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $24.18m^2$ である。柱穴配置をみると、北側桁行の西から2番目の柱穴がみられない。

### (132) 建物132

建物132(第85図)も、調査区南端の溝1南側に位置する。本来、溝1はさらに南までのびていた可能性が高く、その場合は建物132と位置的に重複していたことが考えられる。

東西方向に主軸をもつ長方形プランの建物で、主軸方位は $N66^{\circ}W$ である。建物の北側にある溝1とは異なった方位を示す。また、建物の東側にある溝2とは大きな意味では同様な方位をもつが、まったく同じではなく若干異なる。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $26.66m^2$ である。柱穴配置をみると、北側桁行の西端及び南側桁行の東から2番目の柱穴がみられない。

### (133) 建物133

建物133(第86図)は、溝1の東側に位置する。この部分は、溝1と溝4により二方を画された場所である。建物方位的には、溝1とは方位を異にする。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N78.5^{\circ}W$ を測る。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $24.32m^2$ である。柱穴配置をみると、西側梁行の中央の柱穴及び北側桁行の西から2番目の柱穴がみられない。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第84図)。27は東国東型瓦器物である。口径 $16.0cm$ 、底径 $7.3cm$ 、器高 $5.9cm$ を測るもので、底部は平底である。底部は糸切り後板状圧痕がみられる。底部は円盤状高台を思わせる形態で、体部は内湾気味に口縁にいたる。



第84図 八坂中遺跡建物133出土土器

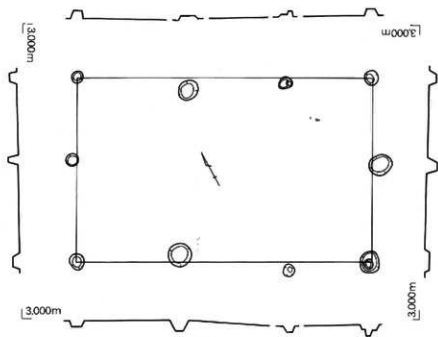
### (134) 建物134

建物134(第86図)は、建物133とほぼ同じ位置で重複してみられる。

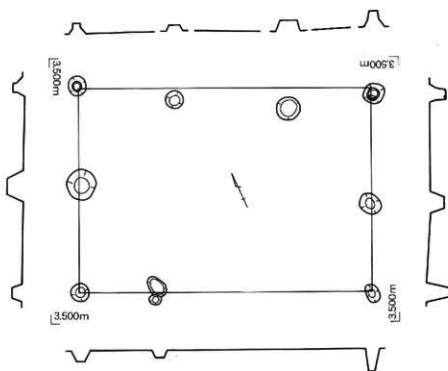
東西方向に主軸をもつ長方形プランの建物で、主軸方位は $N90^{\circ}W$ である。建物の西側にある溝1とは同様な方位を示す。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $26.6m^2$ である。柱穴配置をみると、東側梁行の中央の柱穴及び北側桁行の西から2番目の柱穴、南側桁行の東から2番目の柱穴がみられない。

建物131



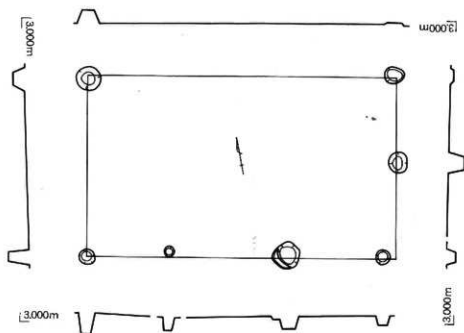
建物132



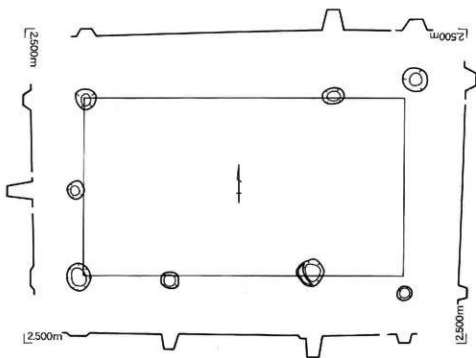
0 2m

第85圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(63)

建物 133



建物 134



0 2m

第86図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(64)



### (135) 建物135

建物135(第88図)は、調査区の中央南端に位置する。建物の北東には溝1がみられる。また、一部が建物132と重複する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N88.5^{\circ}W$ を測り、溝1とは若干方位を異にする。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $20.06m^2$ である。

### (136) 建物136

建物136(第88図)は、溝1と溝4がT字状にぶつかる部分の北側に位置する。建物137とは同位置で重複する。

建物の平面形は方形で、主軸方位は $N88^{\circ}W$ である。同位置で重複する建物137とは方位をほぼ同じくする。規模は南北1間、東西2間で、身舎面積は $17.16m^2$ である。

建物を構成する柱穴から、遺物(第87図)が出土した。28は土師質土器小皿である。底部糸切りで、口径 $7.4cm$ 、底径 $4.7cm$ 、器高 $1.7cm$ を測る。底部は厚く、底部に比べ薄い部は斜方向に引き上げられ、口縁にいたり丸く肥厚する。時期は14世紀代のものか。



第87図 八坂中遺跡建物136出土土器

### (137) 建物137

建物136と同位置で重複する建物137(第89図)は、溝1と溝4がT字状にぶつかる部分の約10m北側に位置する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N88^{\circ}W$ を測り、建物136と同様な方位をもつ。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $27.28m^2$ である。この周辺は、調査区内でも掘立柱建物が希少な部分である。

### (138) 建物138

建物138(第89図)は、溝4が途切れる付近に位置する。溝4の約3m北側にあたる。

建物は長方形の平面プランを呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N2^{\circ}E$ を測るが、部分的に重複する建物141とは若干方位が異なる。

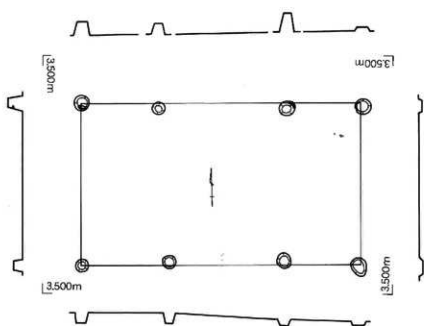
規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $13.2m^2$ である。

### (139) 建物139

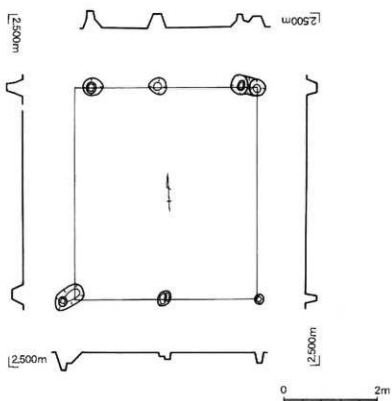
建物139(第90図)は、建物138の西側にみられる。溝4の北側にあたり、溝4とは約6mの距離を測る。東西方向に主軸をもつもので、溝4と同様な方位をもつ。

建物は長方形プランを呈し、主軸方位は $N78.5^{\circ}W$ を測る。本建物は四面に庇をもつもので、身舎の規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $30.24m^2$ である。各面の庇の柱穴列は、いずれも身舎部分より約1mの距離をもち並ぶ。本遺跡で庇を有するものはこれ1基のみである。

建物135

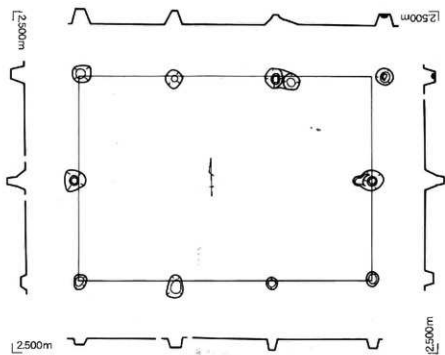


建物136

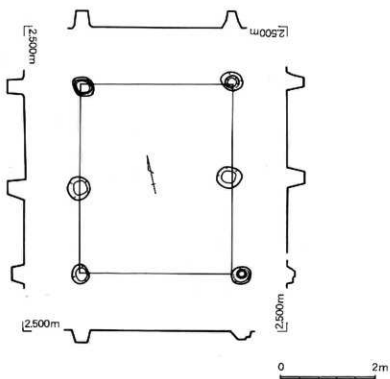


第88図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(65)

建物 137

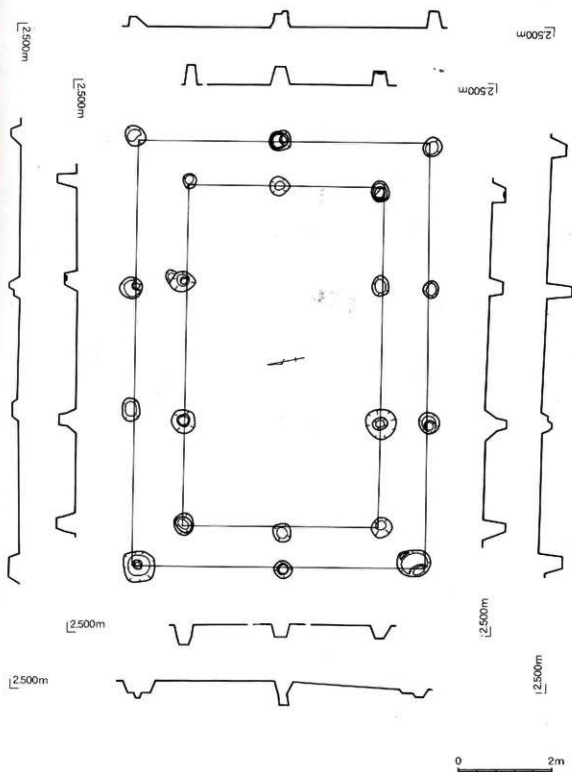


建物 138

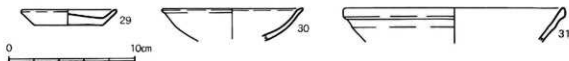


第89図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(66)

建物139



第90圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(67)



第91図 八坂中遺跡建物139出土土器

本建物の東には建物141がみられる。建物141は本建物とほぼ同様な方位を示し、かつ本建物の南側底ラインが建物141の南側梁行ラインと一致することから、同時存在の可能性が高い。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した（第91図）。29は上師質土器小皿である。口径7.4cmを測るもので、体部は比較的シャープに立ち上がる。30は白磁の皿である。また、31は玉縁状を呈する白磁碗である。本建物の時期は、14世紀初前後と考えられる。

#### (140) 建物140

建物140（第93図）は、建物139の東側に位置する。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位はN74°Wを測る。規模は梁行1間、桁行4間で、身舎面積は37.6㎡である。桁行が4間の規模をもつものは、本遺跡でも少ない。また、梁行に比し桁行が長いもので、細長い印象を受ける建物である。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した（第92図）。32は土銅である。



第92図 八坂中遺跡建物140出土土器

#### (141) 建物141

建物139の東側に位置するのが、建物141（第93図）である。

建物は平面プラン長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位はN13°Eを測る。規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は13.33㎡である。

本建物は、すぐ西側に位置する建物139と同様な方位を示す。また、本建物の南側梁行ラインが建物139の南側底ラインと一致することから同時期のものであると考えられる。

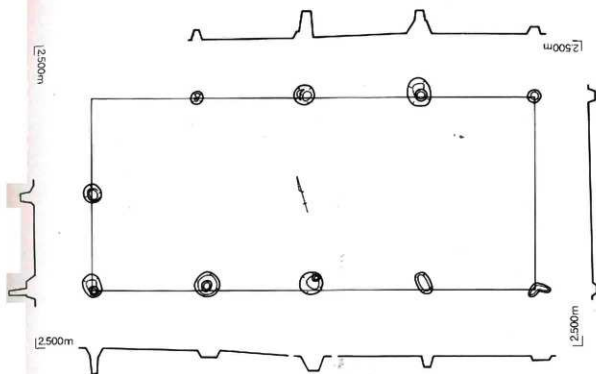
#### (142) 建物142

建物142（第94図）は、建物139の東側に位置する。本建物は、建物140、建物141と重複するが、両建物とは方位を異にする。

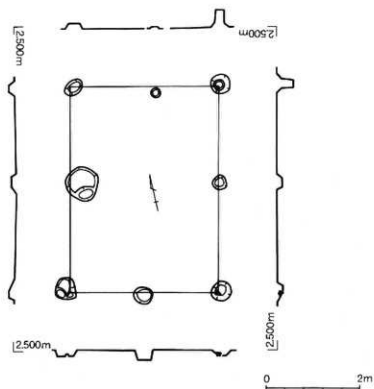
建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位はN84°Wである。規模は梁行1間、桁行4間で、身舎面積は26.24㎡である。また、本建物は梁行に比し桁行が長いもので、平面プランが細長い印象を受ける。

建物の西南隅の柱穴からほぼ完形の上師質土器（第95図）が出土した。33は13世紀後半～14世紀初に位置付けられるもので、建物の地鎮祭りに係わるものである可能性が高い。

建物140

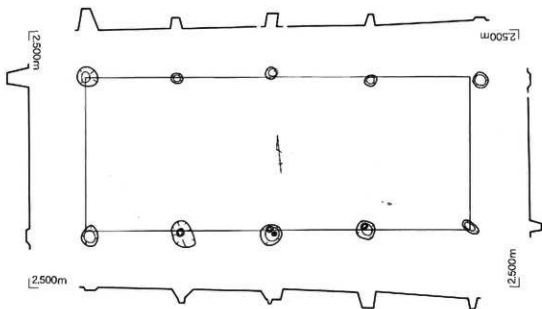


建物141

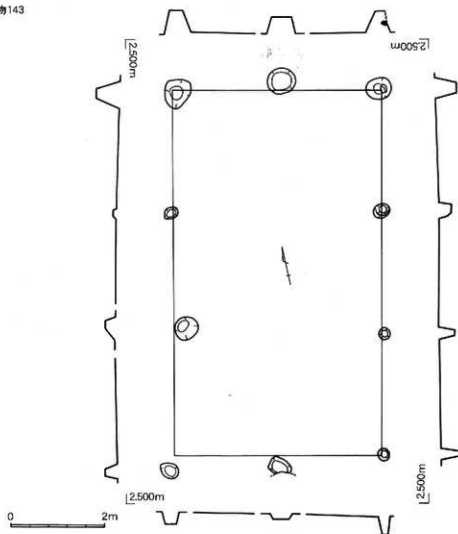


第93図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(68)

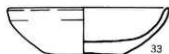
建物142



建物143



第94図 八板中遺跡掘立柱建物跡(69)



第95図 八坂中遺跡建物142出土土器

#### (143) 建物143

建物143(第94図)は、建物142の東側に位置し、建物140、建物144と重複する。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N12.5^{\circ} E$ である。本建物の南側、西側、北側にかけて、細い溝が巡る。位置的にも、方位的にも本建物に伴うようにも見えるが、建物を構成する柱穴と重複しており、本建物との関係は微妙である。

規模は梁行1間、桁行4間で、身舎面積は $33.88m^2$ である。

#### (144) 建物144

建物144(第96図)は、建物143と重複して見られる。

建物は長方形プランを呈するもので、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N80.5^{\circ} W$ である。規模は梁行2間、桁行4間で、身舎面積は $41.82m^2$ である。

柱穴の配置をみると、両梁行とも中央の柱穴がやや北に寄った位置に配される。また、規模的には $40m$ をこえ、本遺跡では大型に位置付けられる。

#### (145) 建物145

建物145(第96図)は、調査区の東端に近い位置にある。

建物は東西方向に主軸をもつもので、主軸方位は $N88.5^{\circ} W$ である。周辺の建物で、本建物と方位が同様なものはない。しかし、西側に約 $15m$ 離れた位置にある建物142は方位的にも似ており、本建物の南側桁行のラインが、建物142の北側桁行ラインとほぼ一致することから同時期の建物である可能性が高い。

規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $12.16m^2$ である。

#### (146) 建物146

建物146(第97図)は、建物144の北側に位置する。

建物は平面プランが方形を呈する。主軸方位は $N16^{\circ} W$ で、周辺には本建物と同様な方位をもつものはみあたらない。

規模は東西方向が2間、南北方向が1間で、身舎面積は $15.2m^2$ である。本遺跡では、平面プラン方形を呈するものはいずれも小型であることから、倉庫などの機能をもつものと推定される。

#### (147) 建物147

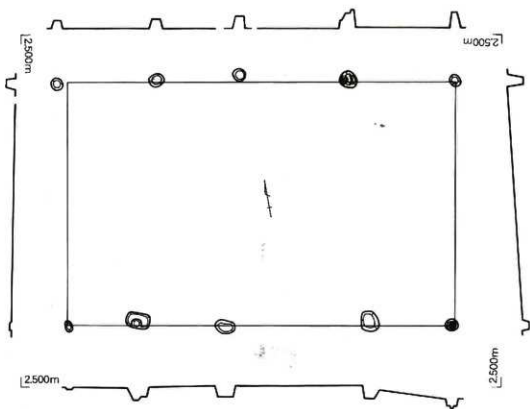
建物147(第97図)は、建物146と重複しながらその西側に位置する。

建物の平面形は長方形で、東西方向に主軸をもつ。建物方位的には、同様な方位をもつものが周辺ではみられないが、建物140に近い方向をもつ。

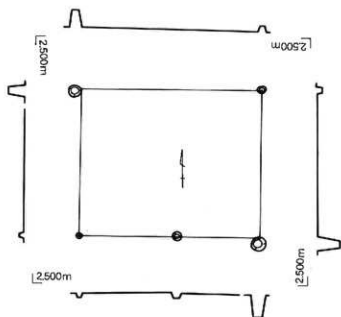
規模は梁行1間、桁行2間で、身舎面積は $68.5m^2$ である。柱穴配置をみると、東側梁行の中央の柱穴がみられない。



建物144

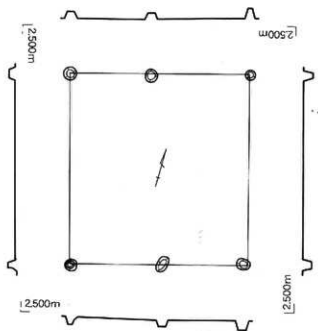


建物145

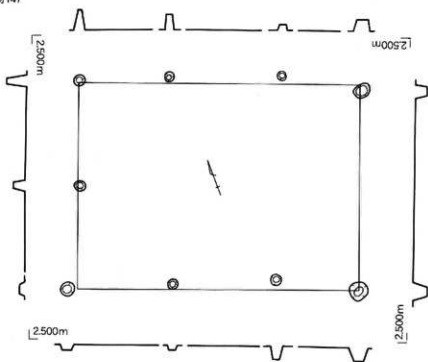


第96圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(70)

建物146



建物147



0 2m

第97図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(71)

#### (148) 建物148

建物148(第100図)は、調査区東北部の建物が密集した地区に位置する。建物146、建物149と重複関係にある。

建物は長方形プランを呈し、南北方向に主軸方位をもつ。主軸方位は $N25^{\circ}W$ で、本建物の北側約5mに位置する建物158と同様な方位を呈する。

建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は21㎡である。柱穴配置をみると、北東コーナー一部の柱穴と東側桁行の南から2番目の柱穴がみられない。

#### (149) 建物149

建物149(第100図)は、建物148の北側に位置し、一部が重複する。

建物は平面形が長方形を呈し、東西方向に主軸を有する。主軸方位は $N85^{\circ}E$ で、建物の北側に位置する建物157と同様な方位をもつ。

建物の規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は24.6㎡である。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第98図)。34は上胎質土器小皿で、口径9.4cm、底径6.2cm、器高1.5cmを測る。底部は糸切り離しである。体部は底部と同じ厚みで、緩やかに立ち上がる。器形や口径からみて、12世紀初前後の時期と考えられる。



第98図 八坂中遺跡建物149出土土器

#### (150) 建物150

建物150(第101図)は、建物149の西側に位置する。

建物は長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N86^{\circ}E$ で、建物の北側に位置する建物157などと同様な方位をもつ。

建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は13.33㎡である。

#### (151) 建物151

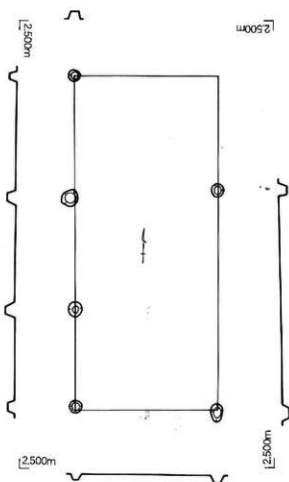
建物151(第101図)は、調査区東北部の建物が密集した地区に位置する。

建物の平面プランは長方形で、東西方向に長軸をもつ。主軸方位は $N86^{\circ}E$ で、建物の北東側に位置する建物157や、建物の南西に位置する建物148と同様な方位をもつ。建物の規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は26.23㎡である。建物からの出土遺物(第99図)は、35の青磁碗である。端部がわずかに外反し、黄色がかかったうすい緑色の釉がかかる。

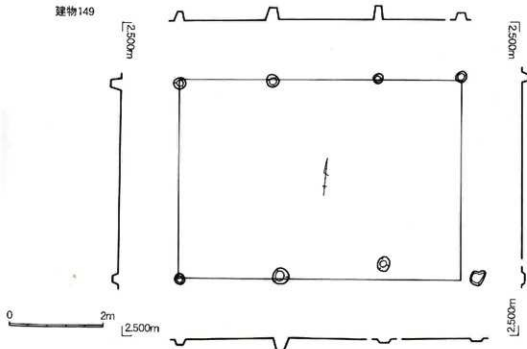


第99図 八坂中遺跡建物151出土土器

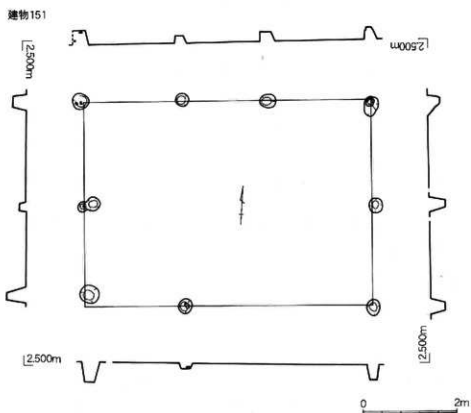
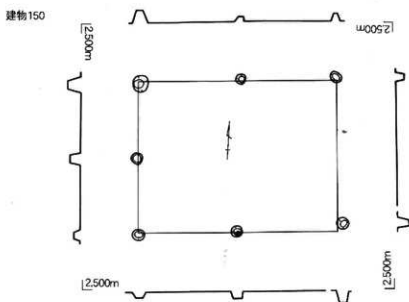
建物148



建物149



第100図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(72)



第101図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(73)

### (152) 建物152

建物152(第103図)は、調査区東北部の掘立柱建物密集地の一角に位置する。建物の南側には、土壇墓25、土窟墓26が並んでみられる。

平面プランは長方形を呈し、南北方向に主軸をもつ。主軸方位は $N7.5^{\circ}W$ である。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は22.94㎡を測る。柱穴配置をみると、北側梁行の中央の柱穴がみられない。

### (153) 建物153

建物153(第103図)は、調査区東北部の掘立柱建物密集地の一角に位置する。

建物は平面プランが方形にちかい長方形で、東西方向に長軸をもつ。主軸方位は $N90^{\circ}W$ で、本建物の東側に位置する建物151と同様な方位を示す。

規模は梁行2間、桁行2間で、身舎面積は18.8㎡を測る。南側桁行の中央の柱穴から、鉄刀が1本確認された。柱穴埋土から検出されており、建物の地鎮祭祀に係わるものか(詳細は「9 埋納遺構、参照」)。

### (154) 建物154

建物154(第104図)は、建物153の北側に位置する。建物の南側に建物153と建物155が接するようにみられることから、これら3基の建物は同時存在したものではないと考えられる。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N89^{\circ}W$ で、周辺の建物とは微妙に方位が異なる。

規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は29.25㎡を測る。

### (155) 建物155

建物155(第104図)は、掘立柱建物が密集する調査区東北部の一角に位置する。建物は建物154に接するようにみられる。

建物は平面プランが長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N88^{\circ}E$ である。

規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は19.71㎡を測る。梁行に比べ桁行が長く、やや細長い印象を受ける建物である。

### (156) 建物156

建物156(第105図)は、建物155の北側に位置する。

建物は長方形プランを呈し、周辺の多くの建物と異なり、北東-南西に主軸をもつ。主軸方位は $N57^{\circ}W$ で、建物161、建物162とおおむね同様な方位をとる。規模は梁行2間、桁行3間で、身舎面積は26.24㎡を測る。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第102図)。36は土師質土器小皿である。底部は糸切りで、口径9.2cmを測る。12世紀代のものと考えられる。



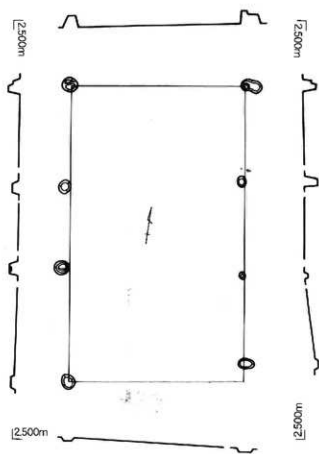
第102図 八坂中遺跡建物156出土土器

### (157) 建物157

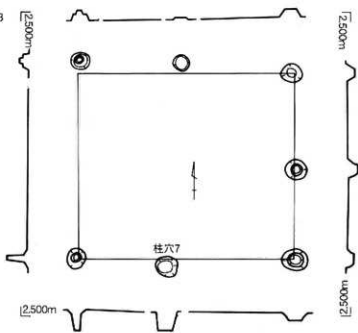
建物157(第105図)は、掘立柱建物が密集する調査区東北部にあり、建物149、建物150の北側に位置する。

建物は平面プランが長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N85^{\circ}E$ である。建物方位的には、隣接する建物149、建物150にちかい。規模は梁行1間、桁行3間で、身舎面積は18.85㎡を測る。

建物152



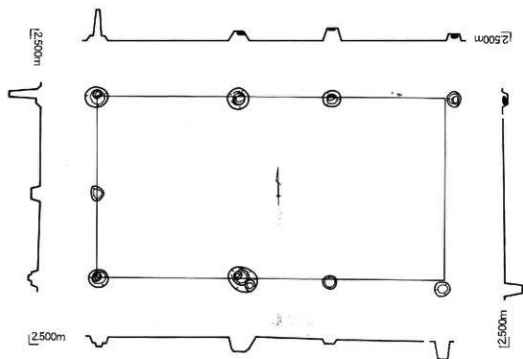
建物153



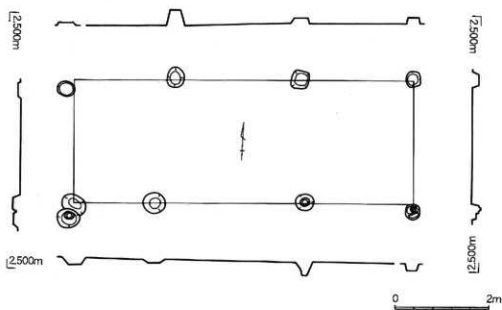
0 2m

第103圖 八坂中遺跡掘立柱建物跡(74)

建物154



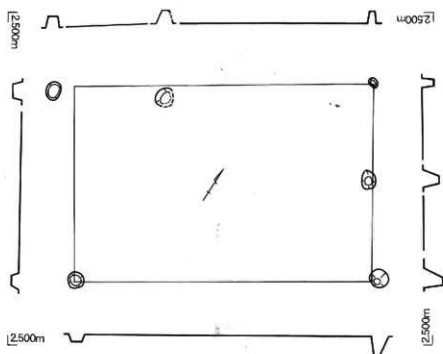
建物155



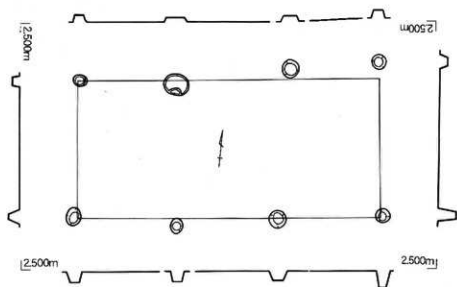
第104図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(75)



建物156



建物157



0 2m

第105図 八板中遺跡掘立柱建物跡(76)

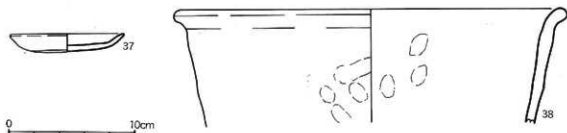
### (158) 建物158

建物158(第108図)は、掘立柱建物が密集する調査区東北部の一角に位置する。位置的には、建物157と重複する。

建物は長方形プランを呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N90^{\circ}W$ で、ほぼ真東西に向く。周辺において、本建物と同様な方位をもつものは建物151、建物153などで、同様な時期の建物と考えられる。

建物の規模は、梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $36.27m^2$ を測る。建物規模的には、本遺跡でも大型の方に位置付けられる。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第106図)。37は土師質土器小皿である。完形品で、建物の地鏡祭祀に係わるものであろう。底部は糸切りのちナデである。口径は $8.8cm$ で、11~12世紀代のものと考えられる。38は土鍋である。体部が直立気味で、口縁部がわずかに外方に折れる。



第106図 八坂中遺跡建物158出土土器

### (159) 建物159

建物159(第109図)は、やはり調査区東北部の掘立柱建物が密集する一角に位置する。位置的には建物158の北側にあたる。

建物は平面プラン長方形を呈し、やはり東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N87^{\circ}E$ で、真東西よりもわずかに南に振る。建物の規模は、梁行1間、桁行3間で、身舎面積は $22.23m^2$ を測る。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第107図)。39は土師器椀である。色調は黄白色で、口縁端部が外方に折れる。体部内外面にはヘラミガキが施される。いわゆる防長系土師器椀の範疇でとらえられるものと思われ、時期的には12世紀初前後であろう。



第107図 八坂中遺跡建物159出土土器

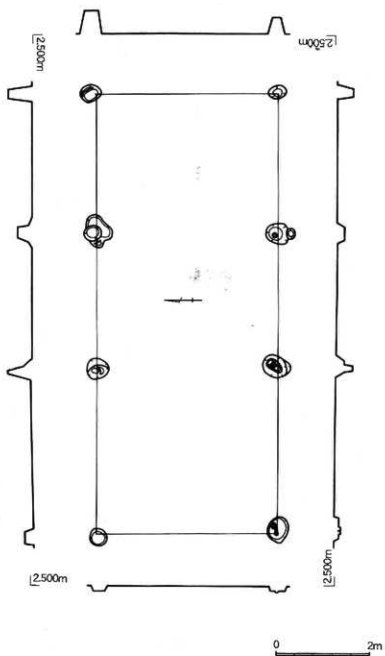
### (160) 建物160

建物160(第109図)は、掘立柱建物が密集する調査区東北部の一角に位置する。位置的には、建物159の西側にあたる。

建物は平面プランが長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N83.5^{\circ}E$ で、真東西よりもわずかに南に振る。方位的には建物159と同様な方位を示す。

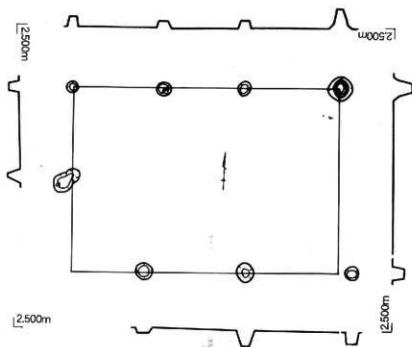
建物の規模は、梁行2間、桁行3間で、身舎面積は $21.46m^2$ を測る。

建物158

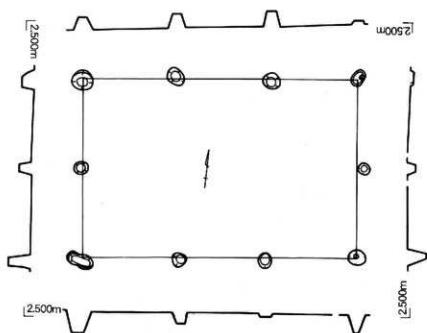


第108圖 八板中遺跡掘立柱建物跡(77)

建物159



建物160



第109図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(78)



第110図 八坂中遺跡建物160出土土器

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第110図)。40は土師器碗である。浅めの碗で、色調は暗褐色ないし黒褐色を呈する。外底面には糸切り痕が残り、高台は断面台形のものが付される。体部は内湾気味に口縁にいたり内外面にはヘラミガキが施される。12世紀前半のものと考えられる。

### (161) 建物161

建物161(第112)は、掘立柱建物が密集する調査区東北部の一角にある。位置的に、建物160と重複する関係にある。

建物は平面プラン長方形を呈し、北東-南西に主軸をもつ。主軸方位は $N55.5^{\circ}E$ で、この周辺で同様な方位をもつものは建物156と建物162である。特に、建物156の南東側桁行と本建物の北西側桁行のラインが一致することから、両者に強い関連性がうかがえる。

建物の規模は、梁行1間、桁行3間で、身舎面積は23.45㎡を測る。

### (162) 建物162

建物162(第112図)は、建物161の北西側に位置する。

建物は方形にちかい長方形プランを呈し、主軸を北東-南西にもつ。主軸方位は $N41^{\circ}W$ で、建物156や建物161と同様な方位を示す。梁行2間、桁行2間で、身舎面積は19.6㎡を測る。

建物を構成する柱穴から遺物が出土した(第111図)。41は土師質土器小皿である。口径は10.3cmと大型で、底部は糸切りである。また、底部中央には穿孔がみられる。11世紀代のものか。



第111図 八坂中遺跡建物162出土土器

### (163) 建物163

建物163(第113図)は、掘立柱建物が密集する調査区東北部の最も北側に位置する。

建物は南北方向に主軸をもつもので、長方形プランを呈する。主軸方位は $N1^{\circ}E$ で、建物159や建物160と同様な方位を示す。建物の規模は、梁行2間、桁行3間で、身舎面積は24.18㎡を測る。両桁行とも南から2番目の柱穴が、攪乱のため欠けている。

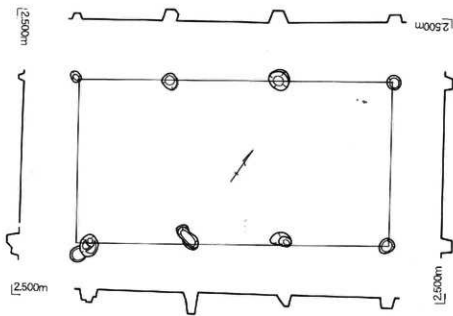
### (164) 建物164

建物164(第113図)は、戻踏3の東側に密集する建物群の中に位置する。

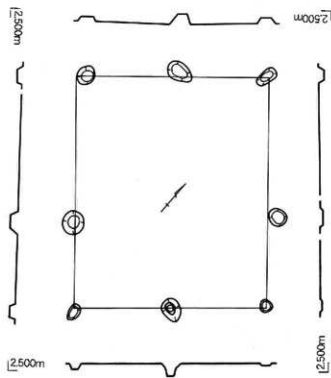
建物は平面プランが長方形を呈し、東西方向に主軸をもつ。主軸方位は $N82^{\circ}E$ で、本建物の西側に位置する建物102と同様な方位をもつ。

建物の規模は、梁行2間、桁行3間で、身舎面積は11.6㎡を測る。建物規模としては、木遺跡のなかでも小規模なものである。

建物161

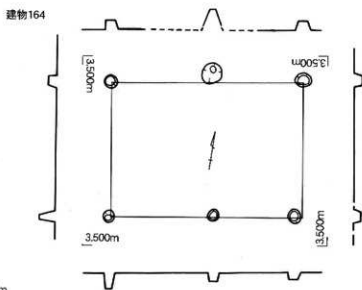
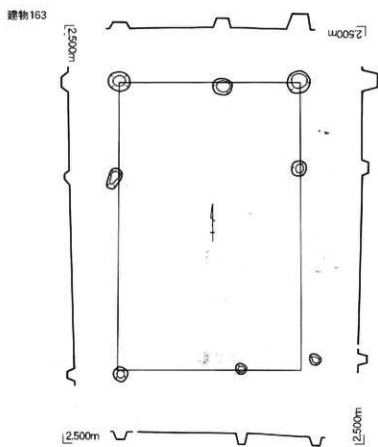


建物162



0 2m

第112図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(79)



0 2m

第113図 八坂中遺跡掘立柱建物跡(80)

## 2 井戸

八坂中遺跡において、井戸は2基が確認されたのみである（付図5）。2基とも円形の石積み井戸で、いずれも石を充填して埋められていた。

### (1) 井戸1

井戸1（第115図）は、居館1の東北コーナーの外側に位置する。居館1の清からは、約2m離れている。また、東側に隣接する居館3は、居館を構成する溝が西北コーナー部で切れており、この部分が居館の出入り口にあたると思定される。よって井戸1は、居館3の西北出入り口部の前面に位置するとも言うことができる。居館1と居館3の北側には、両居館に沿うように幅5m程度の遺構空白部が東西方向に続く。この遺構空白部は、道の可能性が高いと推定される。井戸1は、道にも面した位置にあることが分かる。

井戸1は土壇79と重複し、土壇79を切る。しかし、中央から南にかけての部分に攪乱がみられ、全形は不明である。

井戸は南北約3m、東西2.3mの掘り方をもち、その内部に石積みを行っている。石積みは北から東にかけての部分にせり出しがみられ、上面からみた形状に変形がみられるが、本来的には円形であったと思われる。石積みで使用されている石材は川原石である。全体的には20～30cm大のものが主体となっているが、なかには70cm大におよぶものもある。また、最上段には30～50cm大の比較的大きめの石が用いられる。石材は、井戸の内側からみて、短辺の面をそろえるように積まれており、石材の間隙には小礫が詰められている。

井戸内には、30～70cmの川原石が最上面まで充填されている。これらは、井戸廃絶後に意識的に埋められたものと思われる。上はほとんどみられず、石のみで徹底的に埋められている。大型の石材が多かったため、上面から1.3mほどまでしか掘ることができず、底面の確認はできなかった。また、井戸内に充填された石の間からは、土器片がわずかに検出されたのみで、遺物はまったくといっていいほど検出されなかった。井戸の上面から1.3mほどまでではあるが、井戸廃絶の際の具体的な祭祀行為は確認されなかった。

以上の井戸1は、形態や位置から日常生活に必要な水を供給するためのものと考えられる。時間的には、16世紀後半以降に埋められている。

#### ・出土遺物

井戸内から出土した土器（第114図）には、土師質土器、白磁、瓦質土器がある。

42は土師質土器環である。破片資料で、底部から内湾気味に口縁にいたる。

43は中国明代の白磁皿底部である。口縁部は端反りになるといわれ、断面三角形の高台がやや内湾気味に付される。椀付けは無軸である。

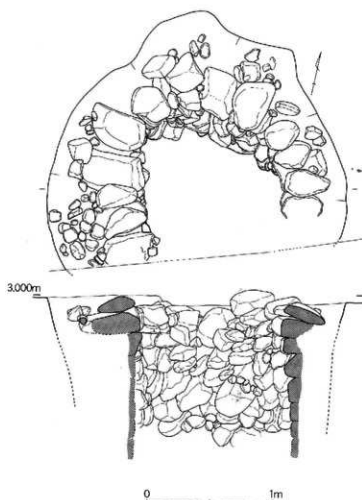
44は瓦質土器鉢の底部である。口径30cm以上に及び大型品と考えられ、口縁部は外方に折れるか肥厚するものであろう。口径に比し器高は低いもので、底部にはやや高い高台が付される。

以上のうち、43、44は16世紀代に位置付けられるもので、42は12世紀代のものか。



第114図 八坂中遺跡井戸1出土土器





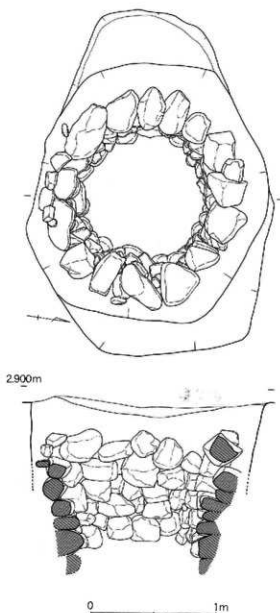
第115図 八坂中遺跡井戸1

## (2) 井戸2

井戸2(第116図)は、居館3の南東コーナー外側に位置する。居館3は方形の溝が二重に巡らされるが、内側の溝である溝12と、外側の溝である溝10に挟まれた比較的狭い空間に井戸は築かれている。外側の溝である溝10のコーナー部が、井戸2を避けるようにやや外側に膨らむように掘られていることから、井戸2がこれらの溝と共存した可能性が高い。

井戸は、長径2.0m、短径1.85mのほぼ円形を呈した掘り方の中に石を積み築かれている。使用された石材は井戸1と同様に川原石で、30~50cm大のものである。全体に30cm前後のものが多く、井戸1に比べやや整然とした感がある。井戸の平面形は円形で、東側の一部がやや膨らむが、ほぼ原型を保っている。しかし、最上段の石積みは抜かれている。

規模は径約1mを測るが、底面については大型の石材は内部に充満していたため、調査としては掘り下げることができなかった。しかし、調査終了後にバックホーを使用し井戸の断ち削りを行う機会を得た。時間的に図画できなかったが、検出面から約2m下の、海拔1m程で底面を確認した。底面は砂礫層下の青灰色砂層に達しており、湧水がみられた。石積みはほぼ底面から行われていることが確認されたが、底面ちかくには目だった造物は確認されなかった。



第116図 八坂中遺跡井戸2

井戸は、井戸1同様に廃棄後に石で意識的に埋められていた。石は30～50cm大で、大部分は川原石であるが、一部に削り石も認められた。ほぼ石のみで埋められており、遺物もわずかな土器片が出土したのみである。井戸廃棄に伴う祭祀行為などは確認できなかった。

井戸2についても、日常の生活用水供給用と考えられ、廃棄された時期は16世紀代以降である。

・出土遺物

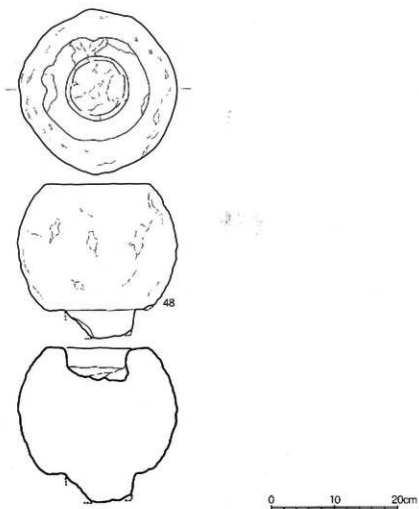
井戸2からは、若丁の上器（第117図）と石製品（第118図）が出土した。

45は瓦器椀の口縁部片である。小破片のため明確ではないが、12世紀代に位置付けられるものであろう。

46が瓦質土器である。外面には、円形のスタンプ文が少なくとも3軀以上連続してみられ、スタンプ文の下には比較的低い突帯が付される。器種的には火鉢の可能性が高い。時期的には16世紀代のものである。



第117図 八坂中遺跡井戸2出土土器



第118図 八坂中遺跡井戸2出土土製品

47は土鍋である。小破片であるが、大型のものと推定される。口縁端部上面は凹み気味で、外方にややつまみ出される。

48は五輪塔の水輪部で、井戸を埋めた石とともに出土した。最大径25.2cm、高さ24.3cmを測るもので、上面に凹部が、また下面に凸部がみられる。

### 3 地下式土壇

確実に地下式土壇と思われるものが4基確認された(付図5)。いずれも居館3の東南コーナーから東側にかけてみられる。これらはすべて、居館3を二重に囲む溝に挟まれた位置にあり、溝により切られる。

このほかに地下式土壇の可能性をもつものが、居館3の東北コーナー部近くにもみられる。これは、大部分が居館2の内側の溝である溝12により切られており、溝12の東側の壁にかるうじてわずかに痕跡が残る。確認はないが、ややオーバーハング気味の壁から、地下式土壇であった可能性が高いと考えられる。しかし、残存部分が少なく全体の規模などは不明である。

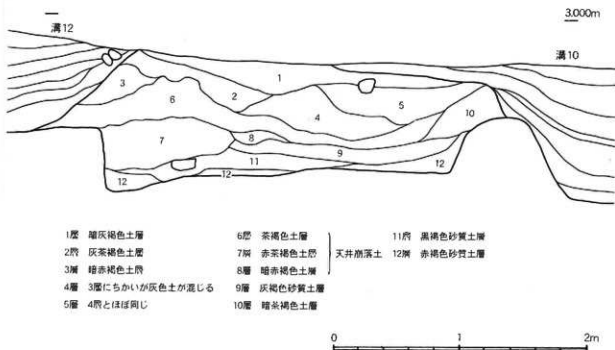
#### (1) 地下式土壇 1

地下式土壇1(第120図)は、居館3の東南コーナー部外側に位置する。居館3は二重の溝により囲まれているが、内側の溝である溝12と外側の溝である溝10に挟まれた位置にある。

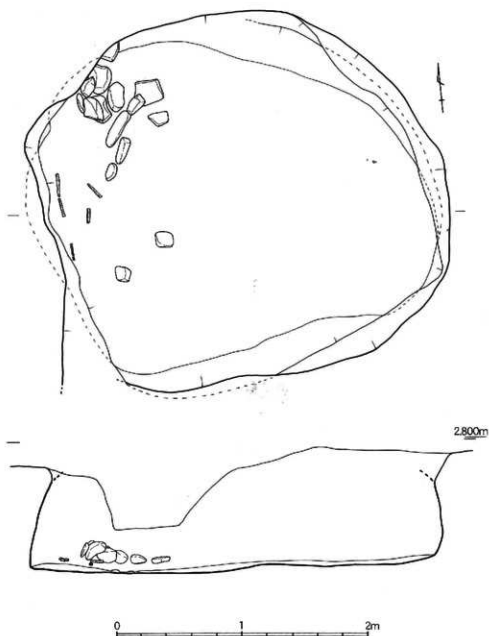
平面プランは楕円形気味の円形を呈し、床面で東西3.3m、南北1.8mを測る。周囲の壁は床面からオーバーハング気味に立ち上がるが、床から0.6~0.7mほど壁が残存するのみで、それより上は崩落する。床面はほぼ平坦で、北西部の壁近くのほぼ床面で0.2~0.3mの礎が集中していた。この礎群の南側からは、保存状態があまり良好ではないものの竹片が出た。骨片もほぼ床面近くであった。これらの骨が人骨かどうかについては、明らかにすることができなかった。

本地下式土壇は、居館3を囲む2本の溝の間に位置するが、北側を溝12に、また南側を溝10により切られる(第119図)。いずれも、地下式土壇の天井が崩落した後にある程度埋没が進行した状態で、溝10と溝12が掘り込まれている。土壇内の上層をみると、床面ちかくで自然堆積がわずかに進んだ時点で天井が崩落している。

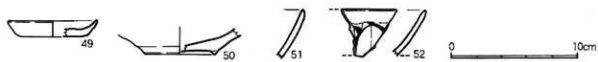
地下式土壇の出入り口部については、明確にすることができない。しかし、土壇北側の溝12と接する部分では、床面から0.5mあがり水平な面が最大0.5m程のびる。この面の上にも天井崩落土がのっており、床面と一連



第119図 八坂中遺跡地下式土壇1土層図(南北セクションを西から)



第120圖 八坂中遺跡地下式土壇 1



第121圖 八坂中遺跡地下式土壇 1 出土土器

の遺構である可能性が考えられる。この場合、床面から一段高い横口が北方向にのび、ややあって出入り口の縦穴が付くのであろうか。

本遺構の時期については、明確にしたい。土壌内からは上器の小破片がわずかに出土したのみで、遺構に明確に伴う良好な遺物は出土していない。

#### ・出土遺物

地下式土壌内からは、土師質土器、瓦器椀、古磁などが出土した（第121図）。

49は土師質土器小皿である。底部は糸切りで、やや厚めの底部から尖り気味の口縁にむかい体部がのびる。復元口径は7cm代で、14世紀代のもと考えられる。

50、51は瓦器椀である。50は東国東型瓦器椀の底部である。底部糸切りの後、底部の端に低い高台が残る。13世紀中～後半に位置付けられる。51は口縁部の破片である。内外面ともヘラミガキはみられない。底部の状況が分からないので時期を明確にしたいが、13～14世紀の東国東型瓦器椀である。

52は中国製古磁碗である。外面に鉛塗がみられる。連弁の幅が広がっていることから、14世紀代に入る可能性をもつ。

## (2) 地下式土壌 2

地下式土壌 2（第122図）も店舗 3 の南東コーナー部外側に位置する。やはり、店舗 3 を囲む 2 本の溝の間にあり、内側の溝である溝 12 に切られる。本土壌の西側には地下式土壌 1 が、また東側には井戸 2 が、本七竈と切りあうことなしてみられる。

本土壌は平面プラン円形を呈するもので、その規模は床面において 2.2～2.4m である。床面は必ずしも平坦ではなく、壁にむかい緩やかにあがっていく。その高低差は、最大で 0.3m である。壁はオーバーハング気味で、概大で床面から 0.8m 残存する。しかし、天井部は全面的に崩落している。

出入り口部については、明確ではない。しかし、比較的壁の残存状態が良好にもかかわらず、その痕跡を確認することができないということは、溝 12 により切られた本土層北西部に出入り口の施設があったと考えざるをえない。

床面からは、南西部において、礎と備前焼播鉢が出土した。備前焼（第123図 59）は、接合した結果、ほぼ完形に復元することができた。

本遺構の時期については、床面出土器などから 16 世紀代と考えられる。

#### ・出土遺物

本遺構からは、土師質土器、瓦器、土鍋、備前焼などが出土した（第123図）。

53は土師質土器小皿である。口径10cmほどの大型品で、底部は回転糸切りである。体部は緩やかに立ち上がり、内湾気味に口縁にいたる。時期的には、その形態と口径から 11、12 世紀代のもと考えられる。

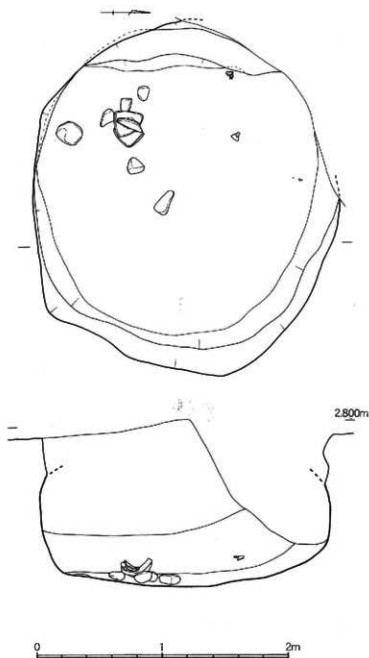
54は土師器椀で、口縁部がやや外反する。内外面にミガキが施されていたと思われるが、磨滅のためほとんど残存しない。12 世紀初前後のものか。

55は東国東型瓦器椀である。底部は平底で、糸切り痕が残る。体部内外面にはヘラミガキは認められず、ナデ仕上げである。内底面には、ユビナデがみられる。時期的には、13 世紀後半～14 世紀初に位置付けられる。

56は楠葉瓦器皿で、復元口径は 10cm ちかくに達する。体部は底部と同じ厚みをもち、緩やかに屈曲しながら立ち上がる。器高は口径に比し低く、内面及び内底面に幅 2、3mm のヘラミガキが施される。形態的には、京都系土師器の皿を模倣したもので、時期的には 12 世紀初前後に位置付けられる。

57は土鍋の口縁部である。口縁部は強くくの字状に折れる。外面にはナデとオサエがみられ、口縁内面には横方向のハケメが施される。12 世紀後半の所産である。

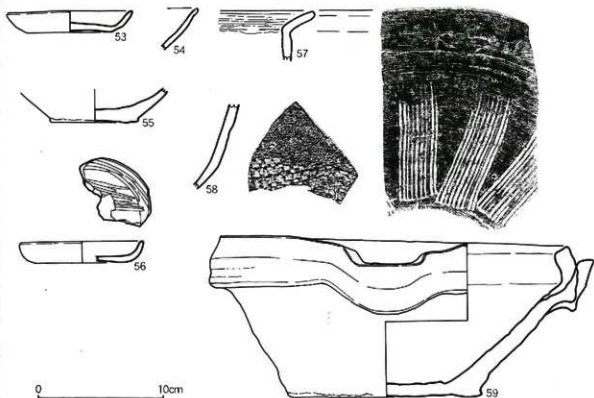
58は土鍋の体部下半である。わずかに屈曲して底部にいたるもので、屈曲部付近から下部に格子目タキが施される。この種の格子目タキがみられる土鍋は、14 世紀代以降にみられる。本品は瓦質焼成であることから、



第122図 八板中遺跡地下式土壇 2

15、16世紀代の所産と考えられる。

59は備前焼種鉢で、ほぼ完形に復元された。口縁部はやや内湾気味で、外面に一部沈線状のものがみられるが、基本的にはみられない。口縁端部上面は平坦で、内傾する。体部内面には9本単位の摺目が10ヶ所にわたりみられるが、内底面には及ばない。時期的には16世紀代に位置付けられる。



第123図 八坂中遺跡地下式土塋2出土土器

### (3) 地下式土塋3

地下式土塋3(第124図)は、地下式土塋1や地下式土塋2と同じく、居館3の東南コーナー部に位置する。居館3は溝が二重に巡るが、地下式土塋3は内側の溝と外側の溝の間にある。地下式土塋1と地下式土塋2が東南コーナーから南側にあるのに対し、地下式土塋3は東南コーナーから東側にみられる。地下式土塋自体は相互に切りあうことなく整然と配置されており、計画的な配置状況がうかがえる。

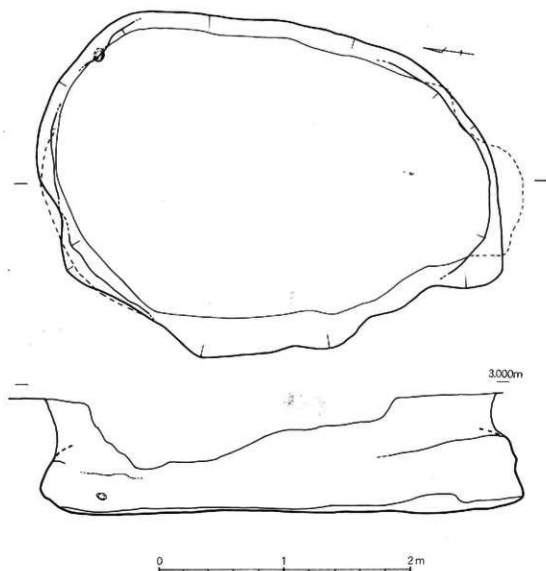
土塋の平面プランは楕円形を呈する。南北方向に長軸をもつもので、その規模は、床面において南北3.8m、東西2.2mを測る。地下式土塋1や地下式土塋2が、ともに平面プラン円形を呈したのと比べると、平面プラン的には大きく異なる。

床面はほぼ平坦であるが、周囲の壁に近づくとうわずかに上がる。壁はオーバーハング気味に立ち上がるが、床面から0.4~0.6mほど残存するのみで、それより上部は崩落している。崩落土は床面上に直接堆積しており、かなり早い段階で大井の崩落が落ちたことを物語る。その上部にはレンズ状の自然堆積が観察されるが、埋土中からの遺物の出土は少なかった。

床面からの出土遺物もほとんど確認されなかったが、東北隅の壁際部分で、床面近くから土師質土器小皿の完形品(第126図60)が出土した。

本土塋は居館3を巡る2本の溝に挟まれた位置にあり、西側を溝12に、東側を溝10により切られている(第125図)。東側の溝10は掘り直しもみられるが、地下式土塋3の天井が崩落し、その上部に自然堆積が進んだ後に最初の溝を掘り込んでいる。よって、溝10が掘られる段階には、地下式土塋3はほぼ埋没していたことが分かる。西側の溝12との関係を見ると、溝12の掘り直し段階の溝からは切られていることが確認される。しかし、当初の溝12との関係は明確ではなく、溝と同時に存在する可能性も考えられる。





第124図 八坂中遺跡地下式土壙3

本土壙の出入り口施設については、明確に確認されていない。土層図をみると、土壙西側の溝12と接する部分で、床面から0.4mほど上がり平坦な面が溝12方向にのびている。この平坦面上にも埋土が水平堆積することから、床面と一連の施設である可能性をもつ。この場合、床面から一段上がり平坦高がのび、この先に縦穴が付くか、直接溝12の壁から出入りしたことが考えられる。

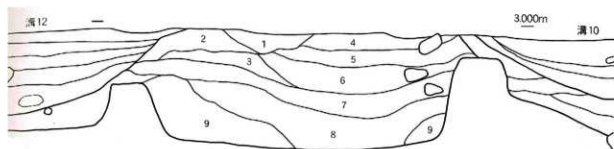
本遺構の時期については、16世紀と考えられる。

・出土遺物

地下式土壙3からは、十師質土器、土師器碗、土鍋などが出土した(第126図)。

60は完形の土師質土器小皿である。底部糸切りで、口径は8.5cmを測る。体部はやや厚みのある底部から斜方向に立ち上がり、下部に屈曲部をもつ。16世紀の所産であろう。

61は土師器碗である。口縁部は緩やかに外反し、体部にはヘラミガキが施される。色調は黄白色を呈し、いわゆる防長系土師器碗の範疇に入るものであろう。時期的には12世紀初前後に位置付けられる。



- |           |                 |
|-----------|-----------------|
| 1層 淡褐色土層  | 6層 淡灰褐色粘質土層     |
| 2層 暗灰褐色土層 | 7層 灰褐色土層        |
| 3層 灰褐色土層  | 8層 褐灰色土層        |
| 4層 灰茶褐色土層 | 9層 茶褐色土層(天井崩落土) |
| 5層 灰赤褐色土層 |                 |



第125図 八坂中遺跡地下式土壇3土層図(東西セクション南から)



第126図 八坂中遺跡地下式土壇3出土土器

62は七錆の口縁部である。口縁端部内側が上方につまみあげられている。防長系のものと考えられ、16世紀代のものであろう。

#### (4) 地下式土壇4

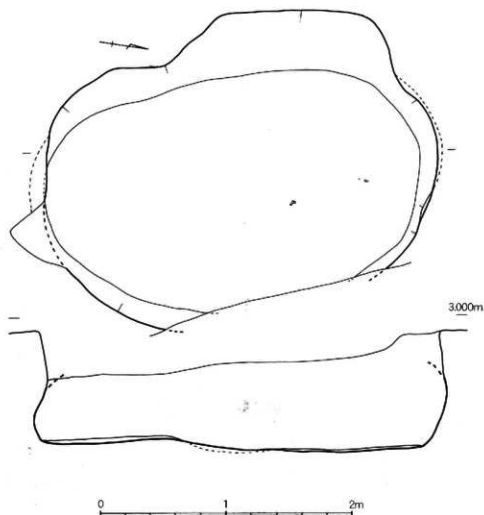
地下式土壇4(第127図)は、居館3の東側に位置する。地下式土壇1～3と同様に、居館3を囲む2条の溝の間に位置する。

土壇の平面形は楕円形で、南北方向に長軸をもつ。その規模は、床面で南北3.0m、東西1.9mを測る。地下式土壇3も同様に楕円形を呈するが、本土壇の方が一回り小規模である。

床面はほぼ平坦で、壁がオーバーハングしながら立ち上がる。壁は一部を除き、0.4～0.6mの高さまでしか残存しておらず、それより上部は崩落している。

床面からの良好な出土遺物はなく、床面及び埋土を含めて、小破片の土器が出土したのみである。また、床面中央やや北側では、小骨片が確認された。この骨片が人骨かどうかは不明である。

本土壇と土壇の東側及び西側に位置する溝との関係を、上層図(第128図)からみてみよう。まず、本土壇と土壇西側の溝12については、直接切りあい関係にないことが分かる。部分的ではあるが、土壇の壁が天井ちかくまで残存しており、溝12と土壇の間に浅い土壇があり、この土壇を溝12が切っている。また、土壇東側の溝10との関係については、やや複雑である。溝10は、この部分では2度の掘りなおしが認められる。このうち、



第127図 八坂遺跡地下式土壇 4

2度目の掘りなおし溝については、天井が崩落した後に堆積した埋土を切っており、明らかに土壇よりも新しい。しかし、当初の溝と1度目の掘りなおし溝については明確にしがたい。土壇の東側（溝10の方向）の壁がある程度立ち上がった状態で残存することから、当初の溝は直接切り合っていない可能性が高い。

土壇の時期については、確実に伴う良好な遺物を欠くので明確にはしがたいが、15、16世紀の幅のなかでとらえられるものと思われる。

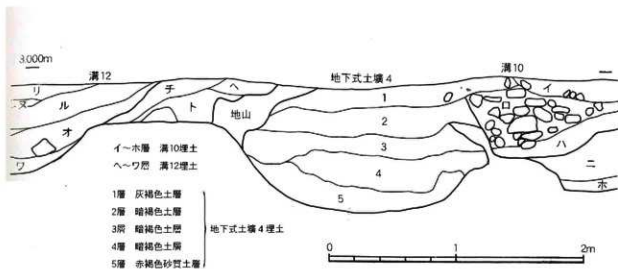
・出土遺物

地下式土壇4からは、土師器椀、瓦器椀、瓦質土器、備前焼、常滑焼などが出土した（第129図）。

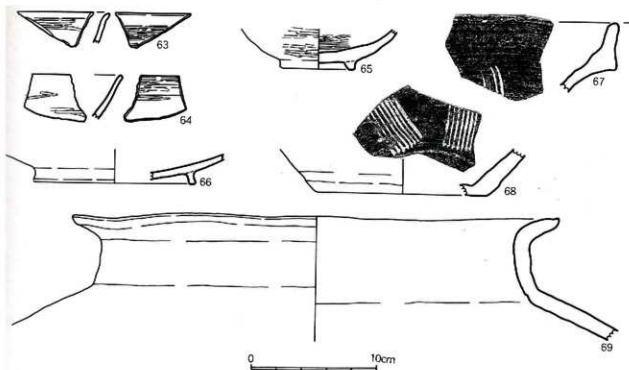
63、64は土師器椀である。63は口縁部がわずかに外反するもので、内外面にヘラミガキがみられる。64も外面口縁下にやや強いナデがはいるが、顕著な外反はみせない。やはり内外面にヘラミガキが施される。色調は両者とも黄白色である。12世紀初前後の時期か。

65は瓦器椀である。やや厚めの器壁をもち、断面方形の高台が付される。高台はあまり高くはないが、かなりしっかりしたものである。体部内外面にはヘラミガキが施されている。12世紀代の所産である。

66は瓦質土器鉢である。口径30cmちかくなるもので、口径に比し器高が低いものである。底部にはやや高めの高台が付される。16世紀代のものである。



第128図 八坂中遺跡地下式土壇4土層図



第129図 八坂中遺跡地下式土壇4出土土器

67、68は備前焼権鉢である。67は口縁部で、口縁部はほぼ直立気味で、口縁部外面には沈線や凹線はみられない。口縁端部上面は丸くおさめられ、平坦にはならない。68は底部である。摺目は8本単位で施されるが、内底面には及ばない。以上は、15世紀代のものであろう。

69は常滑焼の甕である。復元口径38.4cmを測る大型品で、胴部から頸部が内傾気味に立ち上がり、口縁部が外側に折れる。口縁部は尖り気味であるが、端部は上方にわずかに引き上げている。外面及び内面の一部に、灰色がかかった緑色の自然釉がかかる。時期は12世紀末に位置付けられる。

## 4 墓

八坂中遺跡からは、土壇墓26基、周溝墓1基、甕棺墓3基が確認された(付図5、第130図)。

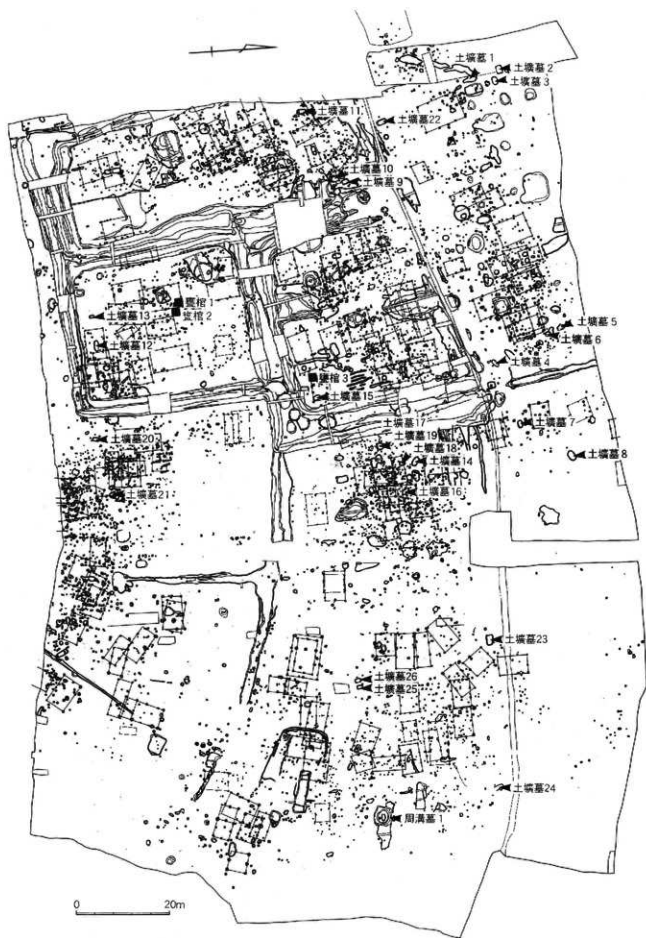
土壇墓のうち3基は、土壇内から鉄釘がまとまって出土しており、木棺が使用されていたことが分かる。これらについては、厳密に言えば木棺墓とすべきであろうが、釘を使用しなくても組み合わせ式の木棺の存在する可能性も考えられることから、本稿では土壇墓として一括した。また、土壇内に炭屑の堆積を確認できるものもあり、土壇墓としたものには内容的にいくつかのものを含むようである。時間的には、11～12世紀代、13～14世紀代、16世紀代のものがあり、大きな傾向として調査区北半に多く分布する。

周溝墓は1基が確認されたのみである。土壇墓を主体部にもち、周囲に溝を方形に巡らす。

甕棺墓は3基検出された。土壇墓などの検出面より上層の面で確認されるもので、いずれも近世の所産である。調査前から、水田のなかに自然石が1個立っており、地元民はこれを水争いの犠牲者の墓であるとして現在でも供養していた。甕棺墓のうち2基は、まさにこの自然石の直下から検出されたもので、地元の伝承が裏付けられたこととなった。

八坂中遺跡墓一覧表

| 土壇墓      | 規模        | 方位 | 副葬品               |         |           | 時期           | その他               |
|----------|-----------|----|-------------------|---------|-----------|--------------|-------------------|
|          |           |    | 土器                | 鉄製品     | その他       |              |                   |
| 1        | 2.55×0.91 | 北  | 内黒土器片1、土師質土器片1    | -       | -         | 12世紀中頃       | 人骨あり              |
| 2        | 1.85×1.15 | -  | -                 | -       | -         | 不明           | -                 |
| 3        | 1.70×1.25 | -  | -                 | -       | -         | 不明           | -                 |
| 4        | 1.85×0.85 | 北東 | -                 | 鉄刀1     | -         | 不明           | 人骨上にワラ灰状の炭化物(神農葬) |
| 5        | 1.60×0.95 | -  | -                 | -       | -         | 15世紀以降       | -                 |
| 6        | 1.20×0.95 | -  | -                 | -       | -         | 16世紀         | -                 |
| 7        | 1.80×0.95 | -  | -                 | -       | -         | 16世紀         | -                 |
| 8        | 2.40×1.40 | 南西 | 土師器片1、土師質土器小皿5    | 鉄刀1     | 基石27個     | 16世紀後半       | 鉄釘5(木棺)、人骨(埋葬)    |
| 9        | 1.50×0.95 | -  | -                 | 鉄刀1     | -         | 11世紀後半       | 伎面に石敷             |
| 10       | 1.70×1.15 | -  | -                 | -       | -         | 16世紀         | -                 |
| 11       | 2.15×1.06 | -  | -                 | -       | -         | 16世紀         | -                 |
| 12       | 2.35×1.06 | 西  | 土師器片1、土師質土器片1、小皿1 | 鉄刀1、鉄鏝1 | 磁石1       | 16世紀(?)      | 人骨(埋葬)            |
| 13       | 1.05×0.85 | 北  | 内黒土器片             | -       | -         | 11世紀後半       | 人骨(埋葬)            |
| 14       | 2.00×1.20 | 西北 | 曹磁碗1、黄白磁合子1       | 鉄鏝1     | -         | 12世紀後半       | 人骨(埋葬)            |
| 15       | 1.50×1.10 | 北  | -                 | -       | -         | 不明           | 鉄釘1(木棺)、人骨(埋葬)    |
| 16       | 1.85×0.95 | 西北 | -                 | -       | -         | 不明           | 人骨                |
| 17       | 1.50×1.25 | 北  | -                 | -       | -         | 16世紀         | 人骨(埋葬)            |
| 18       | 1.30×0.90 | -  | -                 | -       | 鉄貨5       | 16世紀         | 鉄釘2               |
| 19       | 1.55×0.90 | -  | -                 | -       | -         | 16世紀         | 骨片、伎面に石敷          |
| 20       | 1.55×0.85 | 北  | 土師質土器片2、小皿5       | -       | 水鳥製数珠玉25個 | 13世紀後半～14世紀初 | 鉄釘1(木棺)、人骨(埋葬)    |
| 21       | 1.45×1.15 | 北  | -                 | 鉄刀1     | -         | 13世紀後半～14世紀初 | 人骨(埋葬?)           |
| 22       | 2.15×1.06 | -  | -                 | -       | -         | -            | -                 |
| 23       | 2.05×1.35 | -  | -                 | -       | -         | -            | -                 |
| 24       | 1.7×0.85  | -  | -                 | 鉄刀1     | -         | 12世紀初前後      | -                 |
| 25       | 1.25×0.85 | 北  | 土師質土器片2、小皿4       | 鉄刀1     | -         | 14世紀前半       | 人骨(埋葬?)           |
| 26       | 1.40×0.95 | 北  | 土師質土器片3、小皿3       | 鉄刀1     | -         | 13世紀後半～14世紀初 | 人骨(埋葬)、伎面に炭屑      |
| 周溝墓(主体部) | 1.70×0.65 | 西  | 土師質土器片1、小皿3       | 鉄鏝1     | -         | -            | 人骨(神農葬)           |
| (周溝)     | 3.80×4.00 | -  | 土師質土器片3、小皿7、蓋1    | -       | -         | 11世紀後半       | -                 |
| 甕棺1      | -         | -  | -                 | -       | -         | 近世           | 人骨                |
| 甕棺2      | -         | -  | -                 | -       | -         | 近世           | 人骨                |
| 甕棺3      | -         | -  | -                 | -       | -         | 近世           | 人骨                |



第130圖 八板中遺跡位置圖

### (1) 土墳墓 1

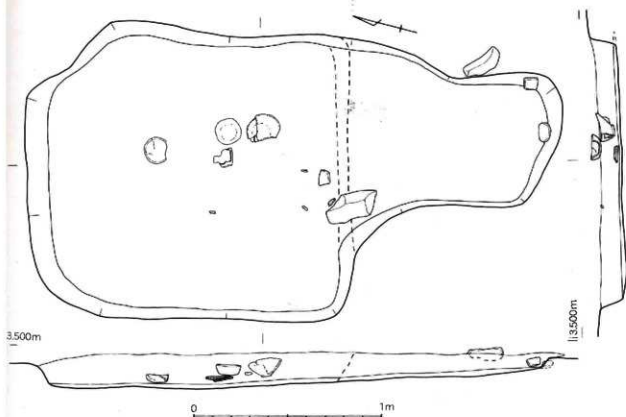
土墳墓 1 (第131図) は、居館 1 の北側 20m 余に位置する。方形の遺構と重複するため全形は明確でないが、南北方向に主軸をもつもので、長方形墓洞の平面形を呈するものと思われる。

頭蓋骨が推定土墳墓線の北端近くで確認されており、頭位を北にとる埋葬であったことが分かる。しかし、他の部位の骨についてはわずかに骨片が検出されたのみで、埋葬姿勢等は明らかにすることができない。

副葬品としては土師質土器環と内黒土器椀が出土した。このうち土師質土器環は完形である。また内黒土器椀については一部欠損するが、本来は完形品であったと思われる。いずれも遺体の胸から腹部にかけての位置にあり、遺体脇の床面あるいは遺体上に安置されたものであろう。

#### ・出土遺物

出土遺物 (第132図) のうち、70 は土師質土器環である。口径 14.7cm を測るもので、体部が内湾気味に口縁にいたる。口径に比し器高が高いものである。71 は内黒土器椀で、体部内外面にはヘラミガキが施される。底部は押し出しの後、断面三角形の高台が付される。これらは、12世紀中頃のものであろう。



第131図 八坂中遺跡土墳墓 1



第132図 八坂中遺跡土墳墓 1 出土土器

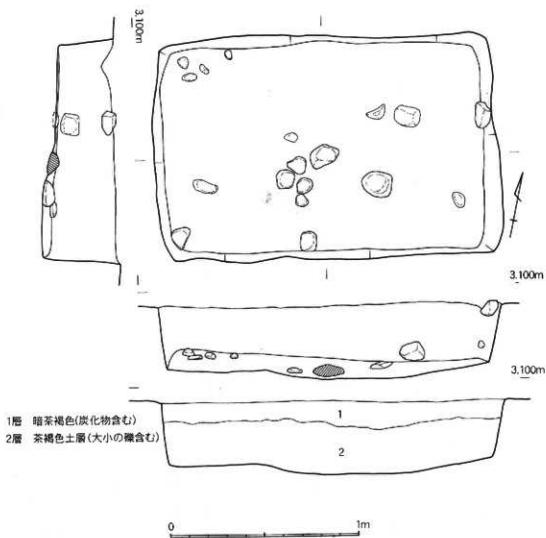


## (2) 土壇墓 2

土壇墓 2 (第133図) は、土壇墓 1 の約 5 m 北に位置する。

平面プランはかなりしっかりした長方形を呈し、東西方向に長軸をもつ。規模は長辺 1.85 m、短辺 1.15 m である。検出面からの深さは 30~40 cm を測り、床面は比較的平坦である。土層を観察しながら注意深く掘り下げを行ったが、木棺などの痕跡は確認できなかった。埋土は、大小の礫を含む茶褐色土が大半を占めており、上層には炭化物を含む暗茶色土がみられる。土壇墓内からは、人骨及び副葬品と考えられる遺物はまったく確認されなかった。よって、木造構が墓という積極的な確証はないが、形状などから墓の可能性が高いと考えた。

本土壇墓の時期は不明である。



第133図 八坂中遺跡土壇墓 2

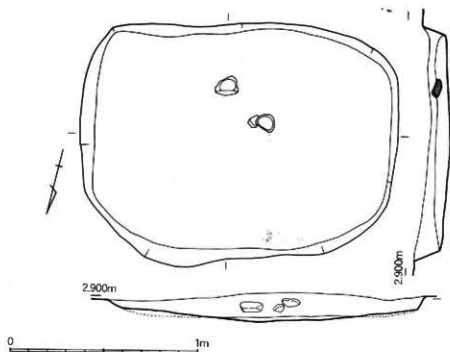
## (3) 土壇墓 3

土壇墓 3 (第134図) は、土壇墓 2 の東南側に位置する。

主軸方位は東西方向にち、隣接する土壇墓 2 と同様な方位をとる。位置関係と主軸方位から土壇墓 2 と密接な関係があるものと推定される。

平面プランは長方形基調を呈するものであるが、四隅が丸みをもち、側辺も湾曲気味である。隣接する土壌墓2に比べると、驚然さに欠ける感がある。規模は長辺1.70m、短辺1.25mを測り、検出面からの深さは0.05～0.15mである。土壌墓内の掘り下げは、土層観察を行いながら横断に行ったが、木棺等の痕跡はまったく確認できなかった。

床面はほぼ平坦であるが、中央部がわずかに凹み気味である。土壌墓内からは、人骨及び副葬品と考えられる遺物はまったく検出されなかった。土壌墓2同様に、本遺構が墓という積極的な確証はないが、形状などから墓の可能性が高いと考えた。時期は不明である。



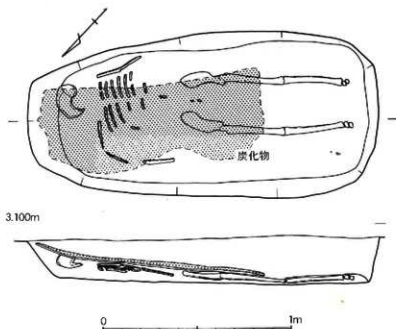
第134図 八坂中遺跡土壌墓3

#### (4) 土壌墓4

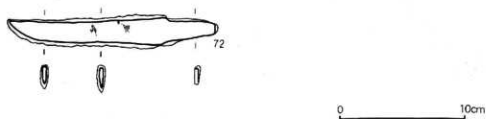
土壌墓4(第135岡)は、居館3の東北コーナー部の北3mに位置する。平面プランは長方形を呈するが、側辺が湾曲気味で、四隅は丸みをもち、規模は長辺1.85m、最大幅0.85mを測り、北東側の側辺が南西側の側辺よりも幅が狭い。主軸方位は、北東から南西にもつ。検出面から床面までの深さは0.2～0.25mで、土層観察を行いながら慎重に土層内の掘り下げを行った。その結果、木棺等の痕跡はまったく確認できなかった。床面はほぼ平坦であるが、壁にむかいわずかに高くなる。床面からは人骨が検出された。骨は非常に脆く、ほとんどが骨粉状であったが、全体の形状はほぼ明らかになった。頭位は北東方向にあり、仰臥伸葬の状況がみとれる。頭の位置がやや高く、上半身がわずかに起き上がったような状態である。副葬品としては、右手付近の床面から鉄製刀子が1本確認された。また、人骨の膝から上の部分には、蕁状の炭化物が厚さ1cm程度の厚みで確認された。人骨を直接覆うようにみられることから、埋葬時に遺体の上で燃やしたものと推定される。しかし、壁や床面には著しく火を受けた痕跡はなく、火葬というよりは送り火のような性格をもつものであろうか。

##### ・出土遺物

土壌墓内からは鉄製刀子が1本出土した(第136岡)。72は全長16.2cm、刃部長12.8cm、最大刃部幅2.2cmを測る。



第135図 八坂中遺跡土壙墓4



第136図 八坂中遺跡土壙墓4出土鉄製品

#### (5) 土壙墓5

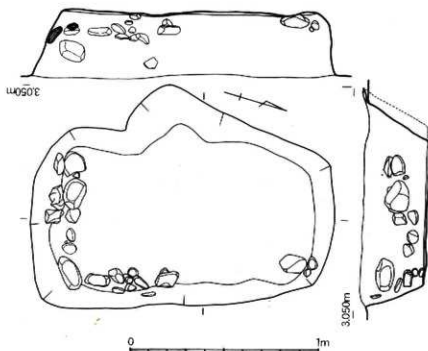
土壙墓5（第137図）は、居館3の東北コーナー部の北約20mに位置する。土壙墓の東約8mには、溝9が南北に走る。主軸方位は南北方向にとる。

平面プランは長方形基調を呈するが、四隅が丸みをもち、やや整然さを欠く。規模は長辺1.60m、最大幅0.95mを測り、北側の側辺が南側の側辺よりも幅が狭い。検出面から床面までの深さは0.35mで、土層観察を行いなから注意深く掘り下げを行ったが、木棺等の痕跡はまったく確認されなかった。

床面はほぼ平坦である。しかし、人骨や副葬品と思われる遺物は検出されなかった。そのため、木造構が墓という積極的な確証は得られなかったが、形状などから墓の可能性が高いと考えた。本土壙墓の時期は、埋土より出土した土器片から15世紀以降と推定される。

#### ・出土遺物

埋土から土器片が出土した（第138図）。73は土師質土器片である。復元口径15.2cmを測り、口径からみると12世紀代のものか。74は瓦質土器片である。外面口縁下にスタンプ文を配する。15、16世紀の所産か。



第137図 八坂中遺跡土墳墓5



第138図 八坂中遺跡土墳墓5出土土器

## (6) 上墳墓6

土墳墓6（第139図）は、土墳墓5と同様な位置にある。上墳墓5のすぐ南にあたり、建物35と建物37の東北隅に近い位置関係にある。

平面プランは、方形にちかい長方形基調を呈する。規模は長辺1.20m、短辺0.95mを測る。しかし、四隅はかなり丸く、一部の側面はかなり湾曲する。主軸方位は南北方向にもち、方位的には隣接する土墳墓5と同様な方位をとる。位置及び方位からみて、上墳墓5とは密接な関係をもつものと推定される。

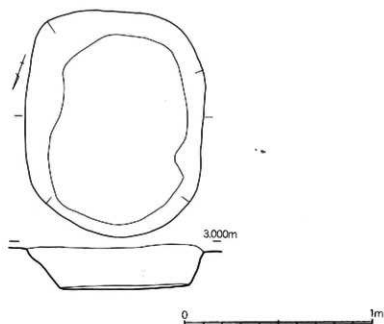
土墳墓内の掘りドブは、他の土墳墓と同じように、上層を観察しながら慎重に行った。その結果、木棺等の痕跡は確認することができなかった。

床面はやや不定形ながら平坦である。しかし、人骨や副葬品と推定される遺物は出土しなかった。本遺構については、形態的に上墳墓とするにはやや不安が残るが、ここでは墓として考えたい。

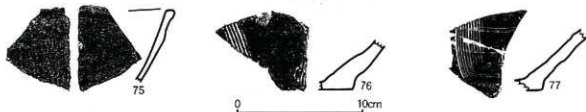
時期については、埋土から出土した土器片より16世紀代の所産と推定される。

### ・出土遺物

出土遺物には瓦質土器鉢、備前焼掃鉢などがある（第140図）。75は瓦質土器鉢である。76、77は備前焼掃鉢である。摺目は76が6本、77が11本である。以上のうち、76はやや古いが、他は16世紀代の所産である。



第139図 八坂中遺跡土墳墓6



第140図 八坂中遺跡土墳墓6出土土器

### (7) 上墳墓7

土墳墓7(第141図)は、溝9が居館3の脇を通る道跡状の部分をはさみ途切れる位置から、東へ約10mのところにある。

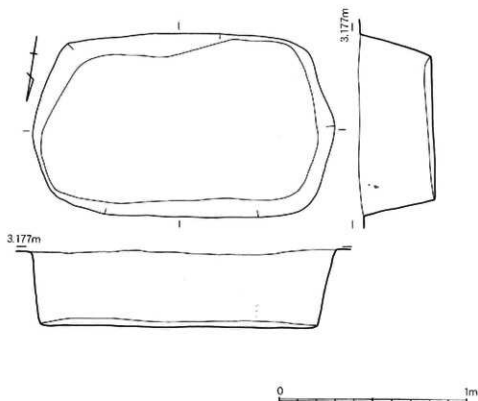
主軸方位は東西方向にもち、居館3の北側を通る道跡状の部分に沿うように位置する。

平面プランは長方形基調を呈する。規模は、長辺1.60m、短辺0.95mを測り、検出面からの深さは0.4mである。床面は、一部不定形気味であるが、ほぼ平坦である。土墳内からは、人骨や副葬品と思われる遺物はまったく検出されなかった。また、土墳掘り下げは、土層観察を行いながら慎重に行った。その結果、木棺等の痕跡は確認されなかった。

時期については、埋土から出土した土器より16世紀代の所産と考える。

#### ・出土遺物

上墳墓内の埋土から土師質土器片が出土した(第142図)。78は体部下半が膨らみ、口縁部がわずかに外反するものである。



第141図 八坂中遺跡土墳墓7



第142図 八坂中遺跡土墳墓7出土土器

### (8) 上墳墓8

土墳墓8（第143図）は、居館3の東北方向に位置する。この部分は造構が散発的で、他の造構がほとんどみられない。

平面プランは長楕円形基調を呈し、主軸方位を北東—南西にとる。規模は長径2.40m、短径1.40mを測るが、北側の側辺が直線的になるなど、やや整然さに欠ける。検出面から床面までは約0.25mで、床面はほぼ平坦である。土壌内からは、人骨、土器、墓石、鉄製刀子などのほか鉄釘が検出された。鉄釘から木棺の使用が推定されるが、具体的には木棺を確認することができなかった。しかし、鉄釘の位置から、長辺1.75m、短辺0.8mの規模を有する木棺であったことが分かる。

人骨は、頭蓋骨と両足の部分がろうじて残存していた。南西方向に頭位をもち、足を曲げた状態で木棺内に納められている。木棺内には副葬品として、土師質土器小皿が1枚頸部の横から、鉄製刀子が胸部付近から、墓石が腰部付近から各々検出された。このうち、墓石は総数27個が一塊になって確認されたことから、袋に入れられ副葬されていたものと推定される。また、木棺外の副葬としては、土師器椀1と土師質土器小皿4が胸部付近の脇から一括して検出された。これらは、人骨などに比べると検出レベルが高いことから木棺上などに置かれ

ていたものと思われる。

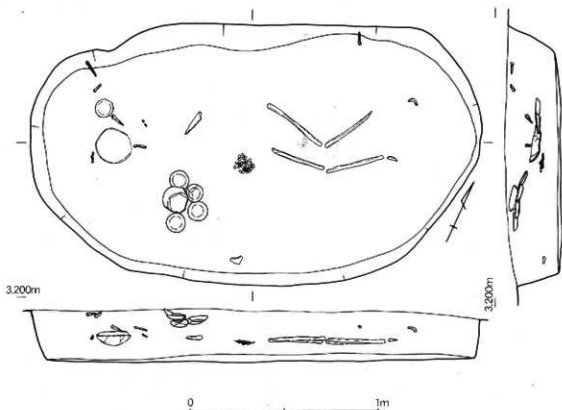
本土墳墓の時期は、11世紀後半と考えられる。

・出土遺物

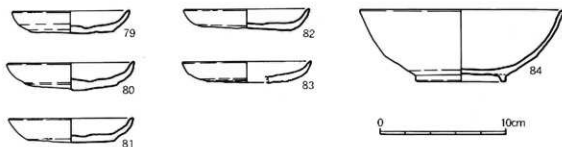
土器は上師質十器小皿と十師器輪が出土した(第144図)。79~83は十師質上器小皿である。このうち82は、木棺内の頭骨脇から検出されたものである。いずれも底部ヘラ切りで、体部が内湾気味に口縁にいたる。口径は9.4~10.4cmを測るが、79を除いていずれも10cmを超える。11世紀後半のものか。

84は上師器碗で、白色を呈する。体部は下半部がやや膨らみ気味で、そのまま口縁にいたる。口縁部はわずかに外反気味である。外底面には糸切り痕が残存し、断面方形の高台が付される。体部は内外面とも磨滅が著しいため明瞭ではないが、ヘラ研磨が施されている。11世紀後半の所産である。

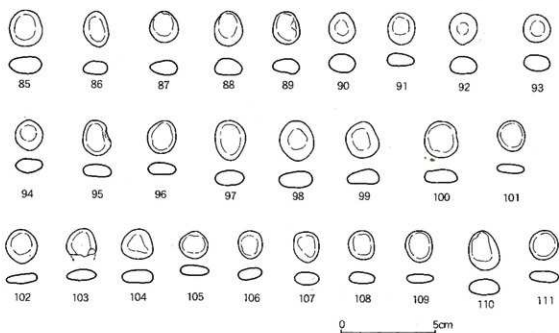
85~111(第145図)は柘石と思われるものである。総数27個で、白色の石英製のものが13個、青灰色の蛇



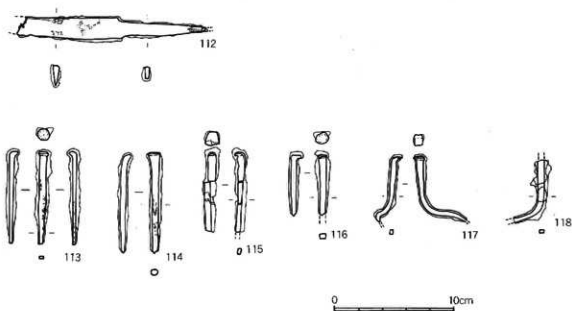
第143図 八坂中遺跡土墳墓8



第144図 八坂中遺跡土墳墓8出土土器



第145図 八坂中遺跡土墳墓8出土石製品



第146図 八坂中遺跡土墳墓8出土鉄製品

紋岩製のもの14個である。いずれも径1.5～2.0cmの円形ないしは楕円形を呈する扁平なものである。

112～118は鉄製品である(第146図)。112は刀子で、先端部を欠損する。刃部は残存する部分で8.6cm、最大刃部幅1.8cmを測る。113～118は断面方形で、頭部を折り曲げる釘である。いずれもわずかに先端部を欠いたりしているが、現存長は最大約8cmを測る。



### (9) 土墳墓 9

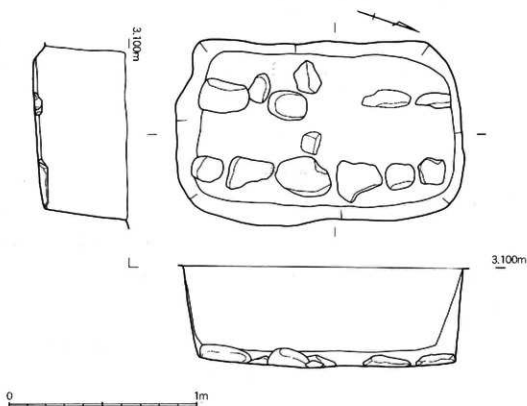
土墳墓 9 (第147図)は、居館 1 内の北東隅に位置する。

平面プラン長方形を呈し、長辺1.50m、短辺0.95mを測る。主軸方位はおおむね南北方向にとり、居館 1 の方位と一致する。深さは検出面から約0.5mを測り、床面はほぼ平坦である。床面には、長軸方向に石が2列にわたり敷かれている。石は0.15~0.3m程のもので、両側辺から各々0.1ないしは0.2mの間隔をもち敷かれていたようであるが、西側についてはやや乱れている。同様な石敷きについては、土墳墓 19でも確認されているが、埋葬とどのように係わるのかは不明である。副葬品と思われるものは確認されていない。

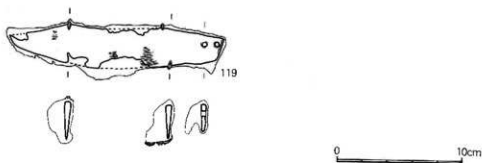
時期的には、16世紀代に比定される。

#### ・出土遺物

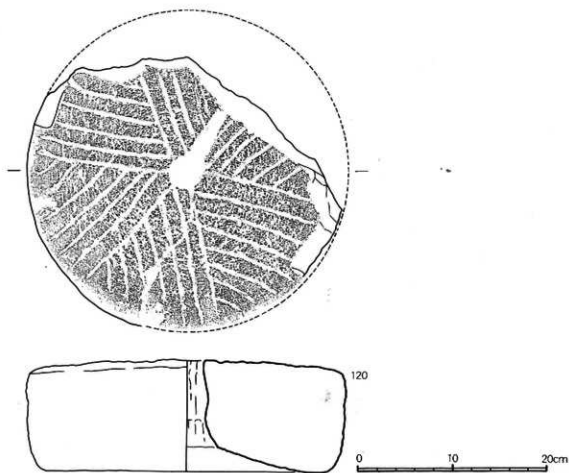
埋土中から鉄製品 (第148図) と石製品 (第149図) が検出された。



第147図 八坂中遺跡土墳墓 9



第148図 八坂中遺跡土墳墓 9 出土鉄製品



第149図 八坂中遺跡土壌墓9出土石製品

119は鉄刀と思われる。刃部先端部の破片で、現存長17.2cmを測る。刃部幅は約3.0cmで、基部にちかい破断部付近に2ヶ所の穿孔が認められる。刀としてはこの部分に穿孔は必要なく、破損後二次的な利用のため施されたものである可能性が高い。

120は挽臼の下臼である。一部が欠損するが、推定径約34cmである。中央に芯棒受け穴が貫通し、これを中心に芯溝が放射状に6本設けられ、6分判の摺目が施されている。崩溝は6ないしは7本で、芯溝から右上がり刻まれている。

#### (10) 上塚墓10

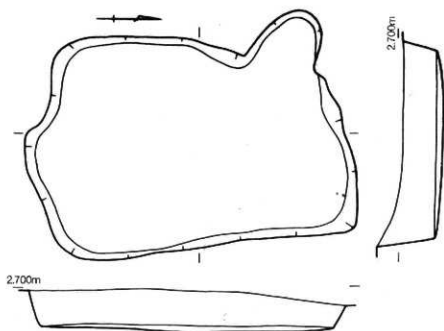
土壌墓10(第150図)は、土壌墓9と同じく居館1内の東北隅に位置する。土壌70と重複しており、これを切る。

平面プランは長方形基調を呈し、長辺1.70m、短辺1.15mを測る。主軸方位は南北にとり、居館1とおおむね同様である。深さは検出面から約0.25cmで、床面は平坦である。土壌内からは、人骨や副葬品と考えられる遺物は確認されなかった。

時間的には、16世紀代の所産と考えられる。

#### ・出土遺物

埋上中から石製品(第151図)が検出された。121は挽臼の上臼である。摺目の溝はやや雑な感じである。



第150圖 八坂中遺跡土墳墓10



第151圖 八坂中遺跡土墳墓10出土石製品

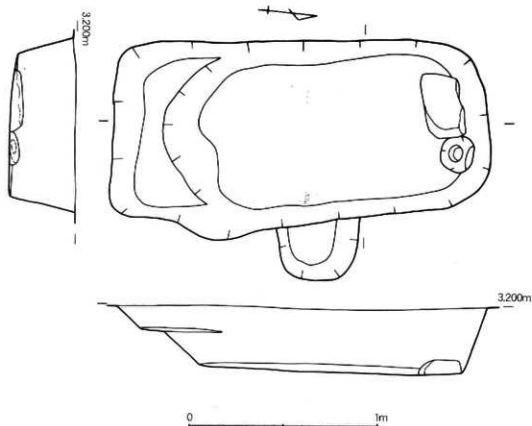
### (11) 上墳墓11

土墳墓11(第152図)は、居館1内に位置する。居館1は、北西隅が調査区外に及ぶが、土墳墓11は北西隅に近い位置にある。

平面プランは長方形で、長辺2.15m、短辺1.05mを測る。主軸方位は南北方向にとる。上墳墓南側の側辺が階段状になるが、床面までの深さは、検出面から0.35mを測る。

床面はほぼ半型であるが、人骨や副葬品と思われる遺物は確認されなかった。ただ、北端の壁際にイがみられるのみである。また、土墳内の掘り下げは、上層を観察しながら注意深く行ったが、木棺などの痕跡は確認できなかった。

以上のように、本土墳は積極的に墓とするには根拠に乏しいが、形態的な面から墓とした。時間的には、16世紀代の可能性もあるが、断定するにはいたらない。



第152図 八坂中遺跡土墳墓11

### (12) 上墳墓12

上墳墓12(第153図)は、居館2内の中央南寄りに位置する。

土墳墓の主軸方位は東西方向で、方位的には居館2の溝と同様である。平面プランは長方形基測を呈するが、東側の側辺が尖り気味であるなど、やや整然さに欠ける。規模は長さ2.35m、幅1.05mで、深さは検出面から0.1~0.2mである。床面は西半が低く、その差は0.1mを測る。

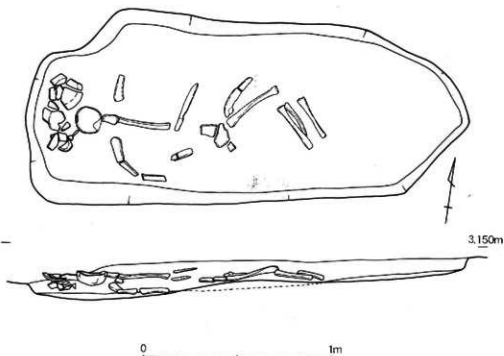
土墳内からは頭位を西に向けた人骨が確認された。人骨は必ずしも残存状態が良好ではないが、曲げた膝を北に倒した屈葬の状況がみてとれる。土層観察でも木棺の痕跡は確認されていないし、鉄釘も検出されていないことから、木棺を使用せず上墳に直葬したものと思われる。副葬品としては土器、石製品、鉄製品が検出された。

土器は頭部内側で、土師器椀、土師質土器杯、土師質土器小皿が各1個体確認された。これらはいずれも破片の状態であったが、いずれも完形ちかくに復元されており、本来完形であった可能性が高い。石製品は砥石で、腹部の右側に位置する。鉄製品は刀子が腹部の上に、また鎌が腰部の左側から検出された。

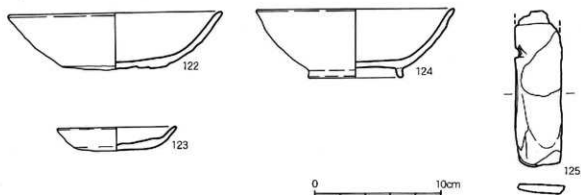
本土墳墓の時期は、11世紀後半と考えられる。

・出土遺物

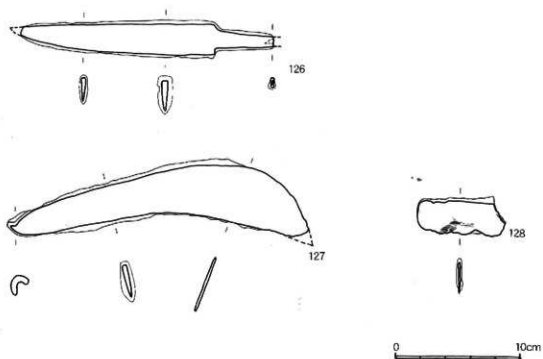
土器（第154図）のうち、122は土師質土器杯である。口径は16.8cmを測るもので、口径に比し底径が小さ



第153図 八坂中遺跡土墳墓12



第154図 八坂中遺跡土墳墓12出土遺物



第155図 八板中遺跡土墳墓12出土鉄製品

く、器高が高い。底部は糸切り後板状圧痕である。123は十師質十器小皿である。底部の切り離しはヘラ切りで、底部から体部が緩やかに立ち上がる。口縁部はわずかに外反気味である。124は十師器椀で、灰色ないしは灰白色を呈する。口縁部がわずかに外反気味である。体部は磨滅が著しいため調整は不明だが、本来はヘラミガキが施されていたものと思われる。外底面についても切り離し痕は観察できないが、形態的にほとんど押し出しが行われていないことが分かる。

石製品（第154図）は125の砥石で、扁平な長方形を呈する。

鉄製品（第155図）のうち、126は刀子である。わずかに先端部を欠くが、現状で刃部長15.4cmを測る。127は鎌で、基部を折り曲げ、屈曲部から先端にかけやや太くなる。128は不明鉄片である。

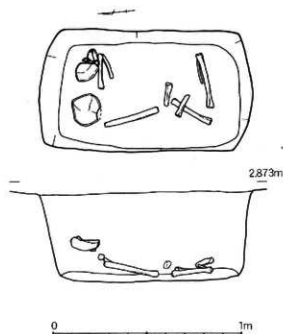
### (13) 土墳墓13

土墳墓13（第157図）は、厩館2内にあり、土墳墓12の西5mに位置する。

主軸方位を南北にとり、平面形は長方形を呈する。規模は長辺1.05m、短辺0.65mで、深さは検出面から0.45mである。他の土墳墓に比べると規模が小さい。床面から人骨と内黒土器椀が検出された。人骨は頸位を北にとり、曲げた膝を西に傾けた屈葬状態である。副葬品の内黒土器椀は頭の東側から1個体検出された。時期的には、11世紀後半に位置付けられる。



第156図 八板中遺跡土墳墓13出土土器



第157図 八坂中遺跡土墳墓13

・出土遺物

129(第156図)は内黒土器碗である。不鮮明であるが、内外面にヘラミガキがみられる。外底面には糸切り痕が残り、やや高めの高台が外傾して付される。11世紀後半の所産か。

(14) 土墳墓14

土墳墓14(第158図)は、居館3の東6mに位置する。

主軸方位は南東から北西方向にとるもので、平面プランは長方形基調を呈する。その規模は長辺2.00m、短辺1.20mを測る。深さは検出面から約0.2mで、床面はほぼ平坦である。上層の掘りトビは、土層観察を行いながら慎重に行ったが、木棺などの痕跡は確認することができなかった。

床面からは、人骨及び副葬品と思われる青磁碗、青白磁合子、鉄製鎌が検出された。人骨は北西に頭位をもち、腕を曲げ、膝も強く折り南西側に倒れている。以上の状況から横臥屈葬であったことが分かる。副葬品のうち、青磁碗は人骨からやや離れた土墳墓の北隅コーナーに置かれていた。青白磁合子は、床面より浮いた頭骨の上のレベルで、蓋がはずれ傾いた状態で確認された。頭の上ないしは埋土の中に置かれていたものであろう。鉄製の鎌は横臥屈葬の胸から腹部にかけての位置で検出された。

本土墳墓の時期は、12世紀後半に位置付けられる。

・出土遺物

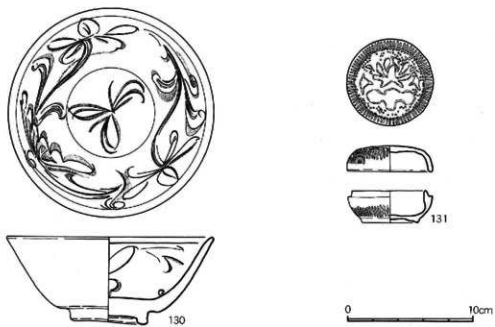
遺物は上器(第159図)と鉄製品(第160図)がある。

130は青磁碗である。これは横田賢次郎・森田勉分類(横田賢次郎・森田勉「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4(1978)の龍泉窯系青磁碗1-2類に相当する。12世紀の後半に位置付けられるものである。131は青白磁合子である。釉は緑がかった乳白色を呈する。

132は鉄製の鎌である。基部が折り曲げられ、刃部は刃を内側に緩やかに湾曲する。刃部の長さは18.6cm、月部最大幅2.5cmである。

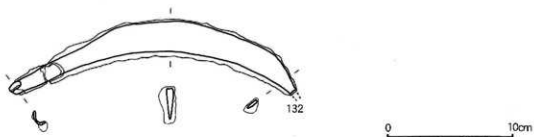


第158図 八坂中遺跡土墳墓14



第159図 八坂中遺跡土墳墓14出土土器





第160図 八坂中遺跡土墳墓14出土鉄製品

(15) 土墳墓15

土墳墓15(第161図)は居館3内の、南東コーナー部に位置する。

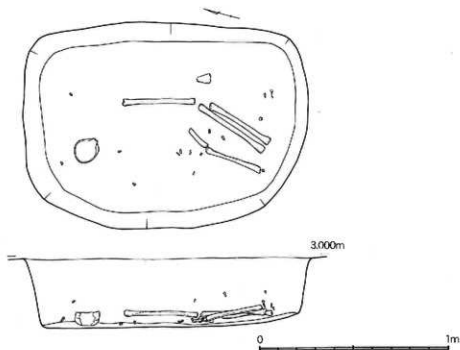
南北方向に主軸方位をもつもので、居館3の方位とおおむね一致する。居館3を囲む溝のなかで内側の溝である溝12をみると、内側のラインがやや膨らみ気味である。この状況が土墳墓15との関係のなかで生じたとすれば、土墳墓15は居館3と共存したものと理解できる。

平面プランは、四隅がやや丸みをもつものの長方形基調を呈する。規模は長辺1.50m、短辺1.10mを測る。深さは検出面から0.3~0.35mで、ほぼ平坦である。

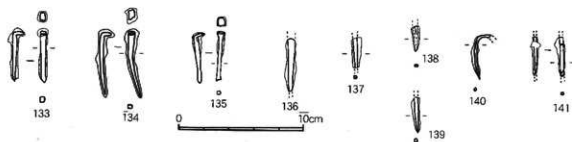
床面からは人骨が検出された。その残存状態は必ずしも良好でなく、頭部と脚部が確認できた。頭位を北にとり、脚を折り曲げた状態がみてとれた。また、土墳内から鉄釘が検出され、その位置から長辺約1.1m、短辺0.5mという木棺の規模が推定できる。副葬品と思われる遺物は確認されていない。

・出土遺物

133~141(第162図)は鉄釘である。いずれも断面方形で、頭部を折り曲げたものである。



第161図 八坂中遺跡土墳墓15



第162図 八坂中遺跡土壌墓15鉄製品

### (16) 土壌墓16

土壌墓16（第163図）は、土壌墓14と同じく居館3の東側に位置する。

主軸方位は南東から北西にとる。主軸方位のみからみると、木上墳墓の西側約5mに位置する土壌墓14と同様な方位であることが分かり、時期的にも同時期の所産である可能性も高い。

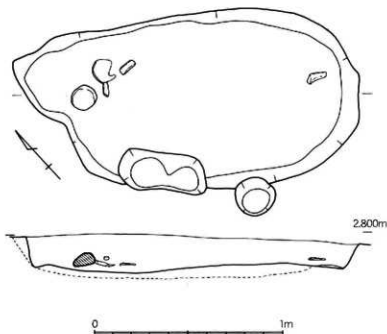
平面形態は楕円形で、一部不定形を呈する。加えて、柱穴により切られている部分もある。規模は長径1.85m、短径0.95mを測り、深さは検出面から0.15mである。床面はほぼ平坦であるが、緩やかに波打つ感じである。

床面からは人骨が確認された。残存状態が悪く、かろうじて頭骨と脚の一部が確認されたのみである。それらから頭位を北西にとることが分かる。しかし、埋葬姿勢などは明らかにすることができなかった。

副葬品と思われる遺物はまったく確認されなかったが、頭骨の横に径0.1m余の石が置かれていた。埋葬時に枕などとして使われたのであろうか。

#### ・出土遺物

142（第164図）は埋土から検出された内黒土器碗の破片である。



第163図 八坂中遺跡土壌墓16



第164図 八坂中遺跡土墳墓16出土土器

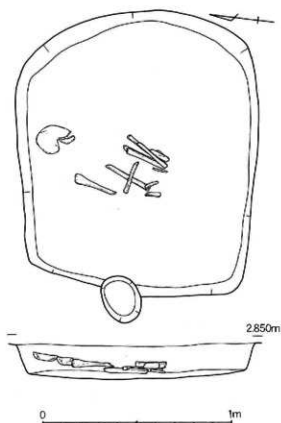
(17) 土墳墓17

土墳墓17(第165図)は、居館3の東側に位置する。居館3は二重の溝により囲まれるが、外側の溝である溝10の東2mにある。土墳墓19と重複しており、土墳墓19を切る。平面プランは方形基調を呈するが、東側の側辺は直線にならず湾曲する。規模は南北1.25m、東西1.50mを測る。検出面から床面までの深さは0.15~0.2mで、床面は平坦である。人骨の残存状況はそれほど良好ではなく、頭蓋骨や脚部が確認されたのみである。頭位を北にとっており、頭蓋骨は東にむいて倒れる。脚部は膝を強く曲げた状態で、足を抱えるような姿勢であったことが分かる。土墳内からは鉄釘は確認されておらず、また、土層観察の結果でも木棺の痕跡は認められず、横臥屈葬の姿勢で土墳に直葬されたものと思われる。副葬品は検出されなかった。

時期は16世紀代と推定される。

・出土遺物

埋土中から143(第166図)の上節質土器小皿片が検出された。13、14世紀代のものか。



第165図 八坂中遺跡土墳墓17



143



第166図 八坂中遺跡土墳墓17出土土器

## (18) 土壇墓18

土壇墓18 (第167図) も居館3の東側に位置する。

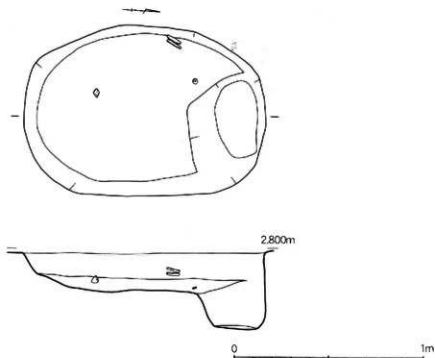
平面プラン楕円形を呈し、土壇内の北端を柱穴により切られる。規模は長径1.30m、短径0.9mを測る。検出面から床面までの深さは0.1~0.2mで、若干の起伏がみられる。

床面からは人骨は確認されず、鉄釘と銅銭(調査後行方不明)が検出された。銅銭は5枚が重なったもので、副葬品と理解される。鉄釘は2本のみで、これが木棺に伴うものかは定かではない。

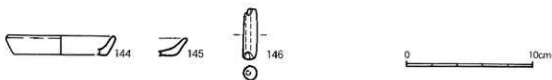
主軸方位が南北方向にあり、居館3などとおおむね一致することから、16世紀の所産であろうか。

## ・出土遺物:

土器(第168図)は埋土中から検出されたもので、144、145は土師質土器小皿、146は土鉢である。鉄器(第169図)は、147、148とも鉄釘と思われる。



第167図 八坂中遺跡土壇墓18



第168図 八坂中遺跡土壇墓18出土土器



第169図 八坂中遺跡土墳墓18出土鉄製品

(19) 土墳墓19

土墳墓19（第170図）は、居館3の東側にある。土墳墓17と重複し、土墳墓17に切られる。

主軸方位を東西方向にもつもので、平面プランは長方形を呈する。規模は長辺1.55m、短辺0.90mを測り、深さは検出面から0.35～0.4mである。

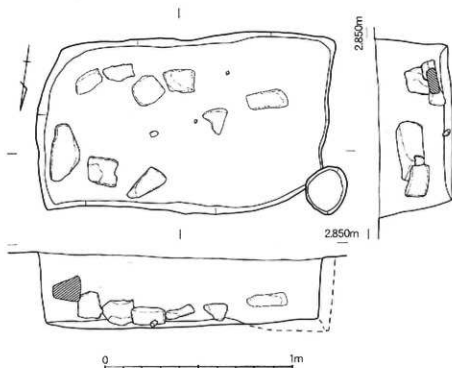
床面には石敷きがみられる。やや乱れた状況であるが、土墳墓9にみられる石敷きと同様なものである可能性が高い。

土墳内の上層及び床面から数点の骨片が検出された。小破片のため、人骨かどうかの判断も含め詳細は不明である。このほか床面から土鍾が1点検出されたが、副葬品かどうかは不明である。

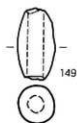
時期は16世紀代のものと推定される。

・出土遺物

149（第171図）は土鍾である。長さ5.6cm、最大幅2.9cmを測る。



第170図 八坂中遺跡土墳墓19



第171図 八坂中遺跡土墳墓19出土土器

## (20) 上墳墓20

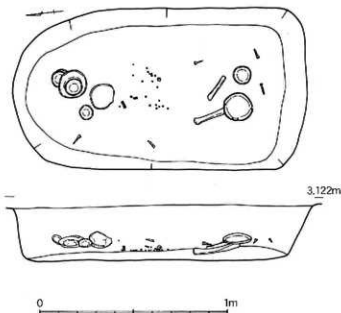
土墳墓20(第172図)は、居館2の南東コーナー部の東側に位置する。

主軸方位は南北方向にとり、平面プランは長方形基調を呈する。しかし、北側の側辺はかなり丸みをもったラインとなる。規模は長辺1.55m、短辺0.85mで、深さは検出面から0.3mである。床面は平坦で、床面上から人骨や土器が確認された。

人骨の残存状況は必ずしも良好ではなく、頭蓋骨と脚部の骨の一部をかりうじて確認できた。頭位は北にとり、足を折り曲げた状況である。頭蓋骨は西を向いているようで、横臥屈葬の姿勢がよみとれる。

また、上墳墓内から十数本の鉄釘が検出された。これらは、木棺に使用されたものと思われ、その位置から長辺1.1m、短辺0.5mの規模を復元できる。

副葬品として上質土器杯と小皿、及び水晶製数珠が確認された。土器はいずれも完形品で、頭蓋骨の北側に小皿の2枚重ね、杯に小皿を重ねたもの、及び小皿1枚のみが各々置かれていた。また、脚部の南側には杯と小皿が各1枚づつ配されており、杯には炭化物がはいっていた。何らかの食物を杯にいれ、供献したものであろうか。また、水晶製数珠が胸付近に散乱していた。胸元で組んだ手に持っていたものか。これら副葬品は、その位



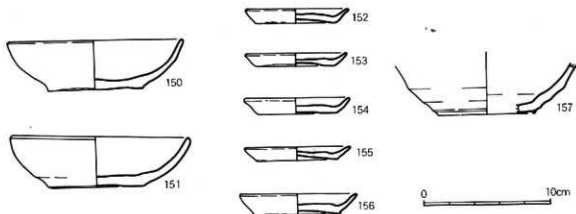
第172図 八坂中遺跡土墳墓20

蓋とレベルから木棺内に入れられていたものと推定される。

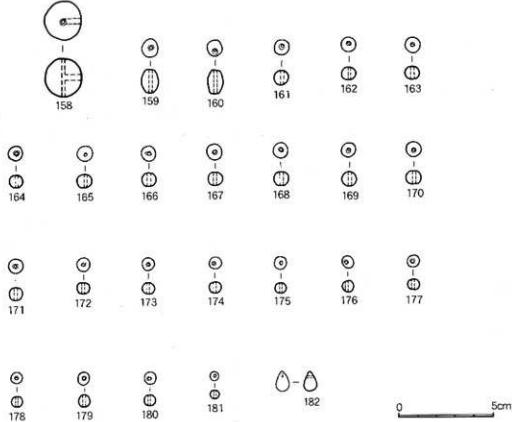
本土墳墓の時期は、13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。

・出土遺物

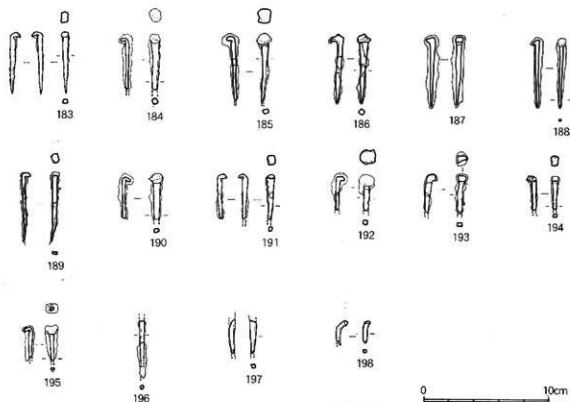
副葬品の土器と埋土中から検出されたものがある(第173図)。150、151は上師質土器坏で、151には供献された炭化物が残っていた。両者とも底部が円盤高台状を呈するもので、体部は内湾気味に口縁にいたる。底部切り離しは、糸切りである。これらの底部の作りは、本遺跡の溝1などからまともって出土する東国東型瓦器碗の



第173図 八坂中遺跡土墳墓20出土土器



第174図 八坂中遺跡土墳墓20出土玉製品



第175図 八坂中遺跡土壌墓20出土鉄製品

底部形態と酷似しており、同一の工人集団により製作されたものと考えられる。152～156は土師質土器小皿である。口径は152～155が8cm前後、156が9.2cmを測る。いずれも底部糸切りで、底部から斜方向に体部を立ち上げる。体部は直線的に口縁部にいたる。以上は13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。157は埋上から検出されたもので、糸切り底部の端に低い高台が付される瓦器碗である。13世紀中～後半の所産。

158～182(第174図)は水晶製数珠玉である。径2cmの円形のもの1、長さ0.7cmの楕円形のもの2、径0.5～0.8cmの円形のもの21、雫型のもの1の合計25個で構成される。183～198(第175図)は鉄釘である。

## (21) 土壌墓21

土壌墓21(第176図)は、居館2の東方に位置する。

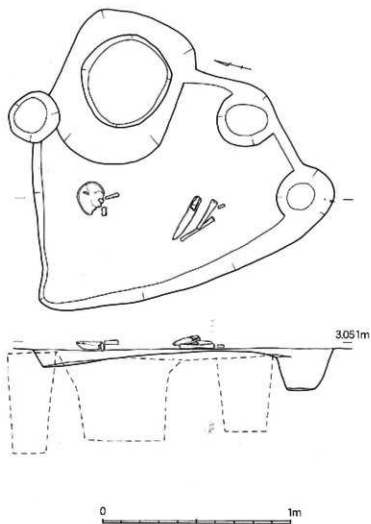
柱穴などに切られたり、削平が著しいことなどから、土壌墓の平面形態は必ずしも明確ではないが、長方形基調を呈するものと思われる。規模は長辺1.45m、短辺1.15mで、検出面から床面までの深さは数cm程度である。主軸方位は、おおむね南北にとる。

人骨は頭蓋骨と脚の一部が残存するが、その状態はあまり良くない。頭位は北にとり、西に倒れているようである。また、脚部の骨の位置から膝を折った状況がうかがえ、人骨は横臥屈葬の姿勢で埋葬されていたことが推定される。副葬品としては、鉄刀が腰のあたりから1本確認された。

### ・出土遺物

土器(第177図)はいずれも小破片で、埋土中から検出された。199は土師質土器片で、口径は15cmを越える。口径からみて、12世紀代のものか。200は土師質土器小皿である。13～14世紀代のものであろう。201は東口東型瓦器碗の体部である。底部を欠くので特定ができないが、13～14世紀のものであろう。202(第178図)は鉄製刀である。基部を欠くが、刃部長2.4cm、刃部幅2.8cmを測る。

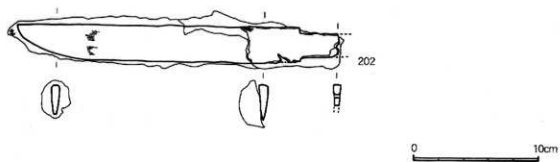




第176圖 八坂中遺跡土墳墓21



第177圖 八坂中遺跡土墳墓21出土土器



第178圖 八坂中遺跡土墳墓21出土鉄製品

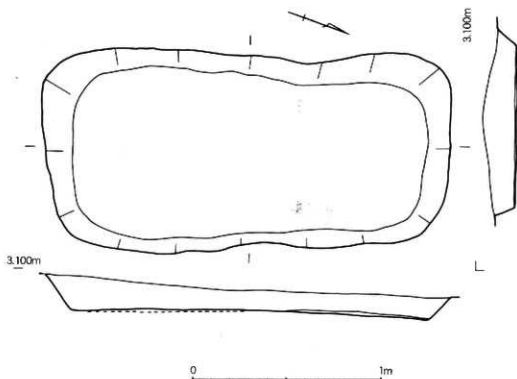
## (22) 土壙墓22

土壙墓22(第179図)は、居館1の北側に位置する。

平面形態は長方形で、規模は長辺2.15m、短辺1.05mを測る。検出面からの深さは、0.1~0.2mで床面は平坦である。

土壙内からは、人骨や副葬品と思われる遺物は検出されなかった。また、掘り下げにあたって土層観察を行いながら慎重に行ったが、木棺などは確認されなかった。

時期の決め手となる遺物は検出されなかったが、土壙墓の位置が居館1の北側にある道路状の部分であることから、居館成立以前のものであろうと推測される。



第179図 八坂中遺跡土壙墓22

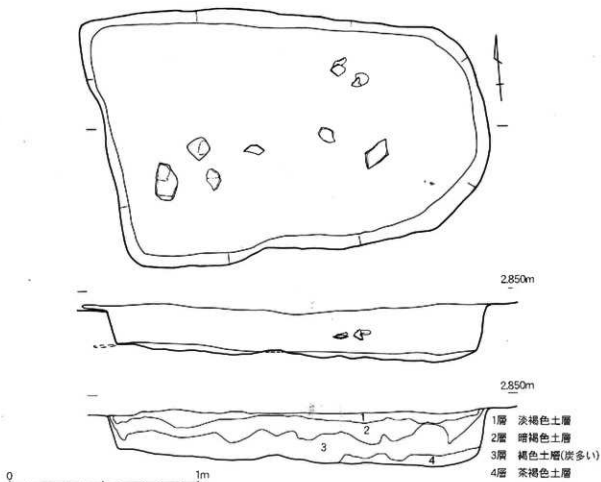
## (23) 土壙墓23

土壙墓23(第182図)は、溝4の北方約40mに位置する。これより北側には遺構がほとんどみられず、遺構群の北端近くにあることになる。

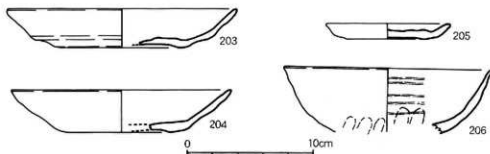
平面プランは台形気味の長方形基調を呈し、主軸方位は東西方向にとる。規模は長さ2.05m、最大幅1.35mを測る。深さは検出面から0.15~0.3mで、床面は緩やかに起伏する。土壙墓内からは、人骨や副葬品と思われる遺物は確認されなかった。時期については、埋土中の土器から12世紀初前後と推定される。

### ・出土遺物

土器(第181図)は、すべて埋土中から出土した小破片である。203、204は十師質土器片である。糸切りと思われる底部から体部がゆるやかに立ち上がる。205は十師質土器小皿である。底部は糸切りで、口径は9cmを越す。206は内黒土器片である。内面にはヘラミガキが施されるが明瞭でない。以上は、12世紀初前後のものか。



第180図 八坂中遺跡土壌墓23



第181図 八坂中遺跡土壌墓23出土土器

(24) 土壌墓24

上墳墓24 (第182図) は、上墳墓23の約30m東に位置する。

土壌墓の南半が削平されているため全容は不明だが、主軸方位を南北方向にとるものである。平面プランは長方形基調を呈するものと思われ、その規模は長さ1.8m以上、幅0.85mである。検出面からの深さは数cmで、

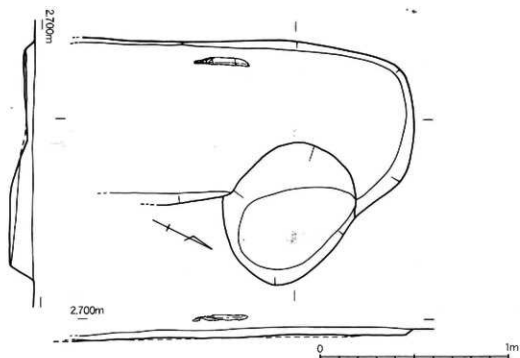
床面がかろうじて残存した状況である。

上城内から人骨は検出されなかったが、副葬品と思われる鉄刀が1本確認された。鉄刀は西側の壁に沿い、先端を北にむけ置かれていた。

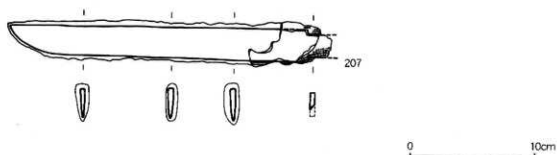
土葬の時期については不明である。

・出土遺物

207 (第183図) は鉄製刀で、基部をわずかに欠く。刃部長23.8cm、刃部幅2.6cmを測る。基部から刃部にかけて木質が残る。



第182図 八坂中遺跡土墳墓24



第183図 八坂中遺跡土墳墓24出土鉄製品

## (25) 土壙墓25

土壙墓25(第184図)は、溝4の北約20mの位置に土壙墓26と並ぶようにみられる。土壙墓25、土壙墓26と溝4の間には建物群があり、向土壙墓の北側にも建物群が展開する。これらふたつの建物群の間に、約10mほど遺構のない空白地があり、その部分に向土壙墓はみられる。

本土壙墓は主軸方向を南北方向にとり、平面プランは台形基調である。規模は長さ1.25m、北側の側辺0.5m、南側の側辺0.85mである。検出面からの深さは0.1~0.15mで、床面は北から南に向かい緩やかに傾斜する。床面からは、人骨と副葬品である土器と鉄製刀子が検出された。

人骨は頭蓋骨と若下の骨片が出土した。人骨の残存状態は良くないが、頭位を北にとり埋葬されていたことが分かる。しかし、他の部位の骨が残存しないので埋葬姿勢を明確にすることができないが、土壙の規模を考えると屈葬であった可能性が高い。

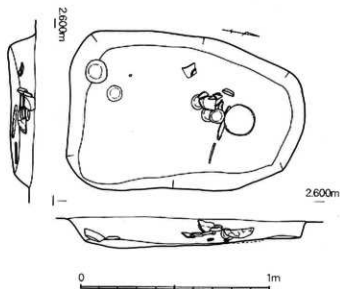
副葬品のうち土器は、足元と思われる土壙南西隅に土師質土器杯と小皿が各1、胸から首にかけての位置に土師質土器杯1と小皿4が各々置かれていた。前者は土壙の床面に直接置かれており、小皿は裏返しの状況である。後者は遺体の胸の上に置かれていたものと推察される。このほか、瓦器椀の小破片が床面ちかくから検出されているが、副葬品ではなく埋土中への流れ込みと思われる。また、鉄製刀子は首のあたりの位置にあり、やはり遺体の上に安置されていたものと思われる。

このほか、土壙内から鉄釘などは検出されず、土層観察の結果ともあわせ、木棺は使用していなかったものと考えられる。

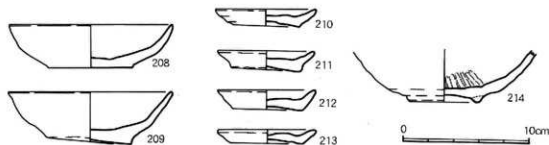
本土壙墓の時期は、14世紀前半に位置付けられる。

### ・出土遺物

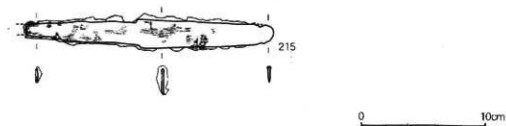
本土壙墓から出土した十器(第185図)のうち208、209は土師質土器杯で、208は足元に置かれていたものである。両者とも底部糸切りで、円盤高台状のやや厚い底部から体部が内湾気味に立ち上がる。口径はいずれも12cm代である。210~213は土師質土器小皿で、このうち212は足元に置かれていたものである。いずれも口径7cm代であるが、やや厚めの底部から斜方向に内湾気味に体部を立ち上げるもの(210、211)、体部を斜方向に直線的に立ち上げるもの(212)、体部をやや外反気味に立ち上げるもの(213)などがある。214は瓦器椀底部である。外底面には糸切り痕が残り、内面にはミガキがみられる。215(第186図)は鉄製刀子で、刃部長約16cm、刃部幅2cmである。



第184図 八坂中遺跡土壙墓25



第185図 八坂中遺跡土壌墓25出土土器



第186図 八坂中遺跡土壌墓25出土鉄製品

## (26) 土壌墓26

土壌墓26 (第187図) は、土壌墓25の西側に並ぶように位置する。主軸方位は南北方向で、隣接する土壌墓25とほぼ同じである。位置関係からみて、両者が強い関係にあったことがうかがえる。

土壌墓の平面プランは楕円形で、長径1.40m、短径0.95mを測る。検出面から床面までの深さは0.1~0.15mで、床面はほぼ平坦である。床面上には厚さ数cmにわたり炭が敷かれている。炭の大部分は細かいものであるが、なかには5cmほどのものも含まれる。この炭層は意識的に持ち込み敷いたもので、本土壌内で燃やしたものではない。なぜならば、土壌内の床や壁に火を受けた痕跡がまったくないからである。この炭の上に横たわるように人骨と副葬品の土器などが検出された。

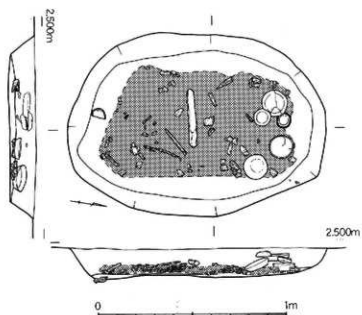
人骨は残存状態が悪く、頭蓋骨と脚部の骨が確認されたのみである。頭蓋骨の位置から、頭を北に向けた埋葬であったことが分かる。また、わずかな骨であるが埋葬姿勢も屈葬であったことが推察される。

副葬品のうち土器は、頭部の東側に土師質土器杯を1個体、頭部の西側に土師質土器杯1個体と小皿2個体、足元にあたる土壌の南端に小皿を1個体各々安置している。また、鉄製刀は腰のあたりから検出されており、遺体の上に置かれていたものであろう。土壌内からは鉄釘などは確認されず、土層観察の結果ともあわせ、木棺は使用していなかったものと考えられる。

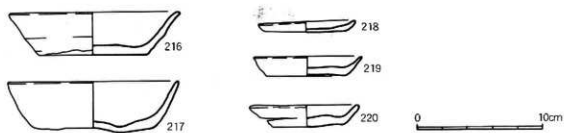
本土壌墓の時期は13世紀後半~14世紀初か。

### ・出土遺物

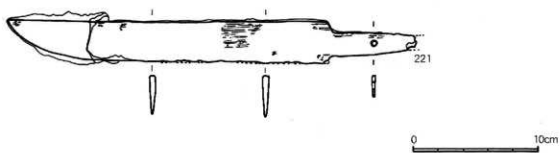
土器 (第187図) のうち、216と217は土師質土器杯である。前者は体部がシャープに立ち上がり口縁外反気味、後者は緩やかに立ち上がり内湾気味に口縁へ続く。口径は両者とも13cm代である。218~220は土師質土器小皿である。220は底部切り離しを失敗したままである。口径は7cm代後半から8cm代前半である。221 (第189図) は鉄刀である。刃部長26cm、刃部幅3.4cmを測る。



第187圖 八坂中遺跡土墳墓26



第188圖 八坂中遺跡土墳墓26出土土器

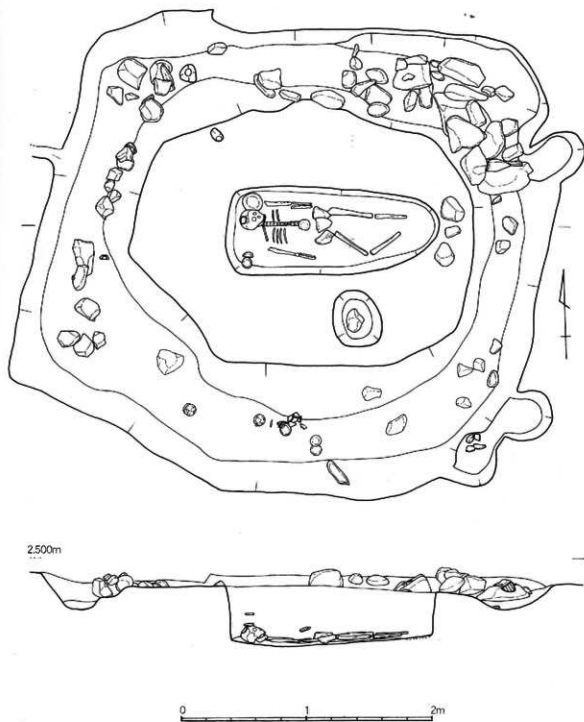


第189圖 八坂中遺跡土墳墓26出土鉄製品

### (27) 周溝墓1

周溝墓1（第190図）は、調査区の東端近くに位置する。この周溝墓1より東側には、掘立柱建物跡や土塼などの遺構がほとんど存在せず、本遺跡における遺構群の最も東端に存在することになる。調査区東端から八坂川までは約100mの距離があるが、この間については試掘調査でも集落遺構は確認されていない。従って、周溝墓1は集落の東の端に造営されているとすることができる。

本遺跡において、周溝を有する墓は周溝墓1のみである。これまで述べた土塼墓については、現在確認するこ



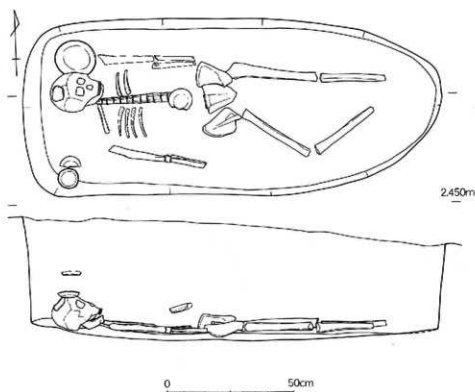
第190図 八坂中遺跡周溝墓1



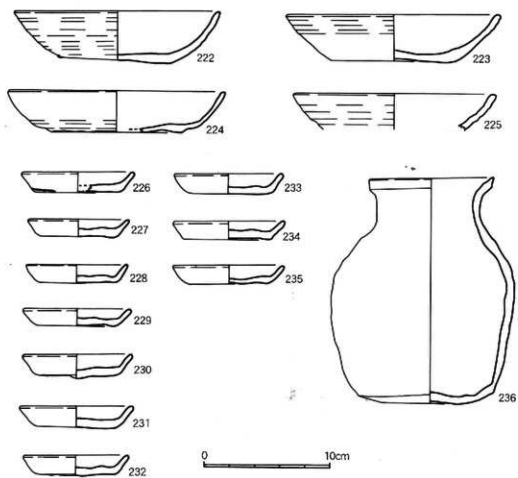
とのできない上部構造はともかくとして、上墳墓の周囲に溝などの施設を伴うものはまったく確認されていない。このような周溝をもつものと、そうでないものの違いが何を意味するのか注目されるところである。

周溝墓1は東西方向に主軸を有する土壌墓を主体部にもつもので、幅0.6～1.4mの溝を巡らす。溝内側のラインは楕円形基調に、また溝外側のラインは方形基調を呈する。周溝墓全体の規模は、周溝の外側で4.0×3.6mを測る。周溝の深さは0.3mほどで、溝底はほぼ平坦である。しかし、溝底の幅については0.2～0.8mと一定ではない。周溝の壁は、内側の壁が緩やかで外側がやや急な傾向にあるが、それほど顕著ではない部分も多い。周溝の内側には、主体部を覆うようにマウンドがあったと思われるが、周溝内にはマウンド上に葬かれていたであろう石材が多数流れ落ちている。石材は周溝の西側から北側にかけ多くみられる。石材には割り石や川原石があり、0.1～0.3mほどの大きさのものが使用されている。また、周溝南側の床面には土師質土器小皿が5枚置かれていた。このうち2枚ずつ2組(第192図229と230、231と232)は、1枚を正位に安置しその上にもう1枚を逆さにして被せて蓋状にしていた。1枚(第192図233)については、正位に安置されていた。このほか、周溝に崩落した石の間や、床面から浮いた状態で土師質土器杯、小皿、土師器臺(第192図223～225、234～235、236)が検出された。これらは、その検出状態からマウンド上に置かれていたものと理解される。埋葬儀礼に係わる供献土器として、マウンド上に置かれたものと周溝の床面に置かれたものがあったことが分かる。

主体部(第191図)は、東西に主軸をもつ上墳墓で長さ1.70m、幅0.65mを測る。平面形は西側が角張り方形基調であるが、東側は丸くなる。深さは検出面から0.45～0.55mで、床面は中央部が緩やかに凹む状況である。上墳墓からは、人骨と副葬品と思われる土師質土器などが検出された。人骨については、本遺跡のなかでは最も遺存状態の良いものであったが、それでもほとんどが取り上げは不可能なほど脆くなっており、骨端部の形状は不明瞭であった。頭位は西にあり、頸椎骨は上向きである。右足を軽く曲げているが、仰臥伸展葬であったと思われる。鉄釘などは検出されず、土層の観察結果からも木棺は確認されていないことから、直葬であったものと思われる。人骨の年齢、性別については遺存状態が悪いので明確にはできないが、左寛骨の形状や大腿骨の骨径



第191図 八坂中遺跡周溝墓1主体部



第192圖 八坂中遺跡周溝墓1出土土器



第193圖 八坂中遺跡周溝墓1出土鉄製品

が細い点を考慮に入れると、女性の可能性が考えられる。年齢は成年から老年のやや幅をもってとらえておきたい。

副葬品としては、土師質土器環（第192図222）が頭蓋骨の北側床面に置かれていた。このほか土師質土器小皿3枚（第192図226～228）と鉄鏃（第193図237）1本がかなり浮いた状態で検出された。

周溝墓1の時期は11世紀後半と考えられる。

#### ・出土遺物

土器（第192図）には、土師質土器環、小皿、土師罏壺がある。222～225は土師質土器環である。このうち222は完形品で、口径16.2cmを測る。底部は糸切りで、底部と同じ厚みの体部が緩やかに立ち上がり内湾気味に口縁にいたる。口縁端部は丸くおさまられ、体部外面には顕著なロク口痕がみられる。器高は3.7cm～4.1cmとやや深めである。223～225に付いても222と大同小異の特徴をもつが、223と224は体部外面全体にロク口痕が及ばない。また、224は他に比べ器高が低い。

226～235は土師質土器小皿である。いずれも底部へラ切りで、体部の底部からの立ち上がりは急である。体部は底部とほぼ同じ厚みをもち、わずかに外反気味に口縁にいたる。口縁端部は丸くおさまられる。口径は7.9～8.9cmで、多くが8cm代の中～後半である。

236は土師罏壺である。底部は平底で、胴部はあまり張らず底部から直線気味にのびる。頸部でややすぼまるが太目の頸部である。口縁部は断面三角形を呈し、口縁が外面には幅の狭い口縁帯を形成する。外底面には顕著な糸切り痕はみられず、胴部内外面とも回転ナゲなどによる仕上げである。

237（第193図）は鉄鏃で、基部を欠損する。

## (28) 甕 棺 1

調査前から水田中に比較的扁平な自然石がひとつ立っていた。地元伝承では、水争いの際に命を落とした人の墓であると言う。石が立つ水田の所有者は、折々に花と線香を供え、丁寧に守り続けている。しかし、本遺跡の所在する件築市巾地区は、地名、屋号、苗字に中世以来の歴史的なつながりを多く残すような古い集落で、近世以降の墓地も各家で各々保有している。このため、水争いで命を落とした地元民の墓が、各家の墓地から離れた水田中にあるとは考えにくく、当初は調査の対象にするか躊躇していた。しかし、地元の方々の多くが墓であると伝え聞いていることを考え併せると、仮に墓そのものではなくても、犠牲者がいるほど激しかった水争いの記念碑的性格をもつものである可能性も想定され、この石の周辺についての調査を開始した。

調査の結果、石の下から甕が2基検出され、その甕の中から骨が確認されるにいたり甕棺墓であるという確証をもった（第194、196図）。

甕棺の上に立つ石は自然石で、おおまかに三角形を呈する。比較的扁平であるが、基部の方が厚みをもち、先端にむけ薄くなる。石と甕棺の関係を土層図（第195図）で見ると、石は、中世の集落が廃絶した後形成された2枚の水田のうち、上層の水田床土を切り込んで据えられていることが分かる。これに対し甕棺は、下層の水田床土を切って埋葬されており、甕棺の埋葬と石を立てた時期が同時ではないことを示している。甕棺の周辺には畔状の高まりがあり、当初甕棺は水田中ではなく畔状の高まりの部分に埋葬されていたようである。よって、仮に上部施設がなくてもその位置を明確に特定できたものと思われる。しかし、上層水田になるとなぜか畔状の高まりの部分も含め水田となったため、甕棺の位置が分からなくなる事態となった。そのため、甕棺の位置を示すものとして水田中に石を立てたものであろう。

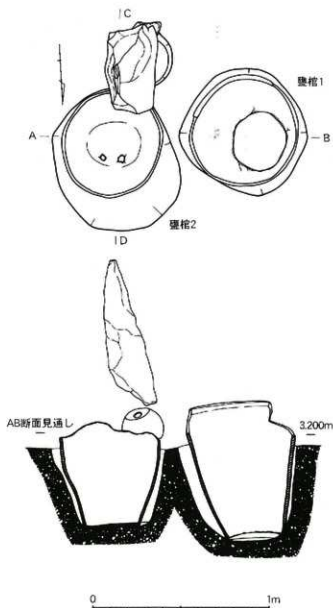
甕棺1（第194、196図）は、円形の土甕を掘り、その中に甕棺を安置したものである。上層は径0.7～0.75mを測るもので、甕棺がやっと入るほどの大きさである。甕棺は、わずかに傾くもののほぼ直立気味に安置されている。甕棺の底部は意識的に打ち欠かれ、底部全体が円形に抜かれていた。現状で口縁部は部分的にしか残存せず、耕作などの影響により多くの口縁部破片が甕棺の内側に落ちていた。当初、口縁部には木蓋が使用されていたものと推定される。甕棺内からは歯及び人骨が検出された。しかし、それらは保存状態が非常に悪く、ほと

んど粉状になったものである。そのため、埋葬者の体位や性別などは明らかにできない。副葬品については、まったく確認されなかったが、甕棺外の掘り方内から銭貨が1枚検出された(第199図)。銭は淳熙元寶(初鋳南宋1174年)であるが、これが意識的に埋納されたものであるかは不明である。

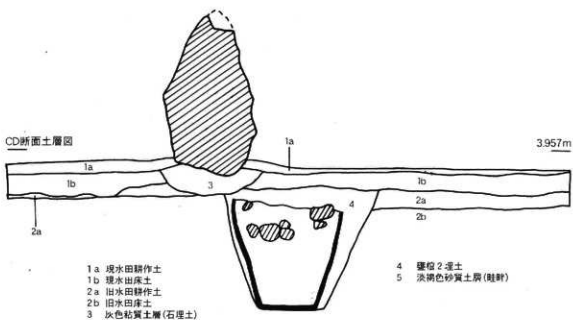
・出土遺物

甕棺に使用された甕(第197図238)は、黄褐色を呈するもので、土師質にちかい感じである。底部が抜かれているものの、器高は70数cmに及ぶことが分かる。胴部は長胴で、上半に最大径を有する。胴部は肩から頸部にむかいわずかにすぼまり、そのまま口縁部にいたる。口縁部外面は帯状に肥厚する。近世の所産である。

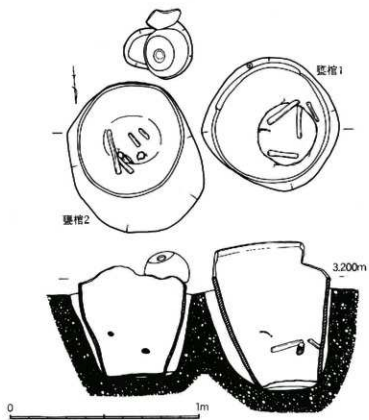
このほか、甕棺や掘り方埋土から土器片が出土した(第198図)。239は土師質土器小皿底部である。切り離しは糸切りである。240は内黒土器片で、239と同様な時期か。241は製塩土器片と思われる。内面に布目痕が残る。242(第199図)は南宋銭の淳熙元寶(初鋳南宋1174年)である。



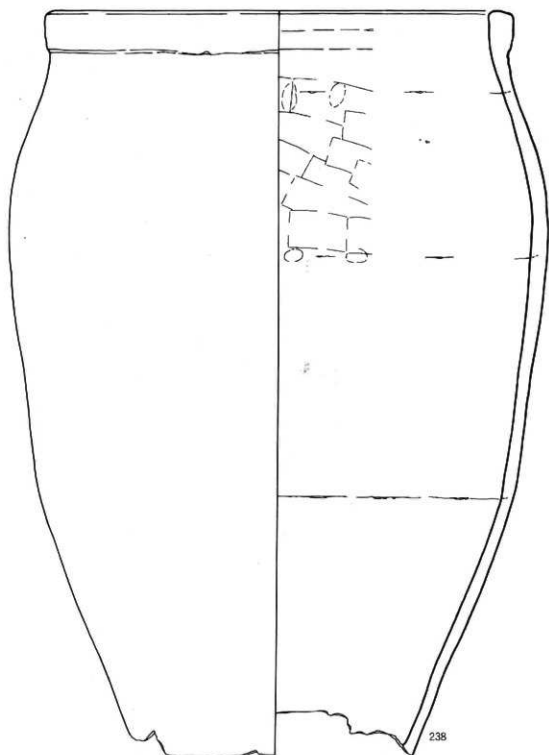
第194図 八坂中遺跡甕棺1、甕棺2



第195図 八坂中遺跡塚棺1、塚棺2周辺土層図



第196図 八坂中遺跡塚棺1、塚棺2人骨出土状況



第197図 八坂中遺跡壺棺 1



第198図 八坂中遺跡甕棺1出土土器



第199図 八坂中遺跡甕棺1出土銭貨

### (29) 甕棺2

甕棺2(第194、196図)は、甕棺1の西側に隣接する。両甕棺の掘り方は、その間5cmほどと非常に近接するが切り合うことはない。甕棺2の掘り方も甕棺1と同様に下層水田の床土を掘り込んでおり、位置関係などと考えあわせると、甕棺1と甕棺2はほぼ同様な段階に埋蔵されたものと推定される。

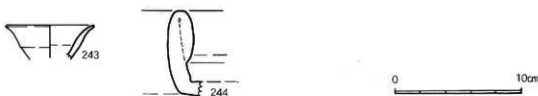
甕棺の掘り方は楕円形を呈し、南北0.8m、東西0.65mを測る。この掘り方内に、甕棺は南側の壁に接するように入置され、北側が大きく余裕をもった状況である。甕棺の安置状況は、甕棺1と同じようにほぼ直立の状態であるが、底部は抜かれていない。

現状の甕棺は肩部より上がすべて失われており、その破片が甕棺内部に崩落していた。本来は完形の状態でも埋納されており、木蓋で塞がれていたものであろう。甕棺は甕棺1と異なり底部全体の打ち欠きは行われていなかったが、底部に2ヶ所の穿孔が施されていた。穿孔は打ち欠きによりなされ、底部の中央からやや端に寄った位置にある。甕棺内からは人骨と思われる骨が確認された。骨の遺存状態は極めて悪く、粉状になったものである。そのため、埋葬の体位や性別は明確にすることができなかった。また、副葬品についてはまったく確認されなかった。

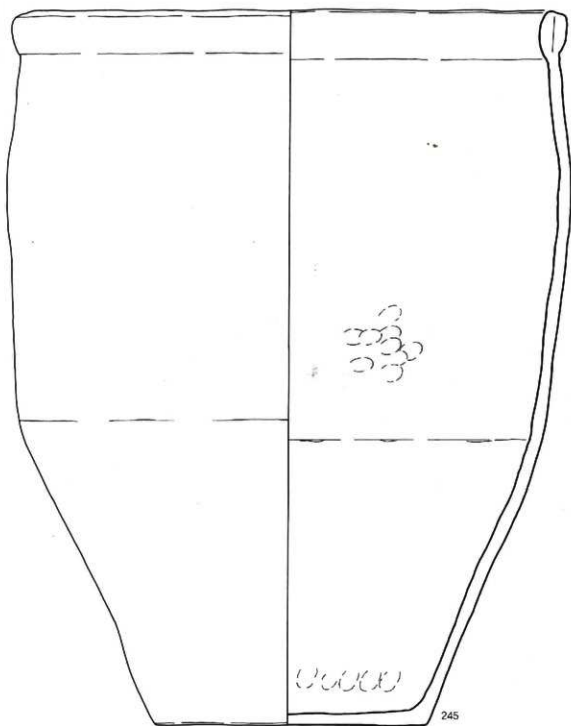
甕棺とは別に、甕棺2のすぐ南には五輪塔の水輪部に入った土壇がある。土壇は甕棺掘り方と切りあわないが、両甕棺とどのような関係にあるかは不明である。

#### ・出土遺物

243、244(第200図)は甕棺1、甕棺2の周辺から検出されたもので、243は白磁環、244は備前焼甕である。甕棺(第201図245)は器高75.0cm、口径55.5cmを測るもので、黄褐色を呈する土師質にちかいものである。胴部は底部から斜方向に立ち上がり、胴中程よりやや下で絞をもち、そのまま口縁にむかい直立する。口縁部は帯状に肥厚する。近世の所産。246(第202図)は、甕棺2の南側にある土壇から検出された五輪塔水輪部である。

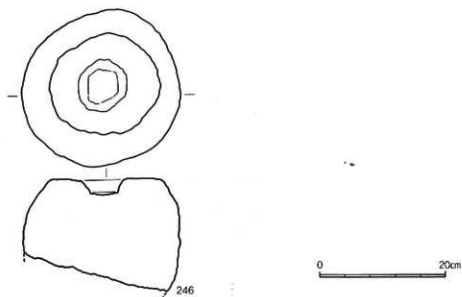


第200図 八坂中遺跡甕棺1、甕棺2周辺出土土器



第201図 八板中遺跡甕棺 2





第202図 八坂中遺跡甕棺1、甕棺2周辺出土石製品

### (30) 甕棺3

甕棺3(第203図)は、甕棺1及び甕棺2の北東に位置する。甕棺3については、甕棺1、2のような上部施設がなかったため、当初はその存在をまったく予想していなかった。しかし、甕棺3を検出した後に改めて地元の方々への聞き取りを行うと、数人から甕棺1、2部分の石とは別に、周辺の水田に立石がいくつかあったとの情報を得た。ただ、情報が非常に漠然としたものだったので、場所などを特定するにはいたらなかった。そのため、可能性は残るが、甕棺3の上に立石などの上部施設があったかどうかは明確にすることはできなかった。

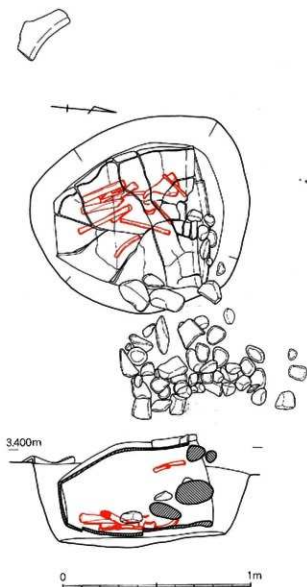
甕棺3が確認されたのは、甕棺1、2の調査の後に、バックフォーにより中世遺構検出面まで下げる段階であった。甕棺の一部をひっかけて初めて気付いた状況であったため、上層図の記録はされていない。しかし、検出時の所見によれば、甕棺が掘り込まれているのは、甕棺1、2同様に下層水田である。加えて、その位置が畦状の部分で、耕作部分ではないことも確認した。

甕棺は、甕棺1、2とはまったく異なり、横位置に安置されている。掘り方の平面形は楕円形で、長径1.3m、短径1.0mの規模を有するもので、南北に主軸をもつ。床面は南側が若干深く、甕はその傾斜に沿うようにわずかに上向きかげんに、口縁部を北に向け安置されていた。甕棺内には、口縁部の方から礫などが流れ込んだ状況が確認できた。これは、口縁部にあった木蓋などが腐朽した後に入り込んだものであろう。甕棺内からは、人骨と思われる骨と歯が検出された。骨の遺存状況はあまり良くないが、甕の底に張り付くようにみられた。また、副葬品はまったく確認されなかった。

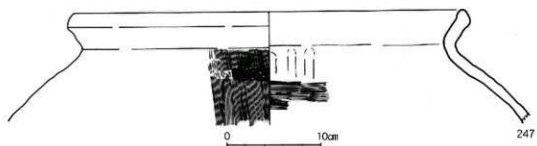
甕棺1、2との関係を考えて、掘り込みの層は同じで、畦状の部分に安置されているという状況も共通する。甕棺の型式をみると、甕棺2と甕棺3が同じであるが、隣接する場所にある甕棺1と甕棺2は異なる。また、甕棺の安置姿勢では、共通する甕棺1、2に対し、甕棺3は異なる。以上から、甕棺の埋葬順序を考えると、大きな意味で同時性はとらえられるが、同時埋葬であるのか微妙な時間差があるのかについては検討の余地がある。

#### ・出土遺物

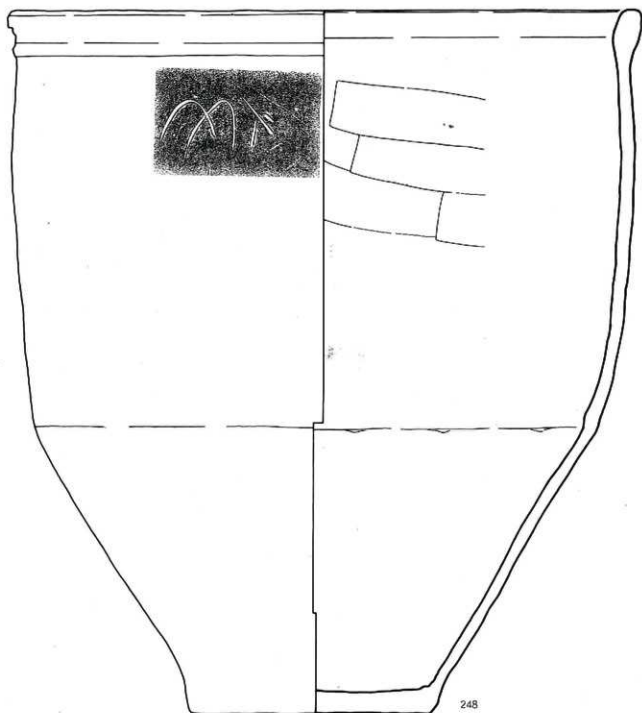
247(第204図)は、周辺から検出された瓦質土器甕で、口縁部が上方に肥厚する。248(第205図)は甕棺2と同様な形態をなすもので、外面口縁下にヘラ記号がみられる。近世の所産である。



第203図 八坂中遺跡甕棺 3



第204図 八坂中遺跡甕棺 3 周辺出土土器



0 20cm

第205図 八板中遺跡甕棺 3

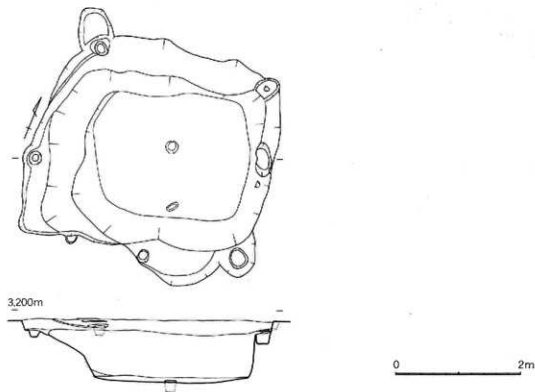
## 5 竪穴

ここで竪穴（付図5）としたものは、一定の定型化した平面プランをもち、床面が平坦なものである。後段で紹介する土壇のなかにも竪穴とした方がよいようなものを含むかもしれないが、今回の報告では以下の2基を竪穴として取り上げる。竪穴とするものは何らかの上屋構造を伴うものと推定され、そのようなものを基本的に伴わない土壇と区別されるものであろう。

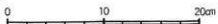
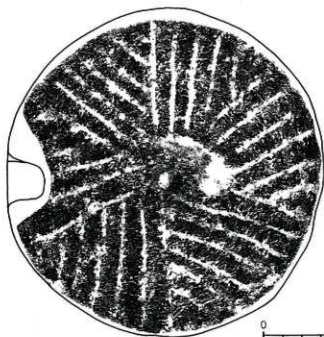
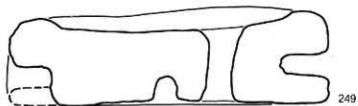
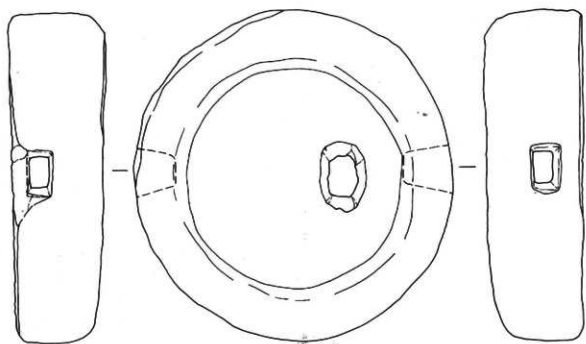
### (1) 竪穴1

竪穴1（第206図）は、居館3の北側に位置する。居館1及び居館3の北側には、東西方向に幅数mの遺構空白部分が続く。この空白部分は道路と推定されるが、竪穴1は道路に沿うようなかたちでみられる。また、位置的に掘立柱建物である建物33と重複する。建物33の東側桁行の北から2番目の柱穴が竪穴1により切られていることから、竪穴1は建物33より後出するものと考えられる。

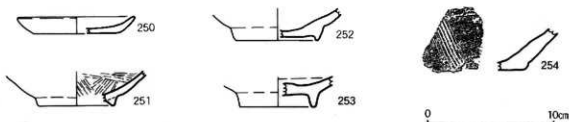
竪穴1の平面プランは、基本的には長方形を早するものと思われる。小規模な土壇と切り合い関係にあるが、現状で長辺3.2～3.6m、短辺2.8～3.2mを測る。しかし、竪穴の西側から北側にかけて平面プランに乱れがみられ、壁の立ち上がりも直立しないことから、この部分は壁がある程度崩壊しているものと考えざるをえない。よって、本来の規模は長辺3m、短辺2.6m程であったと推定される。また、主軸方向がほぼ居館3北側にある道路状部分の方向と一致することから、同時存在した可能性が高い。竪穴の深さは検出面から0.9～1.0mで、床面はほぼ平坦である。床面には目立った施設はなく、ほぼ中央に柱穴が1本みられるのみである。このほかに柱穴



第206図 八坂中遺跡竪穴1



第207圖 八坂中遺跡竪穴1出土石製品



第208図 八坂中遺跡竪穴1出土土器

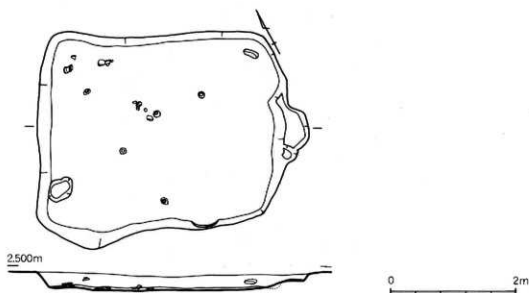
たとえば、竪穴東辺の両コーナーと中央にみられる。対向する西辺は壁が崩壊していると推定されるが、北側コーナーの柱穴が残る。本竪穴は、東側及び西側の各辺検出面付近の高さに3本づつの柱穴をもち、さらに床面中央の柱穴も加えた7本で上層施設を支えていたものと考えられる。良好な共存遺物はないが、16世紀の所産と推定される。

・出土遺物

竪穴からは石製品（第207図）や流れ込みの土器片（第208図）が出土した。249は挽臼の上臼である。天場はほぼ平坦で、側面には対向する位置に角穴の挽手穴が2ヶ所みられる。下面はわずかにふくみをもち、中央に芯棒受けがある。この芯棒受けを中心に主溝が6本放射状に配され、主溝から5ないしは6本の右上がりの副溝が刻まれる。250は上師質土器小皿で復元口径9.2cmを測る。12世紀代のものか。251は内黒土器椀で、断面三角形の高台が付く。12世紀代のものである。252は瓦器椀である。底部切り離しは不明だが、形態から糸切りと推定され、底部の端に高台が付く。13世紀代のものか。253は白磁碗で、12世紀中～後半のものである。254は備前焼播鉢で摺目は7本である。15世紀代のものか。

(2) 竪穴2

竪穴2（第209図）は、調査区東南部に位置する。竪穴の北側には、溝3が南東-北西方向に走っている。溝



第209図 八坂中遺跡竪穴2

3は、本来さらに北へのび溝4、溝5に続いていたものと考えられる。竪穴2は長方形基調を呈し、主軸方向を南東-北西方向におおむねとる。竪穴の主軸方位と溝の方向をみるかぎり、両者は密接な関係があるものと考えられる。

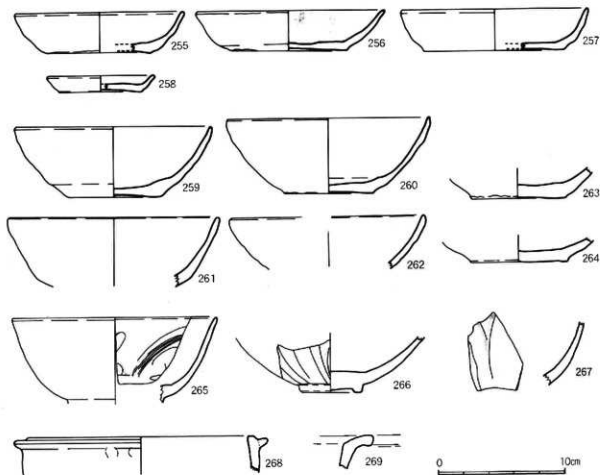
平面プランが長方形基調をなす竪穴の規模は、長辺3.8m、短辺2.8~3.2mを測る。検出面からの深さは0.2mほどで、床面は平坦である。床面には浅くて小規模な柱穴などがみられるが、本竪穴に伴う柱穴ではないと思われる。また、東側の短辺中央は凸字状に突出している。この部分は階段状になっており、竪穴の出入り口施設であった可能性が考えられる。

竪穴内からは散発的に遺物が検出されたのみであるが、それらから竪穴の時期は13世紀後半~14世紀初めに位置づけられる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第210図)には、土師質土器杯、小皿、瓦器碗、青磁碗、上鍋がある。

255~257は土師質土器杯で、いずれも体部が内湾気味に立ち上がる。このうち256は完形品で、口径14.8cmを測る。口径からみればやや古相の感があり、12世紀代のものか、258は土師質土器小皿で、体部が底部から比較的シャープに立ち上がる。復元口径は8.4cmである。13~14世紀代のものか。259~264は瓦器碗である。底部は糸切りのままで平底をなし、体部にはヘラミガキが施されない。これらは、東国東地方を中心に分布する東国東型瓦器碗である。265~267は青磁碗である。265は12世紀後半、266は鎗連弁をもつもので13世紀代、267は連弁に鎗がなく14世紀代か。268、269は上鍋である。268は鈎が口縁ちかくにあり13世紀後半か、269は12~13世紀代である。



第210図 八坂中遺跡竪穴2出土土器

## 6 土 壙

遺跡からは数百基の土壙が確認された(付図4)。ここでは、そのうち主要なものの196基について、出土遺物とともに紹介する。

検出された土壙には、規模や形状が様々なものがみられる。よって、いろいろな機能や性格を有するものが含まれていると考えられる。また、時間的にも11世紀から16世紀までと、幅広い時期のものが存在する。

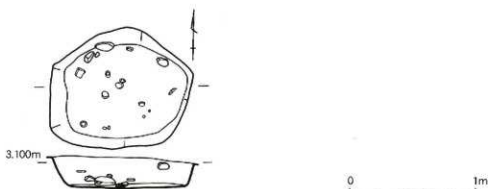
遺跡内における土壙の分布をみると、調査区内全体に広く分布することが分かる。しかし、その分布密度は調査区西半が圧倒的に高く、全体の70~80%は西半分に位置する。調査区の西半分には、溝により区画された居館1、居館2、居館3があり、古代から中世末まで集落地として利用されている。これに対し調査区東半は、調査区西半の居館に対応する時期の遺構がみられず、この段階にはすでに水田化されていたものと推定される。調査区内における土壙の分布密度の差は、こういった状況が反映されているものであろう。

### (1) 土 壙 1

土壙1(第211図)は、居館3の北側に位置する。居館3は溝により区画されるが、この溝のうち北側については西半が切れる。この部分は居館の出入り口としての機能を有するものと考えられる。土壙1は、居館3の出入り口部前面に位置する。また、居館3の北側は東西方向に遺構の希薄な部分が続き、この部分は道路状の機能をもつものと推定される。土壙1はこの道路状の部分に位置することから、道路が存在したであろう居館3の時期とは異なる時間のものであろうか。土壙はやや不整形気味の楕円形を呈する。その規模は、長径1.1m、短径0.9mを測る。深さは検出面から0.2m程で、床面は平坦である。

#### ・出土遺物

270(第212図)は、土師質七器小皿である。底部中央に焼成前の穿孔が認められる。口径は7.2cmで、体部が短くシャープに立ち上がる。14世紀前半のものであろう。



第211図 八坂中遺跡土壙1

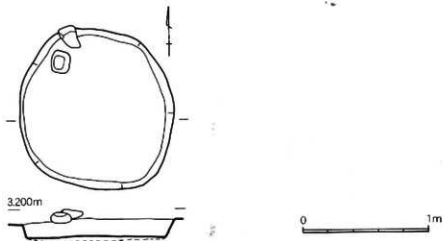


第212図 八坂中遺跡土壙1出土土器



## (2) 土 壙 2

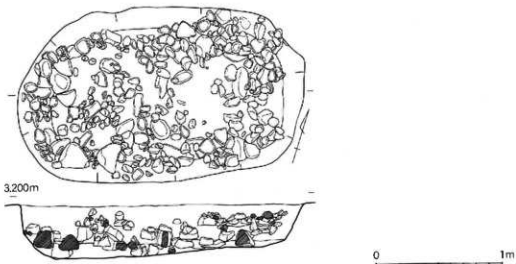
土壙2（第213図）は、土壙1のすぐ西側に位置する。土壙1と同様に、居館3の出入り口部前面にある。加えて居館3北側の道路状部分にあることから、道路が存在したであろう居館3の時期とは異なる時期のものであろうか。土壙内から時期の決め手になる遺物が検出されていないことから、本土壙の時期を考えるにあたり参考にならう。平面プランはほぼ円形で、規模は径1.2~1.25mを測る。深さは検出面から0.15mで、床面は平坦である。土壙内からは、床面より浮いた状態で石が検出された。



第213図 八坂中遺跡土壙2

## (3) 土 壙 3

土壙3（第214図）は、土壙1のすぐ北側に位置する。土壙1及び土壙2と同様に、居館3の北側に東西にのびる道路状部分に位置する。土壙は主軸を東西にもつ楕円形を呈するもので、長辺2.3m、短辺1.4mを測る。深さは検出面から0.35~0.45mで、床面は西に向かい傾斜する。土壙内からは、0.1~0.25mの礫が多量に検出された。これらは、土壙内に廃棄されたものと思われる。また、土器は少量で、若干の破片が検出されたのみである。



第214図 八坂中遺跡土壙3

#### 出土遺物

出土土器（第215図）のうち、271は底部糸切りの土師質土器小皿である。口径9.5cmを測るもので、体部が緩やかに立ち上がる。口径及び器形から、12世紀代のものか。272は白磁の香炉と思われる。貫入をもつ黄色がかった釉がかかるが、外底面は露胎である。



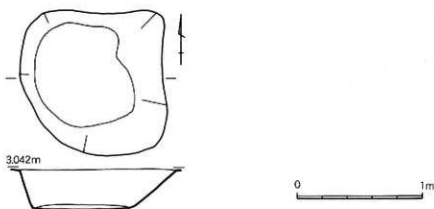
第215図 八坂中遺跡土坑3出土土器

#### (4) 土 坑 4

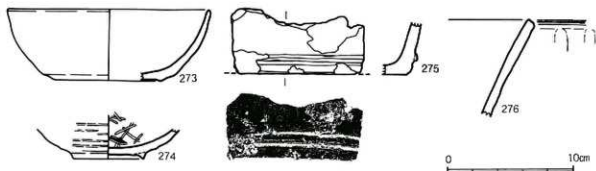
土坑4（第216図）は、居館3の北西出入り口部の約16m北側に位置する。位置的には建物26と重複する。平面プランは方形基調の不整形を呈し、径約1.1mを測る。検出面からの深さは0.3mで、底面は平坦である。出土遺物から16世紀代の所産と思われる。

#### ・出土遺物

出土土器（第217図）のうち、273は瓦器椀である。体部は内外面ともヘラミガキがみられない。底部は底面の端に低い高台を付す。これは東国東型瓦器椀でも、高台がもっとも退化した形態で、13世紀後半に位置づけられる。274も瓦器椀で、体部内外面にヘラミガキがみられる。外面のヘラミガキは散発的になっている。外底面



第216図 八坂中遺跡土坑4



第217図 八坂中遺跡土坑4出土土器

には糸切り痕が残り、断面三角形の高台が付される。東国東型瓦器桶の12世紀後半のものか。275は、淡橙褐色を呈する瓦質土器火鉢の底部である。突帯が1条付されている。数ヶ所に短い脚が付されるものと思われ、16世紀前半～中頃の所産である。276は土鍋の口縁部で、外面にはスズ状付着物がみられる。

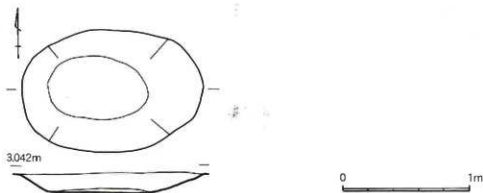
### (5) 土 壙 5

土壙5（第218図）も土壙4と同様に、居館3の北西出入り口部の約16m北側に位置する。居館1と居館3の北側に東西方向にのびる通路状部分に平行するように、土壙4から6m西側に移動した場所である。

土壙の平面プランは長径1.4m、短径0.95mの規模を有し、検出面からの深さは0.2mである。土壙の時期は、16世紀代である。

#### ・出土遺物

277（第219図）は瓦質土器火鉢の口縁部である。色調は外面暗橙褐色、内面褐色を呈す。口縁下に2条の突帯を付し、その間に2種類のスタンプ文を配する。口縁端部は内側にやや肥厚する。16世紀前半～中頃である。



第218図 八坂中遺跡土壙5



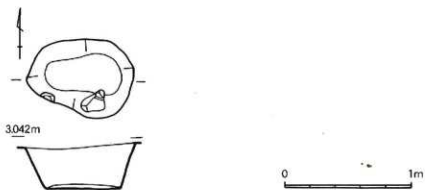
第219図 八坂中遺跡土壙5出土土器

### (6) 土 壙 6

土壙6（第220図）は、土壙5から居館1と居館3の北側に東西方向にのびる通路状部分と平行するように西へ6m行った位置にある。平面プランは楕円形基測を呈し、長径0.85m、短径0.6mを測る。深さは、検出面から0.3mで、床面は平坦である。土壙の時期は16世紀後半である。

#### ・出土遺物

出土遺物（第221図）のうち、278は青花皿である。体部中程で屈曲し、口縁部が外側に折れる。口縁部は波状を呈し、外面胴部下半に縞状文がはいる。口縁部内外面には青色に発色する文様が描かれる。16世紀後半のものか。279は瓦質土器甕で、口縁部は頸部から短く外傾気味に立ち上がる。16世紀代のものである。



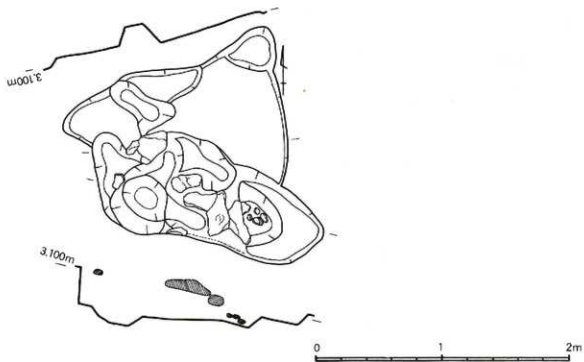
第220図 八坂中遺跡土壌6



第221図 八坂中遺跡土壌6出土土器

(7) 土壌7

土壌7（第222図）は、土壌6のすぐ北側に位置する。目立った遺物は確認されていない。



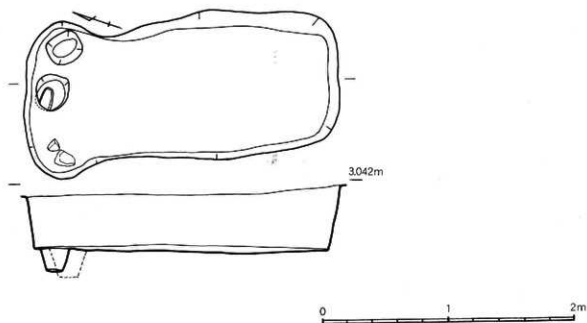
第222図 八坂中遺跡土壌7

### (8) 上 墳 8

上墳8(第223図)は、居館3の北西コーナーから約20m北に位置する。平面プランは長方形基調を呈するが、一部やや変形する。規模は長辺2.4m、短辺1.0mで、検出面からの深さは0.4~0.5mを測る。七墳の北側の端には、2本の柱穴状のものがみられる。土墳の形状から、土壇墓の可能性もある。時期的には16世紀に位置づけられる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第224、225図)のうち280は青磁碗で、上面からみた時に多角形を呈する。281は瓦質土器摺鉢である。色調はやや黄色がかかった灰白色で、内面の摺目は8本以上である。摺目の本数などから16世紀代と思われる。282は12世紀の土鍋である。283は北宋銭の熙寧元貨(初鑄1068年)である。



第223図 八坂中遺跡土墳 8



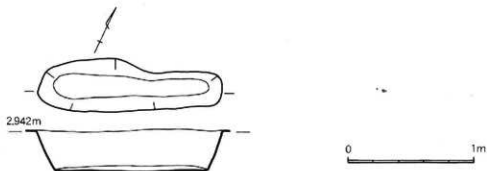
第224図 八坂中遺跡土墳 8 出土土器



第225図 八坂中遺跡土墳 8 出土銭貨

### (9) 土 壙 9

土壙9（第226図）は、土壙8の西約6mに位置する。やや変形気味の長槽円形を呈し、長径1.5m、最大幅0.4mを測る。目立った遺物は確認されなかった。



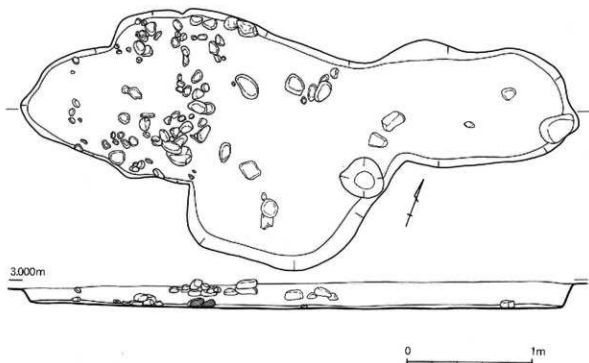
第226図 八坂中遺跡土壙9

### (10) 土 城10

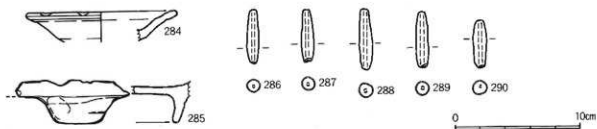
土城10（第227図）は、土壙8のすぐ北側に位置する。不定形を呈し、東西方向に長くのびる。最大長4.4m、最大幅1.7mで、深さは検出面から0.2mである。床面は平坦で、土城内の西側で小腰がまとまてみられた。土城の時期は16世紀代である。

#### ・出土遺物

出土遺物（第228図）のうち、284は青磁の礎花皿である。15世紀に主体を置くものである。185は瓦質土器火鉢で、板状の脚が付く。主に16世紀中頃までのものである。286～290は長さ4～5cmの土鏝である。



第227図 八坂中遺跡土城10



第228図 八坂中遺跡土壌10出土土器

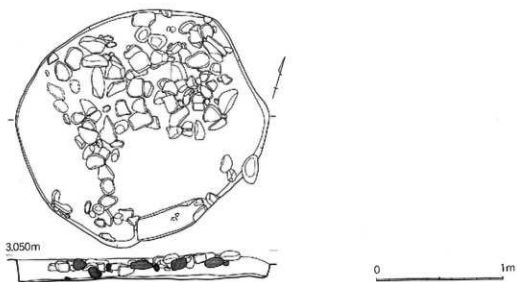
(11) 上 塚11

土塚11(第229図)は、上塚10の北側に位置する。このあたりは建物が復元されておらず、上塚がいくつかみられる。

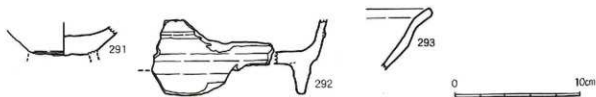
土塚は、やや歪むものの円形基調を呈する。径は1.8~2.0mで、深さは検出面から0.2mである。土塚内北側には、投げ込みと思われる礎が多量にみられる。時期は16世紀代である。

・出土遺物

出土遺物(第230図)のうち、291は青磁碗底部で、高台を欠く。外底面を除き、貫入のはいった灰緑色の釉がかかる。292は瓦貫土器火鉢で、板状の脚が付される。主に16世紀中頃までのものである。293は土鍋の口縁部である。外面口縁部付近は強いヨコナデがなされ、体部外面にはケズリが施される。



第229図 八坂中遺跡土塚11



第230図 八坂中遺跡土塚11出土土器

## (12) 土 壙12

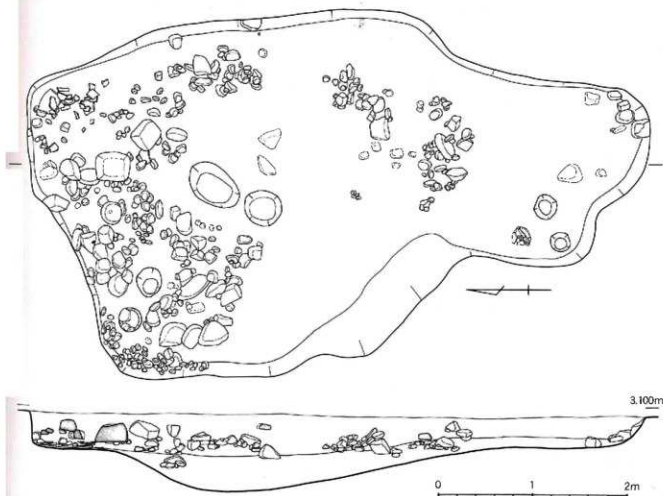
土壙12(第231図)は、居館1の北東コーナー部の北方20m余に位置する。本土壙の南西側には、建物23がみられる。土壙と居館の間には道路状の部分や建物群など遺構が数多く展開するが、土壙の北側には若干の土壙がみられるのみで建物はほとんどみられない。この土壙がある付近が、遺跡の北限を示しているものと思われる。

土壙は平面プラン不定形を呈する比較的大型のものである。南北に長く、長さ6.5m、最大幅3.6mを測る。深さは検出面から0.35~0.8mで、中央からやや北よりの部分が最も深くなっている。また、土壙内には若干の柱穴状のものもみられる。土壙からは0.05~0.35mの層が多く確認された。特に、土壙内の北側には顕著にみられ、北側から投げ込まれた状況が読み取れる。遺物については、土器、石製品、銭貨などが検出されたが、いずれも礫と共に投げ込みの状況である。その量も、土壙の規模からするとかなり少なめである。

本土壙の時期は15、16世紀に比定される。

### ・出土遺物

出土遺物のうち土器は、青磁、播鉢、土鍋、備前焼などがある(第232、233図)。294は青磁碗の口縁部である。短く緩やかに外反し、端部を丸くおさめる。时期的には15、16世紀の所産である。295は土師質の播鉢である。黄褐色を呈するもので、二次焼成を受けている。摺目は4本単位で、ヘラにより1本ずつ間隔をあけ施されているが、上部まで及ばずかなり雑な感じである。内底面に摺目はみられない。摺目の数だけで言えばさらに古いことも考えられるが、ここでは15、16世紀のものとしてとらえておく。296は土鍋である。12世紀初前後



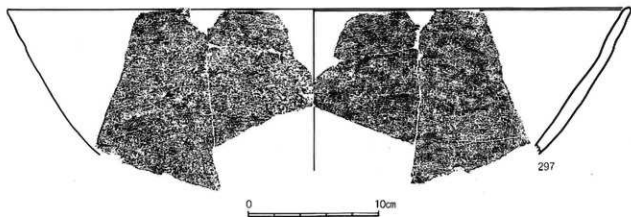
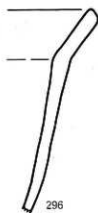
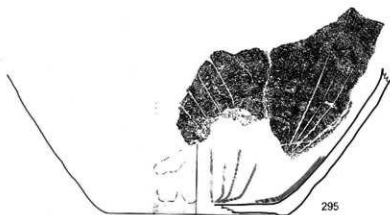
第231図 八坂中遺跡土壙12



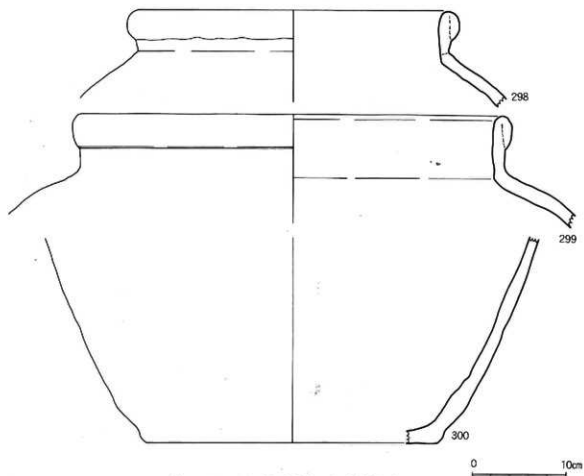
の時期か。297も土鍋である。丸底気味の底部から直線的に口縁にいたるもので、14世紀以降のものであろう。298、299は備前焼製の口縁部である。298は頸渾が短く直立し、口縁部の下縁は丸みをもつ。299は298に比べ、頸部がやや長くなり、口縁部の玉縁もやや扁平化する。これらは15世紀中頃以前に生産されたものであろう。300は備前焼大甕の底部で、底径31.0cmを測る。外面には縦方向の板ナデがみられ、内面は平滑に仕上げられるが一部にヘラ状工具のあたった痕がみられる。

301（第234図）は平面形が円形を呈するもので、上面と下面が平坦になる。側面はあまり丸みをもたず直立気味に立ち、斜めに切れ込むように上面にいたる。下面の中央には凹みがみられる。これは五輪塔水輪部であらう。

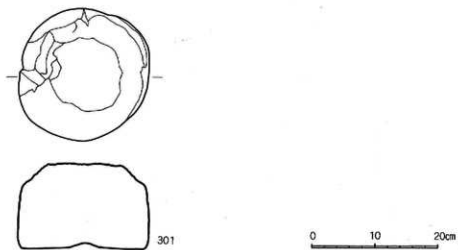
302（第235図）は錢貨で、一部を欠損する。北宋の苜蓿元寶と思われ、初鋳は1056年である。



第232図 八坂中遺跡土坑12出土土器(1)



第233圖 八坂中遺跡土壇12出土土器(2)



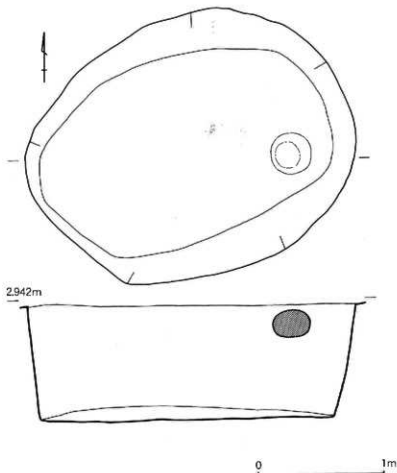
第234圖 八坂中遺跡土壇12出土石製品



第235図 八坂中遺跡土壌12出土錢貨

(13) 土 壌13

土壌13 (第236図) は、土壌12の北西に位置する。土壌の平面形は楕円形で、東西方向に長軸をもつ。規模は、長径2.6m、短径2.0mを測る。深さは検出面から0.9mで、床面は平坦である。土壌からは少数の土器片などが確認されたのみで、時期は16世紀代と思われる。



第236図 八坂中遺跡土壌13

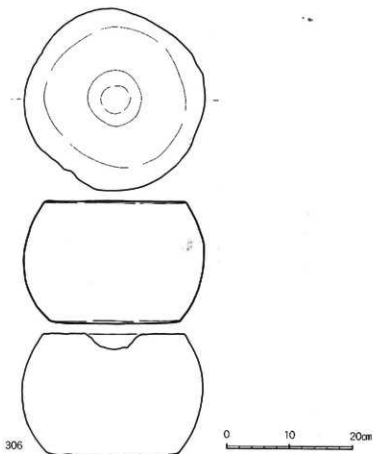


第237図 八坂中遺跡土壌13出土土器

・出土遺物

出土遺物には土器（237図）と石製品（第238図）がある。303は上師器輪の底部である。底面押し出しの後に高い高台が外周きに付される。时期的には11世紀代のものか、304は青磁碗の体部片である。外面には縦方向に縦線が施される。軸は薄い緑色を呈し、貫入がみられる。16世紀代のものである。305は防長系土鍋の口縁部である。

306は五輪塔に水輪部である。上面と下面に平坦面をもち、平坦面の径は上面の方がわずかに小さい。また、下面中央には凹みを有する。



第238図 八坂中遺跡土壌13出土石製品

(14) 上 墳 14

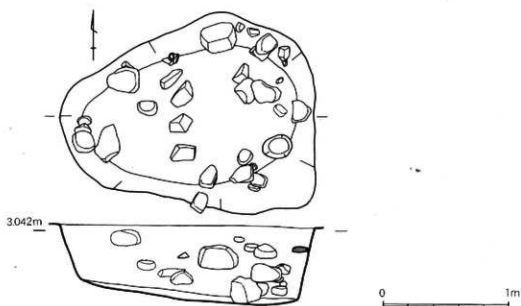
上墳14（第239図）は、居館1の北側20m余に位置する。土墳のすぐ南側には建物23がみられ、西側にも隣接するようにいくつかの土壇がある。

土壇は平面プランが不定形を呈するもので、東西方向に長い。規模は、長さ2.0m、最大幅1.55mを測る。深さは検出面から0.45～0.6mで、西から東に向かい傾斜する。土壇内からは0.1～0.3mの礎が確認されたが、土器などの遺物は少量であった。

本土壇の時期は16世紀代と考えられる。

・出土遺物

307（第240図）は上師質土器坏である。底部の資料で、復元底径5.8cmを測る。底径に比し器高の高いもので、田原氏の影響下にあった16世紀の国東半島地域でよくみられるものである。



第239図 八坂中遺跡土壙14

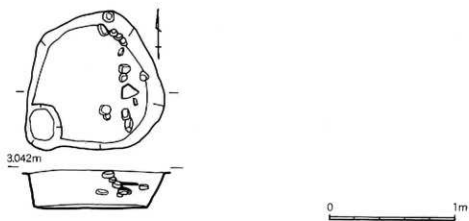


第240図 八坂中遺跡土壙14出土土器

(15) 土壙15

土壙15（第241図）は、土壙14の南側に位置する。土壙は円形基調を呈し、径1.1mを測る。深さは検出面から0.3mで、床面は平坦である。土壙内からは小礫と若干の土器片が出土した。

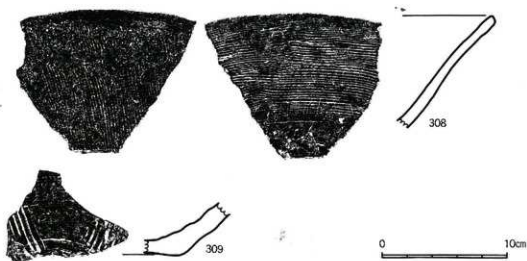
土壙の時期は、15、16世紀代と思われる。



第241図 八坂中遺跡土壙15

・出土遺物

出土遺物（第242図）のうち、308は上鍋である。丸底気味の底部から体部が立ち上がり、そのまま口縁にいたるものである。外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメがみられる。14世紀以降のものか。309は備前焼鉢鉢、内面の摺目は7本以上である。15、16世紀代のものであろう。



第242図 八坂中遺跡土坑15出土土器

(16) 土 坑16

土坑16（第243図）は、居館1の北側20m余に位置する。本土坑の東南側には土坑14、土坑15、土坑40があり、北側から西側にかけては土坑1、土坑2、土坑3などがみられる。また、土坑の南側2mには建物23が南北方向に主軸をもちみられる。土坑16も南北方向に主軸をもち、建物23の西側桁行の延長上が土坑16の西側の辺にほぼあたり、その関連が注目される。

土坑は平面プラン長方形を呈するが、東側の辺については壁の上部が崩落しており、検出時の遺構ラインは丸みをおびていた。主軸を南北方向にもち、規模は長辺3.5m、短辺1.8mを測る。深さは検出面から0.55～0.9mで、壁はほぼ垂直気味に立つ。床面は平坦であるが、北側の床が0.1mほど高く、中央やや北よりで段がつく。床面には柱穴状のものが3本みられるが、どのような性格のものかは不明である。全体に整然とした印象を受け、他にみられる不定形の上層などは性格を異にする可能性が考えられる。場合によっては、上層施設などをもつ倉庫的なものであるかもしれない。

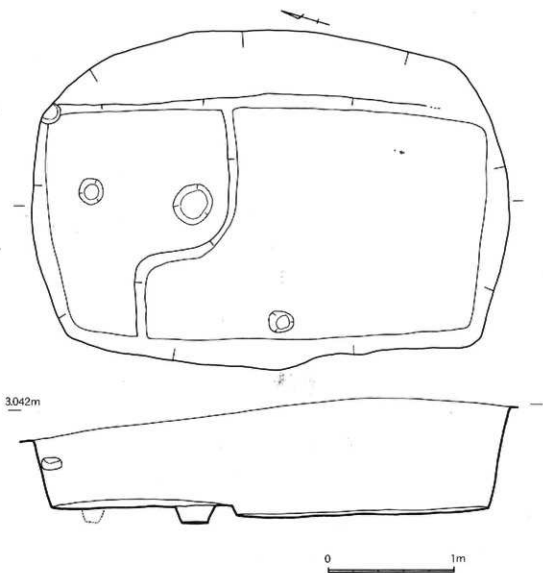
時期は、16世紀代と思われる。

・出土遺物

土坑からは、鉄製品（第244図）、銭貨（第245図）、石製品（第246図）、土器（第247図）などが検出された。

310は鉄製の釘である。完形品と思われ、全長9.5cmを測る。先端部をのぞき錆が著しいが、頭部は折り曲げで方形を呈するものと推定される。

311～313は銭貨である。311は開元通寶である。開元通寶は唐の621年、845年、南唐の960年など、幅広



第243図 八坂中遺跡土坑16

く製造されている。312は一部が欠け、字が不鮮明であるが、312と同じ開元通寶と思われる。313は淳熙元寶である。これは南宋の1174年が初鑄であるが、背面に真書で「十」、「一」の文字がいられていることから、淳熙11年（1184）の鑄造と考えられる。

314は換白の下臼である。中央には芯棒の穴が貫通する。この中央の穴から主溝が6本放射状にのび、主溝からは右上がりの副溝が3～7本付される。溝の配置に整然さを欠き、加えて副溝の本数もばらつきがあるなど、やや雑な感を受ける。

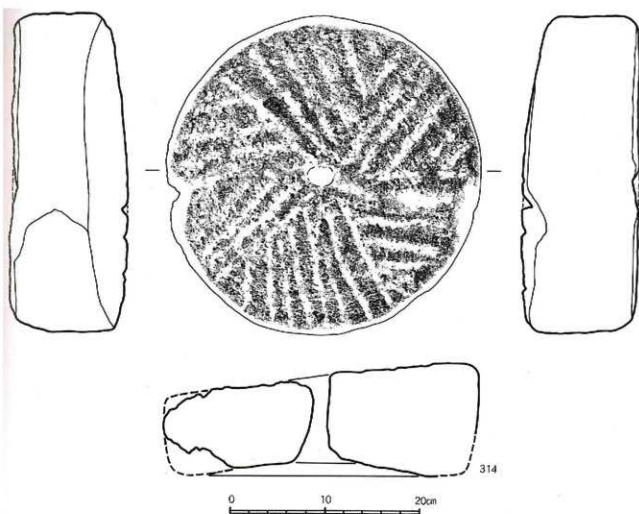
315は土師質土器小皿である。復元口径9.0cmを測るもので、体部が直立気味に立ち、口縁部がわずかに外反する。形態的にみて15世紀のものであろう。316は東播系の須恵器こね鉢である。口縁部の玉縁がほとんど発達しておらず、12世紀以前のものか。317は須恵器甕である。外面には断面三角の突帯が付され、平行タタキが残る。318は備前焼壺である。口縁部が短くくの字状に立ち上がるもので、肩部に櫛播波状文が施される。16世紀代であろう。319は備前焼播鉢で摺目は9本である。16世紀に位置づけられる。



第244圖 八坂中遺跡土壤16出土鉄製品

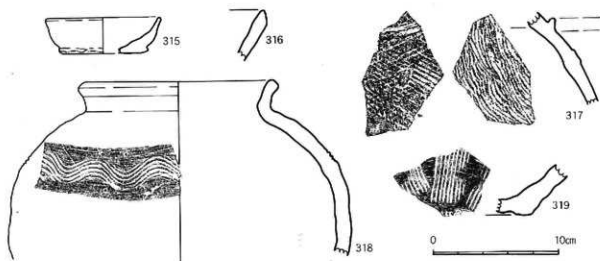


第245圖 八坂中遺跡土壤16出土鉄貨



第246圖 八坂中遺跡土壤16出土石製品





第247図 八坂中遺跡土壙16出土土器

### (17) 土壙17

土壙17（第248図）は、土壙16の北側に隣接した位置にある。平面プランは半円形を呈し、長径1.1m、短径0.9mの規模をもつ。深さは浅く0.05mほどで、柱穴と重複する。目立った遺物は検出されなかった。



第248図 八坂中遺跡土壙17

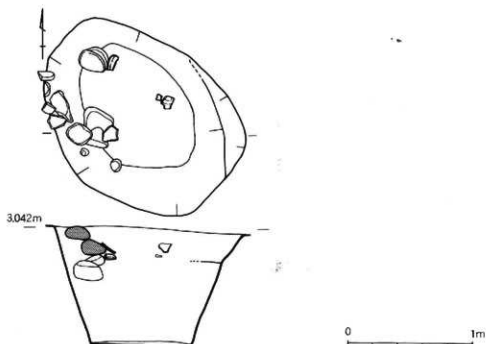
### (18) 土壙18

土壙18（第249図）は、厩館3の西北隅から20m余北側にいった位置にある。土壙の北側には土壙157があり、南側には建物25、建物26が展開する。

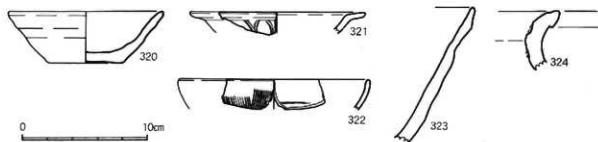
土壙は平面プラン楕円形を呈する。南東-北西に主軸をもつもので、長径1.65m、短径1.3mを測る。深さは検出面から0.9mで、上部において流れ込みの礫を確認した。遺物については、土器片が少数出土したのみである。時期的には16世紀に位置づけられる。

・出土遺物

出土遺物（第250図）のうち、320は上師質土器環である。口径に比し器高の高いもので、16世紀代に関東半島地域でみられる。321は青磁皿である。口縁が外方に折れ、外面に蓮弁文がはいる。14世紀のものか、322は阿安窯系青磁碗である。体部外面に掛指がみられる。12世紀後半のものである。323はこね鉢と思われるもので、上師質にちかい焼きである。324は東播系須恵器製の口縁である。



第249図 八坂中遺跡土坑18



第250図 八坂中遺跡土坑18出土土器

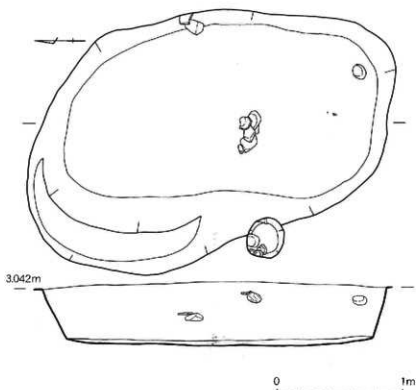
(19) 土 塚19

土塚19（第251図）は、居館3の北約15mに位置する。床面をみると、本来的には長方形基調を呈した可能性があるが、検出面では北西部が大きく膨らむ。規模は長さ2.75m、最大幅1.95mで、深さは検出面から0.45mを測る。土塚内から検出された遺物は少なく、土器片がわずかに確認されたのみである。時期は16世紀に位置づけられる。

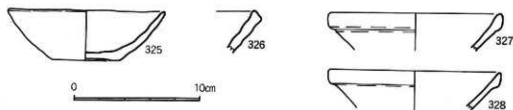
・出土遺物

出土遺物（第252図）のうち、325は土師質土器環である。口径に比し器高の高いタイプで、16世紀に位置づ

けられる。326は束播系の須恵器こね鉢である。口縁端部の発達がまったく認められず、古相に属するものである。327、328は、口縁部が土縁をなす白磁碗である。12世紀前半に主体を置くものである。



第251図 八坂中遺跡土壌19



第252図 八坂中遺跡土壌19出土土器

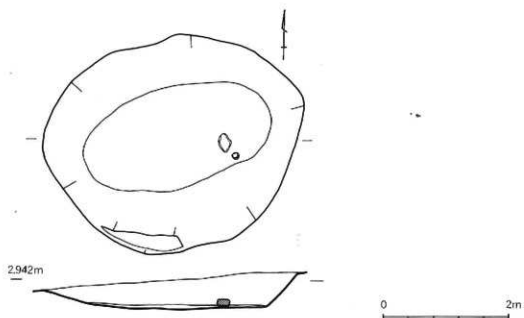
## (20) 上 墳20

上墳20（第253図）は、居館3の北側約10mに位置する。南側に隣接して土塚3がみられる。土塚は平面でラン楕円形を呈し、おおむね東西に主軸をもつ。その規模は長径4.2m、短径3.3mを測り、深さは検出面から0.3～0.5mである。床面は平坦であるが、床面には目立った施設はない。また、遺物も遺構の規模に比しては少なく、破片資料のみである。16世紀に位置づけられるものである。

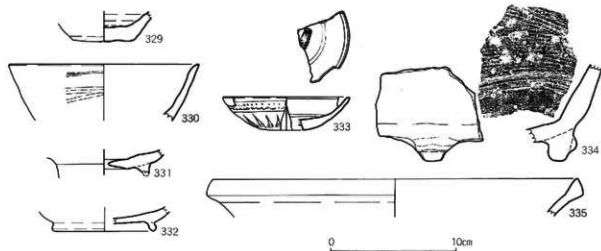
### ・出土遺物

出土遺物（第254図）のうち、329は土師質土器環である。底径5.1cmとやや小型であるが、器高が高くなるタイプであろう。底部は糸切りで、内面には螺旋状の口ク口痕が残る。16世紀代のものか。330は土師器碗である。外面にヘラミガキが残る。331は土師器碗の底部である。底部中央に穿孔がみられる。332は内黒土器碗である。断面方形で、端部が丸みをもつ高台が付く。330～332は12世紀前半を前後する時期のものであろう。333

は青花皿である。鉢筒底を呈するもので、外面に蕉風葉文がみられる。16世紀代のものである。234は瓦質土器火鉢の底部で、内面にハケ状のものがみられる。16世紀代。235は東播系須志器こね鉢である。



第253図 八坂中遺跡土壇20



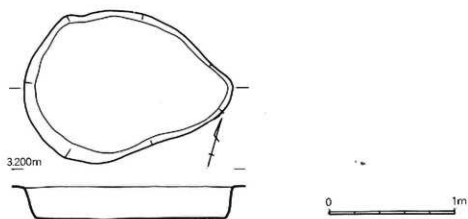
第254図 八坂中遺跡土壇20出土土器

## (21) 土 城21

土城21(第255図)は、居館3の北側約10mに位置する。居館3、居館1の北側には、居館の溝に沿うように東西方向の遺構空白部がある。この空白部は道と考えられ、土城21はこの道に沿うようにみられる。

土城は楕円形基調を呈するもので、長径1.65m、短径1.2mの規模を測る。深さは検出面から0.25mで、床面は平坦である。土城内からは目立った遺物は確認されなかった。

遺物がないので明確な時期は不明だが、居館や道との関係から16世紀代である可能性が高い。



第255図 八坂中遺跡土壌21

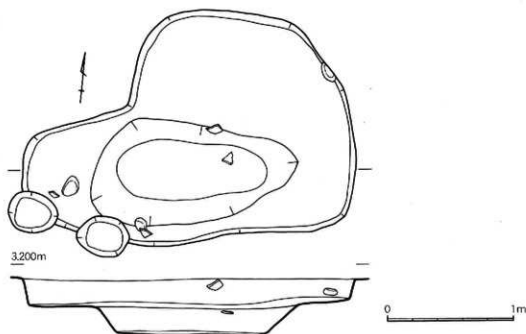
(22) 土 塙22

土塙22（第256図）は、居館3の約10m北側に位置する。土塙21と同じように、居館3の北側を東西に続く道に沿うように位置する。

土塙は不定形を呈する。規模は長さ2.6m、幅1.8mである。検出面から0.15～0.2mで床面に達するが、中央からやや南に寄った位置で、楕円形にもう一段下がる。最深部までは、検出面から0.4mである。時期は、古相の遺物を含むものの、図化不能の資料まで考慮にいれると16世紀代に位置づけられる。

・出土遺物

出土遺物（第257図）のうち、336は土師質土器小皿である。337は白磁碗の底部である。



第256図 八坂中遺跡土塙22



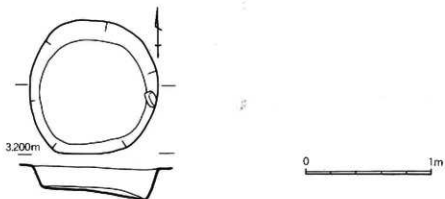
第257図 八坂中遺跡土壇22出土土器

### (23) 上 壙23

七壙23（第258図）は、上壙22の北西に隣接する。土壙の平面プランは円形で、径約1.0mの規模を有する。深さは検出面から0.15～0.25mである。出土遺物は少なく、わずかな土器片が確認されたのみである。

#### ・出土遺物

出土遺物（第259図）のうち338は土鍋である。口縁部は体部より外方に折れ、わずかに内湾気味に端部にいたる。12世紀初前後のものであろう。



第258図 八坂中遺跡土壇23



第259図 八坂中遺跡土壇23出土土器

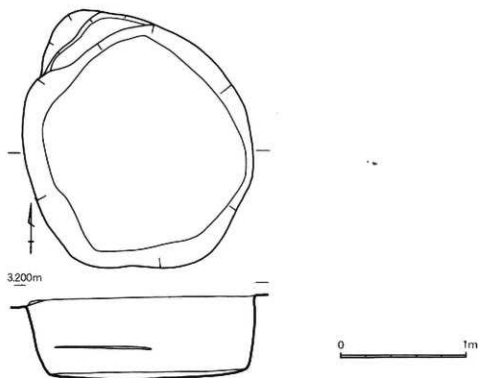
### (24) 土 壙24

上壙26（第260図）は、居館3の北東隅付近から北へ約16mの位置にある。位置的に建物35、建物37と重複する。また、土壙のすぐ南側には上壙墓5、上壙墓6がみられる。さらに、東に約10mいくと溝9が東西に走っている。

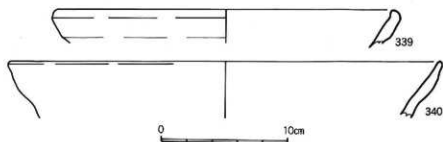
土壙は円形基調を呈するもので、径1.8～1.9mを測る。深さは検出面から0.6mで、床面は平坦である。土壙内からの遺物は少なく、土器片がわずかに検出されたのみである。15、16世紀代の所産か。

#### ・出土遺物

出土遺物（第261図）のうち、339は防長系土鍋の口縁部である。体部から口縁がくの字状に折れるもので、端部は上方につまみ上げられる。16世紀代のものか。340も土鍋と思われる。



第260図 八坂中遺跡土壇24

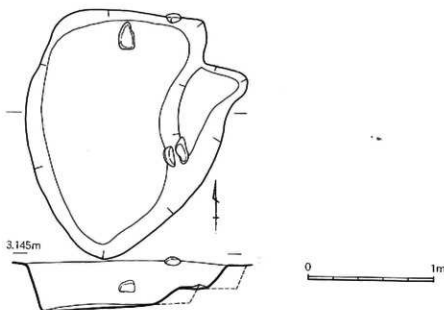


第261図 八坂中遺跡土壇24出土土器

## (25) 土壇25

土壇25(第262図)は居館3の北方にあり、土壇24の北西に位置する。居館3の北方は、居館の溝に沿った遺構の空白部が幅10m程にわたり東西にのびる。この遺構空白部は、居館3の北東コーナーと溝9の間が3~4mにわたり切れる部分につながり、居館3と居館1の北側に抜ける道と考えられる。この道状の部分の北側には、道に沿うように建物や土壇が並ぶ。建物は梁を道に面したかたちで建てられており、明確な区画はないが道に沿っていくつかの屋敷群に分けられるものと思われる。これらの建物や土壇は、おおむね道から10~15mまでみられ、それより北側は遺構が極端に少なくなることから、遺跡の北限を示しているものと理解される。

土壇25は南北に長軸をもつ、不定形気味のものである。規模は長さ1.95m、最大幅1.7mを測る。東側がやや飛び出し階段状を呈するが、深さは検出面から0.35~0.4mで、床面は平坦である。土壇内から目立った出土遺物は確認されず、時期は不明である。



第262図 八坂中遺跡土壙25

## (26) 十 壙26

土壙26(第263図)は、居館3を囲む溝が切れた北西隅部の約10m北に位置する。土壙は、居館1と居館3の北側を東西方向にのびる道に面しており、遺構配置からみても居館及び遺と同時代の遺構である可能性が高い。また、土壙26は建物25と重複する位置にあるが、建物25の南東隅柱穴を切っており、建物25に後出することが分かる。

土壙の平面プランは円形基調を早するもので、径3.2~3.4mを測る。深さは検出面から0.3~0.5mで、中央にいくにつれ深くなる。また、床面の中央東寄りには円形の土壙がみられる。土壙は径1.2mで、床面からの深さは0.3~0.4mである。土壙内には、東から北にかけての端を除き、0.1~0.4mの礫が多量に出土した。礫はいずれも理上の中屑から検出されており、土壙が半ば埋まった状態で一括廃棄されたものと考えられる。

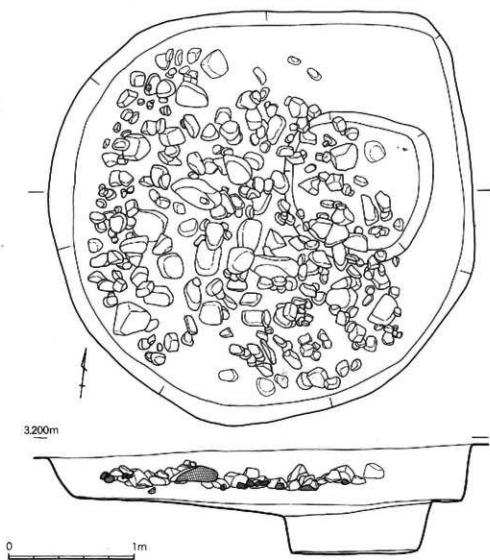
時期は16世紀代に位置づけられる。

### ・出土遺物

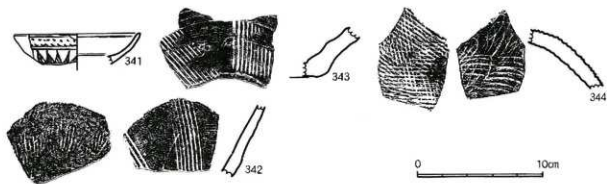
土壙からは、土器(第264図)と石製品(第265図)が出土した。341は青花皿である。鉢筒底を早するものと思われ、体外外面には蕉風葉文がみられる。文様の発色は薄い青色で、やや黄色味をおびた釉がかかる。16世紀代のものか。342は瓦質の摺鉢である。黄色味がかった灰白色を早するもので、胎土に石英を含む。外面にはタタキ状の痕跡がみられる。また、内面の摺目は7本である。産地などは不明だが、摺目の数から15、16世紀のものと思われる。343は偏前焼鉢である。内面の摺目は10本以上で、16世紀のものであろう。344は須恵器製の破片である。外面には平行タタキが、内面には同心円状の当て具痕が残る。タタキの状況から東播磨のものである可能性が高い。

345は椀の白上戸である。天場のくぼみは、供給口にむかい深くなっているようで、現状で約6cmの深さを測る。下面は中央に芯棒受けがあり、ふくみは約0.5cmと比較的浅いものとなっている。破片資料であるが、主溝を6本もつ6分割のものであると推定される。副溝は、右上がりのものが5ないしは6本付される。

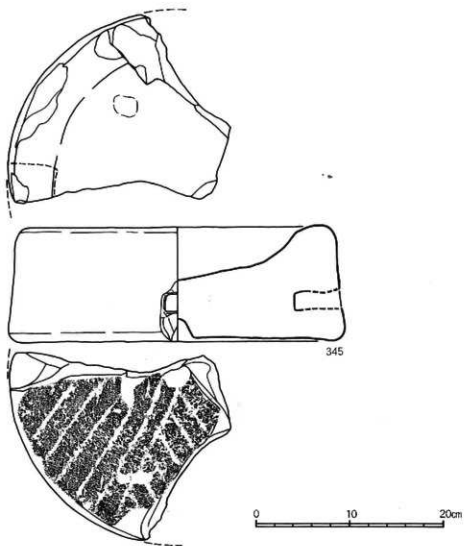




第263圖 八坂中遺跡土坑26



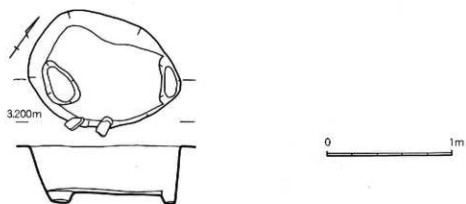
第264圖 八坂中遺跡土坑26出土土器



第265図 八坂中遺跡土壌26出土石製品

(27) 土 壙27

土壙27 (第266図) は、居館3の北西コーナーの北側約19mに位置する。上壙は、東西方向に長軸をもつ楕



第266図 八坂中遺跡土壙27

円形基調のものである。規模は長径1.2m、短径0.9mを測る。深さは検出面から0.4mで、床面は平坦である。床面には柱穴状のものが2本みられる。

・出土遺物

346 (第267図) は白磁碗体部の破片で、外面下部は露胎である。玉縁の口縁を有するもので、12世紀の所産。



第267図 八坂中遺跡土壙27出土土器

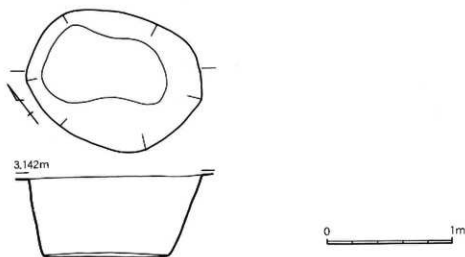
(28) 上 壙28

土壙28 (第268図) は、居館3の22m北側に位置する。土壙の南側には、居館3の北側を東西方向に走る道に沿い多くの建物や土壙がみられる。土壙28は、これら遺構群の最も北側に位置し、これより北には遺構がほとんどみられない。

土壙の平面プランは楕円形を呈し、ほぼ南北方向に主軸をもつ。その規模は、長径1.4m、短径1.05mを測る。深さは検出面から0.6mで、壁は直立気味に立ち、床面は平坦である。土壙内からの遺物は少ないが、それらから14世紀以降のものと考えられる。

・出土遺物

347 (第269図) は、土鍾の破片である。



第268図 八坂中遺跡土壙28



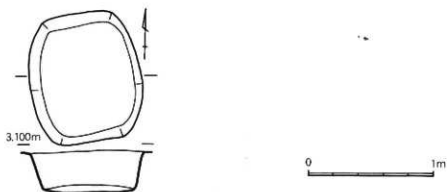
第269図 八坂中遺跡土壙28出土土器

### (29) 土 壙29

土壙29(第270図)は、居館3の北側約15mに位置する。位置的に、建物29及び建物30と重複する。土壙は方形基調を呈し、長さ1.0m、幅0.9mを呈する。深さは、検出面から0.3mである。

#### ・出土遺物

348(第271図)は土鍋で、口縁部は体部から外方に折れる。12世紀代のものか。



第270図 八坂中遺跡土壙29



第271図 八坂中遺跡土壙29出土土器

### (30) 土 壙30

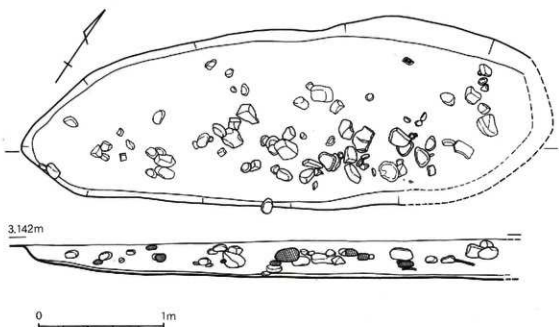
土壙30(第272図)は、居館3の北東コーナー部の約8m北側に位置する。土壙45と重複するが、前後関係は不明である。土壙は長楕円形を呈し、長径4.2m、短径1.4mを測る。土壙内からは、0.1~0.2mの礫が多数検出されたが、土器はわずかししか確認されなかった。

#### ・出土遺物

349(第272図)は、青花碗である。蓮子碗タイプで、外面には蕉風葉文がみられる。文様の発色は濃い青色である。16世紀前半までを主体とするものである。



第272図 八坂中遺跡土壙30出土土器



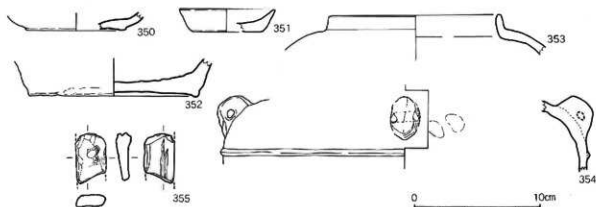
第273図 八坂中遺跡土壌30

(31) 上 墳31

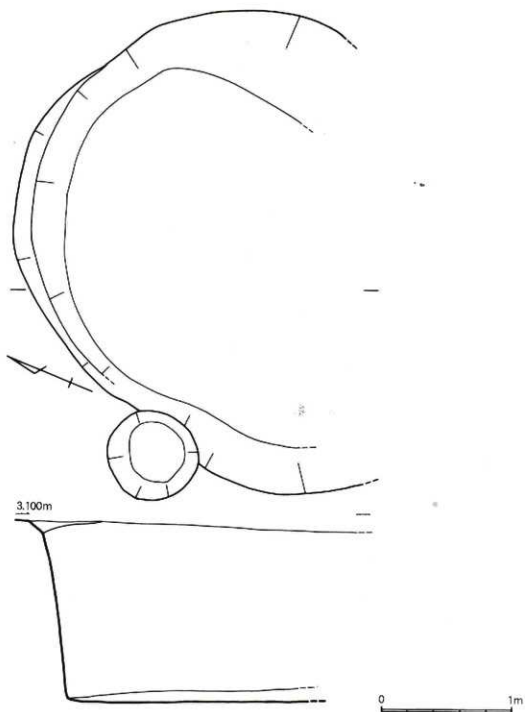
上墳31(第275図)は、居館3の北辺中央付近に、溝に接するようにみられる。上墳と居館3の間に攪乱があるため、両者の関係は明確にできない。土墳は、南側が攪乱などのため不明であるが、精円形基調をなすものと思われる。規模は推定で、長径4m、短径3mを測るものと考えられる。深さは検出面から1.4mとかなり深く、壁もほぼ直立する。時期は16世紀に位置づけられるであろう。

・出土遺物

出土遺物(第274図)のうち、350は土師質土器杯である。底部から体部が丸みをもち立ち上がるもので、復元口径は7.8cmを測る。13~14世紀のものか。351は土師質土器小皿である。復元口径9.4cmで、体部が直立気味に立ち上がる。口縁端部は尖り気味である。14~15世紀のものか。352は土師質の器種不明品である。底部には糸切り痕が残る。353、354は茶釜である。同一個体の可能性をもつもので、15~16世紀のものか。355は砥石で、片面には溝状の研磨痕がみられる。



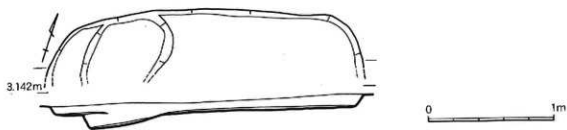
第274図 八坂中遺跡土墳31出土遺物



第275図 八坂中遺跡土壌31

(32) 土 壌32

土壌32(第276図)も、居館3の北辺の溝に接するようみられる。しかし、土壌と溝の間に擾乱がみられ、両者の関係は不明である。土壌は南半分が明確ではないが、現存長2.6mを測る。



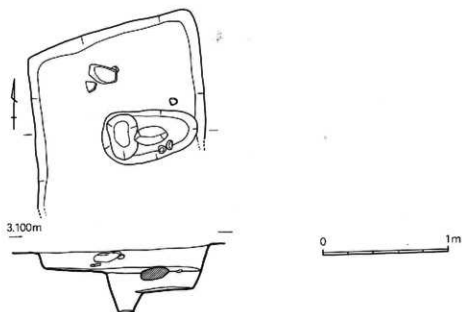
第276図 八坂中遺跡土塚32

(33) 土塚33

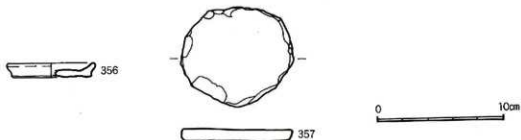
土塚33（第277図）は、一辺1.4mの方形を呈する。遺物は少ないが、15世紀以後の所産と思われる。

・出土遺物

出土遺物のうち（第278図）、356は上師質土器小皿である。復元口径は6.8cmで、14世紀代のものか。357は瓦質土器の破片を打ち欠き円盤状にしたものである。



第277図 八坂中遺跡土塚33



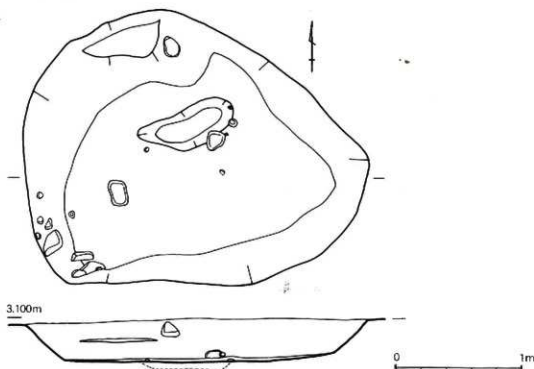
第278図 八坂中遺跡土塚33出土土器

### (34) 土 壙34

土壙34（第279図）は、厩館3の北東隅北側に溝と接するようにみられる。平面プラン三角形を呈し、長さ2.7m、幅2.1mの規模をもつ。土壙からの遺物は少ないが、16世紀代の所産と考えられる。

#### ・出土遺物

358（第280図）は土師貫十器坪である。器高の高いタイプと思われ、16世紀代のものである。



第279図 八坂中遺跡土壙34



第280図 八坂中遺跡土壙34出土土器

### (35) 土 壙35

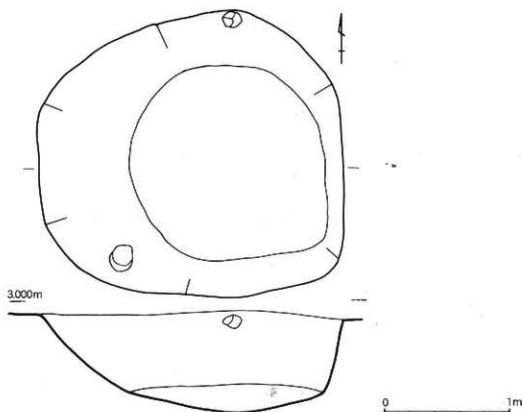
土壙35（第281図）は、厩館1の北約35mに位置する。本土壙の北側の調査区外に試掘調査トレンチを設定したが、遺構はまったく確認されておらず、土壙35が遺跡の北限にあたるものと理解される。

土壙は円形基調を呈するもので、径1.2～1.4mを測る。深さは検出面から0.6～0.8mで、東側の壁のみ緩やかに立ち上がる。土壙内からの遺物は少なく、わずかな土器片が検出されたのみである。本遺構は、14世紀代のものか。

#### ・出土遺物

359、360（第282図）とも瓦器椀である。359は口縁部で、内湾気味の体部が口縁にいたる。内外面ともヘラミガキはみられない。360は糸切りの平底である。これらは東国東型瓦器椀で、13世紀後半～14世紀初のものである。





第281図 八坂中遺跡土坑35



第282図 八坂中遺跡土坑35出土土器

### (36) 土坑36

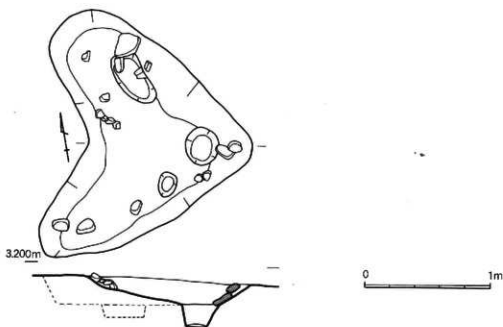
土坑36（第284図）は、居館3の北側17mに位置する。位置的に建物29と重複する。土坑の平面プランは三角形状を呈するもので、西側の辺が凹む。規模は一辺約1mで、深さは検出面から0.2mを測る。床面には柱穴状のものが3本みられる。検出された土器片から14世紀以降の所産と考えられる。

#### ・出土遺物

出土遺物のうち、361（第283図）は器形の復元できたものである。土師器楕で、12世紀代のものか。



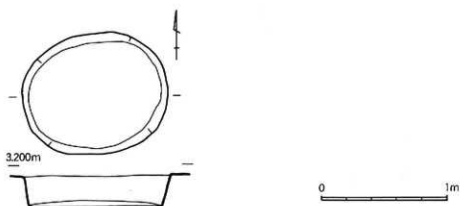
第283図 八坂中遺跡土坑36出土土器



第284図 八坂中遺跡土壙36

(37) 土壙37

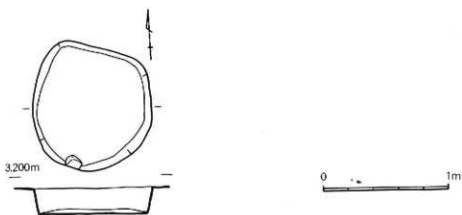
土壙37（第285図）は、居館3の北側約20mに位置する。東側に隣接して土壙38がある。平面プランは楕円形で、長径1.2m、短径0.9m、深さ0.25mを測る。時期は不明である。



第285図 八坂中遺跡土壙37

(38) 土壙38

土壙38（第286図）も居館3の約20m北側に位置し、土壙37と東西に並ぶようにみられる。平面プランは円形基調を呈し、径約1.0m、深さ0.2mを測る。時期は不明である。



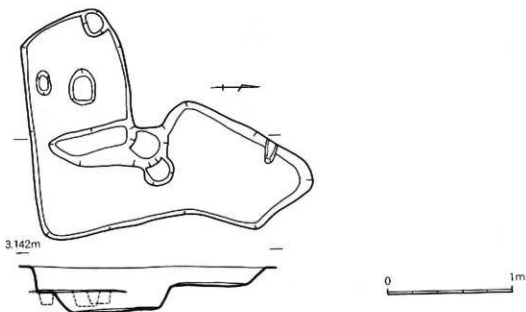
第286図 八坂中遺跡土塋38

(39) 七 塋39

七塋39（第287図）は、居館3の北側18mに位置する。位置的に建物31、建物32と重複する。上層は複数  
が切り合っている可能性をもつが、平面プランL字形を呈する。南北2.2m、東西1.7mの規模を測る。上層内か  
らの遺物は少ないが、器形を復元できなかった遺物に15、16世紀代のものを含む。

・出土遺物

器形が復元できた遺物（第288図）のうち、362は土師質土器小皿である。底部はヘラ切りか、363は内黒土  
器碗である。高台が外方に突き付される。11世紀代のものか。



第287図 八坂中遺跡土塋39



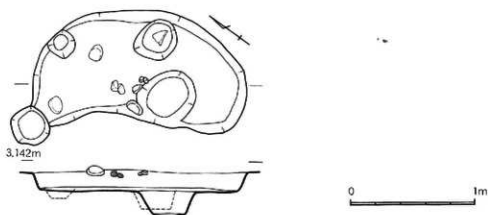
第288図 八坂中遺跡土塋39出土土器

#### (40) 土 塙40

土塙40（第289図）は、厩館1の北方約20mに位置する。位置的に建物23と重複する。土塙はやや変形気味であるが、南北方向に長軸を有する楕円形基調を呈する。規模は長辺1.7m、短辺0.9mで、深さは検出面から0.15mを測る。土塙内から検出された遺物は少量であるが、16世紀に位置づけられる。

##### ・出土遺物

出土遺物（第290図）のうち、364は13世紀後半～14世紀初の瓦器鉢、365は16世紀代の瓦質土器火鉢である。



第289図 八坂中遺跡土塙40



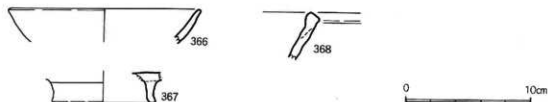
第290図 八坂中遺跡土塙40出土土器

#### (41) 土 塙41

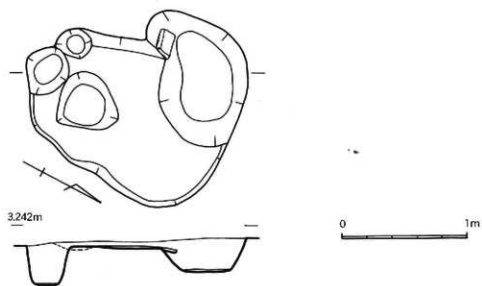
土塙41（第291図）は、厩館3の北方18mに位置する。位置的に建物31、建物32と重複する。土塙はいくつかの柱穴と切り合うが、本来的には台形形状を呈していたものと思われる。南北に長軸をもつもので、長さ1.6m、最大幅1.3mを測る。12世紀代に位置づけられる可能性をもつ。

##### ・出土遺物

出土遺物（第291図）のうち、366は土師器鉢である。11、12世紀のものか。367も土師器鉢で、高い高台が付される。11世紀代のものか。368は東播系の須恵器こね鉢である。12世紀代のものか。



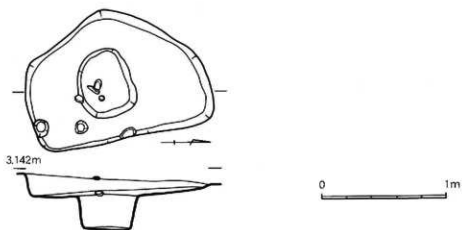
第291図 八坂中遺跡土塙41出土土器



第292図 八坂中遺跡土塙41

(42) 土 塙42

土塙42(第293図)は、居館3の北方18mに位置する。建物34、建物35、建物37と溝9の間にあたる。土塙の平面形は五角形状を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は長さ1.45、幅1.1mを測り、深さは検出面から0.05～0.2mである。床面は平坦であるが、中央に柱穴がみられる。図示できないが、遺物から14世紀以降である。

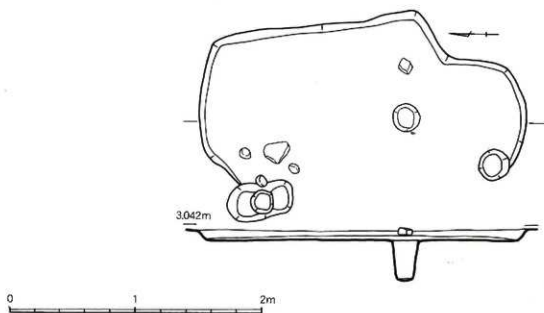


第293図 八坂中遺跡A地区土塙42

(43) 土 塙43

土塙43(第294図)は、居館3の北西コーナーから北に15mの位置にある。土塙は南北に長軸をもつ不定形のもので、西側は削平のため遺構ラインが明確ではない。規模は長さ2.6m、幅1.3mで、深さは検出面から0.1

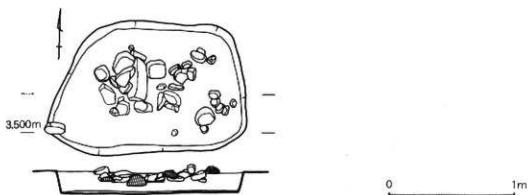
である。遺物は少なく、時期は明らかにできない。



第294図 八坂中遺跡土壌43

#### (44) 土 塙44

土塙44（第295図）は、溝9の東方10m余に位置する。土塙の西側には、接するように建物77がある。土塙は東西に長軸をもつ方形基調の平面形態をなす。規模は長さ1.6m、幅1.0mを測り、深さは検出面から0.15mである。埋上上層には0.1～0.3mの礫がまとまってみられる。時期は不明である。



第295図 八坂中遺跡土塙44

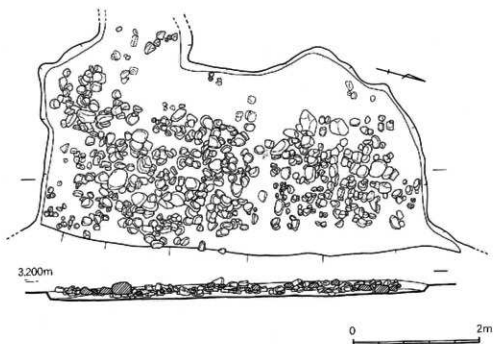
#### (45) 土 塙45

土塙45（第296図）は、溝9の西側に重複してみられ、溝9により切られる。土塙は居館3の北側を東西に走る道に面した状況であることから、居館3や道と同様な時期であったことが考えられる。土塙の全容は溝9に

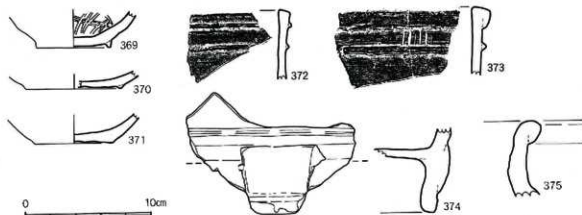
切られているため不明だが、南北約6m、東西3m以上の規模をもつ。深さは検出面から0.1mと比較的浅く、土壌内には0.1~0.4mの層が多量に廃棄されていた。土壌の時期は、出土遺物から16世紀後半に位置づけられる。

・出土遺物

出土遺物（第297図）のうち、369~371は瓦器椀である。369は非押し出しの外底面に断面三角形の高台が付されるもので、内面にヘラミガキが施される。東国東型瓦器椀の12世紀のものか。370は甕前型の瓦器椀で、14世紀のものである。371は糸切りの平底底部である。13世紀後半~14世紀初の東国東型瓦器椀である。372~374は火鉢である。372は口縁部外面が肥厚しない。16世紀前半までに主体を置くものである。373は口縁部外面を肥厚させる。16世紀後半以降の器形である。374は脚である。切れ込みをもつ三角状の板に方形の粘土を貼り付け厚みをもたせる。16世紀前半までに主体を置く。375は備前焼壺で15、16世紀のもの。



第296図 八坂中遺跡土壌45



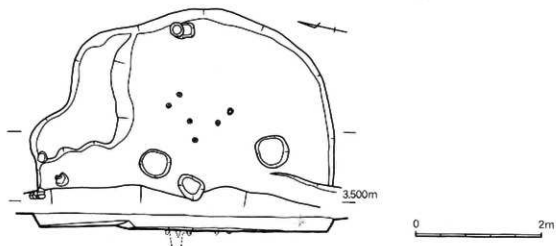
第297図 八坂中遺跡土壌45出土土器

#### (46) 土 壙46

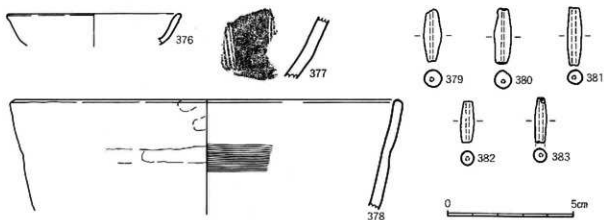
土壙46（第298図）は、居館1内部にある。中央からやや南に寄った位置で、西側の溝と重複している。その規模は南北4.8m、東西3m以上で、深さは検出面から0.2mである。出土遺物から、15、16世紀の所産と考えられる。

##### ・出土遺物

出土遺物（第299図）のうち、376は青磁碗か。377は瓦質土器火鉢である。摺目は4本以上である。15、16世紀のものか。378は上鍋と思われるもので、体部は直立気味である。379～383は土錘である。長さ3.2～4.5cmのものがある。



第298図 八坂中遺跡土壙46



第299図 八坂中遺跡土壙46出土土器

#### (47) 土 壙47

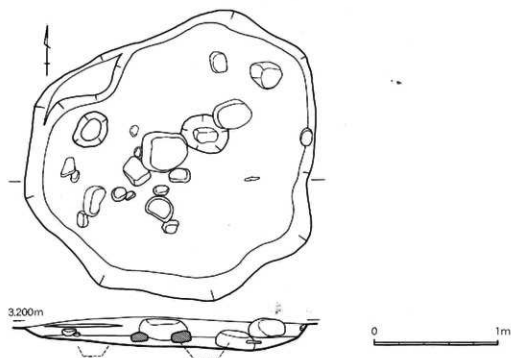
土壙47（第300図）は、居館1内部の中央からやや西に寄った位置にある。土壙は不整形形を呈するもので、径3.2～3.3mを測る。深さは0.1～0.2mで、土壙内には0.1～0.4mの礫がみられる。

##### ・出土遺物

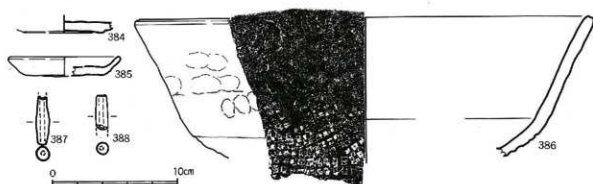
出土遺物（第301図）のうち、384と385は上師質土器小皿である。384は糸切りの底部で、体部の立ち上が



りは緩やかである。385は復元口径8.6cmで、底部はヘラ切りか。386は上鍋である。体部下半から底部にかけて、格子目タキが施される。14世紀以降のものである。387、388は上鉢であるが、いずれも一部を欠く。



第300図 八坂中遺跡土塙47



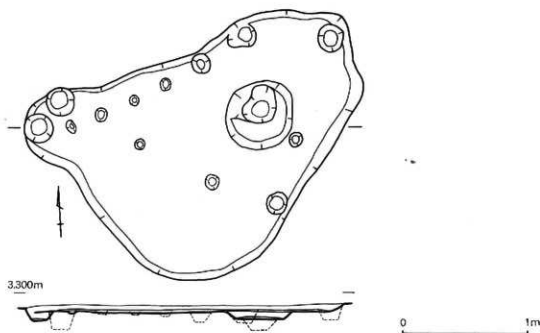
第301図 八坂中遺跡土塙47出土土器

#### (48) 上 城48

上城48(第302図)は、居館1内部のほぼ中央に位置する。不定形を呈し、長さ2.5m、最大幅2.2mを測る。床面までの深さは0.05mと浅く、床面には大小の柱穴がみられる。出土遺物は小破片が少量だけ検出されただけであるが、遺物から14世紀に位置づけられる。

##### ・出土遺物

389(第303図)は、挽きが悪く土師質にちかい瓦器椀である。13世紀後半～14世紀初のものである。



第302図 八坂中遺跡土壇48



第303図 八坂中遺跡土壇48出土土器

#### (49) 土壇49

土壇49（第304図）は、忌籠1内部の中央やや南寄りに位置する。建物4と位置的に重複しており、建物4を切る。

土壇は大型で、不定形を呈する。東西方向に長く、その規模は長さ約8m、幅5.8mである。床面は東から西に向かい階段状に下がり、最深部で検出面から0.4mを測る。土壇内からの出土遺物はいずれも小破片で、散発的な検出状況であった。土壇規模に比し、遺物の出土量は極めて少ない。

本土壇の性格については、土壇自体に整然さを欠きかなりラフな感じであることから、廃棄土壇と考えられる。時期は16世紀代である。

##### ・出土遺物

出土遺物（第305図）には、鉢、土師器椀、土鍋、播鉢、土鍾などがある。

390は鉢である。底部を欠くが、丸底気味になると思われる。体部はわずかに内湾気味に口縁にいたり、口縁端部は尖る。内面に一部ハケメが残る。この鉢は、弥生時代終末から古墳時代初めにかけてのものと思われる。ほとんどローリングも受けていないことから、周辺にこの時期の遺構があったものと推定される。

391は土師器椀である。ハの字状に開く高台が付くもので、外底面はヘラ切り彫しの痕跡が明瞭に残る。体部は、高台の部分から斜方向に立ち上がるもので、内底面には螺旋状のロクロ痕がみられる。8世紀末～9世紀初めのものであろう。

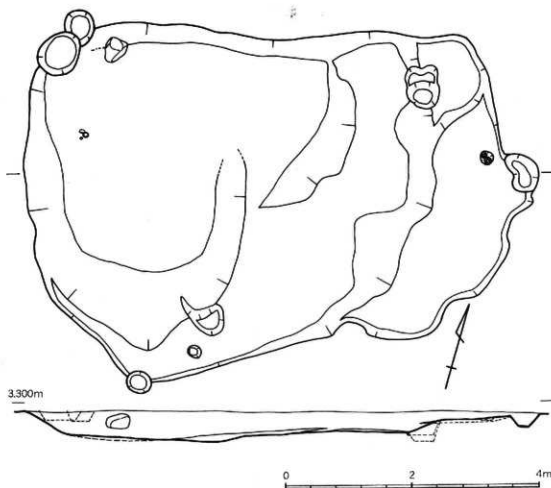
392は瓦質土器火鉢である。色調は暗褐色を呈し、直立する口縁は内外面とも肥厚せず、端部上面は平坦である。外面口縁下には2条の低い突帯が付され、その間に雷文のスタンプが付される。16世紀前半までに主体をおくものである。

394は瓦質土器燗鉢である。色調は黒褐色を呈し、体部は斜方向にのびる。口縁端部は上方につまみ上げられる。内面には横目がみられるが、破片のため全容は確認できない。1単位3本以上で、摺口は上部までは及ばない。防長系のものである可能性が考えられ、時期は15、16世紀である。

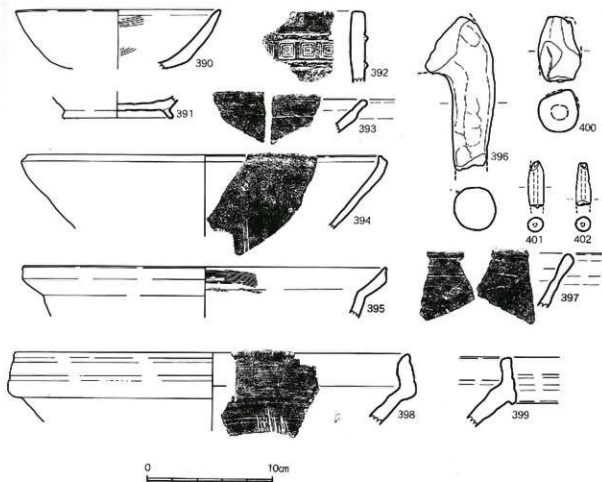
393、395～397は土鍋である。393は口縁部内外面に強いヨコナデが施され、そのため特に外面口縁下に段が生ずる。外面の段より下部は、ケズリが施されているようである。397も393と同様な調整技法を施したものである。しかし、口縁周辺の強いヨコナデが内外面とも均等に施されているため、内外面とも同様な段が付く。外面の段より下部にはヘラケズリがみられる。393、397とも16世紀のものである。395は防長系の土鍋である。暗灰色を呈し、体部から口縁がくの字状に折れ、端部を上方につまみ上げる。16世紀のものか。

398、399は備前焼燗鉢である。398は口縁部外面に、凹線状のものが2条はいる。口縁端部上面は内傾する。内面の横目については全容が不明であるが、1単位5本以上である。399は口縁外面に明瞭な凹線がみられず、口縁端部上面も丸みをもつ。399は15世紀代に、また398は16世紀前半～中頃に位置づけられる。396は土鍋の脚で、防長系のもなどに付く。

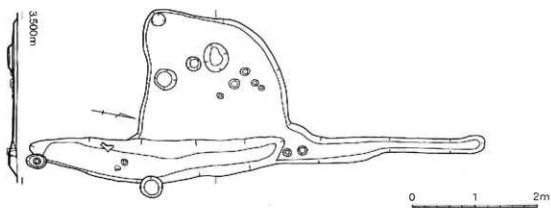
400～402は上鉢である。このうち400は、太くて中心に通る孔の径も大きい。



第304図 八板中遺跡土壘49



第305圖 八坂中遺跡土壙49出土土器



第306圖 八坂中遺跡土壙50

(50) 土 壙50

土壙50(第306図)は、居館1内部の中央やや南寄りに位置する。土壙は約7mの溝状の遺構に、一辺約2mの方形基調のものが取り付くような形態である。遺構の規模に比し遺物は少なく、遺物からみれば14世紀代の所産である可能性をもつ。

・出土遺物

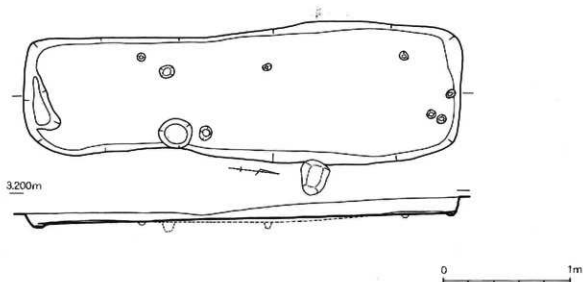
403(第307図)は上鍋である。外面口縁下に付く跨が退化したもので、14世紀代のものである。



第307図 八坂中遺跡土壙50出土土器

(51) 土 壙51

土壙51(第308図)は、居館1内部の南寄りに位置する。南北に長い長方形を呈し、長辺3.5m、短辺0.9mの規模をもつ。深さは、検出面から0.05~0.15mと比較的浅い。床面は平坦で、大小の柱穴がみられる。目立った遺物はなく、時期は不明である。



第308図 八坂中遺跡土壙51

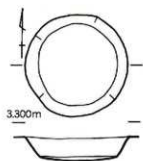
(52) 土 壙52

土壙52(第309図)は、居館1の南西コーナー外側に位置する。

土壙の平面形は円形を呈する。その規模は径0.8mで、深さは検出面から0.2mである。また、床面は平坦である。

・出土遺物

404(第310図)は、糸切りの平底底部をもつ瓦器碗である。13世紀後半~14世紀初に位置づけられる。



第309図 八坂中遺跡土壇52

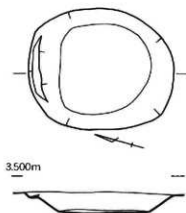


第310図 八坂中遺跡土壇52出土土器



### (53) 土壇53

土壇53（第311図）は、居館1内部の南西隅に近い位置にある。土壇の北側には、土壇46がみられる。土壇の平面プランは楕円形を呈し、長径1.2m、短径0.95mを測る。深さは検出面から0.2mで、床面は平坦である。また、土壇の壁は斜めに立ち上がる。目立った遺物はなく、時期は不明である。



第311図 八坂中遺跡土壇53

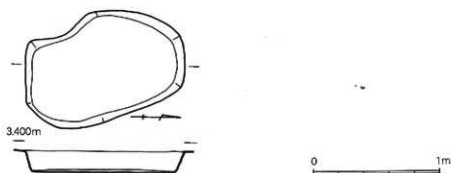


### (54) 土壇54

土壇54（第312図）は、居館1の中央やや南寄りに位置する。土壇の北側には土壇49が、また東側には土壇50がみられる。土壇は楕円形状を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は、長辺1.3m、短辺0.9mを測る。深さは検出面から0.2mである。13世紀の所産か。

・出土遺物

405 (第313図) は土鍋で、外面の鈔が口縁端部近くまで上がっている。13世紀のものか。



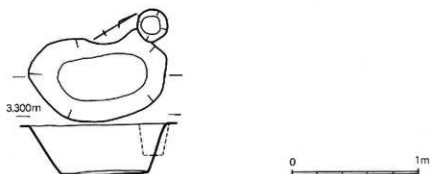
第312図 八坂中遺跡土坑54



第313図 八坂中遺跡土坑54出土土器

(55) 土 坑55

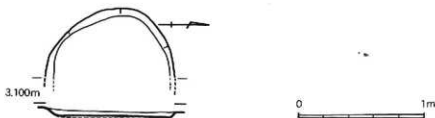
土坑55 (第314図) は、居館1の中央やや南寄りに位置する。土坑の西側には土坑49が、また東側には土坑50がある。土坑の平面プランは楕円形で、長径1.1m、短径0.6mの規模をもつ。深さは検出面から0.4mで、床面は平坦である。土坑内からは目立った遺物は検出されず、時期は不明である。



第314図 八坂中遺跡土坑55

### (56) 土 壙56

土壙56(第315図)は、居館1内部の南寄りに位置する。土壙の西側には、土壙51がみられる。土壙は、東半分が攪乱のため削平され不明であるが、径約1mの規模をもつものと推定される。深さは、検出面から0.05mと浅く、目立った遺物も検出されなかった。そのため、時期は不明である。



第315図 八坂中遺跡土壙56

### (57) 土 壙57

土壙57(第316図)は、居館1内部に中央やや西寄りに位置する。位置的に建物8と重複する。土壙は不定形を呈するが、長さ約1m、幅約0.8mの規模をもつ。深さは検出面から0.3mで、床面は平坦である。壁はほぼ直立気味に立つ。土壙内から目立った遺物は検出されておらず、時期は不明である。



第316図 八坂中遺跡土壙57

### (58) 土 壙58

土壙58(第317図)は、居館1内部の中央付近に位置する。場所的に建物10と重複するほか、周囲には多くの建物が展開する。

土壙は楕円形を呈し、南北方向に長軸を有する。その規模は長径1.1m、短径0.7mで、深さは検出面から0.2mである。土壙内からは土器片が散発的に検出されたのみである。

#### ・出土遺物

出土遺物(第318図)のうち、406は土師質土器小皿である。底部は糸切りで、復元口径7.0cmを測る。体部の立ち上がりは比較的シャープで、内湾気味に口縁にいたる。14世紀初前後のものか、407は土器である。復元口径35.4cmを測る大型のもので、外面にはスズ状付着物がみられる。口縁端部は角張り、強いヨコナデのため口縁部がわずかに外傾する。15、16世紀代のものである。





第317図 八坂中遺跡土墳58



第318図 八坂中遺跡土墳58出土土器

(59) 土 墳59

土墳59（第319図）は、居館1内部の中央からやや北寄りに位置する。場所的に、建物13などと重複する。土墳の平面形は楕円形基調を呈し、南西-北東に主軸をもつ。規模は長径0.85m、短径0.6mを測る。また、深さは検出面から0.4mと、やや深めである。土墳内から目立った遺物は検出されず、時期は不明である。



第319図 八坂中遺跡土墳59

(60) 土 墳60

土墳60（第321図）は、居館1内部のほぼ中央に位置する。建物8とわずかに重複する。土墳は楕円形基調



第320図 八坂中遺跡土墳60出土土器

を呈するもので、長径0.75m、短径0.6mを測る。深さは0.3mで、床面に柱穴状のものがある。時期は不明。

・出土遺物

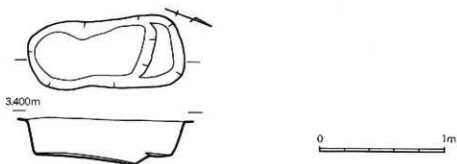
408（第320図）は七鍬で、長さ4.6cmを測る。



第321図 八坂中遺跡土壙60

(61) 土壙61

土壙61（第322図）は、厩館1内部中央に位置する。平面プランが長楕円形を呈するもので、長径1.2m、短径0.5mを測る。深さは最深部で検出面から0.3mで、一部床面に段がつく。土壙内から図示できるような遺物は検出されなかったが、遺物から時期は14世紀以降と思われる。



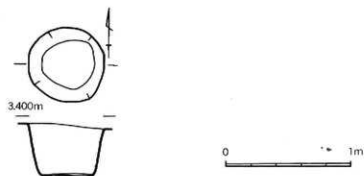
第322図 八坂中遺跡土壙61

(62) 土壙62

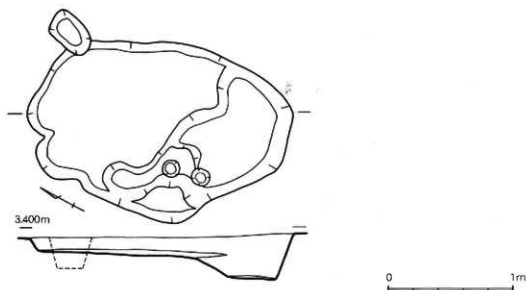
土壙62（第323図）は、厩館1内部の中央からやや北寄りに位置する。径0.6mの円形を呈し、深さは検出面から0.4mである。時期は不明である。

(63) 土壙63

土壙63（第324図）は、厩館1内部の中央からやや北寄りに位置する。すぐ南側には土壙62がある。土壙の平面形は不定形を呈し、長さ2.1m、幅1.4mの規模をもつ。土壙内の南側が一段低く、最深部で検出面から0.3mを測る。土壙内からは図示できるような遺物は確認されなかったが、遺物から時期は14世紀以降である。



第323図 八坂中遺跡土壙62



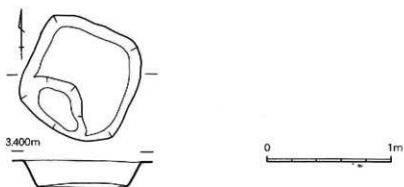
第324図 八坂中遺跡土壙63

#### (64) 土壙64

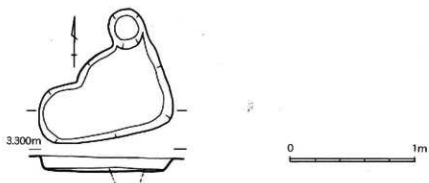
土壙64（第325図）は、居館1内部の中央からやや北寄りに位置する。すぐ南側には土壙63がある。上壙は方形基測の平面プランを呈し、規模は一辺約0.9mである。深さは検出面から0.2mで、南西隅が一段低くなる。土壙内からは、時期を決定できるような目立った遺物は検出されなかった。

#### (65) 土壙65

土壙65（第326図）も、居館1内部の中央からやや北寄りに位置する。このあたりは建物が密集しているが、本土壙もいくつかの建物と重複する。土壙は一部柱穴と重複するが、基本的には東西方向に長い不定形を呈する。その規模は、長さ1.1m、幅0.7mで、深さは検出面から0.15mである。土壙内から時期を決定できるような遺物は検出されなかった。



第325図 八坂中遺跡土壌64



第326図 八坂中遺跡土壌65

(66) 十 墳66

土壌66 (第327図) は、土壌64のすぐ北側に位置する。このあたりは建物や土壌が密集しており、本土壌もいくつかの建物と位置的に重複する。

土壌の平面形は楕円形で、長径0.9m、短径0.5mの規模をもつ。深さは検出面から0.1mと比較的浅く、床面は平坦である。

土壌内からは目立った遺物は検出されず、時期は不明である。



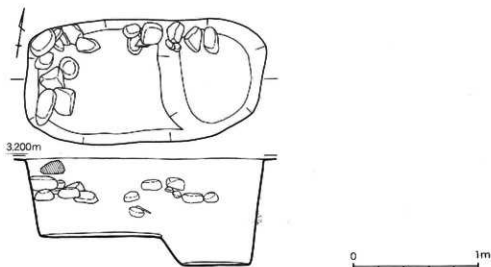
第327図 八坂中遺跡土壌66

### (67) 土 壙67

土壙67(第328図)は、居館1内部北側に位置する。土壙は東西方向に長軸をもつ楕円形を呈し、その規模は長径1.9m、短径0.95mを測る。床面は階段状になり、最深部は検出面から0.8mである。上層内中層からは0.2mほどの礫が検出された。時期14世紀か。

#### ・出土遺物

出土遺物(第329図)のうち、409は土師質土器環である。体部はシャープに立ち上がる。410は土師質土器小皿で、短い体部が立ち上がる。以上は14世紀のものか。411は14世紀初前後の瓦器椀。412は土錘である。



第328図 八坂中遺跡土壙67



第329図 八坂中遺跡土壙67出土土器

### (68) 土 壙68

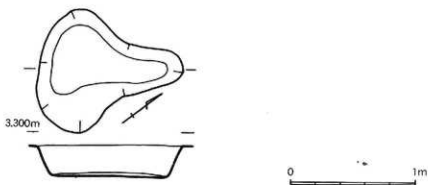
土壙68(第330図)は、居館1内部の北東隅付近に位置する。土壙の平面プランは不定形で、長さ1.1m、最大幅0.95mを測る。深さは検出面から0.25mで、床面は平坦である。上層内からは図示できる遺物は検出されなかったが、遺物から14世紀以降の時期と推定される。

### (69) 土 壙69

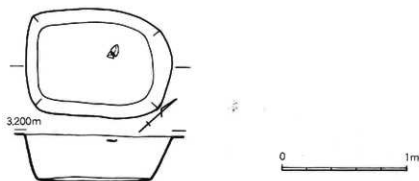
土壙69(第331図)は、居館1内部の北東隅付近に位置する。土壙の平面プランは長方形を呈し、長辺1.0m、短辺0.8mの規模をもつ。深さは検出面から0.35mで、床面は平坦である。出土遺物は少ないが、11、12世紀のものか。

#### ・出土遺物

413(第332図)は、円盤状高台の内黒土器椀である。内面には分割のヘラミガキが残る。11世紀代のもの。



第330図 八坂中遺跡土壘68



第331図 八坂中遺跡土壘69



第332図 八坂中遺跡土壘69出土土器

### (70) 土壘70

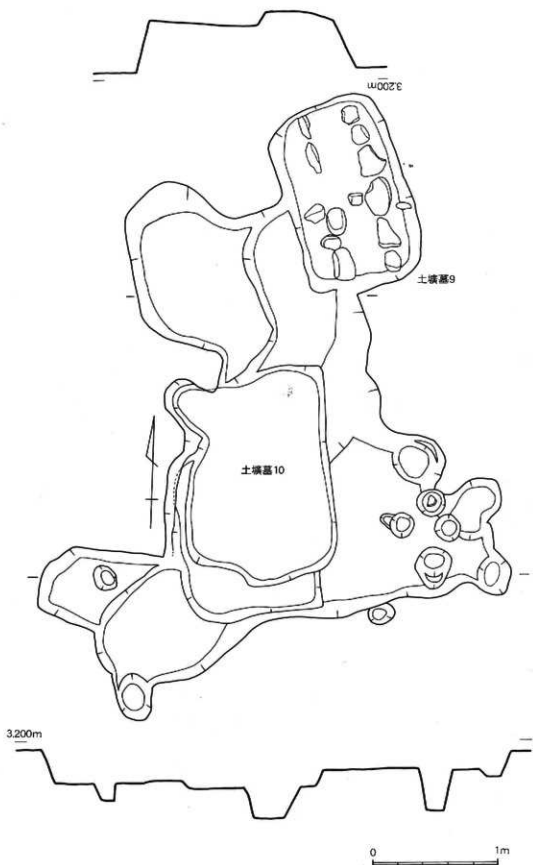
土壘70（第333図）は、居館1内部の北東コーナー部に位置する。土壘葦9や土壘葦10と切り合い関係にあるほか、本土壘自体もいくつかの土壘が重複する可能性をもつ。土壘葦と本土壘の前後関係は、土壘葦9→土壘70・土壘葦10の順となる。

土壘はいくつかの土壘が切り合う可能性をもつためか、不定形を呈する。その規模は、最大で南北に3.6m、東西に3.6mほどである。また、深さもばらつきがみられ、検出面から0.3～0.5mである。土壘内からは土器片などが一定程度検出されたが、いずれも破片資料である。このほか、貝殻が一括して廃棄された状況が確認された。

本土壘の時期は、16世紀代である。

#### ・出土遺物

出土遺物（第334図）のうち、414は土師質土壘坏である。体部が内湾気味に口縁にいたるもので、13世紀後半～14世紀初のものか。

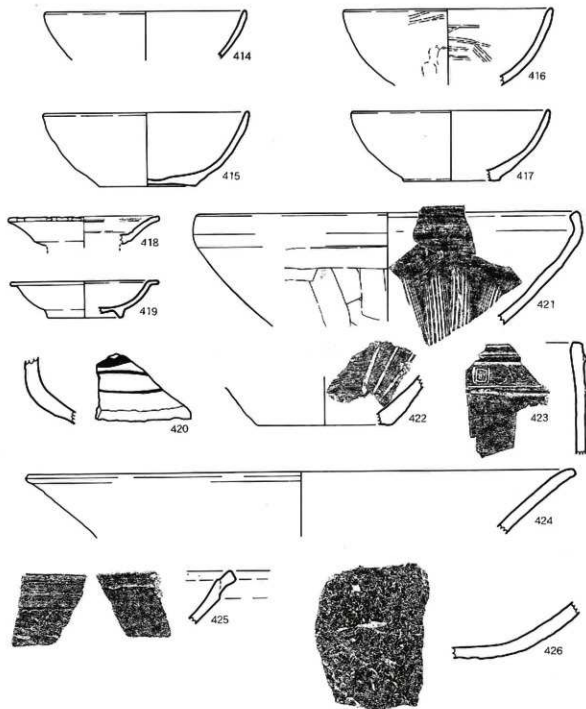


第333圖 八坂中遺跡土墳70

415～417は瓦器椀である。このうち415と417は東国東型瓦器椀で、底部は糸切りの平底である。13世紀後半～14世紀初のものである。416は尊前型瓦器椀である。体部内外面にヘラムガキが残る。13世紀代のものである。

418は青磁椀花皿である。下半部に稜をもち、口縁に向かい大きく外反する。また、体部内面にも文様をもつ。15世紀代に中心を置くものである。419は端反の白磁皿である。15世紀後半から16世紀前半に主体を置く。

420は焼締め陶器片である。甕の肩部であると思われるが、外面に彩色により文様が描かれる。彩色の色は、現状では黒色を呈する。東南アジア産のものか。



第334図 八坂中遺跡土坑70出土土器



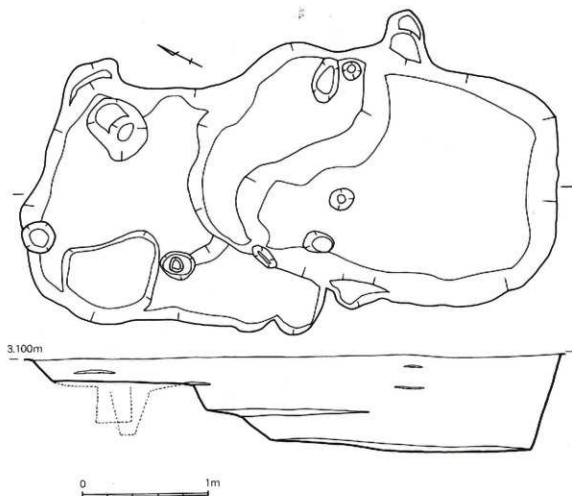
421、422は瓦質土器播鉢である。421は茶褐色を呈するもので、口縁部は内溝する。体部外面にはヘラケズリが施される。摺目の単位は5～7本である。422は須恵質にちかいもので、内面には横方向の細かいハケメの後に太めの摺目がいられる。両者とも15、16世紀に位置づけられる。

423は瓦質土器火鉢である。口縁部は肥厚せず、口縁下の突起間に雷文のスタンプがみられる。16世紀中頃までに主体を置くものである。

424～426は土鍋である。424は復元口径43.2cmを測る大型のものである。体部は斜方向にのび口縁にいたる。口縁部内外面には強いヨコナデがなされ、その結果わずかに外反し段が付く。425も口縁内外面に強いヨコナデがはいり、顕著な段がみられる。体部外面にはケズリが施される。426は底部で、粗い格子目タタキがある。以上はいずれも、15、16世紀代のものである。

### (71) 土 壙 71

土壙71(第335図)は、居館3内部の中央やや西寄りに位置する。現状で土壙は不定形を呈するが、2基の長方形基調の土壙が重複している可能性も考えられる。現状の規模は南北4.2m、東西3.2mで、北から南にむかい階段状に低くなる。深さは、最深部で検出面から0.75mである。土壙内からの遺物は少なく、いずれも破片資料である。時期は15、16世紀代に位置付けられる。



第335図 八板中遺跡土壙71

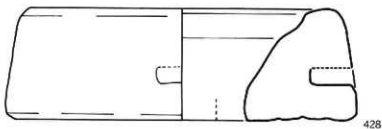
・出上遺物

出上遺物には石製品（第336図）と土器（第337図）がある。

427、428は挽白の上臼である。両者とも破片であるが、天場のくぼみが供給口に続く状況がみてとれる。側面には角穴の挽手穴がみられる。

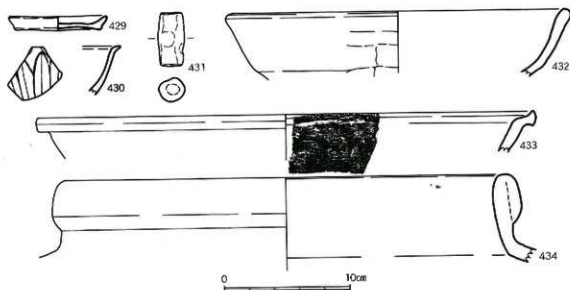
429は土師質土器小皿である。短い体部が直立気味に立ち上がるもので、14世紀代の所産か。430は青磁碗である。口縁部端反で、外面に縞連弁がみられる。13世紀代に位置づけられるものか。431は円筒状の土鉢で、中心を貫く孔は太めである。432は瓦質土器鉢で、外面にはヘラケズリがみられる。15、16世紀のものか。433は土鍋で、復元口径39.2cmを測る。口縁が外方に折れ、内面に横方向の細かなハケメがみられる。15、16世紀のものか。

434は備前焼甕である。口縁部の糸縁は扁平化する。15、16世紀のものである。



0 10cm

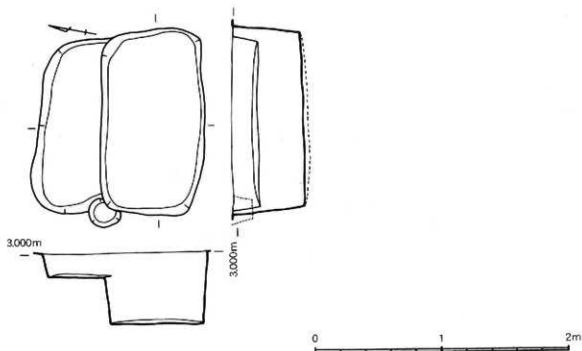
第336図 八坂中遺跡土坑71出土石製品



第337図 八坂中遺跡土壇71出土土器

(72) 土 壇72

土壇72（第338図）は、居館3内部の東端に近い位置にある。長方形の上壇が2基切り合うもので、南側が新しい。南側の土壇の規模は、長辺1.4m、短辺0.7～0.8mで、深さは0.55mを測る。形態的にみれば土壇墓の可能性も考えられるが、備前焼甕の大型破片や石臼の破片が理上に含まれることを考え、ここでは土壇として扱う。時期は16世紀か。

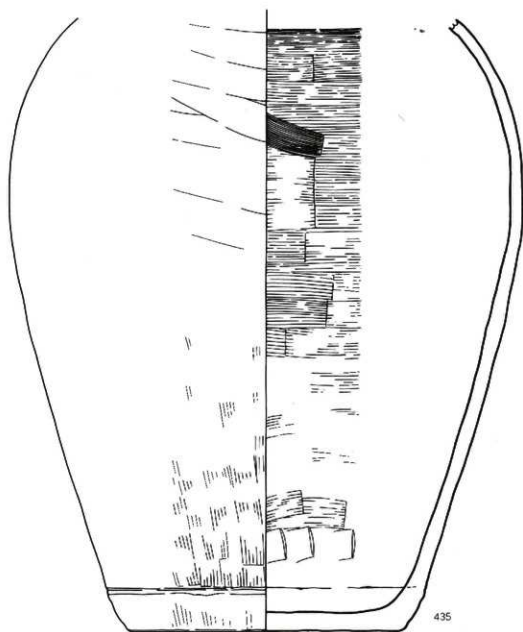


第338図 八坂中遺跡土壇72

・出土遺物

出土遺物（第339～341図）のうち、435は備前焼裏である。本上襷に加え、上襷146、溝11、溝12の破片が接合した。頸部以上を欠くが、現状で高さ60cm余を測る。胴部最大径が胴上半部にくるもので、長胴気味の器形を呈する。外面下部及び内面にハケメがみられる。16世紀のものである。

436は十師貫土器環である。底部は糸切りで、体部が緩やかに立ち上がる。器高はそれほど高くない。13～14



第339図 八坂中遺跡土坑72出土土器(1)

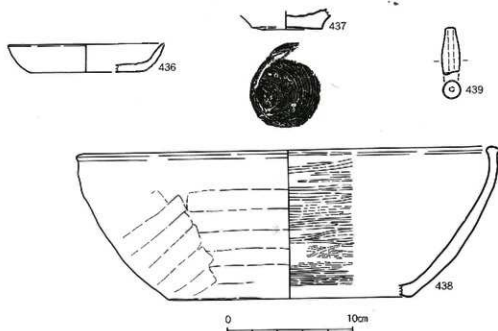
世紀のものであろう。

437も土師質土器環である。底部は糸切りで、口径に比し器高の高いタイプのものである。16世紀代に位置づけられる。

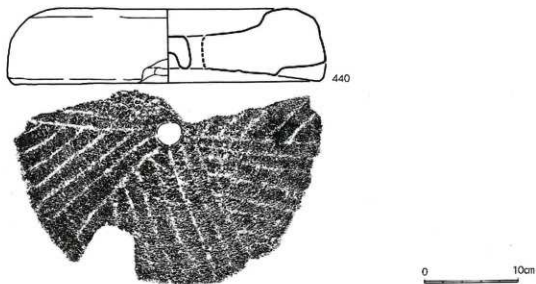
438は瓦質土器鉢である。体部は内湾気味に口縁にいたり、口縁端部が内外に肥厚する。外面にはヘラケズリがみられ、内面にはヘラミガキが施される。16世紀代のものか。

439は土鏝である。

440は挽臼の上臼である。下面の中央に芯棒受の穴があり、その横に供給口がある。主溝は6本の6分割と思われ、主溝から右よりの副溝が6～7本付される。



第340図 八坂中遺跡土壌72出土土器(2)



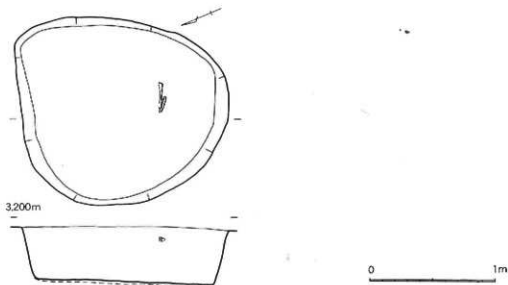
第341図 八坂中遺跡土壌72出土土製品

### (73) 土 壙73

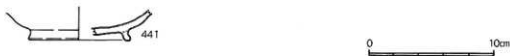
土壙73(第342図)は、居館3の東方約10mにある。土壙の南側には、溝6がみられる。土壙は円形基調を呈し、径1.5~1.65mを測る。深さは0.45mで、上層から骨が少量検出された。時期は12世紀代が。

#### ・出土遺物

出土遺物(第343図)のうち、441は内黒土器碗である。丸みを有する体部下半に高台が付される。内面にはハラミガキが施されていたようであるが、磨滅のため明確ではない。12世紀初前後に位置づけられよう。



第342図 八坂中遺跡土壙73



第343図 八坂中遺跡土壙73出土土器

### (74) 土 壙74

土壙74(第344図)は、居館3の東の外側に位置する。居館3を二重に取り囲む溝のうち外側に位置する溝10から、約15m離れる。また、土壙の南約10mには溝5が東西方向に走る。この周辺は建物や土壙が密集する部分であるが、すぐ西側に隣接して土壙152がみられる。

土壙の平面プランは三角形状を呈する。南北方向に長く、長さ7.2m、幅4.2mを測るもので、深さは検出面から0.8mである。壁はそれほどシャープな立ち上がりを示さず、場所によってはかなり斜めに立ち上がる。また、壁の一部は階段状を呈する。床面は不定形を呈するが、平坦である。ほぼ床面に0.4mほどの石が3個並ぶ。出土遺物の多くは破片の状態で、遺構規模に比し遺物量は少ない。全体として整然さを欠いており、廃棄土壙などとして利用されたものであろうか。

土壙の時期は16世紀代である。

#### ・出土遺物

出土遺物(第345図)のうち、442と443は土師質土器環である。442は糸切りの底部で、底径5.4cmを測

る。口径に比し器高が高いタイプのもと思われる。16世紀代に位置づけられる。443も糸切りの底部である。体部の立ち上がりは緩やかで、立ち上がり部にヘラ状上具によるナデがみられる。時期的には12世紀以前のものであろう。

444は十師匠上器小皿である。底部糸切りで、短い体部が斜方向に立ち上がり口縁にいたる。口縁部はやや肥厚し、丸くおさめる。14世紀のものであろう。

445は内黒上器椀である。外底面に糸切り痕がみられる。やや上げ底気味となっているが、円盤状高台である。11～12世紀代のものである。

446、447は瓦器椀である。446は外底面に糸切り痕が残る。底部切り離しの後に押し出すことなく、縁に断面三角形の高台を付している。447は高台がつかず、完全な平底となっている。両者とも東国東型瓦器椀で、446が13世紀前半、447が13世紀後半～14世紀初である。

448、449は青磁である。448は口縁端反て体部に鉛連弁文を施す。13世紀代のものか。449は皿である。

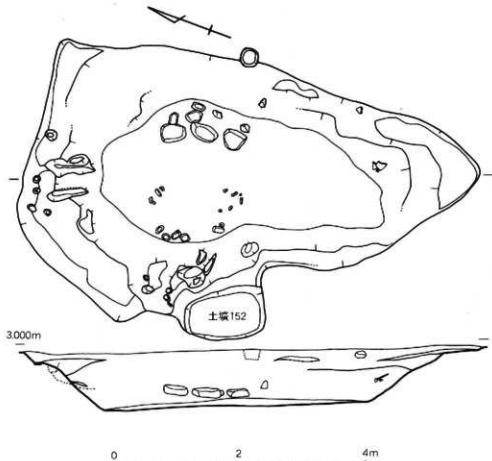
450は備前焼の壺で、肩部に櫛歯状文が施される。16世紀代であろう。

451は軒丸瓦である。珠文と團縁が残るが、本来は中央に巴文があるものと思われる。16世紀代か。

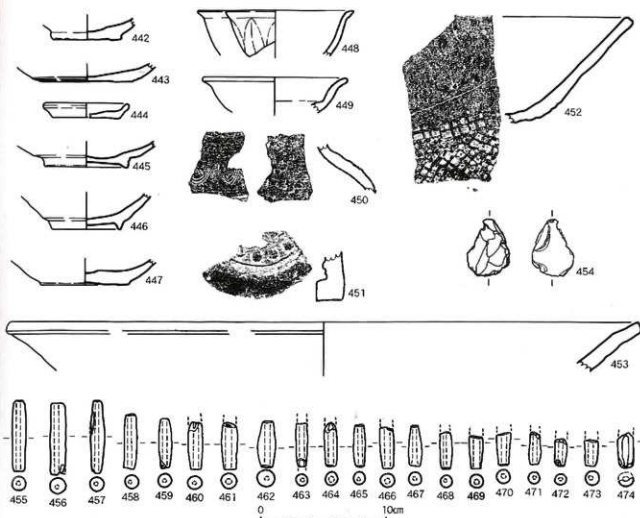
452と453は土鍋である。両者とも丸底気味の底部から、斜方向に緩やかに立ち上がり口縁に至る。口縁部付近は内外とも強いナデが施され、わずかに外に折れる。452の底部には格子目のタタキがみられる。

454は珪質石製の火打ち石と思われる。

455から474は上鍾である。サイズ的には大きく長さ5.5cm、4cm、3cmのものがある。



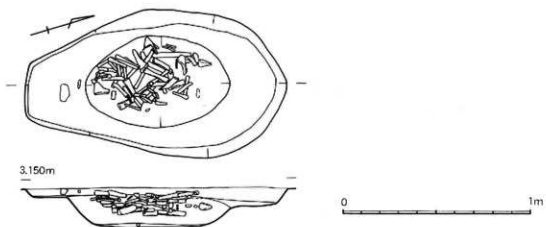
第344図 八坂中遺跡土壘74



第345図 八坂中遺跡土壌74出土遺物

(75) 土 壌75

土壌75 (第346図) は、居館2内部の南西隅に位置する。



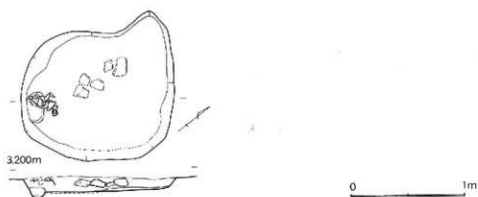
第346図 八坂中遺跡土壌75



土壇は長楕円形を呈するものである。規模は、長辺1.4m、短辺0.75mを測る。2段掘り状になっており、いったん0.1mほど下げ平坦にした後に、中央付近を長辺0.8m、短辺0.45mの楕円形に掘り下げる。深さは、最深部で0.2mである。土壇内からは長さ0.1mほどの骨が集中して検出された。骨は獣骨と思われ、意識的に折られたり切断されたものである。食用で、最終的に一括廃棄されたものであろう。時期は不明である。

#### (76) 土壇76

土壇76(第347図)は、居館2内部の南東隅近くから確認された。位置的に建物73、建物74などと重複する。土壇は円形基調を呈するが、一部不整形を呈する。その規模は径1.1~1.35mを測り、深さは検出面から0.15mである。土壇内の南端の上層から骨片が若干まとまって検出されたが、人骨などではなさそうであった。また、中央部付近からは、0.15mほどの礫が数個確認された。時期は不明である。



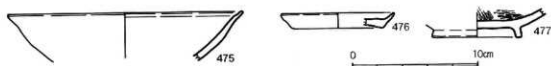
第347図 八坂中遺跡土壇76

#### (77) 土壇77

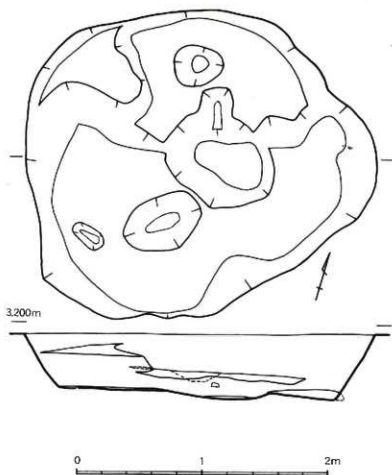
土壇77(第349図)は、居館1の北東コーナーと居館3の北西コーナーの間に位置する。居館1を囲む溝が溝13で、居館3を囲む溝が溝12、溝15である。溝12と溝15は切り合い関係にあり、溝15が先行する。居館1を囲む溝13は、北東コーナー付近でかなり浅くなるものの切れることなく巡る。これに対し、居館3を囲む溝は溝12、溝13とも北西コーナー付近で途切れる。居館3の北西コーナー部は、出入り口として利用されたものであろう。溝13と溝12の間が約8m、溝13と溝15の間が約3mである。土壇77は、両居館の溝の間にみられる。土壇の平面プランは円形基調を呈し、径2.4~2.8mを測る。深さは、最深部で検出面から0.5mであるが、床面は凹凸が著しい。土壇内からは土器片が少量出土したのみで、時期は13~14世紀であろう。

#### ・出土遺物

出土遺物(第348図)のうち、475は土師器碗である。12世紀代のものか。476は土師質土器小皿である。体部が比較的シャープに立ち上がる。13、14世紀代か。477は内黒土器碗である。11、12世紀のものである。



第348図 八坂中遺跡土壇77出土土器

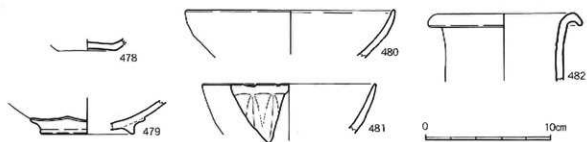


第349図 八坂中遺跡土壇77

(78) 土壇78

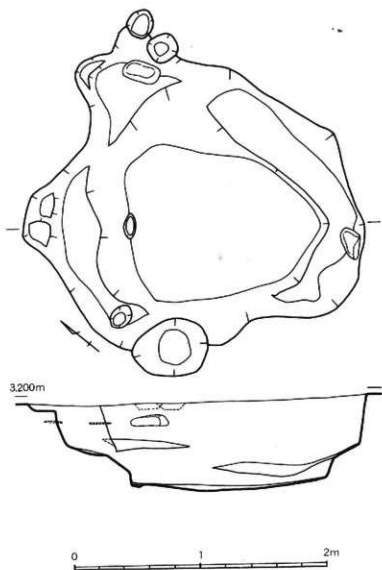
土壇78(第351図)は、居館3内部の北西隅に位置する。居館3を囲む溝12は、北西コーナー付近で途切れており、この部分が居館3の出入り口として利用されていたことが分かる。土壇は不定形を呈する。規模は径2.4~2.7mを測り、深さは検出面から0.7mである。床面はほぼ平坦であるが、周囲の壁は不規則な階段状を呈する。土壇内からは土器片が検出されたが、それらから14世紀初前後に位置づけられる。

・出土遺物



第350図 八坂中遺跡土壇78出土土器

出土遺物（第350図）のうち、土師質土器小皿である。底部糸切りで、底径4.8cmを測る。14世紀初前後のものか。479は内黒土器椀である。高台は断面三角形の比較的低いものが付される。外面高台ちかくには花卉状の貼り付けがみられる。12世紀代のもの。480は、13世紀後半～14世紀初の東国束型瓦器椀である。481は龍泉窯系青磁碗で、外面には縮速弁文がみられる。13世紀代のもの。482は中国製白磁四耳碗の口縁部である。口縁端部が外方に折られる。11世紀後半から12世紀前半のものである。



第351図 八坂中遺跡土器78

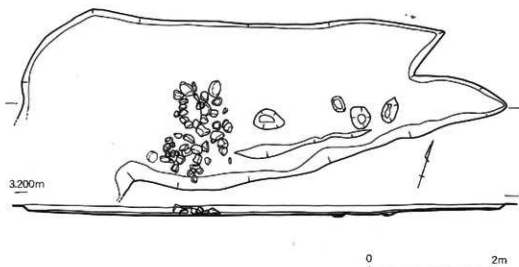
### (79) 土 壙79

土壙79（第352図）は、居館1と居館3の間にあたる部分の北側に位置する。井戸1と重複しており、井戸1に切られる。居館1と居館3の北側を走る道に沿うように、東西に長く展開する。

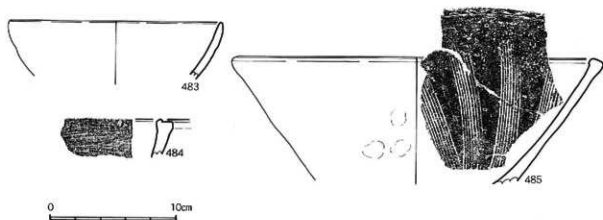
土壙は不定形を呈するもので、東西3.9m、南北1.3mの規模をもつ。深さは0.1mほどと比較的浅く、床面に柱穴状のものがいくつみられる。また、0.1m以下の小礫が中央付近に密集する。15、16世紀の所産である。

・出土遺物

出土遺物（第353図）のうち、483は瓦器桶である。底部を欠くが、糸切りの平底を有するものであろう。東国東型瓦器桶で、13世紀後半～14世紀初に位置づけられる。484は上鍋である。内面には、横方向のハケメが施される。口縁端部は肥厚し、段がつく。口縁下の鈎が退化したものと考えられ、14世紀代のものであろう。485は瓦質土器揺鉢である。淡黄褐色を呈し、外面にはユビオサエなどがみられる。内面の摺目は8本単位である。15、16世紀代のものである。



第352図 八坂中遺跡土壌79



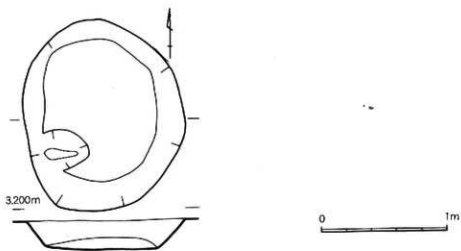
第353図 八坂中遺跡土壌79出土土器

(80) 土 壇80

土壇80（第354図）は、居館3を囲む溝12が、居館北西部で途切れた位置にある。土壇の平面プランは楕円形で、長径1.5m、短径1.3mを測る。深さは0.2mで、壁の立ち上がりは比較的斜めである。土壇内からの遺物は少なく、いずれも小破片である。12世紀の所産か。

・出土遺物

出土遺物（第355図）のうち、486は黒色土器碗である。断面三角形の低い高台が付く。12世紀代のものか。



第354図 八坂中遺跡土壌80



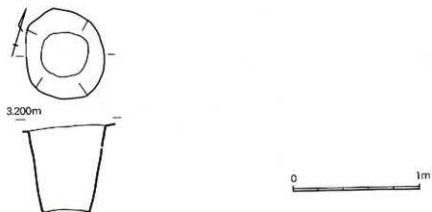
第355図 八坂中遺跡土壌80出土土器

(81) 土 壌81

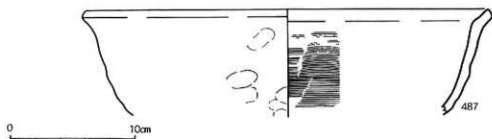
土壌81（第356図）も、居館3を囲む溝12が、居館北西部で途切れた位置にある。土壌は円形を呈し、径0.6～0.7mを測る。深さは検出面から0.7mと、土壌の規模に比しては深い。13世紀後半の所産。

・出土遺物

487（第357図）は土鍋で、口縁がくの字状に折れる。内面には横方向のハケメがみられる。13世紀後半。



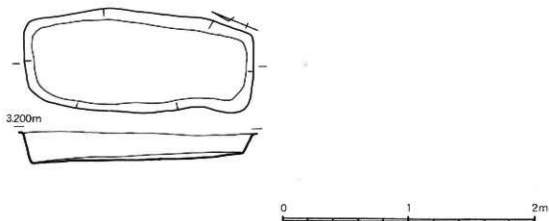
第356図 八坂中遺跡土壌81



第357図 八坂中通跡土壙81出土土器

(82) 土 壙82

土壙82（第358図）は、厩館3内部の北西コーナー部に位置する。上縁は南北方向に主軸をもつもので、平面プラン長方形を呈する。周縁は長辺1.8m、短辺0.8mを測る。深さは検出面から0.15～0.25mで、床面は平坦である。形態から上墳墓の可能性もある。土壙内から目立った遺物は検出されず、時期は不明である。



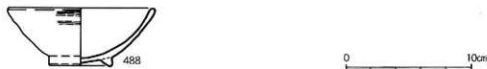
第358図 八坂中通跡土壙82

(83) 土 壙83

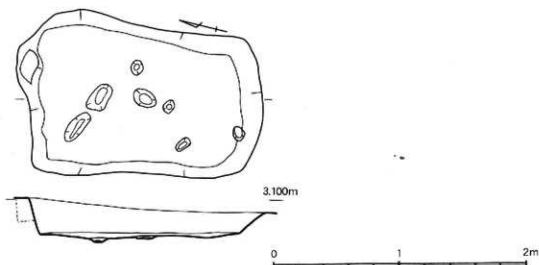
土壙83（第360図）は、厩館3内部の西側中央に位置する。建物41と位置的に重複する。土壙は南北に長軸をもつ長方形を呈し、長辺1.7～1.8m、短辺1.05～1.2mを測る。深さは検出面から0.2～0.3mである。床面は平坦で、浅い小穴がいくつかみられる。形態から上墳墓の可能性も考えられる。土壙内からの遺物は少ないが、図示できない遺物も考慮に入れ、15世紀代に位置付けられる。

・出土遺物

488（第359図）は、小椀で断面三角形の高台が付く。外面にはヘラミガキがみられる。12世紀代のものか。



第359図 八坂中通跡土壙83出土土器



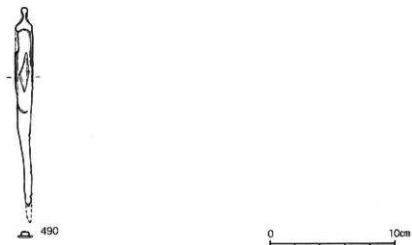
第360図 八坂中遺跡土壌83

(84) 土 塚84

土塚84（第363図）は、居館3内部の中央付近に位置する。南側で土塚146につながるが、両者の前後関係は明らかではない。土塚は不定形を呈し、現状で南北4m、東西2.1～3.3mを測る。深さは0.15～0.25mで、床



第361図 八坂中遺跡土塚84出土土器

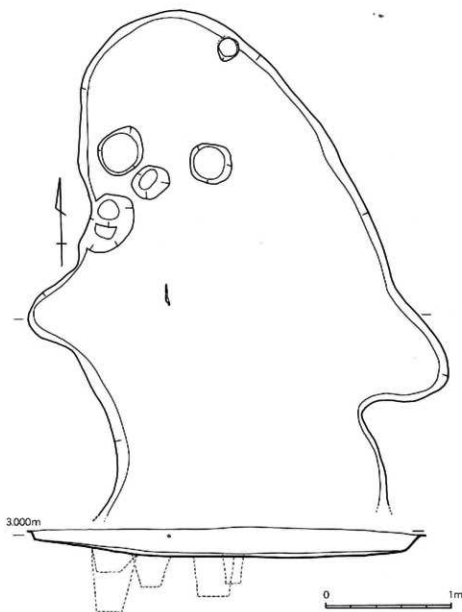


第362図 八坂中遺跡土塚84出土金属製品

面はほぼ平坦である。上墳内からの遺物は、上墳の規模に比べて少なく、破片資料ばかりである。時期は16世紀に位置づけられる。

・出土遺物

489 (第361図) は備前焼鉢鉢である。小破片のため全容は不明だが、口縁部外面には凹線はみられない。15、16世紀のものか。490 (第362図) は青銅製筭である。全体が波打つように曲がり、先端部を欠く。現状で長さ16cm強を測る。装飾部分の枠については残存状態がよくないが、三角形の貼り付けの装飾は明瞭に残る。



第363図 八坂中遺跡土墳84

(85) 上 城85

土城85 (第364図) は、厩館3内部のほぼ中央に位置する。

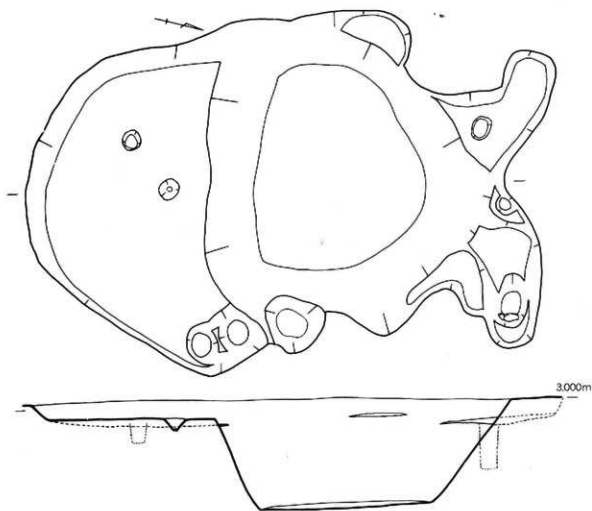
上城は北側がやや不整形気味であるが、全体としては楕円形基調を呈する。その規模は南北3.8m、東西2.7m



である。土壙内は南半が浅く、北半が深い。深さは検出面から、南半が0.15m、北半が0.9mを測る。床面は平坦であるが、全体として整然さを欠く。土壙内からの遺物は少なく、それらから13世紀代の所産と思われる。

・出土遺物

出土遺物（第365図）のうち、491は内黒土器椀である。口縁がわずかに外反し、内面にはヘラミガキがみられる。12世紀代のものか、492は龍泉窯系の青磁碗で、外面に鎗蓮弁文がみられる。13世紀代のもの。



第364図 八坂中遺跡土壙85

0 1m



491



492

0 10cm

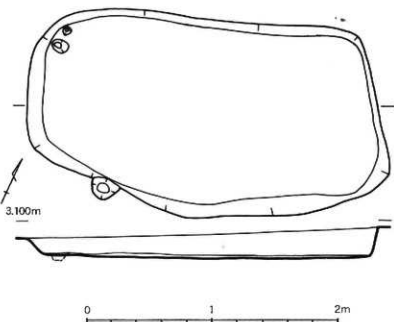
第365図 八坂中遺跡土壙85出土土器

### (86) 土 壙86

土壙86（第366図）は、居館3内部の中央からやや南東寄りに位置する。東西方向に長軸をもつもので、長方形基調を呈する。規模は長辺2.4～2.8m、短辺1.2～1.3mを測り、深さは検出面から0.15～0.2mである。床面は平坦で、土壙内からの遺物は少量である。遺構の時期は16世紀代に位置づけられる。

#### ・出土遺物

出土遺物（第367図）のうち、493は土師質土器杯である。器高の高いタイプと思われ、16世紀代のもの、494は土師器碗で、11、12世紀のものか。495は須恵質の甕である。



第366図 八坂中遺跡土壙86



第367図 八坂中遺跡土壙86出土土器

### (87) 土 壙87

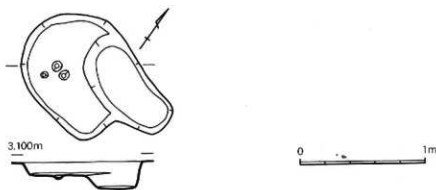
土壙87（第369図）は、居館3内部の中央からやや南東寄りに位置する。土壙の西側に隣接して、土壙86がみられる。土壙不定形を呈し、東西1.3m、南北0.8mの規模をもつ。床面は2段になり、最深部で検出面から0.2mを測る。土壙内からは、ほぼ完形に土師質土器小皿が検出された。土壙の時期は12世紀代であろう。

#### ・出土遺物

496（第368図）は土師質土器小皿である。底部は糸切りの後板状片痕がみられる。体部は斜方向に緩やかに立ち上がり、端部は丸くおさめる。口径は10.4cmである。12世紀初前後のものである。



第368図 八坂中遺跡土壙87出土土器



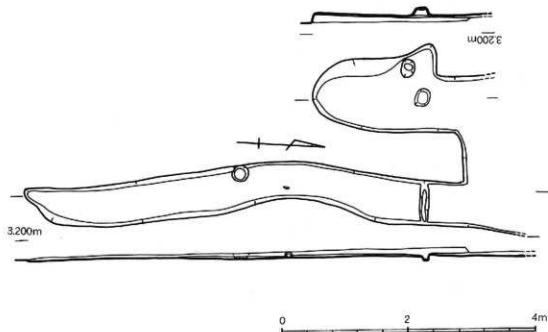
第369図 八板中遺跡土壇87

(88) 土壇88

土壇88（第370図）は、居館3内部の中央からやや南東寄りに位置する。溝状を呈するもので、深さは0.05mと非常に浅い。12世紀代のものが。

・出土遺物

出土遺物（第371図）のうち、497は非ロクロ系の土師質土器小皿と思われる。器境はやや厚めであるが、丸底の底部より緩やかに口縁にいたる。498は、黄白色を呈する土師器椀である。12世紀初前後のものか。



第370図 八板中遺跡土壇88



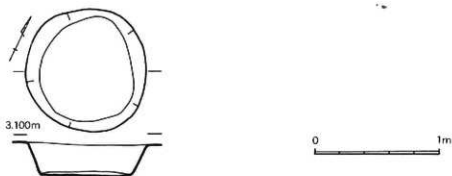
第371図 八板中遺跡土壇88出土土器

### (89) 土 壙89

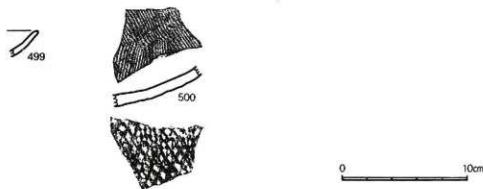
土壙89(第372図)は、居館3内部の中央からやや南東寄りに位置する。本土壙の西側には土壙87が、また南から東にかけては土壙90がみられる。土壙は0.95mの円形で、深さは0.25mである。

#### ・出土遺物

出土遺物(第373図)のうち、499は土師質土器杯と思われる。500は土鍋の底部である。内面にハケメ、外面に格子目タタキが施される。



第372図 八坂中遺跡土壙89



第373図 八坂中遺跡土壙89出土土器

### (90) 土 壙90

土壙90(第374図)は、居館3内部の南東隅部付近に位置する。土壙は南北方向に長い不定形を呈し、南北5.45m、東西0.8~2.5mを測る。深さは0.2mで、床面はほぼ平坦である。土壙内からの出土遺物はいずれも小破片であるが、12世紀初前後に位置付けられる。

#### ・出土遺物

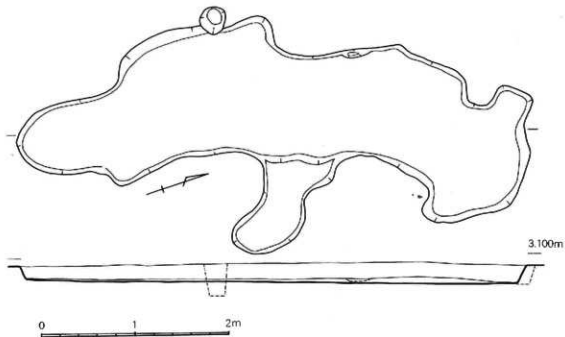
出土遺物(第375図)のうち、501、502は土師質土器小皿である。501は体部が底部から丸みをもって立ち上がる。502は糸切り後板状片の底部から、体部が斜方向に緩やかに立ち上がる。

503、504は土師器碗である。両者とも口縁部が外反し、体部内外面にヘラミガキが施される。

505は土師質土器杯である。復元口径17.6cmを測る。

506は内黒土器碗で、やや高い高台が付される。507は黒色土器碗で、断面三角形のやや高い高台が付く。

以上の土器は、12世紀初前後に位置づけられる。



第374図 八板中遺跡土塙90



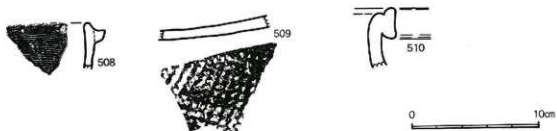
第375図 八板中遺跡土塙90出土土器

(91) 土 塙91

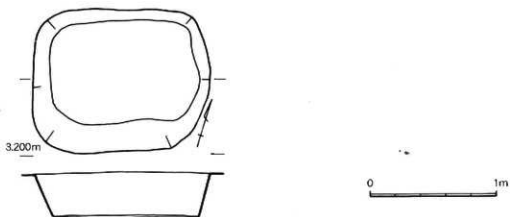
土塙91(第376図)は、居館3内部の南東隅部付近に位置する。土塙は長方形で、長さ1.4m、幅1.2m、深さ0.35mを測る。形態的に土塙竈の可能性もある。

・出土遺物

出土遺物(第376図)のうち、508は土鍋である。口縁直下に鈿が付き、内面にはハケメが施される。13世紀後半のもの。509は土鍋底部で外面に格子口タキがみられる。510は常滑焼甕で14世紀前半か。



第376図 八板中遺跡土塙91出土土器



第377図 八坂中遺跡土壇91

(92) 土壇92

土壇92（第378図）は、居館3内部の南東隅部付近に位置し、居館の南側の溝に寄る。

土壇は東西方向に長い楕円形を呈し、長径1.1m、短径0.9mを測る。土壇内からは若干の上器片と鉄滓が検出された。時期は不明である。



第378図 八坂中遺跡土壇92

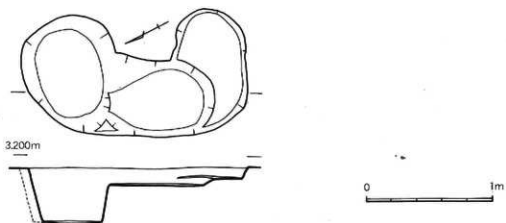
(93) 土壇93

土壇93（第379図）は、居館3内部の南東隅部付近に位置する。土壇の南側には土壇90が、また東側には畝状の溝がみられる。この周辺は居館3内部でも土壇が集中しているが、建物は少なく、この付近の土壇とはほとんど重複しない。

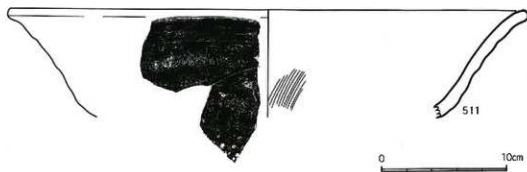
土壇は不定形を呈しており、いくつかの土壇が重複している可能性をもつ。規模は南北1.8m、最大幅1.0mを測る。深さは最深部で0.4m、南側から階段状に深くなる。

・出土遺物

511（第380図）は上鍋で、外面にスス状附着物がみられる。丸底気味の底部から体部が外反しながら口縁にいたる。底部付近には格子目タタキがみられる。



第379図 八坂中遺跡土坑93

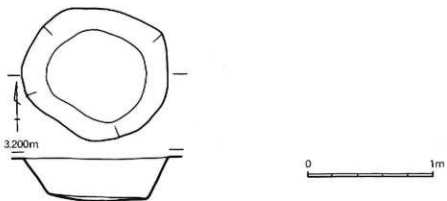


第380図 八坂中遺跡土坑93出土土器

(94) 土坑94

土坑94 (第381図) は、居館3内部の北西隅付近に位置する。

土坑の平面プランは円形を呈し、径1.0～1.2mを測る。深さは検出面から0.3mで、床面はほぼ平坦である。土坑内からは若干の上器片が検出されたのみで、時期は12世紀代か。



第381図 八坂中遺跡土坑94

・出土遺物

512 (第382図) は土師器碗で、高台は断面三角形の低いもの。内面に分割のヘラミガキがある。12世紀代。



第382図 八坂中遺跡土壇94出土土器

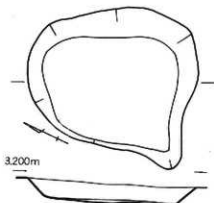
(95) 土壇95

土壇95 (第383図) は、居館3内部のほぼ中央に位置する。

土壇はやや不整形気味であるが、長方形基調を呈する。規模は長さ1.35m、幅1.1mで、深さは0.15mである。土壇内からは土器片が若干出土した。時期は13世紀後半～14世紀初である。

・出土遺物

513 (第384図) は瓦器碗である。東国東型瓦器碗の平底を呈するもので、13世紀後半～14世紀初のものである。



第383図 八坂中遺跡土壇95



第384図 八坂中遺跡土壇95出土土器

(96) 土壇96

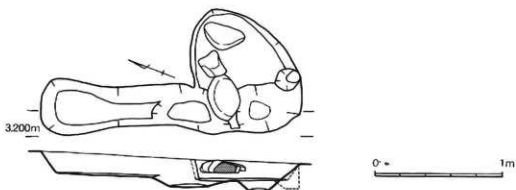
土壇96 (第385図) は、居館3内部の中央から東に寄った位置にある。

土壇は不定形を呈するが、複数の土壇が重複している可能性が考えられる。土壇の南側には、径0.2～0.4mの竈が数個並ぶ。12世紀代のものが。

・出土遺物

514 (第386図) は土師器碗で、口縁がわずかに外反する。内面にはヘラミガキが顕著に残る。12世紀代か。





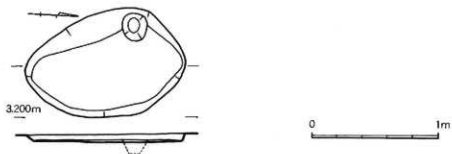
第385図 八坂中遺跡土壇96



第386図 八坂中遺跡土壇96出土土器

#### (97) 土壇97

土壇97(第387図)は、屈館3内部の中央からやや南東寄りに位置する。上壇は楕円形基調を呈し、長径1.3m、短径0.8mの規模を有する。深さは、検出面から0.05mと非常に浅い。土壇内からは若干の土師器片が出土したのみで、時期は不明である。

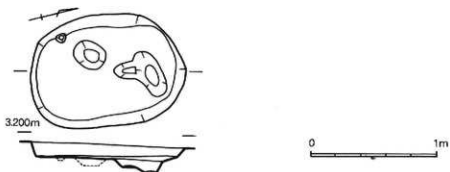


第387図 八坂中遺跡土壇97

#### (98) 土壇98

土壇98(第388図)は、屈館3内部の中央からやや北東寄りに位置する。この周辺は建物が密集しており、建物49、建物52と重複する。

土壇は平面プラン楕円形を呈するものである。規模は長径1.25m、短径0.9mを測り、深さは検出面から0.1mである。床面は平坦であるが、床面に大小の柱穴が数個みられる。土壇内からは若干の土師器片が出土したのみで、時期は不明である。



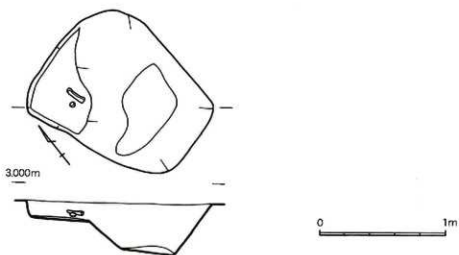
第388図 八板中遺跡土壌98

(99) 土 壌99

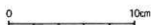
土壌99（第389図）は、居館3内部の北東隅に位置する。土壌は南北方向に長軸をもつ方形基調のものである。規模は、長さ1.3m、幅0.7～1.1mである。床面は階段状を呈し、最深部で検出面から0.4mである。土壌内から検出された遺物は少量であるが、12世紀前後のものか。

・出土遺物

515（第390図）は円盤状高台の底部か。11、12世紀のもの。516（第391図）は不明鉄製品である。



第389図 八板中遺跡土壌99



第390図 八板中遺跡土壌99出土土器



第391図 八坂中遺跡土壙99出土鉄製品

## (100) 土壙100

土壙100(第392図)は、居館3内部の中央北寄りに位置する。

上壙は、居館3を囲む溝12と切り合っており、溝12を切る。溝12は、居館3の北側では明確な掘り替えが認められる。居館の北側では、古い溝12aの幅は3.5~4mあり、土壙100に接するあたりで止まっていたようである。居館3では北西コーナー一部で大きく溝が途切れ、出入り口として利用されていたと考えられるが、この位置で溝12aが途切れたとすれば、居館3の北辺は溝による区画が半分にも達しなかったことになる。溝は掘り替えがなされ、溝12aの最も北側を重複して溝12bが掘られる。溝12bは幅1.0~1.5mで規模を大きく縮小する。深さについても、溝12aに比べ浅くなる。しかし、溝12aより8mほど西にのび、居館3の北辺は半分以上が溝により囲まれたことになった。上壙100は、溝12bがかなり埋没した段階に、溝を切って掘り込まれている。その状況から、場合によっては、居館3が機能を失ってしまった後に、居館3とはまったく関係のない施設として掘られた可能性もある。

上壙100は南北に長い楕円形を呈するものであるが、上面の遺構ラインには出入りがあり、整然さに欠ける。規模は南北12.4m、東西7.0mを測り、本道跡の上壙のなかでも最も大型のものである。深さは最深部において0.8mである。壁については、北側の壁が比較的急な立ち上がりみせるが、他の壁は非常に緩やかである。床面はほぼ平坦で、上壙の北端には石敷きと石組み(第393図)がみられる。

石組みは北側の下端からややあって、東西方向に2段にわたり階段状に組む。階段状の部分は0.3~0.4mの大型の石材を使用し、整然と積まれている。石材のなかには、瓦輪塔の火輪部も含まれている。2段目の背後には0.1~0.2mの石材が整然さを欠きみられるが、本来は石組みがあった可能性もある。石組みは幅約2mにわたり認められ、床面から土壙北側へ上がる階段のようにもみえる。石敷きは、階段状の石組みに沿うように東西方向になされる。かなり長かたがりして乱れてはいるが、0.1~0.3mの石材を使い、床面上に幅約1mにわたり敷いている。

土壙内からは土器などの遺物が検出された。しかし、いずれも破片資料ばかりで、明確なかたちで遺構に伴うものではなく流れ込みとして理解される。本上壙の性格は、石敷きや石組みがあることから単なる廃棄土壙とは考えにくい。また、遺物などの状況から祭祀的な性格をもつ可能性も低い。土壙が、居館3の廃絶後の掘られた可能性を考慮にいれれば、農業用の水溜め施設とも考えられる。しかし、上層などの観察では明確に水溜めの根拠は確認されておらず、このような性格をもつものであったとしても使用期間は短かったものであろう。本上壙の時期は16世紀以降と考えておく。

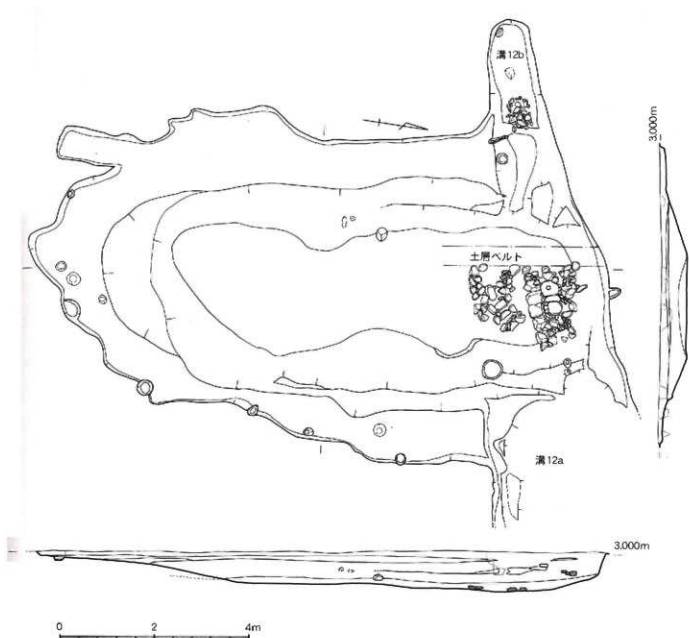
### ・出土遺物

土壙内からは、土器片(第394図)、石製品(第395、396図)が検出された。

517は土師質土器小皿である。底部糸切りで、斜方向に体部が立ち上がる。

518は底部糸切りの平底を呈する瓦器陶で、13世紀後半~14世紀初に位置付けられる東国東型瓦器碗である。

519、520はともに口縁部端反の白磁皿である。15世紀後半から16世紀前半に主体をもつものである。



第392図 八坂中道跡土壌100

521は青磁碗である。外面に蓮弁文をもつが、銘が明確ではなく14世紀代に下る可能性をもつ。

522は、土師質の円盤状土製品である。

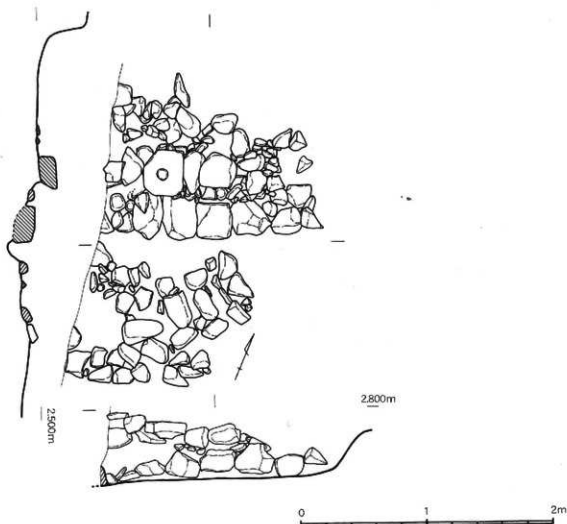
523は茶釜の肩部に付されるもので、16世紀代か。524は土鍋の脚部付け根部分である。内面に横方向のハケメが認められる。525は上錘である。

526は土師質の播鉢である。内面には間隔のあいた摺目が施される。土壌12に近似した播鉢がみられる。

527、528は備前焼播鉢である。527は口縁外面に凹線をもつもので、底部上面は内傾する。528は口縁外面に凹線がみられず、端部も丸みをもっておさめられる。前者は16世紀に、また後者は15世紀に位置付けられる。

530は火鉢と思われ、口縁が大きく内湾する。

529、531～533は甕である。529は暗灰色を呈する瓦質のものである。肩があまり張らず、頸部は短く立ち上がる。頸部には、上下一対になった棒状の刺突が5ヶ所みられ、これが1単位になっているようである。口縁端



第393図 八坂中道跡土壇100石組み遺構

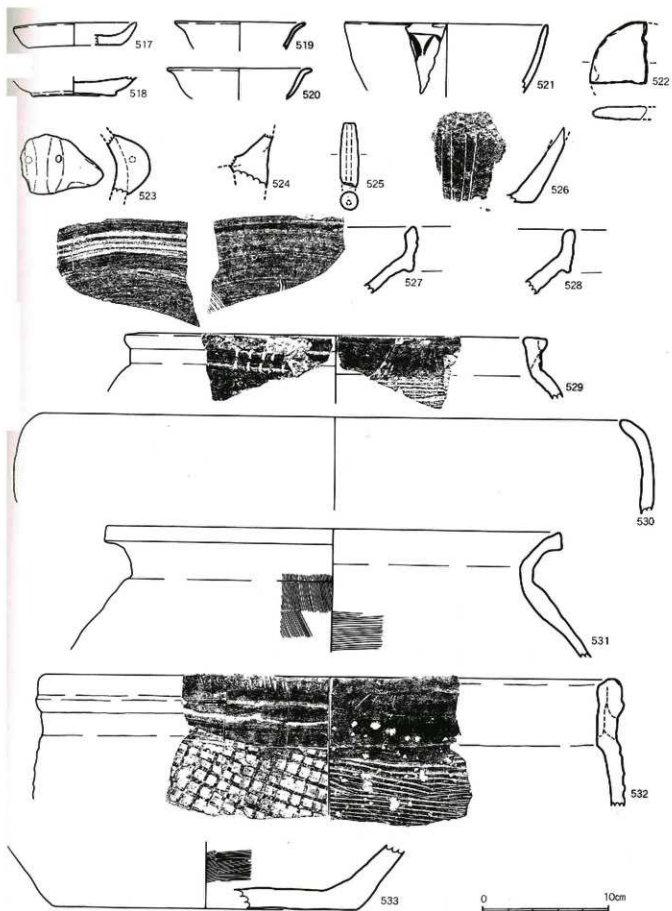
部上面は外傾し、外側が顕著に肥厚する。内面にはハケメがみられる。16世紀代か。531は頭部からL縁が強く緩やかに外反するもので、口縁端部はやや肥厚し角張る。体部内外面にはハケメがみられる。532は暗灰色の瓦質土器である。胴部はまったく張らず、そのまま短い頸部へと続き、外面がやや肥厚する丸みをもったL縁にいたる。L縁端部外面には刻み目が施される。体部外面には格子目タタキが、また内面にはハケメがみられる。533は底部で、内面にハケメがみられる。

534は五輪塔火輪部である。一部が欠損するものの、ほぼ全形が分かるものである。軒の反りは緩やかで、上部には露盤はもたない。また、上部には空・風輪を受けるための穴が穿たれ、下部には水輪部と組み合わせるための凸部がみられる。

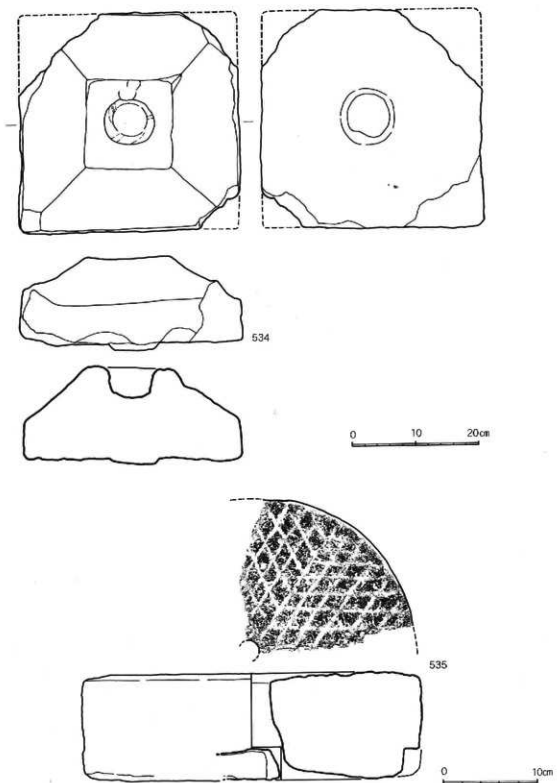
535は挽臼の下臼である。中央に芯棒受の穴があり、側面下部に手かけ穴がみられる。上面の溝は格子目状に掘られている。

536は挽臼の上臼である。含みは1.2cmで、中央に芯棒受がある。側面には角穴の挽手穴が確認される。尺場のかほみは3~4cmである。口ははやや整然さを欠くが、6分割であろう。土溝から右にがりの刷溝が4~5本みられる。

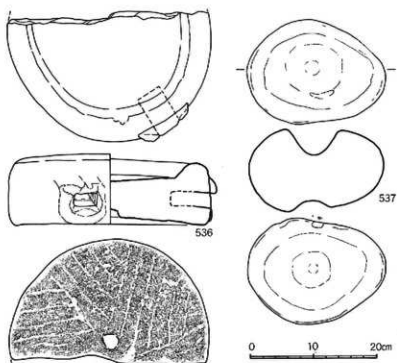
537は凹石である。長さ22.2cm、幅16.5cmの円礫を利用したもので、両面に深さ約4cmと1.5cmの凹み部を作りだす。



第394图 八坂中遺跡土坑100出土土器



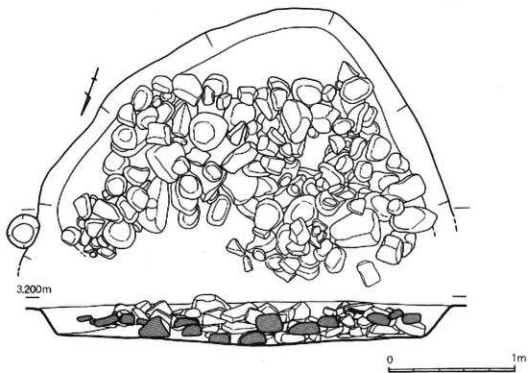
第395圖 八坂中遺跡土坑100出土石製品(1)



第396図 八坂中遺跡土壌100出土石製品(2)

(101) 十 塚101

上塚101 (第397図) は、居館1内部の北東隅に位置する。居館1を方形に囲む溝13と重複しており、溝13により切られる。土塚の全形は不明だが、現状で南北約2m、東西3.3mを測る。本来的には方形基調を呈する



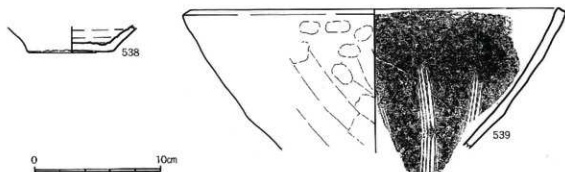
第397図 八坂中遺跡土塚101



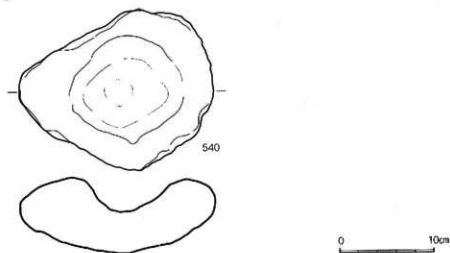
ものである可能性が高い。土壌内には0.1～0.4mの礫が充填しており、一括して廃棄した状況がみてとれる。土壌の深さは検出面から0.25～0.3mで、床面はほぼ平坦である。16世紀の所産と考えられる。

・出土遺物

出土遺物（第398、399図）には、土器と石製品がみられる。538は土師質土器杯である。底部糸切りで、底径6.8cmを測る。体部は外反気味に立ち上がる。16世紀のもの。539は瓦質土器鉢鉢である。体部はそのまま口縁にいたり、端部は肥厚したりせず角張る。体部外面にはユビオサエと斜方向のケズリがみられ、内面には4ないしは5本の摺目がみられる。15、16世紀のものであろう。540は凹石である。大きさは長さ20.7cm、幅17.0cmで、片面に径約12cm、深さ約3.5cmの凹みがみられる。



第398図 八坂中遺跡土壌101出土土器



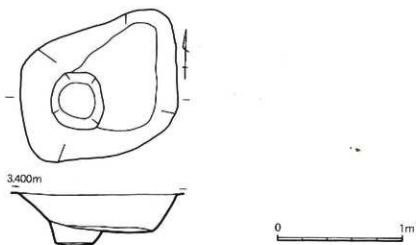
第399図 八坂中遺跡土壌101出土石製品

(102) 土 壌102

土壌102（第400図）は、居館1内部の中央からやや北西に寄った位置にある。

土壌の平面プランは長方形基調を呈し、東西方向に長い。その規模は、長辺1.2m、短辺0.8mを測る。深さは検出面から0.2～0.3mで床面はほぼ平坦である。また、床面の西端には、柱穴状のものがみられる。土壌内からの遺物は散発的で、土器片がわずかに検出されたのみである。

遺構の時期は明確にできない。



第400図 八坂中遺跡土壙102

### (103) 土壙104

土壙104 (第401図) は、居館1内部の北端に位置する。

土壙はいくつかの柱穴が重複するが、一辺0.8～1.0mの方形を呈する。深さは検出面から0.1mで、床面は平坦である。土壙内からの遺物は少なく、若干の上器片は検出された。図示できるものはないが、14世紀以降か。



第401図 八坂中遺跡土壙104

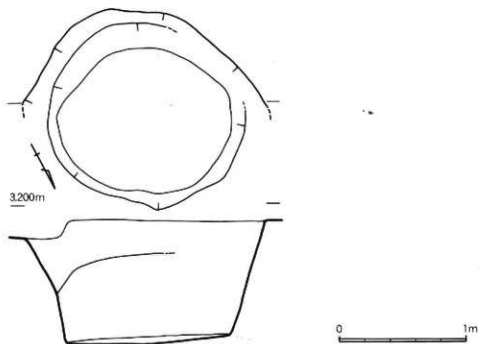
### (104) 土壙106

土壙106 (第402図) は、居館1内部の北東隅にあり、居館1を画する溝13と重複する。層位的には明確にできなかったが、轡の入り方などから溝13により切られていると判断した。土壙は円形基調を呈し、径約1.6mの規模をもつ。深さは検出面から0.9mで、床面は平坦である。遺構の16世紀である。

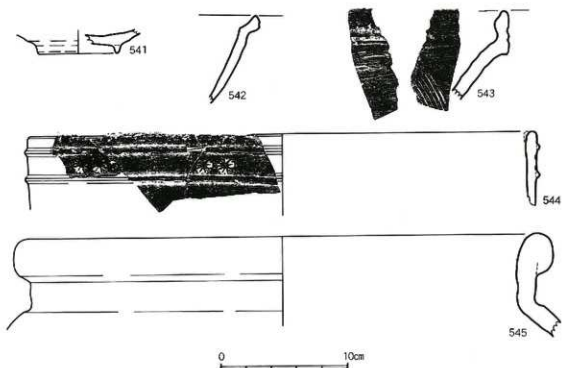
#### ・出土遺物

出土遺物 (第403図) のうち、541は瓦器椀である。底部の切り離しは不明だが、顕著な押し出しは認められない。高台やミガキから12世紀後半代の東国東型瓦器椀と思われる。542は瓦質の土鍋である。15～16世紀の

ものか。543は、16世紀代の備前焼播鉢。544は瓦質土器火鉢で、16世紀前半に主体を築くものである。545は備前焼甕である。



第402図 八坂中遺跡土壌106

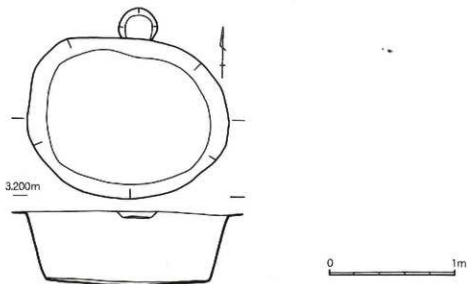


第403図 八坂中遺跡土壌106出土土器

(105) 土 壙107

土壙107(第404図)は、居館2の南西コーナー部に位置する。

土壙の平面プランは楕円形で、長径1.6m、短径1.2mの規模を有する。深さは検出面から0.55~0.6mで、床面は平出である。土壙内からは散発的に土器片が検出されたのみで、時期は不明である。



第404図 八坂中遺跡土壙107

(106) 土 壙108

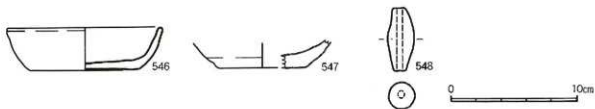
土壙108(第406図)は、居館2の北西コーナー部に位置する。建物19と位置的に重複するが、建物の柱穴を切っており、建物19に後出する。また、上層は居館2を囲む溝11とも重複していた可能性があるが、両者の間に擾乱がみられ、その関係は不明である。

土壙は東西方向に長いもので、不定形を呈する。その規模は、現状で東西6.4m、南北4.2mを測る。深さは検出面から0.1~0.2mで、東側が一段低くなる。遺構内からの遺物は、遺構規模に比べて少なく、土器片が散発的に検出されたのみである。

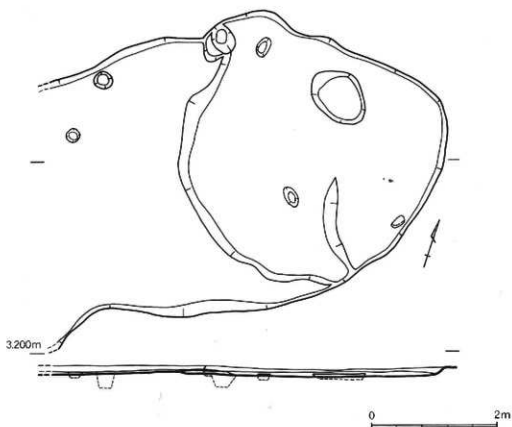
遺構の時期14世紀代か。

・出土遺物

出土遺物(第405図)のうち、546は土師質土器杯である。体部は緩やかに立ち上がり、直立気味になる。14世紀代のものか。547は平底をなす13世紀後半~14世紀初めの瓦器椀である。548は土師で、紡錘形を呈する。



第405図 八坂中遺跡土壙108出土土器



第406図 八坂中遺跡土壙108

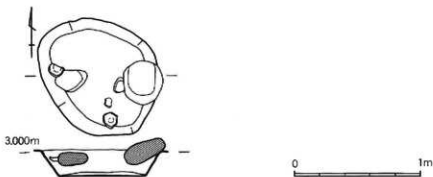
(107) 土 壙109

土壙109 (第407図) は、厩館2の北西コーナー付近に位置し、北側に土壙108がみられる。

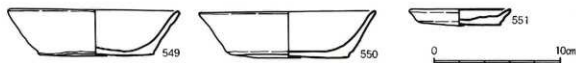
土壙は楕円形基溝を呈し、長径1.0m、短径0.9mを測る。深さは0.2mで、土壙内には0.2～0.3mの礎がみられる。出土土器のうち、土師質上器環2個体と小皿1個体は完形にちがひもで、遺構の時期は14世紀か。

・出土遺物

出土遺物 (第408図) のうち、549、550は土師質上器環、551は小皿である。以上は13世紀後半～14世紀初の所産。



第407図 八坂中遺跡土壙109



第408図 八坂中遺跡土壙109出土土器

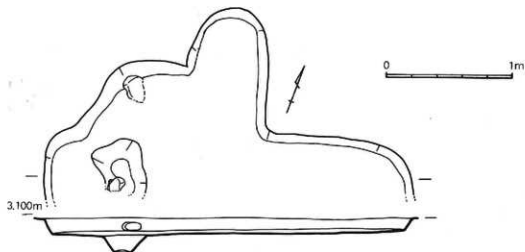
### (108) 土壙110

土壙110(第409図)は、屈館1の北西約20mに位置する。

土壙は南半が調査区外に及ぶため全形は不明であるが、不定形を呈する。現状で東西2.9m、南北1.5mである。深さは検出面から0.1mで、床面は平坦である。

#### ・出土遺物

出土遺物(第410図)のうち、552は土師質土器坏である。口径は11.9cmを測る。14世紀代のものである。553は瀬入品の瓦質土器土鍋である。頸部はいったん短く直角に折れ、再び立ち上がる。



第409図 八坂中遺跡土壙110



第410図 八坂中遺跡土壙110出土土器

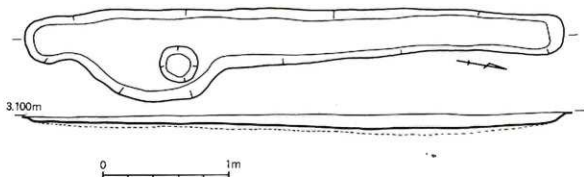
### (109) 土壙111

土壙111(第411図)は、土壙110同様に屈館1の北西約20mに位置する。

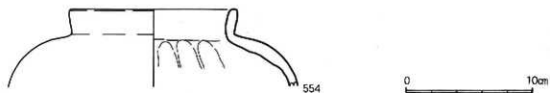
南北に長い溝状を呈し、長さ4.3m、幅0.3~0.7mを測る。深さは0.05~0.1mと比較的浅いものである。遺物は少なく岩下の上器片が出土したのみである。遺構の時期は、15、16世紀と思われる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第412図)のうち、554は球形の体部から頸部が短く立ち上がり、そのまま口縁にいたるものである。茶釜の可能性をもつ。15、16世紀のものである。



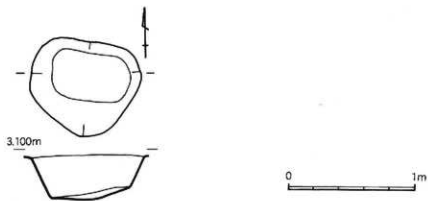
第411図 八坂中遺跡土壇111



第412図 八坂中遺跡土壇111出土土器

(110) 土壇112

土壇112（第413図）は、やはり居館1の北西外方に位置する。本土壇の西方約8mには、土壇111がみられる。土壇は不整形形で、南北0.7m、東西0.9mの規模をもつ。深さは0.25～0.35mで、南側の壁の傾斜が他に比



第413図 八坂中遺跡土壇112



第414図 八坂中遺跡土壇112出土土器

べ緩やかである。土壌内から若干の土器片が出土したのみであるが、時期は15、16世紀に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第414図）のうち、555は青磁碗で、口縁部がわずかに濺反る。15、16世紀のものであろう。

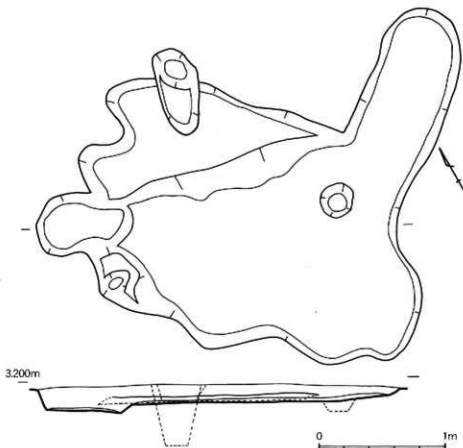
(111) 土 塋 113

土塋113（第415図）は、やはり居館1の北西外方に位置する。このあたりは、土塋が点々とみられるが建物などは確認されていない。

土塋は不定形を呈するもので、いくつかの土塋が重複している可能性もある。規模は南北3.1m、東西2.8mを測り、深さは0.05～0.2mである。土塋の時期は16世紀か。

・出土遺物

出土遺物（第416図）のうち、556は東播系こね鉢である。12世紀のものか。557は土鍋か。口縁端部が肥厚する。558は暗灰色を呈する瓦質の土鍋か。外面にスス状付着物がみられる。



第415図 八坂中遺跡土塋113



第416図 八坂中遺跡土塋113出土土器



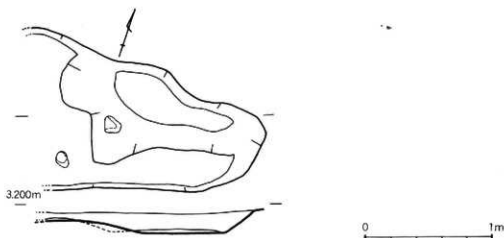
### (112) 土 城114

上層114 (第417図) は、調査区の西端に位置する。

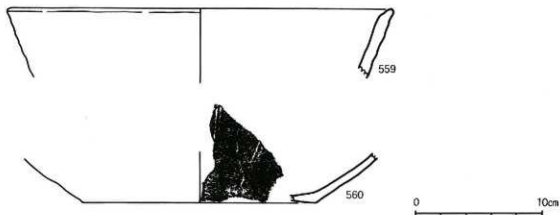
土城は、西半が攪乱を受けており全形は不明である。東西方向に長いもので、現状で東西1.9m、南北1.3mを測る。深さは0.05～0.15mで、床面に凹凸がみられる。遺構の時期は15、16世紀と思われる。

#### ・ 出土遺物

出土遺物 (第418図) のうち、559は土鍋である。560は瓦質の播鉢で、15、16世紀のもの。



第417図 八坂中遺跡土城114

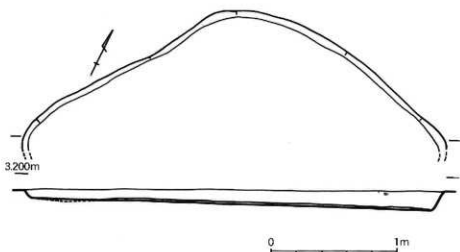


第418図 八坂中遺跡土城114出土土器

### (113) 土 城115

土城115 (第419図) は、やはり居館1の北西外方に位置する。このあたりは、遺構がまばらになってきており、これより北側についてはほとんど遺構が展開しないものと思われる。この状況は居館3の北側と同じである。

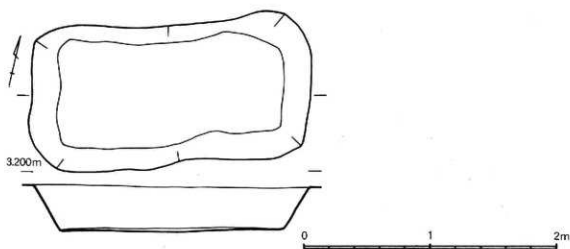
上層は南半が攪乱を受けているため、全形については明らかではない。現状では東西方向に長く、東西3.35m、南北1.2mである。深さは検出面から0.05～0.15mで、西から東にむかい深くなる。土城内からは備前焼片などが検出されたが図示できるものはない。遺構の時期は15、16世紀か。



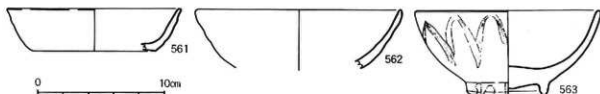
第419図 八坂中遺跡土坑115

(114) 土坑116

土坑116 (第420図) も戸館1の北西外方に位置する。土坑は平面プラン長方形を呈し、長辺2.2、短辺1.2mを測る。深さは0.35mで、床面は平坦である。木上端は土壘葺の形態をなすことに加え、完形の青磁碗が出土していることから土壘葺の可能性も高い。しかし、偏前装束の大きな破片が埋上に含まれることを考え、ここでは通常の土坑として扱った。時期は15世紀か。



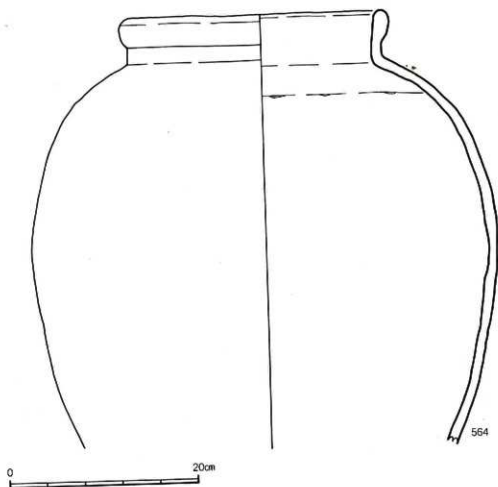
第420図 八坂中遺跡土坑116



第421図 八坂中遺跡土坑116出土土器

・出土遺物

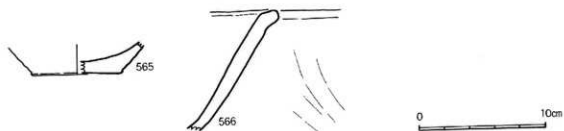
出土遺物（第421、422図）のうち、561は土師質土器環で、体部が直立気味である。14世紀代か、562は平底をなす東国東型瓦器碗で、14世紀初前後のものか。563は青磁碗である。軸切れの目立つ軸がかけられており、蓮弁文も確認される。全体として軽な作りの感がある。14世紀代のもの。564は15世紀の備前焼である。



第422図 八坂中遺跡土壙116出土土器(2)

(115) 上 壙117

土壙117（第424図）は、土壙116の南西側に位置する。やはり、居館1の北西外方である。上端は不定形を呈し、長さ1.65m、幅1.35mの規模をもつ。深さは検出面から0.15～0.3mで、床面に高低が

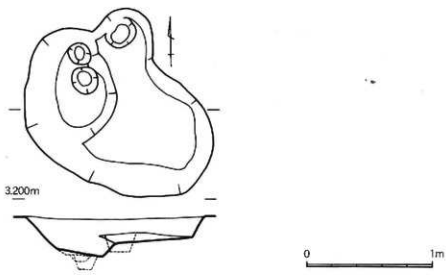


第423図 八坂中遺跡土壙117出土土器

みられる。土壙内からは若干の土器片が出土したのみであるが、時期は15、16世紀に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第423図）のうち、565は13世紀後半～14世紀初の瓦器椀。566は土鍋で外面にケズリがある。15、16世紀代か。



第424図 八坂中遺跡土壙117

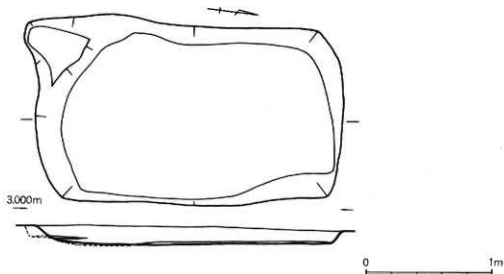
(116) 土壙118

土壙118（第425図）は、居館3の東側外方に位置する。

土壙は長方形を呈し、長さ2.4m、幅1.5mの規模をもつ。深さは検出面から0.1～0.15mと、比較的浅い。土壙内からは若干の土器片が出土したのみであるが、土壙の形態から上墳墓の可能性もある。14世紀代のものか。

・出土遺物

出土遺物（第426図）のうち、567は須恵質の甕で、龜山焼か。13、14世紀のものであろう。



第425図 八坂中遺跡土壙118



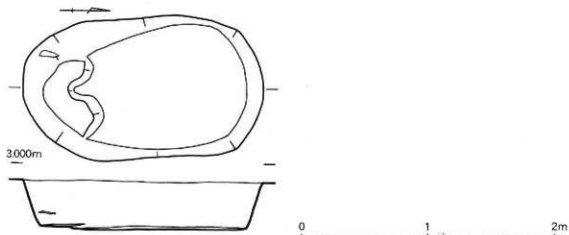
第426図 八坂中遺跡土壙118出土土器

### (117) 土壙119

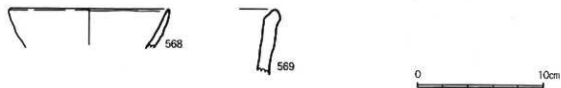
土壙119（第427図）は、屈館3の東側外方に位置する。上壙118と屈館3の間に位置しており、土壙118と並行するようにみられる。土壙は楕円形を呈し、長径1.9m、短径1.1mの規模をもつ。上壙の形態から上壙墓の可能性をもつ。遺構の時期は14世紀か。

#### ・出土遺物

出土遺物（第428図）のうち、568は13～14世紀の瓦器碗。569は土鍋で口縁部が退化する。14世紀のもの。



第427図 八坂中遺跡土壙119



第428図 八坂中遺跡土壙119出土土器

### (118) 土壙120

土壙120（第429図）は、屈館3の東側外方に位置する。屈館3東方の溝5と溝6に伏された部分は、掘立柱建物や土壙の集中する場所である。本土壙も、位置的に建物102と重複する。

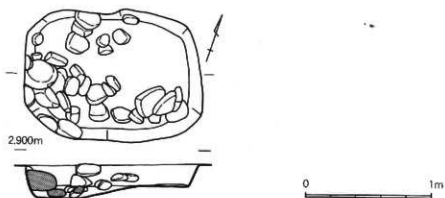
土壙は平面プランが長方形を呈する。その規模は長さ1.4m、幅1.05mを測る。深さは検出面から0.2～0.3mで、床面は高低差をもつ。土壙内からは0.1～0.3mの礫がまとまって検出された。特に、土壙の南から西にかけ

て集中する傾向にある。

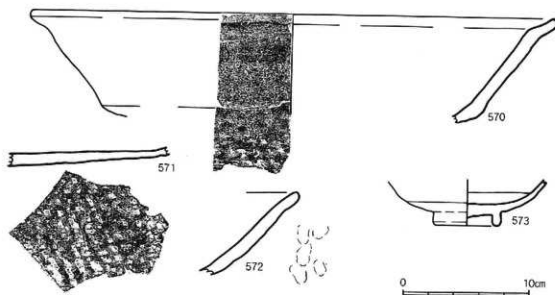
遺構の時期は14世紀以降か。

・出土遺物

出土遺物（第430図）のうち、570～572は土鍋である。570は11径に比し浅い器形である。11縁は短く外に折れ、やや内湾気味に端部にいたる。底部には格子目タタキがみられる。571は土鍋底部で、格子目タタキが施される。572は口縁部が折れないものである。573は青磁碗である。



第429図 八坂中遺跡土坑120

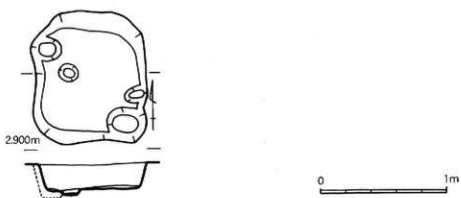


第430図 八坂中遺跡土坑120出土土器

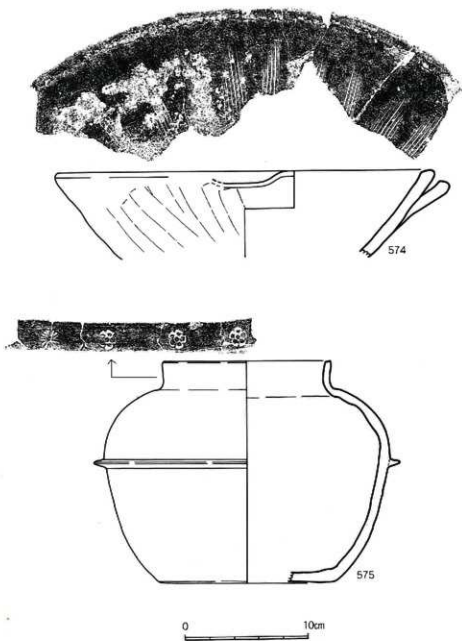
(119) 土 坑121

土坑121（第431図）は、居館3の東側外方に位置する。土坑の周辺は建物や土坑が集中しており、位置的に建物103と重複する。

土坑はいくつかの柱穴と重複するが、基本的に長方形を呈する。その規模は長さ1.05m、幅0.85mを測る。深さは検出面から0.2mで、床面は平坦である。遺構の時期は15、16世紀に位置付けられる。



第431圖 八坂中遺跡土坑121



第432圖 八坂中遺跡土坑121出土土器

・出土遺物

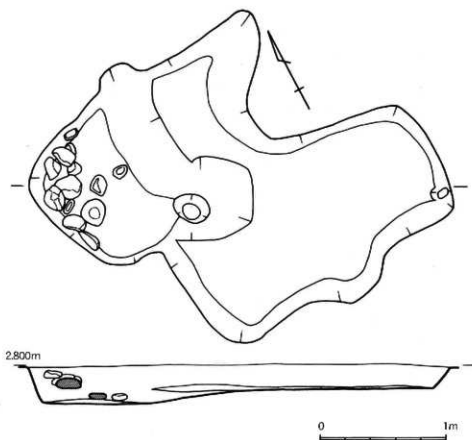
出土遺物（第432図）のうち、574は播鉢である。口縁部は内側へわずかに肥厚する。外面には斜方向のケズリが施される。内面の摺目は7本単位である。16世紀か。575は茶釜である。肩の貼り付け部分は欠くが、体部中段に突帯が付される。口縁外面には2種類のスタンプがみられる。15、16世紀のものか。

(120) 土 壙122

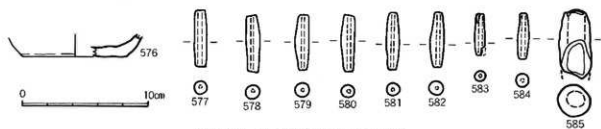
土壙122（第433図）は、厩舎3の東側外方に位置する。現状は不定形を呈するが、いくつかの土壙が重複している可能性が高い。現状の規模は、南北2.45m、東西2.3mを測る。土壙の時期は13、14世紀代か。

・出土遺物

出土遺物（第434図）のうち、576は上飾質土器杯である。体部の立ち上がりは、直立気味である。13、14世紀代のものか。577～585は十銭である。585はやや大型であるが、他は細身のものである。



第433図 八坂中遺跡土壙122



第434図 八坂中遺跡土壙122出土土器

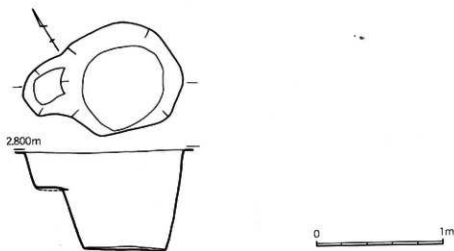


### (121) 土 壙123

土壙123 (第435図) は、居館3の東側外方に位置し、居館を囲む溝11に接するようにみられる。土壙の平面形は不定形で、長さ1.25m、幅0.85mの規模をもつ。深さは最深部で0.75mである。12世紀後半のものか。

#### ・出土遺物

出土遺物 (第436図) のうち、586は瓦器碗である。着減のため明確ではないが、体部内外面にはヘラミガキが施されているようである。12世紀代か。587は龍来窯系青磁碗で、内面に文様がみられる。12世紀後半。



第435図 八坂中遺跡土壙123



第436図 八坂中遺跡土壙123出土土器

### (122) 土 壙124

土壙124 (第437図) は、居館3の東側外方に位置する。土壙は不定形を呈し、加えて柱穴もいくつか重複する。土壙の規模は、南北2.6m、東西1.5mを測る。時期は13、14世紀代と思われる。

#### ・出土遺物

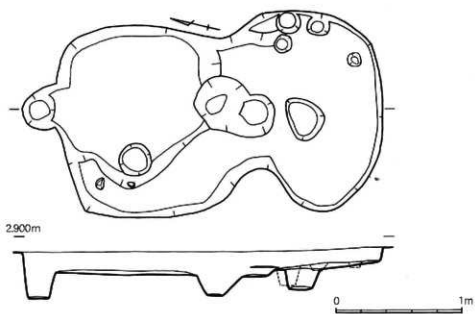
出土遺物 (第438図) のうち、488は東国東型瓦器碗で、平底を呈することから13、14世紀に位置付けられる。589は須恵質の甕である。

### (123) 土 壙125

土壙125 (第439図) は、居館3の東側外方に位置する。土壙は南北方向に長く、南北2.4m、東西1.5mの規模をもつ。土壙内からは若干の上器片が検出されたのみである。土壙の時期は、12世紀か。

#### ・出土遺物

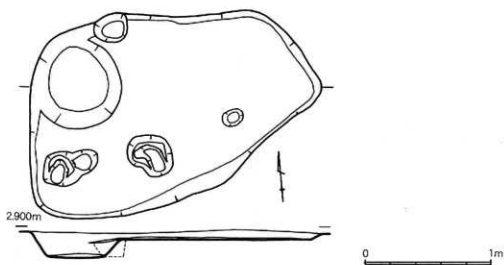
590 (第440図) は上師黄土器小皿である。体部は緩やかに立ち上がるもので、12世紀代のものか。



第437図 八坂中遺跡土壇124



第438図 八坂中遺跡土壇124出土土器



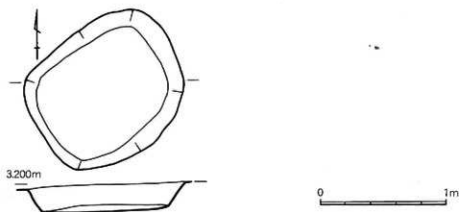
第439図 八坂中遺跡土壇125



第440図 八坂中遺跡土壇125出土土器

(124) 土 壙 126

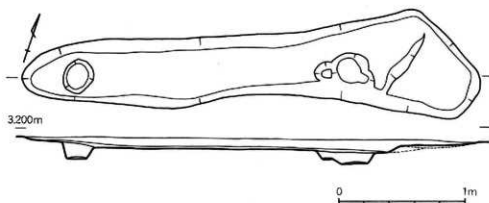
土壙126(第441図)は、溝6のすぐ東側に位置する。上壙は楕円形を呈し、長辺1.25m、短辺1.05mの規模をもつ。深さは検出面から0.2mで、床面は平坦である。上壙内からの出土遺物は散発的で、土器片がわずかに検出されたのみである。遺構の時期は不明である。



第441図 八坂中遺跡土壙126

(125) 土 壙 127

土壙127(第442図)は、居館3の北側約3mに位置する。上壙は東西方向に長くのびる溝状を呈し、居館3と並行するようにみられる。規模は東西3.6m、南北0.4~0.8mである。土壙内からは若干の土器片が出土したのみで、時期は不明である。



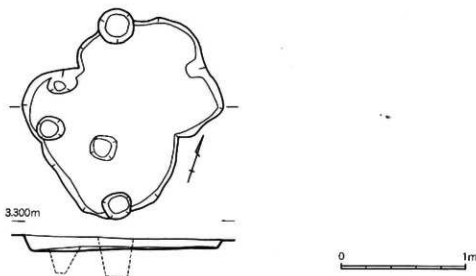
第442図 八坂中遺跡土壙127

(126) 土 壙 128

土壙128(第443図)は、居館2の南東側外方に位置する。この周辺は建物や土壙が密集するもので、木土壙も位置的に建物96と重複する。土壙は不定形を呈し、南北1.6m、東西1.3mの規模を有する。深さは検出面から0.05~0.1mである。時期は12世紀代か。

・出土遺物

591 (第444図)は土鍋である。口縁部は強く外に折れ、体部は内外面ナデである。12世紀代のものか。



第443図 八坂中遺跡土壊128



第444図 八坂中遺跡土壊128出土土器

(127) 上 壙129

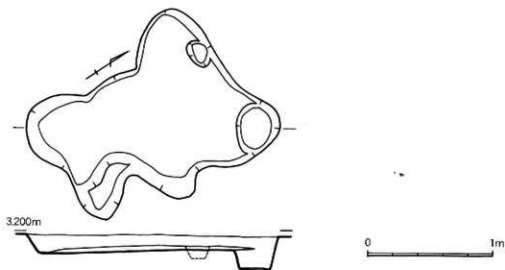
土壙129 (第446図)は、居館2の南東側外方に位置する。土壙の周辺は建物や土壊が数多くみられ、本土壊も建物97と重複する。土壙は不定形を呈し、南北1.5m、東西1.35mの規模をもつ。土壙内からは若干の土器片が出土したのみであるが、時期は12世紀代と思われる。

・出土遺物

出土遺物 (第445図)のうち、592～594は土師器類と思われる。592は体部内外面が著しい磨滅のため調整不詳である。593は黄白色を呈する底部で、低い高台が付される。594は口縁部で、内面にはヘラミガキが残る。以上は、12世紀代に位置付けられる。



第445図 八坂中遺跡土壊129出土土器



第446図 八坂中遺跡土坑129

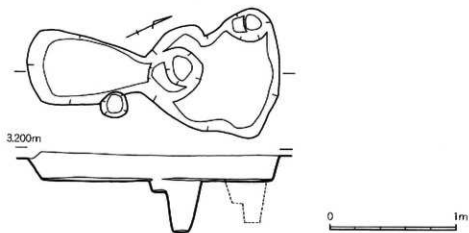
(128) 十 竈130

土竈130（第447図）は、厩館2の南東側外方に位置する。建物97と重複関係にある。

土竈は柱穴などと重複するものの不定形を呈し、南北方向に長軸をもつ。規模は、長さ2.0m、幅1.0mを測り、深さは検出面から0.2mである。土竈内からの遺物は少ないが、土竈の時期は13、14世紀か。

・出土遺物

595（第448図）は、上陸質土器環である。13、14世紀代のものか。



第447図 八坂中遺跡土竈130

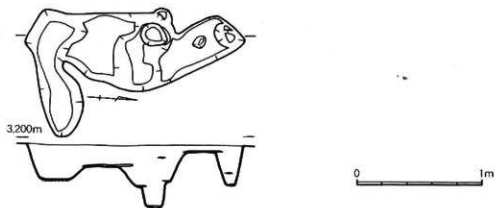


第448図 八坂中遺跡土竈130出土土器

(129) 土 壙 131

土壙131(第449)は、居館2の南東側外方に位置する。

土壙は不定形を呈し、一部柱穴と重複する。南北方向に長くのびるもので、南北1.65m、東西1.0mを測る。深さは検出面から0.05~0.3mで、床面に高低差をもつ。遺物は図示できないものばかりであるが、14世紀か。



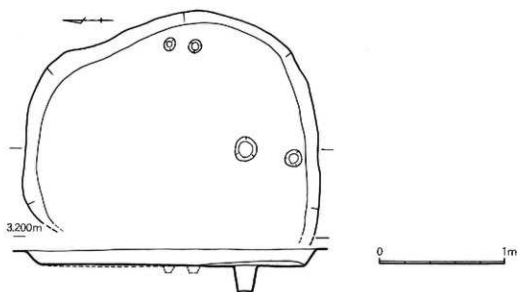
第449図 八坂中遺跡土壙131

(130) 土 壙 132

土壙132(第450)は、居館2の南東隅外側に位置する。土壙は居館2を二重に囲む溝のうち、外側の溝である溝10に切られる。土壙の規模は、南北2.3m、東西1.8m以上で、深さは検出面から0.1mで、床面は平坦である。遺構の時期は12世紀前後か。

・出土遺物

596(第451)は、土師質土器小皿である。体部はほとんど立ち上らず、斜めにのびる。12世紀前後か。



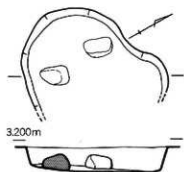
第450図 八坂中遺跡土壙132



第451図 八坂中遺跡土壙132出土土器

(131) 土壙133

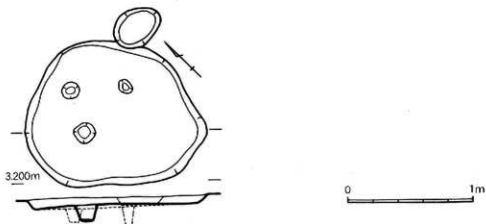
土壙133（第452図）は、居館2内部の南東隅に位置する。居館を囲む溝11と重複しており、溝11に切られる。土壙は不定形を呈し、南北1.15m、東西0.8m以上の規模をもつ。深さは検出面から0.2mで、床面は平坦である。床面に0.2mほどの礎が2個ある以外に、遺物はほとんど認められなかった。時期不明である。



第452図 八坂中遺跡土壙133

(132) 土壙134

土壙134（第453図）も、居館2内部の南東隅に位置する。土壙は楕円形基調の不整形を呈するもので、規模は長径1.4m、短径1.1mを測る。深さは、検出面から0.05～0.1mと非常に浅いものである。土壙内からは土器片などが散発的に検出されたのみで、時期は不明である。



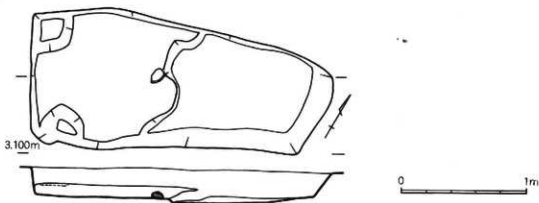
第453図 八坂中遺跡土壙134

### (133) 土 壙135

土壙135(第454図)は、居館2の南東隅外側に位置する。土壙は長方形基調を呈し、東西方向に長軸をもつものである。規模は長辺2.2~2.4m、短辺0.7~1.0mを測る。深さは0.2~0.25mで、床面には高低差がみられる。時期は11世紀か。

#### ・出土遺物

597(第455図)は内黒土器椀で、内面にはヘラミガキがみられる。11世紀のものであろう。



第454図 八坂中通跡土壙135



第455図 八坂中通跡土壙135出土土器

### (134) 土 壙136

土壙136(第456図)は、居館2内部の南東隅に位置する。居館を囲む溝11と重複しており、溝11に切られる。全形は不明だが、長方形基調を呈するものと思われる。規模は南北2.7m、東西2.8m以上である。深さは検出面から0.05mと非常に浅い。遺構内からは若干の土器片が検出されたのみで、時期は不明である。

### (135) 土 壙137

土壙137(第457図)は、居館2内部の南東隅に位置する。南北方向に長い溝状を呈するもので、南端は柱穴と重複する。規模は長さ約2m、幅0.2~0.3mで、深さは検出面から0.05~0.1mである。土壙内からの遺物は、土器片が若干検出されたのみで、時期は不明である。

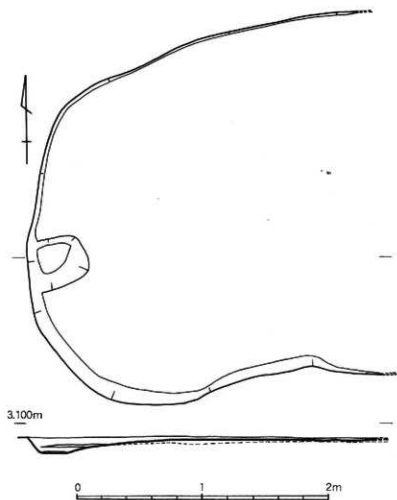
### (136) 土 壙138

土壙138(第460図)は、居館1内部の北東隅に位置する。居館1を囲む溝13から派生する土壙状の部分と重複する。土壙は不定形を呈しており、現状で南北1.3、東西1.0m以上の規模をもつ。深さは検出面から0.4~0.7mで、南から北にむかい深くなる。時期は15、16世紀か。

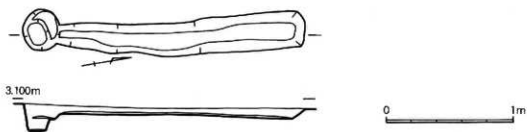
#### ・出土遺物

598(第458図)は、15、16世紀の青磁碗。599(第459図)は円石である。





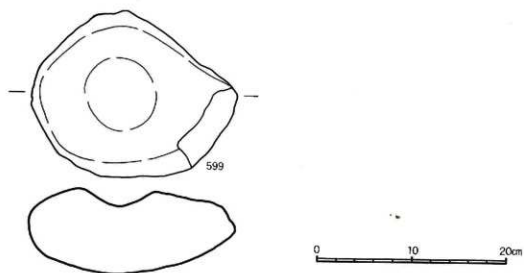
第456図 八坂中遺跡土溝136



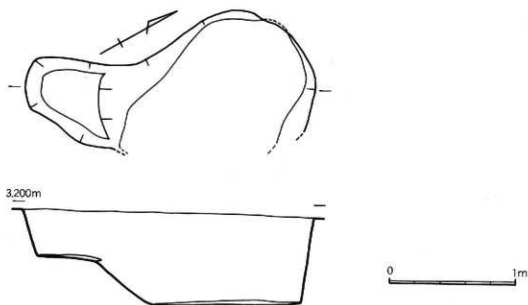
第457図 八坂中遺跡土溝137



第458図 八坂中遺跡土溝138出土土器



第459図 八坂中遺跡土壙138出土石製品



第460図 八坂中遺跡土壙138

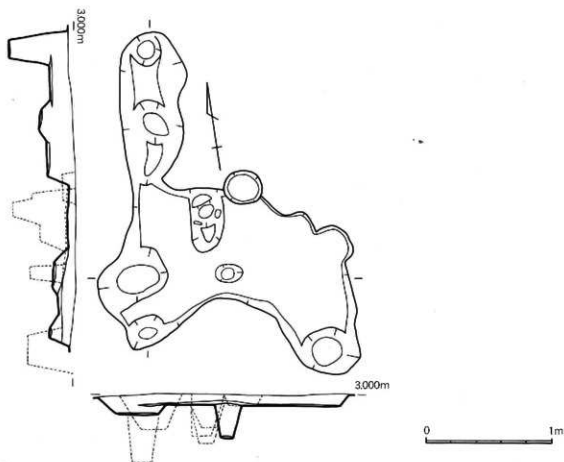
### (137) 上 壙139

土壙139(第461図)は、居館2の南東隅外側に位置する。この周辺は建物や土壙などが密集するが、本土壙も建物116と位置的に重複する。また、土壙の南側に隣接するように上壙墓21もみられる。

上壙は本来的に不定形を呈し、加えていくつかの柱穴が重複する。その規模は、東西2.0m、南北2.4mを測る。深さは検出面から0.05~0.2mで、床面に高低差が認められる。土壙内からは土器片が散発的に出土したのみで、ある。土器は古相のものも含むが、14世紀代に位置付けられる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第462図)のうち、600は土師器碗である。黄白色を呈し、口縁がわずかに外反する。内外面にはヘラミガキがみられる。12世紀初前後か。601は内黒土器碗で、磨滅が著しくミガキは不明。11、12世紀か。



第461図 八坂中遺跡土塙139



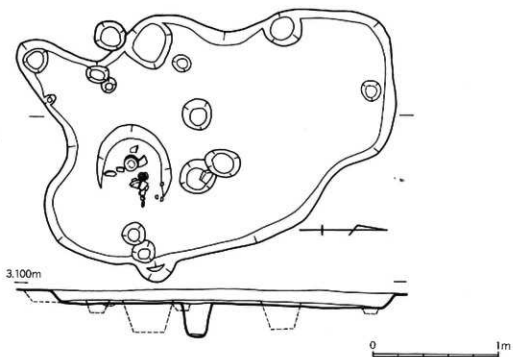
第462図 八坂中遺跡土塙139出土土器

### (138) 十 塙140

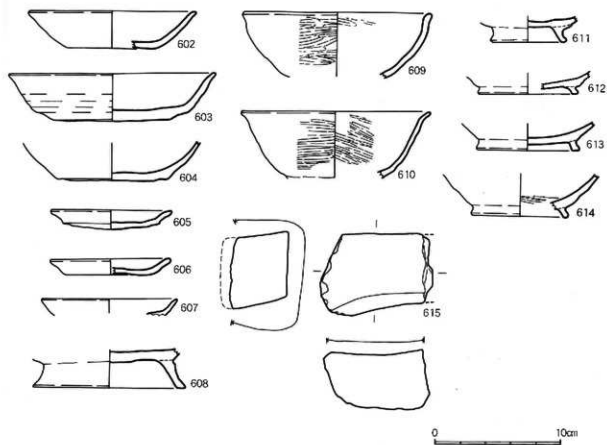
上塙140(第463図)は、居館2の南東隅外側に位置する。周囲は建物などの遺構が密集しており、土塙も数棟の座物と重複する。上塙は不定形を呈し、加えていくつかの柱穴が重複する。その規模は長さ3.0m、幅1.95mを測る。深さは検出面から0.1mで、床面は平坦である。土塙内からは土器片が検出され、12世紀初前後に位置付けられる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第464図)のうち、602~604は土師質土器片である。602は体部が緩やかに立ち上がり、斜方向にのびる。復元口径は小破片のため不確定である。603は口径16.4cmを測る。底部糸切りで、体部は下半部で丸みをもち、口縁はわずかに外反する。604は底部資料で、体部が斜方向に立ち上がる。



第463回 八坂中遺跡土坑140



第464回 八坂中遺跡土坑140出土遺物

605～607は土師質土器小皿である。605は復元口径9.4cmで、底部の切り離しは不明である。体部は外反しながら口縁にいたる。606は底部糸切りで、体部は斜方向に立ち上がり、外反気味に口縁部にいたる。607は復元口径10.6cmである。

608は土師器椀である。高い高台が外開きに付される。

609～614は内黒土器椀である。609は口縁部がわずかに外反するもので、端部は丸くおさめる。内面の一部が磨滅のため不明だが、内外面ともヘラミガキが施される。610は609に比べやや薄手で、口縁部がやはり外反する。内外面にはヘラミガキが施される。611は他に比べ小型品であるが、やや高い高台が外開きに付される。612～614は、611に比べて低い高台が付される。

615は砥石である。破損品のため全形は不明だが、残存する3面に使用の痕跡がみられる。

以上の土器の時期は、一部古相の時期を含むものの、12世紀初前後に位置付けられる。

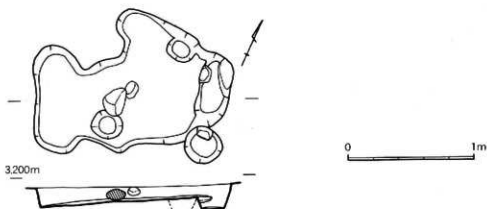
### (139) 土 壙141

土壙141（第465図）は、居館2の南東隅外側に位置する。

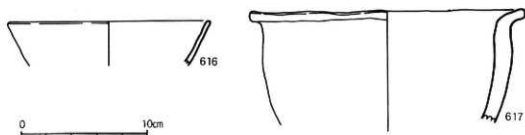
土壙は不定形を呈し、長さ1.55m、幅1.05mの規模を有する。深さは、検出面から0.1～0.2mである。土壙内からは散発的に土器片が出土したのみで、時期は12世紀代か。

#### ・出土遺物

出土遺物（第466図）のうち、616は土師器椀であるが、磨滅のためミガキ不明。12世紀。617は土鍋である。



第465図 八坂中遺跡土壙141



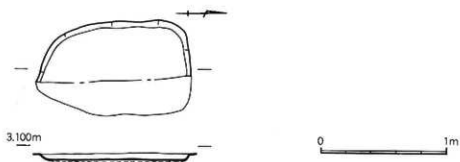
第466図 八坂中遺跡土壙141出土土器

(140) 土 壙142

土壙142 (第467図) は、厩館2の南東隅外側に位置する。土壙の東側に隣接して、土壙墓21がある。土壙は楕円形を呈し、その規模は長径1.2m、短径0.7mを測る。深さは検出面から0.05mと浅く、出土遺物もわずかである。しかし、時期の決め手になるようなものがなく、本土壙の時期は不明である。

・出土遺物

618 (第468図) は、土錐である。



第467図 八坂中遺跡土壙142



第468図 八坂中遺跡土壙142出土土器

(141) 土 壙143

土壙143 (第470図) は、厩館2の南東隅外側に位置する。

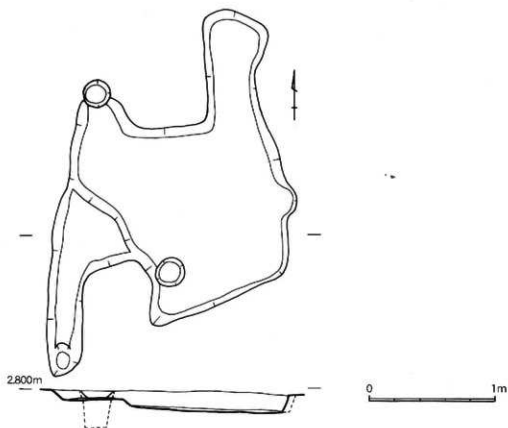
土壙はいくつかの土壙が重複する可能性もあるが、現状で不定形を呈する。規模は南北2.3m、東西1.85mを測る。土壙内の遺物は少数であるが、それらから12世紀代の所産とおもわれる。

・出土遺物

619 (第469図) は土師器碗と思われる。磨減が著しくミガキは不明である。12世紀代か。



第469図 八坂中遺跡土壙143出土土器



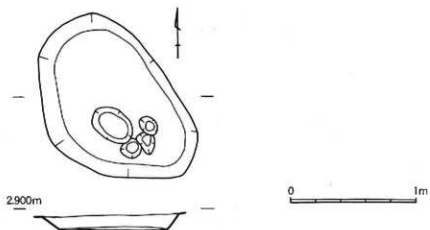
第470図 八坂中遺跡土壇143

(142) 土壇144

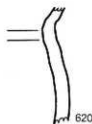
土壇144 (第471図) は、居館3東側の外に位置する。土壇は長さ1.5m、幅1.0mの規模をもつ。12世紀か。

・出土遺物

620 (第472図) は土鍋である。12世紀代のもと思われる。



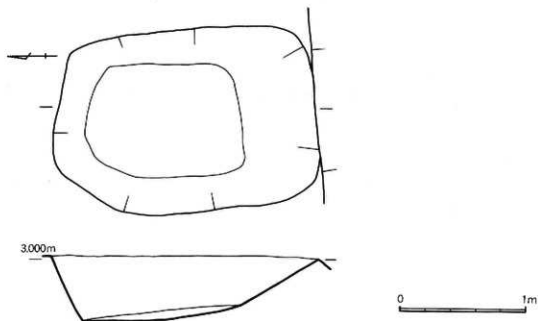
第471図 八坂中遺跡土壇144



第472図 八坂中遺跡土壙144出土土器

(143) 土壙145

土壙145（第473図）は、居館2の南西隅付近に位置し、居館を囲む溝11に接するようにみられる。土壙の平面プランは長方形基調を呈し、長さ2.1m、幅1.4mを測る。深さは検出面から0.4～0.5mで、南側の壁の立ち上がりのみが緩やかである。時期は明らかにできない。



第473図 八坂中遺跡土壙145

(144) 土壙146

土壙146（第474図）は、居館3内部の中央南側に位置する。土壙は居館3を囲む溝12と切り合い関係にある。上層図（第655図）をみると、基本的には本土壙が溝12により切られている。しかし、溝12が埋没した後に、溝12と本土壙を併せた部分をもう一度皿状に浅く掘りくぼめていることが分かる。調査では、最後の皿状掘り込みの面的な範囲が確認されていないが、遺物の大半は下層から出土しており、ここで紹介する遺物は溝12に切られた最初の土壙に伴うものである。

土壙は不定形を呈するもので、その規模はおおよそ南北9.2m、東西8.0mである。深さは検出面から0.3～0.8mで、南にいくにつれ深くなる。

本土壙については、整然さを欠く不定形のものであることから、廃棄土壙などの性格をもつものであると推定



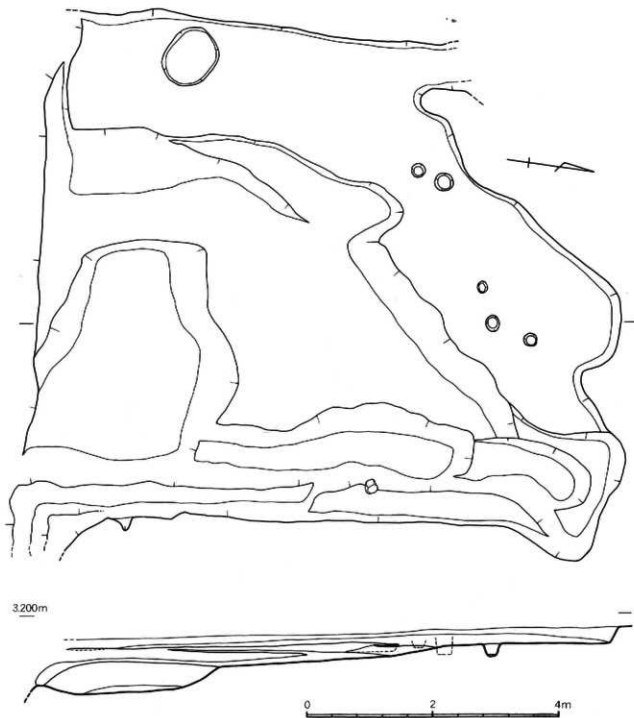
される。時期は16世紀後半代である。

・出土遺物

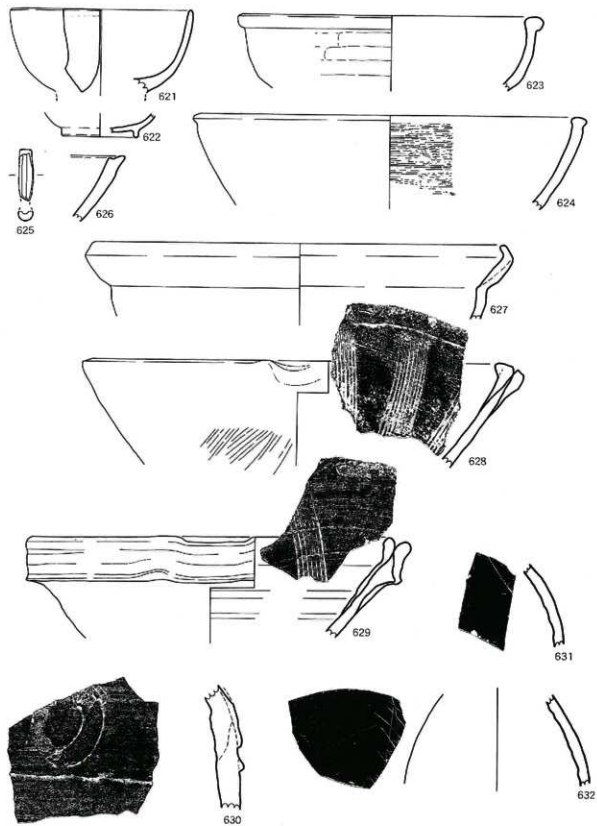
出土遺物には、土器（第475図）と石製品（第476図）がある。

621は青磁碗で、直口口縁をもつものである。15、16世紀のものであろう。

622は白磁皿の底部である。口縁が端反りになるものと思われ、畳付けは無箱で砂が付着する。15世紀後半から16世紀に主体を置くものである。

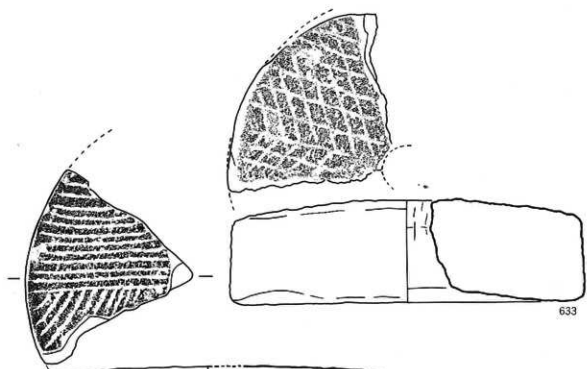


第474図 八坂中遺跡土壌146

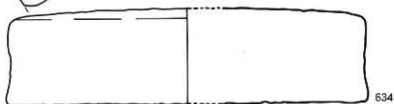


0 10cm

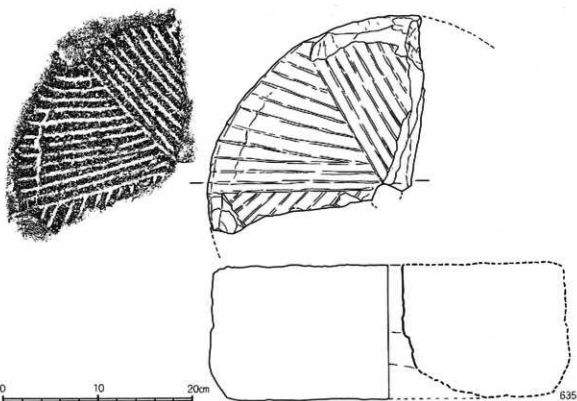
第475圖 八坂中遺跡土壙146出土土器



633



634



635

0 10 20cm

第476図 八坂中遺跡土坑146出土石製品

623、624は鉢である。623は口縁部外面が肥厚しており、底部に高台を有するものであろう。体部外面にはヘラケズリが施される。16世紀後半のものである。624は口縁端部が若干肥厚し、内面にはヘラミガキが施される。16世紀代のものであろう。

625は土鍾である。

626、627は土鍋である。626は口縁端部の外面側が上方につまみ上げられる。口縁部付近には強いヨコナデがみられる。14世紀のものか、627は防長系の土鍋である。頸部でいったん外方に折れ、口縁端部を上方に引き上げる。16世紀のものである。

628は防長系搥鉢である。片口を呈し、口縁端部内側を断面三角形に肥厚させる。外面は縦方向のハケメ後ナデ、内面にも横方向のハケメがみられる。摺口は9本単位である。16世紀のものである。

629は備前焼搥鉢である。口縁部外面に明確な凹線などはなく、端部も丸くおさめられる。内面の摺口は7本単位である。15世紀代のものである。

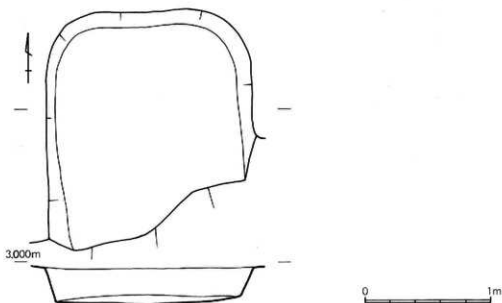
630は備前焼水旱甕である。体部外面に環状の貼り付けと突帯がみられる。16世紀代のものである。

631、632は備前焼徳利である。両者は同一器体の可能性をもつもので、外面に細いヘラにより文様が描かれる。16世紀代のものである。

633～635は挽臼の臼であるが、いずれも欠損しており破片資料である。633は中央に芯棒穴がある。芯棒穴は下面に近づくほど径が広がる。臼は格子目状に施されており、どのように分割されていたかは明確ではない。このような格子目状の臼は類例が乏しいが、同様なものが土壙100の535にみられる。634は主溝を放射状に配し、それから右上がりの副溝を設けている。副溝は11～12本みられ、全体としては精緻な感じである。635は中央に芯棒穴があり、芯棒穴は633と同様に下面に近づくほど径が広がる。臼は6分割と推定され、放射状に配した主溝から右上がりの副溝が13本ほど設けられている。やはり精緻な感を受ける。

#### (145) 土壙147

土壙147(第477図)は、居館3内部の南東隅に位置する。居館を囲む溝12を切る。土壙は、全形が不明だが長方形を呈するものと思われる。南北に長軸をもつので、南北1.8m以上、東西1.8mの規模をもつ。深さは0.3mで、床面は平坦である。時期は不明だが、形態から土壙墓の可能性もつ。



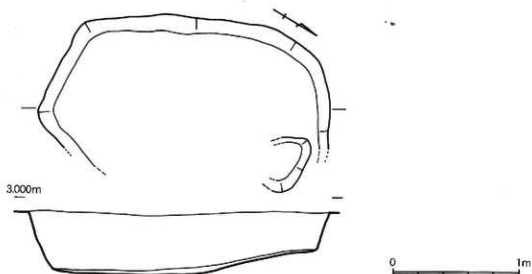
第477図 八坂中遺跡土壙147

(146) 土 壇149

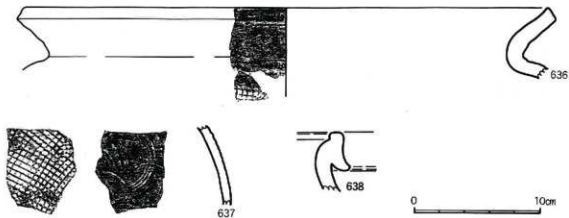
土壇149 (第478図) は、厩館3北東隅の外側に位置するもので、厩館を二重に囲する2本の溝の間にあたる。外の溝である溝10に切られる。土壇は南北2.3m、軸1.2m以上である。13世紀後半のものか。

・出土遺物

出土遺物 (第479図) のうち、636、637は須恵貫の甕である。636は外面に格子目のタタキがみられ、637は外面に格子目、内面に同心円のタタキがある。両者は亀山施であろう。638は13世紀の常滑焼甕である。



第478図 八坂中遺跡土壇149



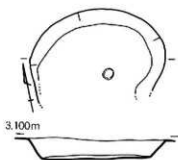
第479図 八坂中遺跡土壇149出土土器

(147) 土 壇150

土壇150 (第480図) は、溝6の北側に接するように位置する。土壇は溝6に切られており、全形は不明である。楕円形を呈していたと思われ、東西1.05m、南北0.8m以上の規模をもつものであろう。12世紀の所産か。

・出土遺物

出土遺物 (第481図) のうち、639は土師質土器小皿である。口径8cm余で、糸切りの底部から体部が引き上げられる。12世紀のものか。



第480図 八坂中遺跡土壇150



第481図 八坂中遺跡土壇150出土土器

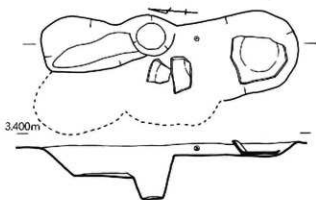


### (148) 土壇151

土壇151 (第482図) は、厩館1内部の中央西寄りに位置する。西半が調査区外に及ぶが、現状で南北2.0m、東西0.6mの規模を測る。土壇内からは備前焼甕の底部などが検出された。時期は、15、16世紀である。

#### ・出土遺物

出土遺物には、上器 (第483、484図) と銭貨 (第485図) がある。このうち640は土師質土器小皿である。小破片のため径は復元できないが、体部の立ち上がりはシャープである。14世紀代か。641は上鏡か。642～645は備前焼甕である。642、643はH線帯で玉縁が扁平となるが、643の方が顕著である。16世紀のもの。646は明銭の永樂通宝 (初鑄1408年) である。

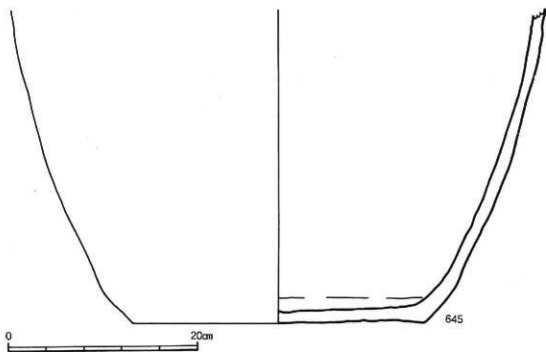
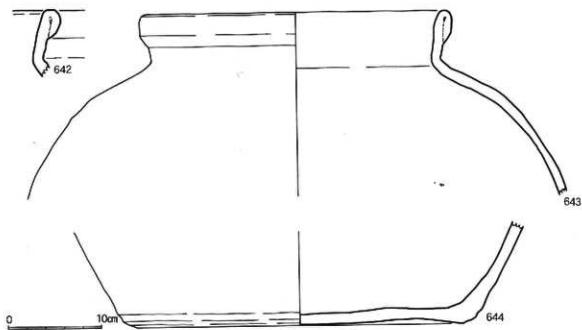


第482図 八坂中遺跡土壇151



第483図 八坂中遺跡土壇151出土土器(1)





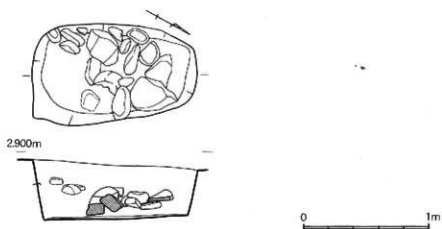
第484圖 八坂中遺跡土坑151出土土器(2)



第485圖 八坂中遺跡土坑151出土錢貨

(149) 土 壙152

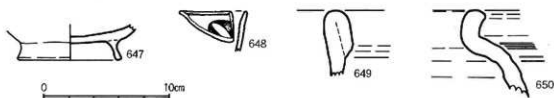
土壙152 (第486図) は、厩館3の東側外方に位置する。東側に隣接し土壙74がある。土壙は楕円形プランを呈し、長径1.3m、短径0.8mの規模を有する。検出面からの深さは0.35~0.45mで、床面は平坦である。土壙内からは0.1~0.3mの鏝が検出されたのみで、時期を明確にするような遺物は確認されなかった。



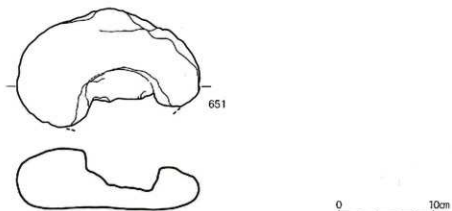
第486図 八坂中遺跡土壙152

(150) 土 壙153

土壙153 (第489図) は、厩館3東北隅外側に位置する。厩館3を囲む溝12と重複する可能性が高いが、同



第487図 八坂中遺跡土壙153出土土器



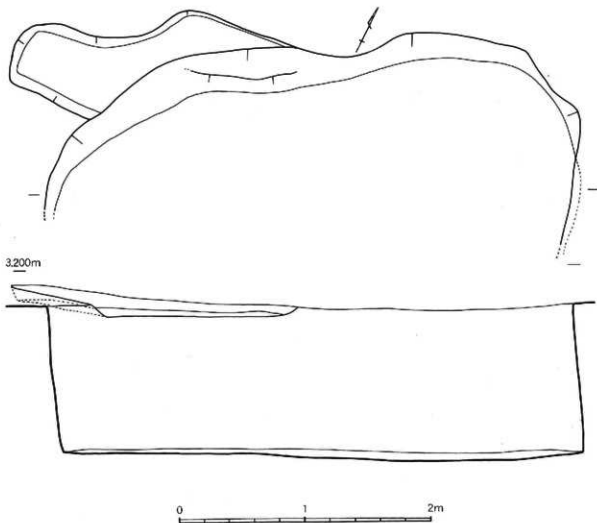
第488図 八坂中遺跡土壙153出土石製品



者の間に攪乱がありその関係は不明である。全形は不明であるが、現状で東西2.3m、南北1.7m以上である。深さは1.1mを測り、壁もほぼ垂直に立つ。遺構規模に比し遺物量は少ないが、16世紀に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物には、上器（第487図）と石製品（第488図）がある。647は土師器碗の底部である。高台は細く高いもので、外樹き気味に付される。11世紀代のものであろう。648は龍泉窯系の青磁碗である。内面に文様がみられる。12世紀後半である。649は備前焼甕である。外面の玉縁は長く垂下し、下部が面取り気味である。16世紀代のものか。650は備前焼甕で、口縁が短く立ち上がる。肩部に飾描文が施される16世紀代である。651は凹石である。欠損品であるが、片面の中央に凹みがみられる。



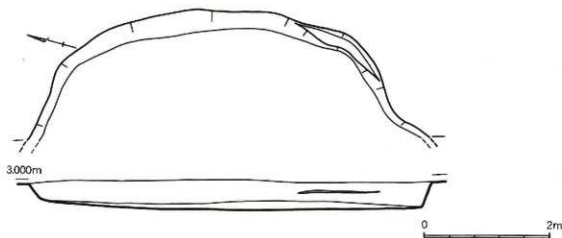
第489図 八坂中遺跡土坑153

(151) 土 坑154

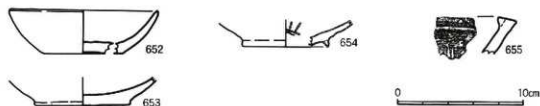
土坑154（第490図）は、居館3内部の西端に位置する。居館を囲む溝12と重複するが、溝の部分が未掘のため両者の関係は不明である。土坑は現状で、南北6.2m、東西2.0m以上である。深さは検出面から0.4mで、床面は平坦である。土坑規模に比し遺物は少ないが、15、16世紀に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第491図）のうち、652、653は十師質土器杯である。652は体部内湾気味である。14世紀代のものか。653は底部が甲盤高台状を呈する。14世紀代のものである。654は瓦器椀である。断面三角形の低い高台が付く。内面にミガキがみられる。12世紀後半のものか。655は防長系細鉢である。15、16世紀のものである。



第490図 八坂中遺跡土壇154



第491図 八坂中遺跡土壇154出土土器

## (152) 十 塚155

十塚155（第492図）は、屈館1内の東北隅付近に位置する。土壇は、屈館を囲む溝13と重複するが、溝の部分が木掘のため両者の関係は不明である。

土壇の全形は不明だが、現状では不定形を呈する。現状の規模は、南北6.4m、東西5m以上である。深さは検出面から0.05～0.6mで、東に向かうにつれ階段状に深くなる。土壇内からの出土遺物は上器片ばかりで、土壇規模に比し量は少ない。土壇の整然さを欠く形状などから、本十塚は廃棄土壇などの性格を有するものと思われる。時期は16世紀末に位置付けられる。

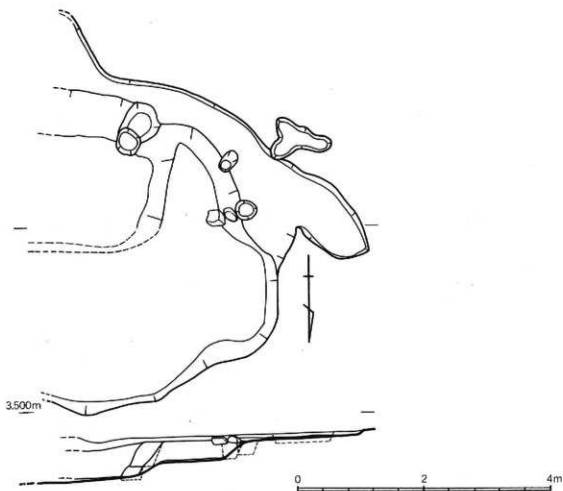
### ・出土遺物

出土遺物（第493図）のうち、656は上師質土器杯である。底部は糸切りで、体部が斜方向に立ち上がる。体部外面にはロクロ痕がみられる。本品は、中世大友府内町遺跡などで15～16世紀にかけてみられる、体部にロクロ痕を残すものに類似する。このような杯は、これまで国東半島地域ではほとんど確認されていない。16世紀代か。

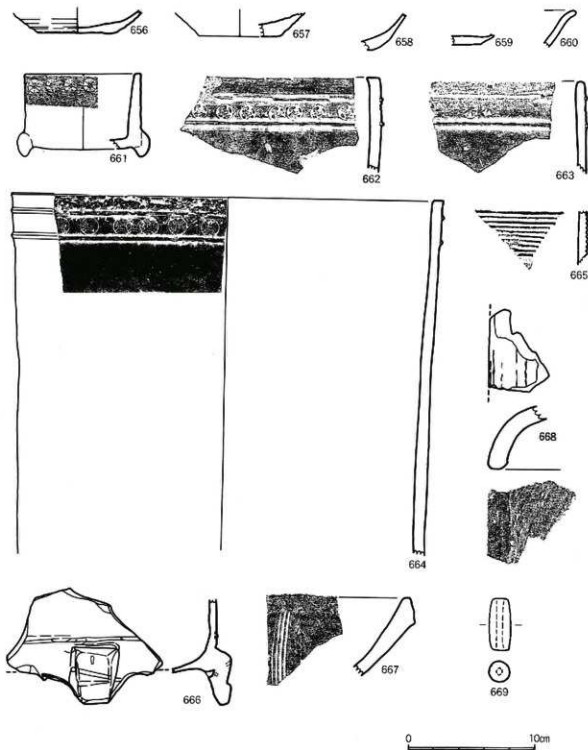
657は瓦器椀である。底部は平底で糸切りが残る。13世紀後半～14世紀初めの東国東型瓦器椀である。

658は唐津系陶器椀である。底部にちかひ破片資料で、外面下半を除き内外面とも灰釉が施釉される。16世紀末でのものあろう。

- 659は山磁皿である。外底付近は無輪で、口縁口縁をもつものと推定される。13～14世紀のものである。
- 660は青磁碗である。口縁は緩やかな端反を呈するもので、15、16世紀のものである。
- 661は香が型の瓦質土器である。復元口径9.2cm、器高6.5cmの小型品で、底部には丸い粘土を貼り付けた脚が付される。また、口縁外面にはスタンプ文が配される。15、16世紀のものである。
- 662～667は瓦質土器火鉢である。このうち662は暗灰色を呈するもので、平坦な口縁端部の内側がわずかに肥厚する。外面には低い2条の突帯があり、突帯間にスタンプ文が配される。また、外面にはヘラミガキがみられる。663は口縁部に肥厚は認められず、端部はやや丸みをもつ。やはり外面口縁下に2条の突帯を付し、その間にスタンプ文を配する。スタンプ文は2個単位で施されているようである。外面にはヘラミガキがみられる。664も口縁端部に肥厚はみられず、外面口縁下に低い2条の突帯を付す。突帯間にはスタンプ文を配する。外面は丁寧に磨かれている。665は胴部の破片と思われる。外面全体に断面トタン板状の沈線がみられる。このタイプのは県内では川上例が少なく、久住町小路遺跡など数ヶ所で確認されているのみである。666は脚部である。途中に山形を削りだした三角板を貼り付けたもので、さらに中央部には長方形に粘土を重ね厚みをもたせている。以上は、16世紀前半に主体を置くものである。
- 667は偏前焼播鉢である。口縁部はくの字状に立ち上がり、若干上方に肥厚する。14世紀代のものである。
- 668は暗灰色を呈する丸瓦片である。内面には布目が残る。16世紀代か。
- 669は上鉢である。



第492図 八坂中遺跡土壊155



第493図 八坂中遺跡土坑155出土土器

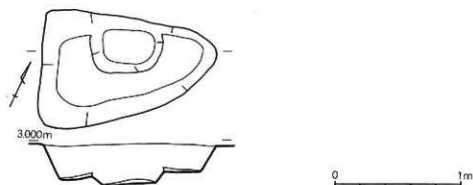
(153) 上 壙156

上壙156 (第494図) は、屈館2の東側外方に位置する。

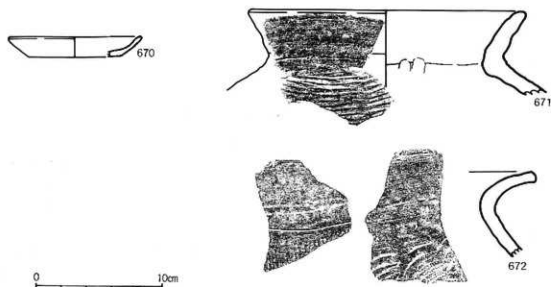
土壙は三角形を呈し、長さ1.4m、幅0.9mの規模をもつ。中央に柱穴状のものがみられるが、深さは0.2～0.3mを測る。土壙内からは土器片が散発的に検出されたのみで、時期は14世紀に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第495図）のうち、670は土師質土器である。復元口径10.5cmを測る。671は須恵質の甕である。口縁は体部からくさくさの字状に折れる。体部外面には平行タタキが施される。672も須恵質の甕で、亀山焼と思われる。口縁は大きく緩やかに反外する。また、体部外面には格子目タタキが施される。14世紀代のものである。



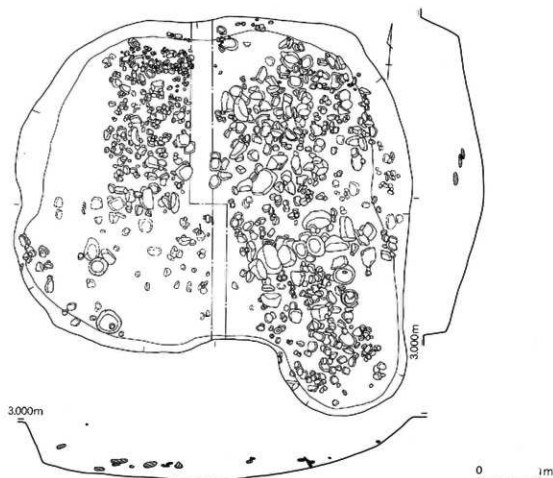
第494図 八坂中遺跡土壇156



第495図 八坂中遺跡土壇156出土土器

(154) 土壇157

土壇157（第496図）は、居館3北西隅の北側外方に位置する。居館1及び居館3の北側は、居館の溝に接するようにいくつかの大型の上壇が並び、その北側には東西方向の道が走る。道は整地した道路面や側溝などを伴うものではなく、幅10m弱の遺構が希薄な部分として認識される。この遺構空白部分に沿うように、北側には建物群が並び、建物は道に梁行が通っており、建物の周辺や北側に大小の土壇がみられる。建物群の北側は上壇がいくつかみられるが、柱穴などの遺構は激減する。これら建物群の北側は基本的に遺構はみられず、土壇157があるあたりが、本遺跡の北側の限界にあたると思われる。



第496図 八坂中遺跡土壌157

土壌は建物25、建物26の北側にあり、南側に隣接して土壌18がある。平面プランは隅丸方形形状を呈し、南東コーナーに半円形の突出部が付いた感じである。規模は東西6.2m、南北5.3mを測る大型のもので、さらに長さ2.0m、幅1.2mの突出部がつく。深さは検出面から0.6～1.0mで、床面は全体が中央にむかい緩やかに傾斜する。また、四周の壁は明確な立ち上がりみせるが、一部については立ち上がりが認められず緩やかな状況である。土壌内には、ほぼ全面にわたり礫がみられる。礫は0.05～0.5mのものがあり、中層から下層にかけ堆積するが、場所により礫の大きさが顕著に異なる。すなわち、東半部分に大型のものが多く、北西部には小礫が目立つ。礫は土壌内に投棄されたものと推定されることから、これら礫の異なる状況は、投棄の単位の違いを表しているものかもしれない。土器などの遺物は礫に混じり検出されたが、いずれも小破片である。本土壌の時期は16世紀後半に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物には、土器(第197図)と石製品(第498、499、500図)、金属製品(第501図)がある。

673は土師器椀である。底部資料で、外底には糸切り後板状圧痕の痕跡が残る。高台は底部をあまり押し出すことなく、断面長方形のものを外周き気味に付す。体部内外面にはヘラミガキがみられ、このうち内面のミガキは下部が横方向、それより上部が斜方向に施されている。12世紀初前後のものか。

674は内黒土器椀である。底部資料で、やや低めの高台が外周きに付く。内面にはミガキがある。12世紀代。

675は青磁碗底部である。676は玉縁口縁をもつ白磁碗で、12世紀代のものである。

677は青花碗である。小破片のため明確ではないが、蓮子碗ないしは中間形態の底部を呈するものと推定される。文様は輪郭を濃い細線で描くものではなく、一筆で描いたものである。16世紀前半のものか。

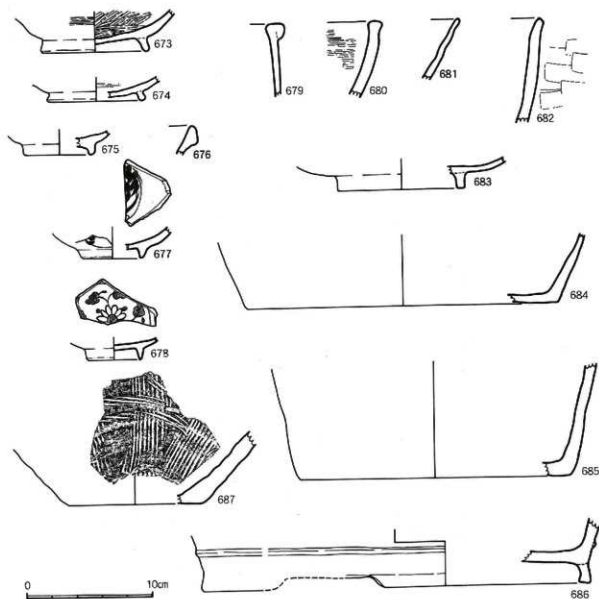
678は色絵の杯で、見込み部と体部外面に文様が描かれる。赤色で輪郭を描き、内部を薄い緑色で塗りつぶすところもある。16世紀代である。

679、684～686は瓦質上器火鉢である。679は口縁部で、口縁外面が肥厚する。口縁下には突帯やスタンプ文などはみられない。16世紀後半か。684、685は底部で、本来は脚が付されるものか。16世紀前半～中頃に主体を置くものである。686も底部資料である。全体に高台状の貼り付けを行い、部分的に抉りをいれ装飾とする。16世紀後半に主体を置くものである。

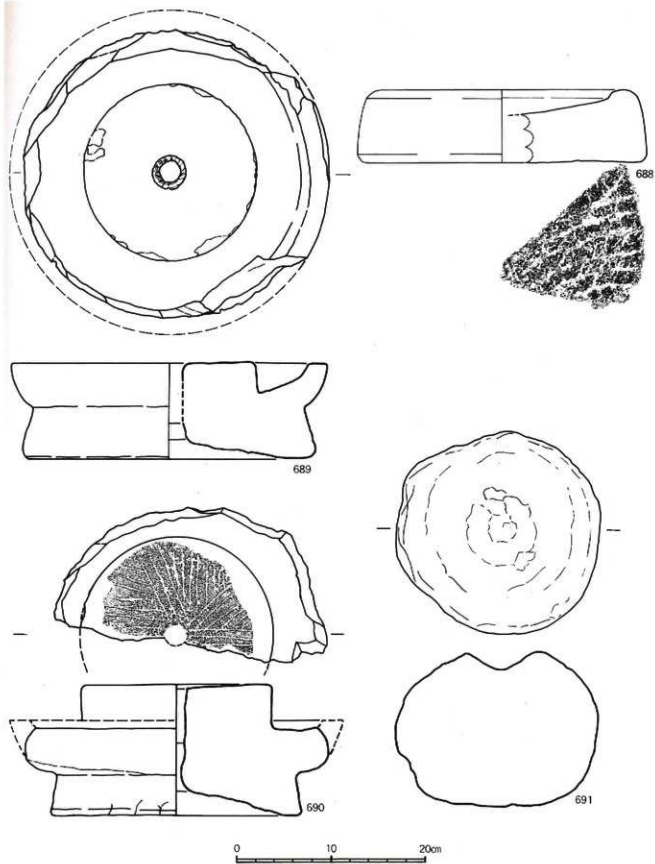
680、683は鉢である。680は内湾気味の体部が口縁にいたり、口縁を丸くおさめる。端部は内外に若干肥厚させる。内面には横方向のミガキが施されている。16世紀代のもの。683は底部で高台が付される。16世紀代。

687は備前焼播鉢である。斜行の摺目がはいるもので、16世紀後半から末のものである。

688は挽白の上戸である。天場のくぼみは中央にむかい深くなっており、その深さは現状で約3cmである。

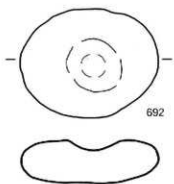


第497図 八坂中遺跡土壙157出土土器



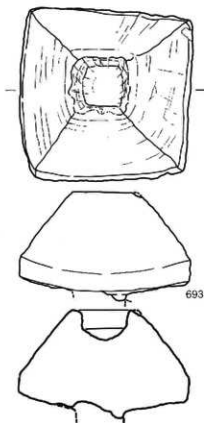
第498図 八坂中遺跡土坑157出土石製品(1)





0 10cm

第499図 八坂中遺跡土坑157出土石製品(2)



0 10 20cm

第500図 八坂中遺跡土坑157出土石製品(3)

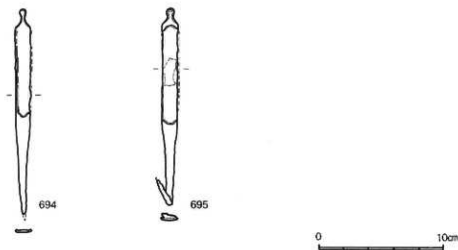
目は主溝から左上がりに副溝が付けられる。副溝は本末右上がりのものが大半をしめるが、このような例は数少ない。全体に雑な感じである。

689、690は茶臼の下臼である。ともに中央に芯棒穴があり、底部は上げ底気味である。689は目が残っていない。また、690の目はおおむね6分割と推定されるが、かなり雑な感じである。

691、692は町石である。691は球状の石に凹みをつけ、692は扁平な石に凹みをつけている。

693は五輪塔の火輪部である。高さがあり、傾斜は急である。上面には空・風輪部との接合のための凹部が、また下面には水輪部との接合のための凸部がある。

694、695は青銅製である。694は先端部を欠き、裝飾部分も剥落が著しく枠が半分ほど確認できない。695は先端が折れ曲がっているが、裝飾部には、形状が不明ながら銀色の裝飾が残る。



第501図 八坂中遺跡土壌157出土金属製品

(155) 十 城158

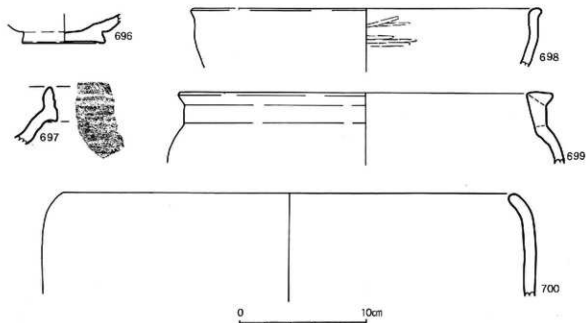
土城158 (第502図) は、居館3の北方に位置する。土城と居館3の間には、道状の遺構空白部と建物群があり、木上城が遺跡の北限にほぼあたる。土城は不整形を呈し、南北5.8m、東西2.7mの規模をもつ。土城内からは、北半を中心に0.1mほどの雑がまとまって検出された。時期は16世紀代である。

・出土遺物

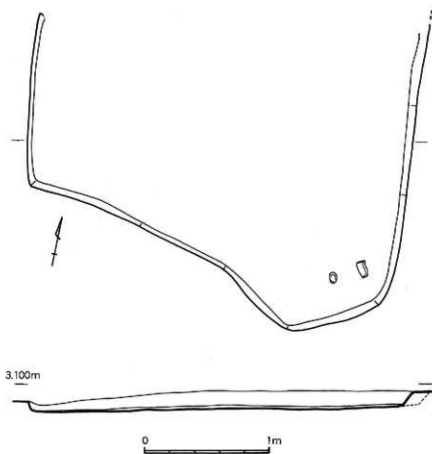
出土遺物 (第503図) のうち、696は十師器柄で円盤状高台を呈する。底面には糸切り痕が残る。11、12世紀のもの。697は備前焼漆鉢で外面に円線と扇目状の線がある。16世紀代。698は鉢で口縁はわずかに外反する。内面にはミガキがある。16世紀代。699は瓦質甕で16世紀代か。700は火鉢で口縁内湾する。16世紀代か。



第502図 八坂中遺跡土城158



第503圖 八坂中遺跡土坑158出土土器



第504圖 八坂中遺跡土坑159

### (156) 土 壙159

土壙159(第504図)は、店館3の北方に位置する。東側に隣接して土壙158がある。土壙は北半が調査区外に及ぶため全形は不明であるが、現状で南北2.2m以上、東西3.1mである。深さは検出面から0.15mで、床面はほぼ平坦である。土壙内からの遺物は少なく、若干の土器片が検出されたのみである。13、14世紀以降のもの。

#### ・出土遺物

701(第505図)は土師質土器環で、13~14世紀代のものと思われる。

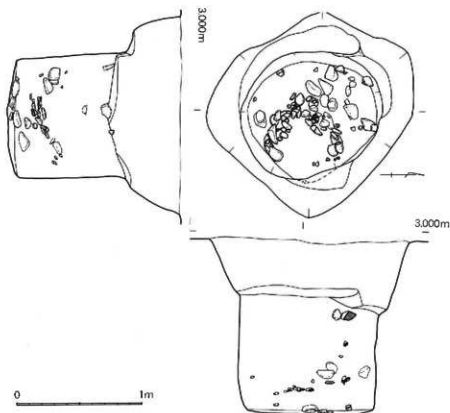


第505図 八坂中遺跡土壙159出土土器

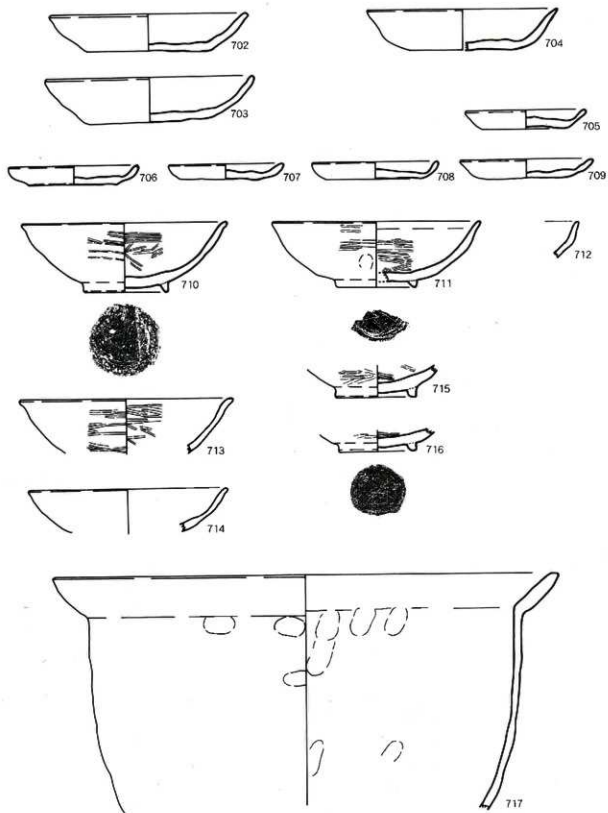
### (157) 土 壙160

土壙160(第506図)は、店館3の東側外方約30mの位置にある。この周辺は遺構の密度が低く、建物も復元されていない。

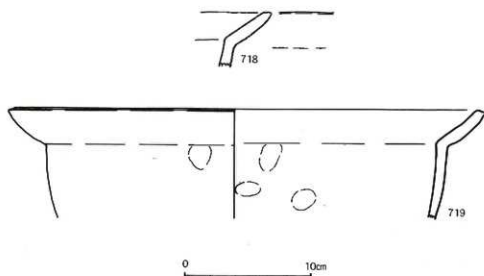
土壙の平面プランは方形基調を呈する。一部不整形をなすものの、辺約1.4~1.5mの規模を測る。土壙は、まず検出面からいったん0.45~0.5mほど掘り下げる。この時、壁はやや斜めになる。ここから再び平面プラン円形の土壙を、ほぼ垂直に掘り下げる。床面までは、検出面から1.4mの深さを測る。二段目の円形土壙は、径1.0



第506図 八坂中遺跡土壙160



第507図 八坂中遺跡土器160出土土器(1)



第508図 八坂中遺跡土壌160出土土器(2)

～1.05mを掘り、整然とした感じで掘り下げられている。床面は平坦で、中層より下部を中心に礫などに混じり土器片が検出された。検出された土器は11世紀末～12世紀前半に位置付けられる。

本遺構は井戸状を呈するが、掘り下げ時に上層観察を行なったが木枠などの痕跡は確認できなかった。よって、本来的に枠をもたなかったと推定される。また、屈館3の南東側にあった井戸A1は、礎層下の青灰色粘土層まで達している。おそらく、ここまで下げなければ安定した水の供給が困難であったものとおもわれる。本土壙は本格的な礎層まで達しておらず、水が安定的に自噴したとは考えにくい。よって、飲料用の井戸と云うよりも農業用の灌漑井戸の可能性が高い。

#### ・出土遺物

出土遺物(第507、508図)のうち、702～704は土師質土器である。いずれも底部糸切りで、体部が緩やかに立ち上がる。702、704は口縁部がわずかに外反気味である。口径は15.2～16.3cmを測る。

705～709は土師質土器小皿である。これらは形態的に、体部が比較的シャープに斜方向に立ち上がるもの(705)、体部中程から急激に内湾させ、端部を丸くおさめるもの(706～708)、体部の立ち上がりが明確ではなく、そのまま斜方向に口縁へいたるもの(709)、以上のように分けられる。いずれも底部糸切りで、口径は9.0～10.5cmである。

710～716は土師器碗である。710は白黄褐色を呈するもの、外底面には明確に糸切り痕が残る。高台は断面長方形で、わずかに外開き気味に付される。体部はあまり丸みをもたずに口縁にいたり、口縁は強いヨコナデが施されるためやや外反する。体部内外面にヘラミガキが施される。711は白黄褐色を呈する。外底面の切り跡は不明だが、細い刻線がみられる。高台は、710に比べたくて低いものである。体部下半はあまり張らず、口縁にいたりやや外反する。浅碗という感じである。体部内外面にはヘラミガキがみられる。713は底部を欠くもので、黄白色を呈する。口縁部には強いヨコナデが施されわずかに外反する。体部内外面にはヨコナデが残る。714は白黄褐色を呈するもので、かなり浅い感じを呈する。磨滅のためミガキは不明である。715、716は底部である。両者とも断面四角形のややたくて低めの高台が付される。体部内外面にはヘラミガキがみられる。716の外底面には、711にみられたような細い刻線が施される。

717～719は土鍋である。口縁部は体部からくの字状に折れ、やや内湾気味に端部にいたる。

以上の土器は、11世紀末～12世紀前半の所産であろう。

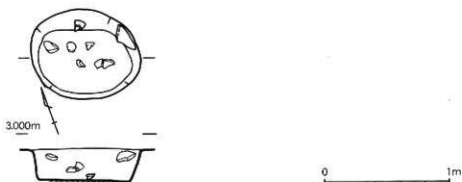
### (158) 上 墳161

土壙161(第509図)は、上墳160の南方約6mに位置する。

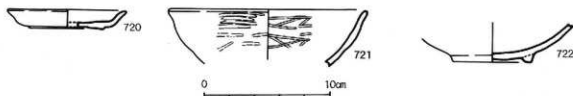
土壙は精円形を呈し、長径0.85m、短径0.7mの規模を有する。深さは検出面から0.25mを測り、床面は平坦である。土壙内からは散発的に土器片が検出されたのみで、時期は12世紀代である。

#### ・出土遺物

出土遺物(第510図)のうち、720は土師質上器小皿である。体部の立ち上がりは非常に緩やかで、復元口径9.2cmを測る。721は土師器椀で、口縁がわずかに外反気味である。内外面にヘラミガキがみられる。722は土師器椀底部で、高台は断面四角形の太くて低いものである。以上は、12世紀代の所産か。



第509図 八坂中遺跡土壙161



第510図 八坂中遺跡土壙161出土土器

### (159) 上 墳162

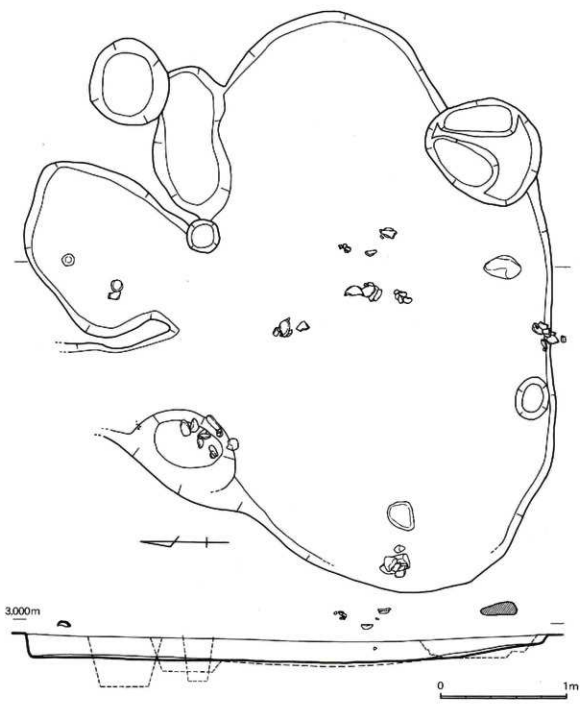
土壙162(第511図)は、溝1が途切れるあたりで溝1と重複する。溝1は溝4からほぼ直角に折れ南に向かう。南に向かうにつれ検出面の標高が高くなり、溝1は途切れてしまう。この周囲の検出面は砂質土で、遺構の検出は非常に困難を極めた。そのため何度となく検出を試み、溝1などを確認した。土壙162は溝1と切り合い関係にあると思われるが、遺構の残りが悪く土層観察では確信をもち確認するにはいたらなかった。しかし、その状況から、溝1が上墳162を切っているものと考えた。

土壙は、小規模の土壙がいくつか重複するが、基本的には長精円形を呈するものと思われる。その規模は、長径が4.6mを測り、短径は約2.8mと推定される。

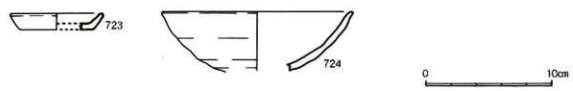
土壙の時期は13~14世紀代である。

#### ・出土遺物

出土遺物(第512図)のうち、723は土師質上器小皿である。体部はシャープに立ち上がり、端部は丸くおさまる。724は瓦器椀で、内外面ともヘラミガキはみられない。両者とも13~14世紀代のものであろう。



第511図 八坂中遺跡土坑162



第512図 八坂中遺跡土坑162出土土器



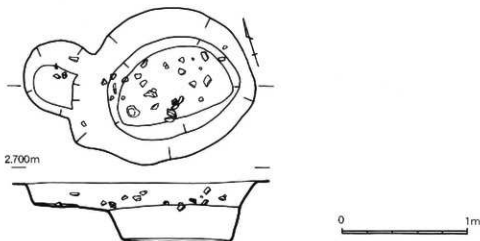
### (160) 土 壙163

土壙163(第513図)は、溝1と溝4により囲まれたエリア内に位置する。

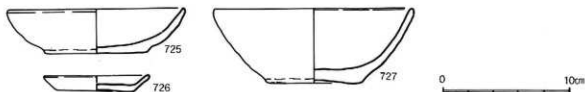
土壙は基本的に楕円形を呈するもので、その規模は長径1.5m、短径1.2mを測る。深さは検出面から、0.5mである。遺構の時期は14世紀前半である。

#### ・出土遺物

出土遺物(第514図)のうち、725は十師質土器杯である。底部は糸切りで、若干円盤高台状を呈する。体部は内湾気味に口縁にいたる。726は十師質土器小皿である。体部はシャープに立ち上がり、口径は8.3cmである。727は平底の瓦器椀で、底部は糸切りである。以上は13世紀後半～14世紀初めに位置付けられる。



第513図 八坂中遺跡土壙163



第514図 八坂中遺跡土壙163出土土器

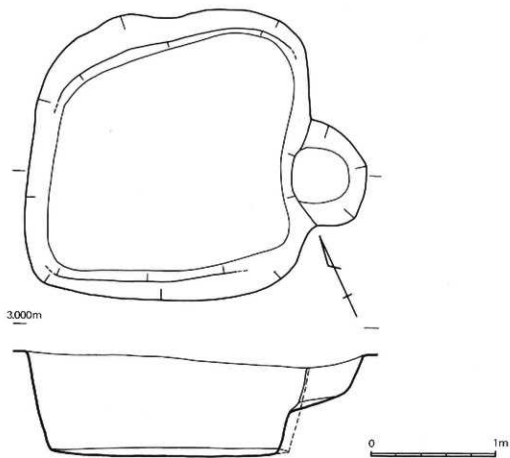
### (161) 土 壙164

土壙164(第515図)は、調査区の東端付近に位置する。建物119と重複しており、建物の西北隅柱穴を切っている。

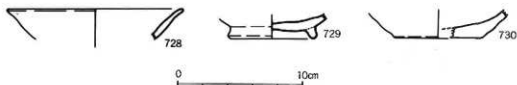
土壙は一部他の小土壙と重複するが、基本的には方形基調を呈する。やや不整形を呈する部分もあるが、その規模は一辺1.2～1.3mを測る。深さは検出面から0.7～0.8mで、床面は平坦である。土壙内からの遺物は散発的で、少量の土器片が確認されたのみである。土壙の時期は13、14世紀代と考えられる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第516図)のうち、728は土師器椀と思われる。磨滅のため内外面のヘラミガキは不明である。12世紀代のものか。729は内黒土器椀である。外底面には糸切り痕が残る。12世紀代か。730は瓦器椀底部である。東国東型瓦器椀で、平底の底部には糸切りがみられる。13世紀後半～14世紀初である。



第515図 八坂中遺跡土塙164



第516図 八坂中遺跡土塙164出土土器

## (162) 土 塙165

土塙165 (第517図) は、居館3の東北外方に位置する。居館3の東北隅から20m余を測るが、この周囲には遺構がまったくみられず、本土塙がほぼ単独に存在する。

土塙は不定形を呈するもので、長さ4.4m、幅3.8mを測る。深さは検出面から0.15～0.2mで、床面は平坦である。土塙内からは、多くの土器が雑などに混じり検出された。それらは遺構内の土層から検出されており、土塙内に廃棄されたものと思われる状態であった。しかし、完形品なども含んでおり、その出土状況とも考えあわせると一括性の高い良好な資料と言える。付近に建物などの遺構が存在しないことから、生活感に乏しく、廃棄土塙と言っても祭祀的意味合いが強いものである可能性をもつ。

遺構の時期は、11世紀後半と考えられる。



第517図 八坂中遺跡土坑165

#### ・出土遺物

土坑内からは多くの土器が検出された(第518～521図)。土器には、土師質土器杯、土師質土器小皿、土師器碗、内黒土器碗、黒色土器碗、鉢、土鍋、製塩土器などがある。

731～738は土師質土器杯である。731は全体に歪んでおり、口径14.8～16.0cmを測る。底部糸切りで、部分的に異なるものの、体部は緩やかに丸みをもち立ち上がる。口縁端部は強いヨコナデのためわずかに外反気味である。732～737についても731と同様な形態的特長をもつ。このうち底部が残る732～734、737は、共通して底部糸切りの後板状圧痕がみられる。口径は14.0～17.0cmを測る。738については、他と様相を異にする。すなわち、糸切りの底部から斜方向に体部がのびるもので、体部外面にロクロ痕が残る。しかし、小破片の資料であることから、器形や法量などに考慮の余地があると思われる。

739～757は土師質土器小皿で、完形品や大型の破片も多い。器形的には、糸切りの底部から、底部と同じ厚

みをもち体部が緩やかに立ち上がるものが主体を占める。全体として器高も低い。口径は9.0～10.5cmを測る。このほか少数品として、体部の立ち上がりやや明確になり、器高のたかいもの(755～757)と、体部をシャープに斜方向に立ち上げるもの(752)がある。前者は底部糸切りで、口径も10.6～10.7cmと他に比べ大振りの感がある。また、器高もやや高い。後者は底部糸切りで、法量は主体を占めるものとほぼ同様である。

758～761は土師器輪である。758は黄褐色を呈するもので、体部下半が丸く張る。口縁端部は外方にわずかにつまみ出された感じである。器面調整は内外面とも磨滅のため明確ではないが、内面にはミガキの痕跡が認められる。759は黄白色を呈する薄手のものである。口縁部はわずかに外反する。器面はかなり磨滅がみられるが、内外面ともヘラミガキが認められる。760は黄褐色を呈するもので、体部はあまり張らず底部にむかう。内面にヘラミガキがみられる。761は底部である。わずかに残存する体部は、底部から直線的にのびる。外底面の切り離しは必ずしも明確ではないが、非押し出しのまま高台を付したことが想定される。高台は断面四角形で、外開きに付される。以上の土師器輪であるが、数量的には内黒土器輪に圧倒的に劣る。

762～779は内黒土器輪である。これらには輪高台を呈するもの(762、763、767～774)と円盤状高台(764、765、775～779)を呈するものがある。また、766はどちらに属するか不明である。

前者のうち、762は全形が分かる資料である。深めの器形であるが、体部下半はそれほど丸みをもたない。口縁はわずかに外反し、端部を丸くおさめる。外底面には糸切りの痕跡が残る。底部が水平であることから、ほとんど押し出すことなく高台を付けたことが分かる。高台は断面長方形のやや高いものが、外開きに付される。体部には内外面ともヘラミガキが施される。内面のミガキは内底面と体部を完全に分けて行っており、体部は分割ミガキの様子がみてとれる。763も深めのものである。体部下半があまり張らず、口縁部がわずかに外反する器形は762に類似する。外底面には、やはり糸切り痕が残る。体部内外面にはヘラミガキが認められるが、磨滅のため詳細は不明である。767は底部資料で、体部から内底面にかけて丸みをもつ。外底面には切り離しの痕跡は残らないが、押し出した後に高台を付したようである。768、770も同様な底部形態を呈する。これに対し769、771～774は底部が水平かつ、外底面に糸切りが残っており、あまり顕著な押し出しが行われていないと思われる。高台は細めの長方形で、外開き気味に付されている。

円盤状高台をもつものうち、764、765は同一個体と思われる。浅めの器形を呈するもので、内外面にはヘラミガキが施される。外面のミガキは、分割ミガキの様子がみてとれる。また、外底面には糸切り痕が残る。775～779は底部資料である。若干上げ底気味のものやそうでないものなど形態に若干のバリエーションがあるが、共通して底部に糸切りが残る。また、体部が残存し器形が分かるものでは、775、776とも体部が丸みをもたず斜方向に直線的にのびる。

780は黒色土器輪である。底部資料で、外底面には糸切り後板状痕がみられる。底部が水平であることから、顕著な押し出しは、なされていないことが分かる。高台は、断面長方形のやや太目のものが、外開き気味に付されている。

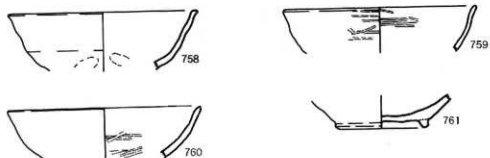
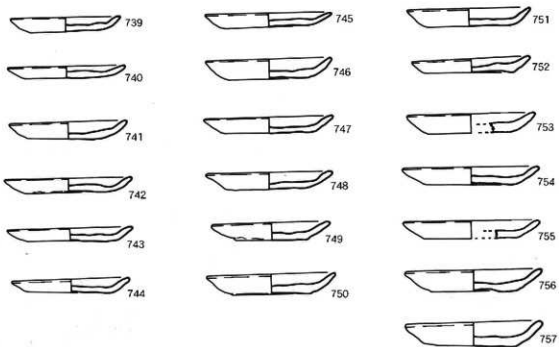
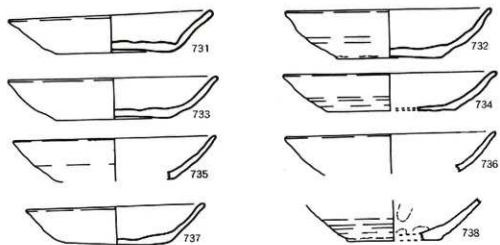
781、782は鉢と思われる。両者は同一個体の可能性が高い。底部は不明であるが、斜方向にのびる体部から口縁が短く内湾する。口径は約20cmである。

783は甕と思われる。土師質のもので、体部から口縁が強くくの字状に折れる。体部は内外面ともナデによる仕上げである。

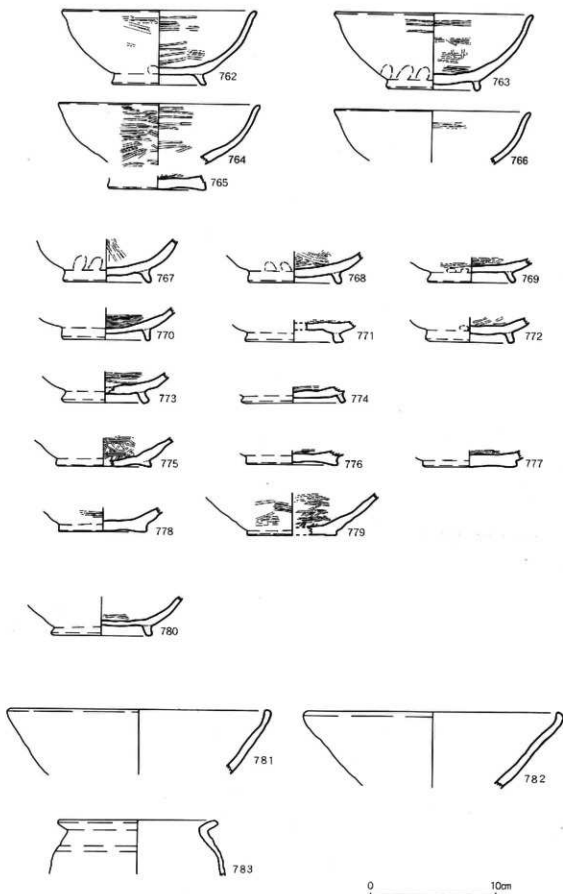
784～789は土鍋である。784は半球形の体部から、口縁がU字状に折れる。口縁は丸く仕上げられ、端部がやや上方に肥厚気味である。体部は内外面とも、ナデやオサエによる調整である。785は破片資料であるが、口縁は体部から緩やかに折れる。786、787は口径16～18cmの小型品である。体部から口縁が緩やかに外反するが、787のほうが786に比べ体部が張る。788、789は脚である。

790は製塩土器と思われる。内面に布目痕が残り、外面は指によるナデやオサエにより調整されている。復元口径が5.6cmとやや大きいことが気になるが、製作技法や調整はいわゆる製塩土器と同じである。

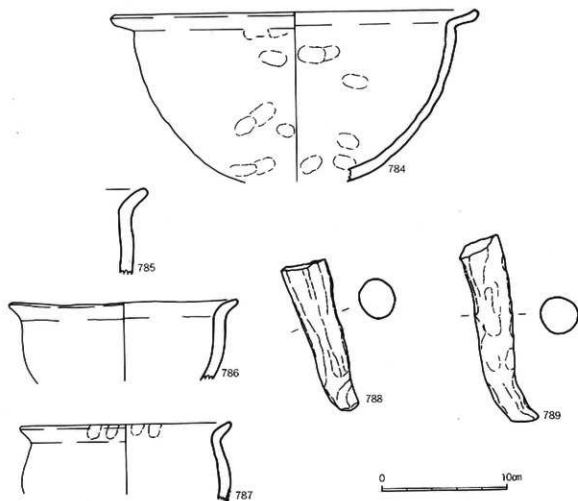
以上の土器は、全体として11世紀後半に位置付けられる。



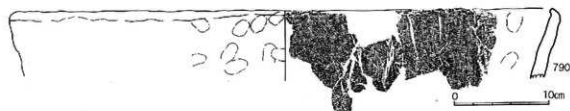
第518図 八坂中遺跡土坑165出土土器(1)



第519圖 八坂中遺跡土坑165出土土器(2)



第520図 八坂中遺跡土壙165出土土器(3)



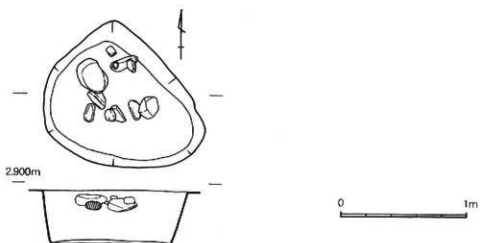
第521図 八坂中遺跡土壙165出土土器

### (163) 土壙166

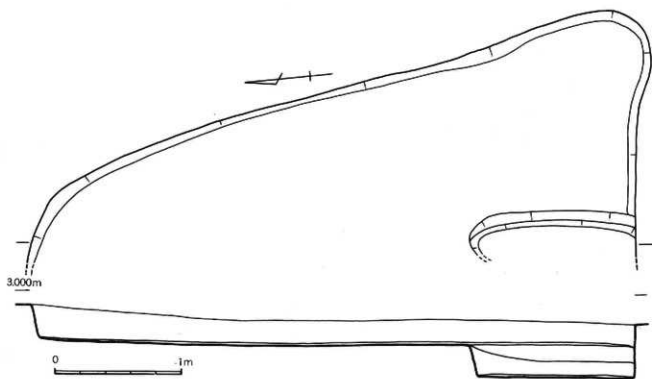
土壙166(第522図)は、土壙160の北東方向約8mに位置する。この周辺は遺構密度が低く、建物も復元されていない。土壙は不定形を呈し、長さ1.3m、幅1.05mの規模を測る。検出面からの深さは0.4mで、床面は平坦である。埋上層から礫がいくつか検出されたが、時期が決定できるような遺物は確認されなかった。

### (164) 土壙167

土壙167(第523図)は、溝4の北側約17mに位置する。遺構の西半が明らかではないが、その規模は南北4.8m、東西約2mを測る。土壙内からはわずかに土器片が検出されたが、時期は不明である。



第522図 八坂中遺跡土壙166



第523図 八坂中遺跡土壙167

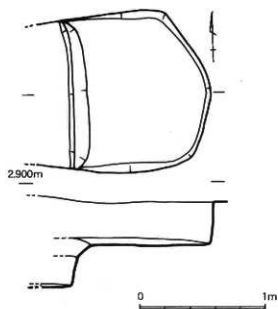
### (165) 十 壙168

上壙168(第524図)は、土壙167の南に隣接してみられる。土壙は西半が明らかではないが、現状で南北1.25m、東西1.3m以上の規模をもつ。深さは検出面から0.35mで、西側はさらに深くなり0.7mに達する。土壙内からは若丁の上器片が出土した。時期は12世紀代と思われる。

#### ・出土遺物

出土遺物(第525図)のうち、791は土師質土器杯と思われ、二次焼成を受けている。792は土師器椀の底部資料である。12世紀のものであろう。





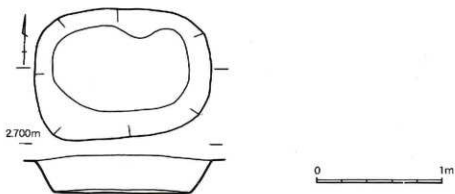
第524図 八坂中遺跡土壌168



第525図 八坂中遺跡土壌168出土土器

(166) 土 塚169

土塚169（第526図）は、溝4の北20数mに位置する。土塚170に隣接するようにみられる。土塚の平面プランは楕円形で、長径1.4m、短径1.0mを測る。深さは検出面から0.3mで、床面は平坦ある。土塚内からは若



第526図 八坂中遺跡土塚169

干の土器片が出土したのみで、12世紀の所産と思われる。

・出土遺物

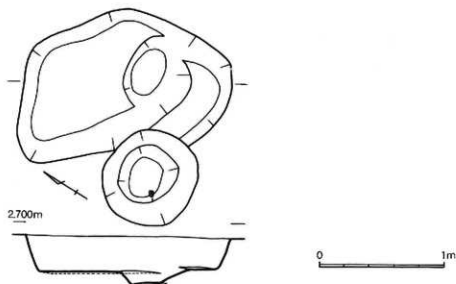
793（第527図）は、土器の胴部から頭部にかけての資料である。頭部は緩やかに折れる。12世紀のものか。



第527図 八坂中遺跡土壙169出土土器

(167) 土 壙170

土壙170（第528図）は、土壙169の南西側に隣接する。土壙は不定形を呈し、一部を柱穴に切られる。その規模は長さ1.65m、幅1.1mを測る。深さは検出面から0.25～0.35mで、床面に高低差が認められる。土壙内からは目立った遺物は確認されず、土壙の時期は不明である。



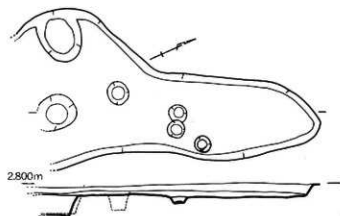
第528図 八坂中遺跡土壙170

### (168) 土 壙171

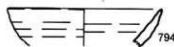
土壙171(第529図)は、調査区の南端に位置するもので、溝2の6m西にある。土壙は一部が調査区外に及ぶため全容は不明であるが、その平面プランは不定形である。現状で、長さ2.4m以上、幅1.2mの規模を測る。遺物はわずかな土器片が検出されたのみであるが、14世紀代のものか。

#### ・出土遺物

794(第530図)は十師賢土器杯である。11径から14世紀代と推定される。



第529図 八坂中遺跡土壙171



第530図 八坂中遺跡土壙171出土土器

### (169) 土 壙172

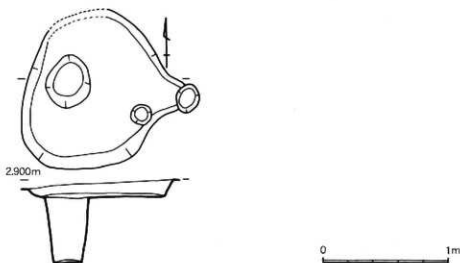
土壙172(第531図)は、調査区の南端近くにあり、溝2の西側に位置する。本土壙の周囲には土壙が密集し、加えて建物もみられる。

土壙は不定形を呈するもので、柱穴と重複する。その規模は、長さ1.3m、幅1.2mを測る。深さは検出面から0.1mで、床面は平土である。土壙内からは土器片わずかに検出されたが、図示できるようなものはなかった。これらの遺物から、本土壙は12世紀後半に位置付けられる。

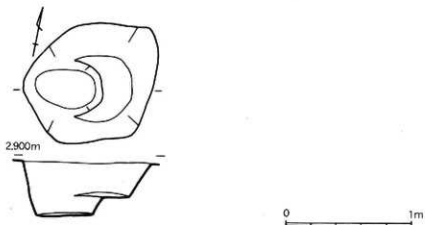
### (170) 土 壙173

土壙173(第532図)は土壙171や土壙172と同様に、調査区南端にあり、溝2の西側に位置する。厩館2南西部外側から本土壙のある位置にかけての部分は、建物や土壙などの遺構が密集する。これらの部分は、調査区中央の溝5、溝4、溝3がある位置に比べると標高が高く、溝に沿う部分では遺構密度が低いのに対し、標高の高い調査区南端では遺構が密集する。

土壙は不整形を呈するもので、長さ1.0m、幅0.9mを測る。深さは0.25~0.45mを測る。土壙内からは若干の土器片などが検出されたが、時期を明らかにすることはできなかった。



第531図 八坂中遺跡土塼172



第532図 八坂中遺跡土塼173

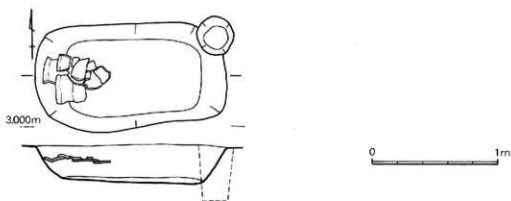
### (171) 土塼174

土塼174（第533図）は、調査区の南端近くにあり、溝2の西側に位置する。すぐ南側に隣接して土塼172が、また北側に隣接して土塼175がある。

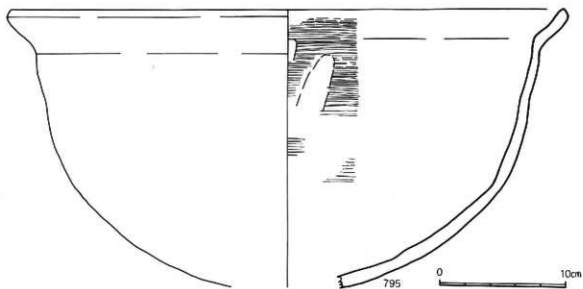
土塼の平面形は長方形で、東西方向に長軸をもつ。その規模は長さ1.5m、幅0.85mを測る。深さは0.25～0.3mで、床面は西から東にむかい緩やかに傾斜する。土塼内からは土鍋が割られた状態で検出された。これら土鍋片は土塼の西端中層に集中しており、意図的に置いたようにもみえる。土塼は形態的にみて土塼蓋の可能性もあり、そうした場合、頭部などを何らかの理由で意識的に覆ったとも考えられる。12世紀後半か。

#### ・出土遺物

795（第534図）は土鍋である。復元口径43.8cmを測るもので、半球形の体部をもち、底部は丸底である。口縁部は体部から短くくの字状に折れるが、やや内湾気味である。12世紀後半のものか。



第533図 八坂中遺跡土坑174



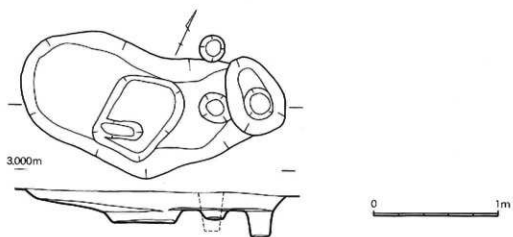
第534図 八坂中遺跡土坑174出土土器

### (172) 土 坑175

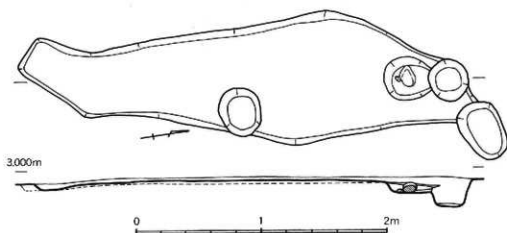
土坑175(第535図)は、調査区南端近くにあり、溝2の西側に位置する。すぐ南側に隣接して土坑174がみられる。土坑は不定形を呈し、柱穴とも重複する。その規模は、長さ2.0m、幅1.0mを測る。深さは検出面から0.1~0.2mで、床面には高低差がみられる。土坑内からは若干の土器片が検出されたのみである。図示できるようなものはなかったが、内黒土器や白磁などがあり、12世紀代に位置付けられる。

### (173) 土 坑176

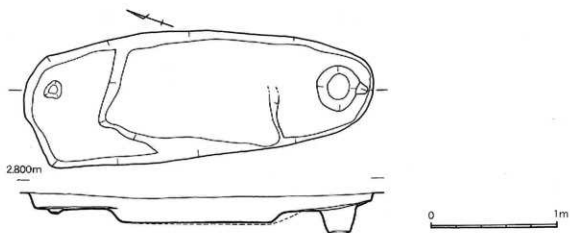
土坑176(第536図)は、調査区南端近くにあり、土坑162の南側に位置する。土坑は南北に長い溝状を呈し、長さ3.7m、幅0.4~1.0mの規模をもつ。深さは、深い部分で0.05mと極めて浅い。いくつかの柱穴と重複するが、床面は平坦である。本土坑の北側には、溝1が南北方向にのび、土坑162と重複した部分で途切れている。本土坑は位置的に溝1の延長上にあることから、形態的な状況とも考え併せ、溝1の残影であると推定される。よって、溝1は本来さらに南までのびていたことが分かる。出土遺物はないが、溝1と同じ14世紀であろう。



第535図 八坂中遺跡土壙175



第536図 八坂中遺跡土壙176



第537図 八坂中遺跡土壙177

(174) 土 壙177

土壙177 (第537図) は、溝2の西側に隣接するように位置する。土壙は楕円形を呈するもので、長さ2.75m、短径1.0mの規模を測る。深さは検出面から0.1~0.2mで、床面には高低差が認められる。遺構内からは若干の上器片が出土したのみであるが、13~14世紀代に位置付けられるであろう。

・出土遺物

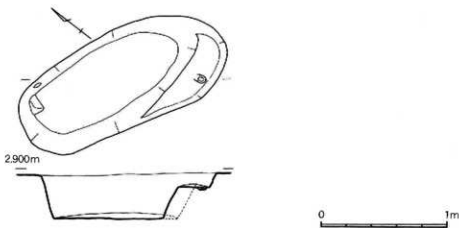
796 (第538図) は土師質土器小皿で、体部はシャープに立ち上がる。口径から13~14世紀代のものが。

(175) 土 壙178

土壙178 (第539図) は、調査区中央の東端近くに位置する。土壙の平面プランは楕円形を呈する。その規模は、長さ1.7m、短径0.7mを測る。深さは検出面から0.1~0.35mで、土壙内の北東部分で階段状になる。遺構内からはわずかに土器片が出土したのみであるが、12世紀代に位置付けられる。

・出土遺物

797 (第540図) は土師器碗で、内外面にヘラミガキがみられる。12世紀代か。



第539図 八坂中遺跡土壙178



第540図 八坂中遺跡土壙178出土土器

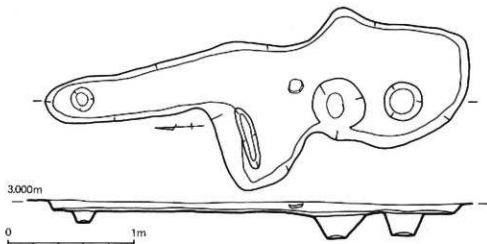
(176) 土 壙179

土壙179 (第541図) は、調査区中央の東寄りに位置する。土壙は南北に長い溝状を呈するもので、部分的に不定形を呈する。また、いくつかの柱穴と重複する。その規模は南北3.35m、東西0.35~1.05mを測る。深さは検出面から0.05mと浅いが、床面は平坦である。土壙内からの遺物は少なく、若干の上器片が出土したのみであ

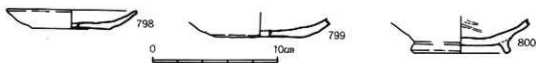
る。それらから、12世紀初前後に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第542図）のうち、798は上師質土器小皿である。底部は糸切りと思われ、体部は緩やかに立ち上がる。799は内黒土器杯で、内面にはミガキがある。800は内黒土器椀である。以上は、12世紀初前後のものであろう。



第541図 八坂中遺跡土壌179



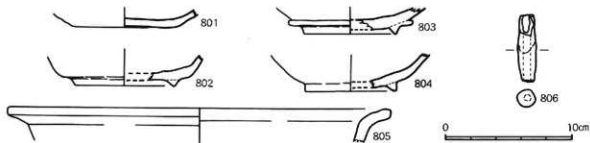
第542図 八坂中遺跡土壌179出土土器

(177) 土 塙180

土塙180（第544図）は、調査区中央の東端近くに位置する。土塙の南約10mには、周溝器1がある。土塙は不定形を呈し、長さ2.9m、幅1.5～2.2mを測る。深さは検出面から0.2～0.25mで、床面は平坦である。土塙内からは、礫のほかに土器片が出土した。12世紀代の所産か。

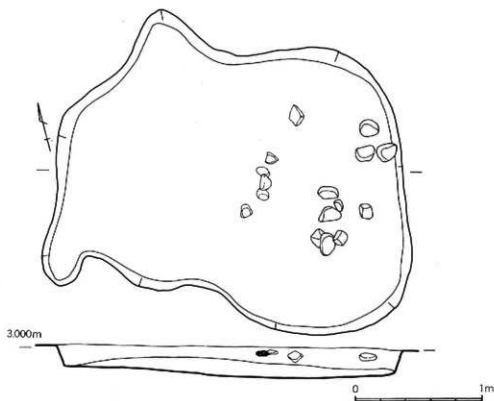
・出土遺物

出土遺物（第543図）のうち801は土師質土器杯である。802は土師器椀で、外底部に糸切り痕が残る。体部は下部で屈曲する。803、804は内黒土器椀である。803は底部ちかくに鈎状の突出が付く。高台はいずれも断面三角形である。805は土鍋。806は土鏝である。以上は12世紀代のものであろう。



第543図 八坂中遺跡土塙180出土土器

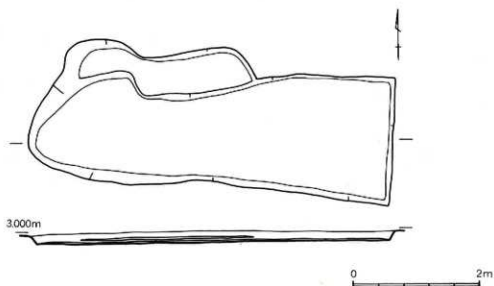




第544図 八坂中遺跡土壇180

(178) 土壇181

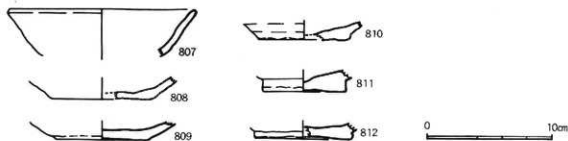
土壇181(第545図)は調査区中央の東端近くにあり、土壇180と同溝壑1の間に位置する。土壇は東西に長く、東側は方形基調で、西側は楕円形基調をなす。その規模は、長さ5.8m、幅1.7~2.2mを測る。土壇内からの出土遺物は土器片が主体で、それらから時期は11、12世紀に位置付けられる。



第545図 八坂中遺跡土壇181

・出土遺物

出土遺物（第546図）のうち807～810は上師質土器である。807は口縁部資料で、復元口径14.6cmを測る。808は底部糸切りで、体部は斜方向に立ち上がる。809は底部は糸切りと思われ、板状圧痕が残る。やはり体部は斜方向に立ち上がる。810は底部ヘラ切りの可能性もある。811は円盤状高台をもつ十師器胸である。底部には糸切り痕が残る。812は内黒土器胸で、底部は円盤状高台を呈する。以上、全体として11、12世紀のものであろう。



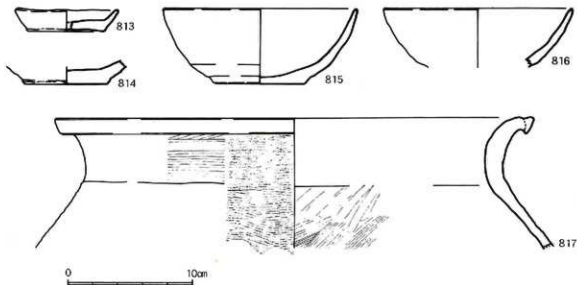
第546図 八坂中遺跡土壌181出土土器

(179) 土 壌182

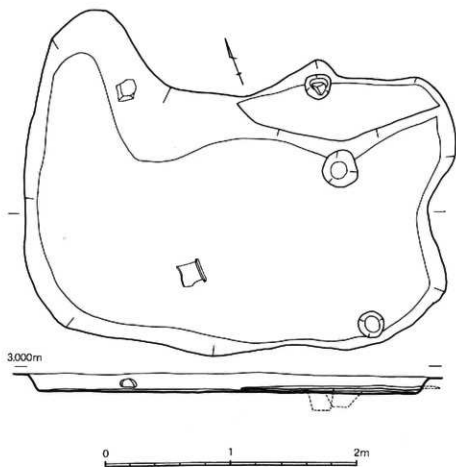
土壌182（第548図）は、溝3のすぐ西側に位置する。溝3は溝4の延長と思われるが、途中で途切れている。溝3が本来西に伸びていれば本土壌と重複するはずであるが、本土壌が切られた状況は認められない。よって、溝3がこの部分で切れていたか、本土壌が溝3を切っているものと理解される。土壌は不定形を呈し、長さ3.4m、幅2.05～2.5mを測る。深さは検出面から0.15mで、床面は平坦である。土壌内からの出土土器から、14世紀前半に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第547図）のうち、813は上師質土器小皿である。13～14世紀代であらう。体部の立ち上がりは急で、復元口径8.2cmを測る。814～816は東国東型瓦器胸である。816は底部を欠くが、814、815はいずれも底部は糸切りの平底である。13世紀後半～14世紀初である。817は東播磨の須恵器甕である。



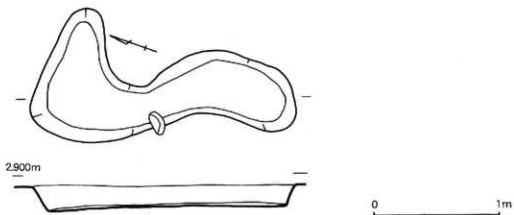
第547図 八坂中遺跡土壌182出土土器



第548図 八坂中遺跡土壘182

(180) 土壘183

土壘183 (第549図) は、溝3が途切れた位置の南東側にある。土壘は不定形で、長さ2.1m、幅0.35~1.0mを測る。土壘の時期は13~14世紀代である。



・出土遺物

818（第550図）は東国東型瓦器碗で、底部は糸切りの平底である。13世紀後半～14世紀初のもの。



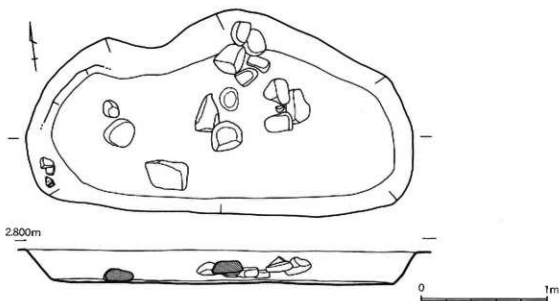
第550図 八坂中遺跡土壌183出土土器

(181) 土 塚184

土塚184（第551図）は、調査区中央の東端に位置する。土塚の規模は長辺3.05m、短辺1.6mで、深さは検出面から0.25mである。土塚内からは礫と共に土器片が検出されており、それらから13～14世紀に位置付けられる。

・出土遺物

出土遺物（第552図）のうち819は土師質上器杯で、14世紀代のもの。820は土師質上器小皿で、12世紀代のものか。821は東国東型瓦器碗で、13世紀後半～14世紀初のものである。



第551図 八坂中遺跡土塚184



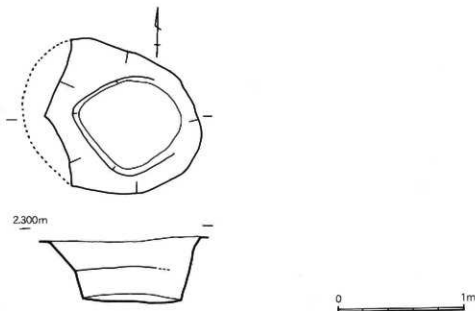
第552図 八坂中遺跡土塚184出土土器

### (182) 土 壙185

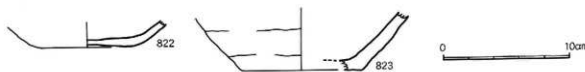
土壙185 (第553図) は、調査区中央の東端近くに位置する。土壙164と重複しており、土壙164に切られる。土壙は木束構門形を呈していたものと考えられ、長径は推定で1.45m、短径1.1mを測る。深さは検出面から0.45mである。土壙内からは上器片がわずかに出土したが、それらから13、14世紀以降と推定される。

#### ・出土遺物

出土遺物 (第544図) のうち822は上師質土器杯で、12世紀代。823は瓦質土器こね鉢で、13、14世紀以降。



第553図 八坂中遺跡土壙185



第544図 八坂中遺跡土壙185出土土器

### (183) 土 壙186

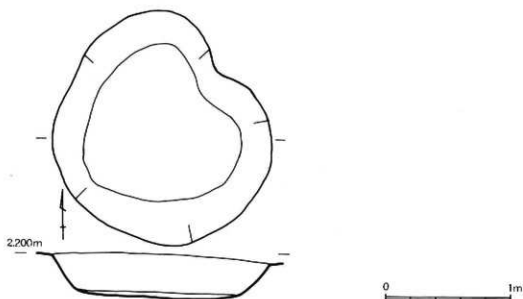
土壙186 (第555図) は、調査区東端に位置する。土壙は門形基調を呈するものの、一部不定形をなす。その規模は径1.5~1.8m、深さ0.35mを測る。また、床面は平坦である。土壙内からは口立った出土遺物はなく、遺構の時期は不明である。

### (184) 土 壙187

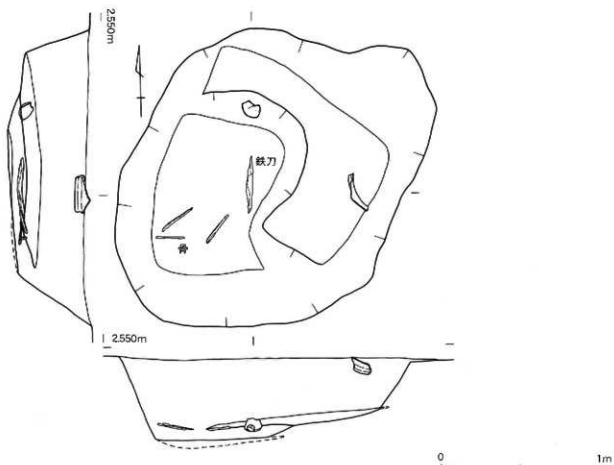
土壙187 (第556図) は、溝1と溝4により画される一角に位置する。この一角の溝4に近い部分には遺構がほとんどみられず、土壙187はほぼ単独で見られる。

土壙は門形基調を呈するが、全体としてやや不定形気味である。その規模は径1.7~1.9mを測る。深さは検出面から0.4~0.55mで、東側が階段状になる。

土壙内については、中層から上層にかけ川原石が充填していた。これらの礫は図化できなかったが、径0.1~

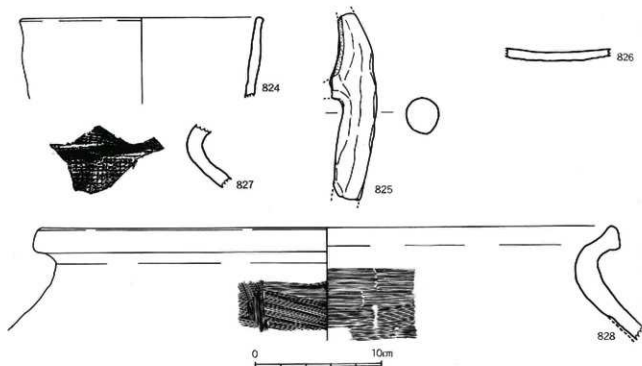


第555図 八坂中遺跡土壌186

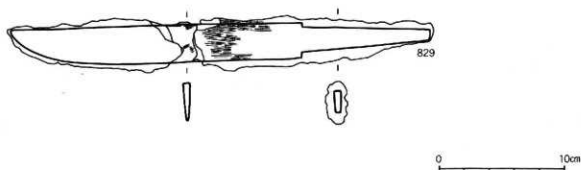


第556図 八坂中遺跡土壌187

0.3mほどのものであった。当初は、糞などを廃棄するための廃棄土層と考えていたが、下層にいたり骨と鉄刀を確認した。鉄刀は完形品で、竹と同レベルで検出された。骨は脚部と思われるが、他の部位は確認できなかった。骨の残存状態は必ずしも良好ではなく、粉状を呈していた。その形状と大きさから人骨であろうと判断したが、その確度は低い。本遺跡における土壌層からの人骨出土状況を見ると、多くの場合頭骨は残存しており、脚部の



第557図 八板中遺跡土壌187出土土器



第558図 八板中遺跡土壌187出土鉄製品

骨の残り具合から考えて、本土塚において頭部がまったく確認できないのは当初からなかった可能性が高い。これが人骨とすれば異常な状態での埋葬と言うことができ、何らかの特殊な状況下によるものと考えざるをえない。本土塚の時期は14世紀と思われる。

・出土遺物

出土遺物（第557、558図）のうち、824～826は土鍋である。このうち825は土鍋と思われるが、口径20cmにみたない小型品で、体部が直立し口縁にいたる。内外面ともナデ調整で、時期は不明である。825は土鍋の脚である。826は土鍋の底部である。外面には格子目タタキと思われるものがみられる。14世紀以降か。

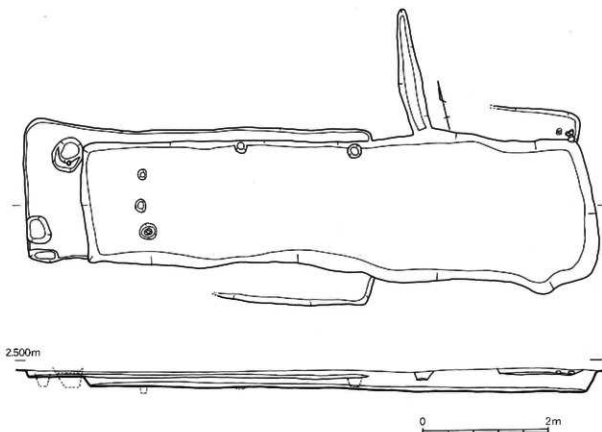
827は須恵器甕の頸部である。外面には格子目タタキがみられるもので、龜山坑であろう。828は瓦質の甕で、内外面にはハケメが施される。13、14世紀のものであろう。

829は鉄刀である。全長33.2cm、刃部長23.0cmを測る。

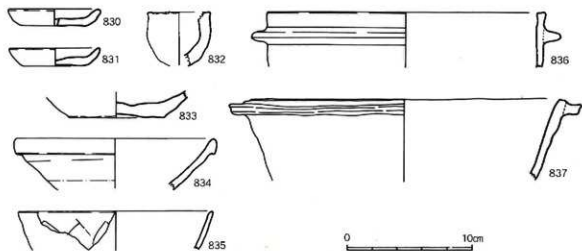
(185) 土 壙188

土壙188（第559図）は、調査区中央の東端に位置する。

土壙は長方形を呈するものである。複数の土壙が重複する可能性をもつが、調査時の上層観察ではその関係を明確にできなかった。土壙の規模は、現状で約9.0m、幅2.1~2.4mである。土壙内からは土器片などが確認されたが、いずれも流れ込みの状態である。



第559図 八坂中遺跡土壙188



第560図 八坂中遺跡土壙188出土土器



本遺構の時期は、14世紀代と思われる。

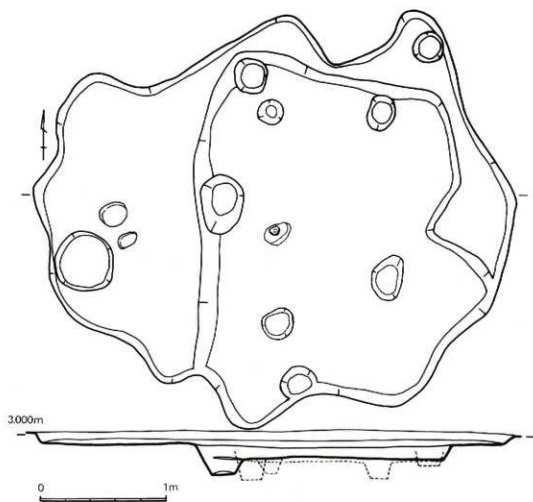
・出土遺物

出土遺物（第560図）のうち、830、831は土師質土器小皿である。復元口径が7.0～7.2cmで、14世紀代のものであろう。832は丸底を呈する小型の臺である。833は瓦器椀である。東国東型瓦器椀の平底を呈するもので、13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。834は白磁碗で、口縁が下縁をなす。12世紀前半のもの。835は龍泉窯系古磁碗で外面に蓮弁文がみられる。13、14世紀代のもの。836、837は土鍋である。いずれも口縁下に鈔が付されるものである。前者は口縁下1cm余に鈔がつくもので、13世紀前半か。後者は鈔が口縁端部ちかくに付くもので、13世紀後半から14世紀にかけてのものである。

(186) 上 墳 189

土墳189（第561図）は、居館3の東20数mに位置する。居館3の東側には、多くの建物や土墳が集中している。

土墳は不定形を呈する。現状で、東西3.8m、南北3.2mを測る。深さは、検出面から0.1～0.2mである。本土墳はふたつの土墳が重複しており、内側の一段深い土墳を外側のものが切っている。内側の土墳は長方形基調を呈するもので、一部不定形をなす。その規模は長さ2.8m、幅2.3mである。いくつかの柱穴がみられるが土墳に伴うものではないと思われる。土墳内からは出土遺物はいずれも土器片で、その多くは外側の土墳に伴うもの



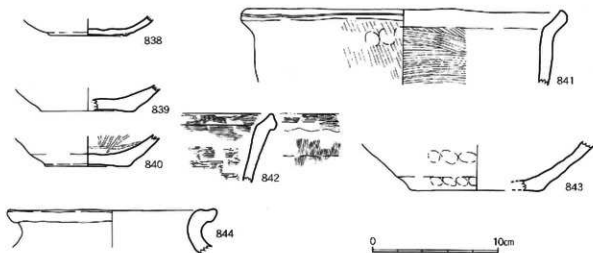
第561図 八坂中遺跡土墳189

と推定されるが、調査ミスから厳密に区分されていない。

時期は14世紀代である。

・出土遺物

出土遺物（第562図）のうち、838は豊前系の瓦器椀である。高台は低く、体部内外面にヘラミガキはみられない。14世紀初めを前後する時期であろう。839、890は東国東型瓦器椀である。いずれも底部糸切りで、平底を呈する。このうち840の内面にはヘラミガキがみられる。東国東型瓦器椀については、13世紀の後半段階で完全にヘラミガキが消えており、14世紀に位置付けられるこの段階でヘラミガキがみられるのは稀有な例である。841、842は土鍋である。841は口縁がくの字状に折れ、842は口縁がわずかに折れる。13、14世紀のものである。843はこね鉢、844は、東播系の須恵器甕を模倣したものと思われるもので、土師質にちかい。



第562図 八坂中遺跡土壌189出土土器

(187) 土 壙 190

土壙190（第564図）は、土壙189の北側に位置する。

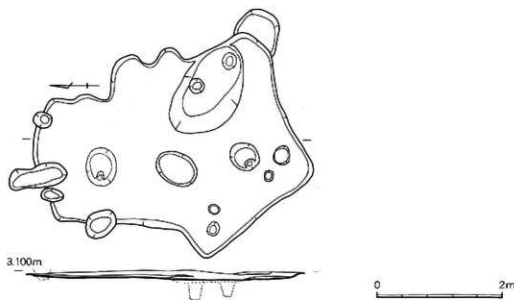
土壙は不定形を呈し、いくつかの柱穴が重複する。その規模は南北4.4m、東西3.6mである。深さは検出面から0.1mと浅く、床面は中央にむかい緩やかに深くなる。時期は13世紀後半以降と思われる。

・出土遺物

出土遺物（第563図）のうち、845は瓦器椀である。内外面ともヘラミガキがみられない。底部を欠くため厳密な時期は不明であるが13世紀後半以降。846は12世紀代の瓦器椀。847は土鍋。848は土鏝である。



第563図 八坂中遺跡土壙190出土土器



第564図 八坂中遺跡土壇190

(188) 土壇191

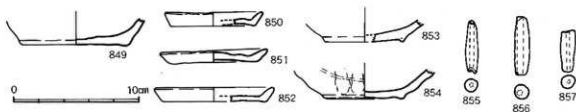
土壇191(第566図)は、居館3の東側約20mに位置する。この付近には大型の土壇が集中しており、本土壇の東側には土壇189、土壇190、土壇192などがみられる。

土壇の平面プランは、全体としては円形基調を呈するが、一部に不定形気味や直線的な部分があるなど、必ずしも整然としたものではない。規模は径2.8～3.0mを測る。また、深さは検出面から0.1～0.2mで、床面は平坦である。床面からいくつかの柱穴が確認されたが、木造構に伴うものであるかは不明である。北側の壁際には、0.2～0.3mの礎が床面に置かれている。土壇内からの遺物はいずれも土器片で、流れ込みの状態を確認された。本遺跡では、上層構造を伴うと推定されるものを壑穴とした。2基確認されているが、両者とも平面プラン長方形で整然とした感があった。これに比べると整然さを欠くため、ここでは土壇として扱った。

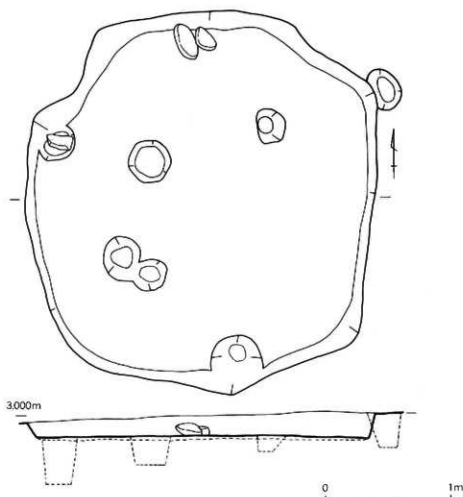
本遺構の時期は、14世紀初前後か。

・出土遺物

出土遺物(第565図)のうち、849は上師質土器片である。底部糸切りで、体部の立ち上がりは急である。850～852は上師質土器小皿である。いずれも糸切りの底部から、体部をシャープに立ち上げる。体部は短く、端部は尖り気味になる。復元口径は7.6～9.2cmである。14世紀初前後か。853、854は瓦器碗である。いずれも低い高台を付すもので、13世紀後半から14世紀にかけてのものか。855～837は土鐘である。855と857は欠損品であるが、856は長さ4.6cmを測る。



第565図 八坂中遺跡土壇191出土土器



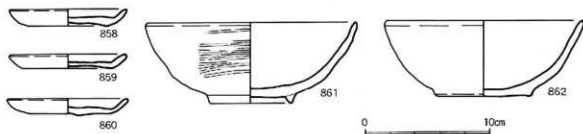
第566図 八坂中遺跡土坑191

(189) 土 坑192

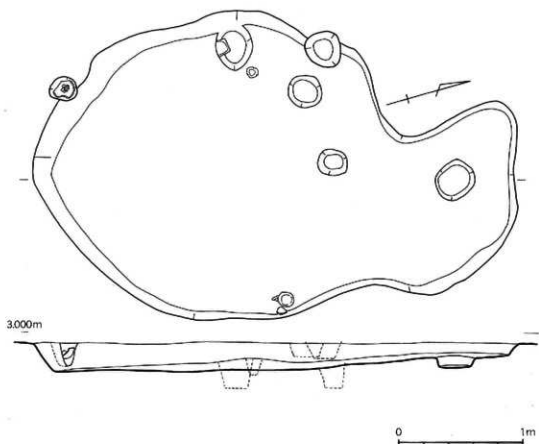
上層192 (第568図) は、厩館3の東側約20m余に位置する。土坑は不定形を呈し、長さ3.85m、幅1.0~2.45mの規模をもつ。深さは検出面から0.1~0.2mで、北から南に向かい深くなる。木遺構の時期は13世紀後半であろう。

・出土遺物

川上遺物 (第567図) のうち、858~860は上師質土器小皿である。いずれも底部は糸切りであるが、このう



第567図 八坂中遺跡土坑192出土土器



第568図 八坂中遺跡土壌192

ち858と860は体部を緩やかに立ち上げ、内湾気味に口縁にいたる。これに対し859は、ややシャープに立ち上げ、斜方向に引き上げる。口径は9.0～9.4cmで、12世紀代か。861は上鉢器輪である。体部外面はヘラミガキが認められるが、内面は磨滅のためミガキの単位が明確ではない。高台は断面三角形のものが付される。12世紀代である。862は東国東型瓦器輪である。底部糸切りの後、端部をわずかにつまみ出し高台状にする。13世紀後半か。

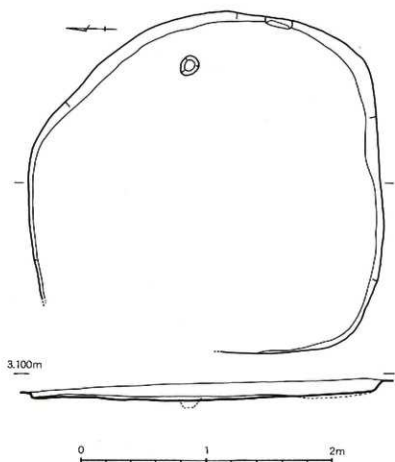
(19) 土 壌193

土壌193 (第570図) は、屈館2の東側20数mに位置する。上層は不整形を呈し、北西部が削平のため明確ではない。深さは検出面から0.05～0.1mで、床面は平坦である。出土土器は少量であるが、それらから本遺構の時期は13世紀後半以降と思われる。

・出土遺物



第569図 八坂中遺跡土壌193出土土器

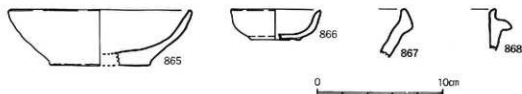


第570図 八坂中遺跡土壇193

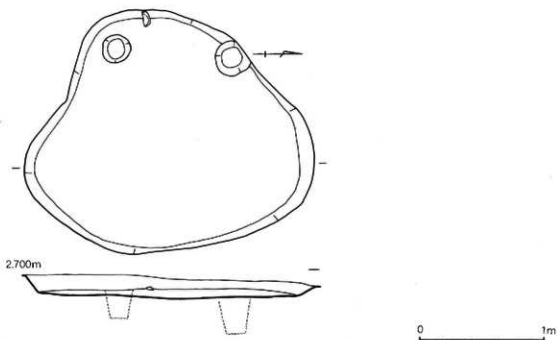
出土遺物（第569図）のうち、863は土師質土器杯である。器高の高いもので、糸切りの底部から直線的に口縁にいたる。壺前前半の地域では13世紀後半以降、器高の高い杯が確実に伴う。壺前前半や壺後では明確ではないが、壺前地域の例をあてれば、13世紀後半以降。864は器高の低いもので、体部内湾気味である。13世紀代のものか。

#### (191) 土壇194

土壇194（第572図）は、溝1と溝4に囲まれた部分に位置する。土壇は楕円形基調を呈する不定形で、長径2.3m、短径1.9mを測る。深さは検出面から0.15mで、床面はほぼ平坦である。土壇内からの遺物は小破片ばかりであるが、それらから13世紀後半～14世紀初に位置付けられる。



第571図 八坂中遺跡土壇194出土土器



第572図 八坂中遺跡土壇194

・出土遺物

出土遺物(第571図)のうち、865は土師質土器坏である。底部糸切りで、円盤高台状にやや厚めである。体部は内湾気味に口縁にいたる。13世紀後半～14世紀初のものか。866は小型の瓦器碗である。復元口径7.0cm、器高3.8cmと、口径に比し器高が低い。体部は下膨れの感じで、口縁がわずかに外反する。底部には低い高台が付される。高台などから13世紀後半から14世紀にかけてのものか。867は束播系こね鉢。868は口縁下に唾が付される土鍋で、鈎が口縁端部ちかくになる。13世紀後半か。

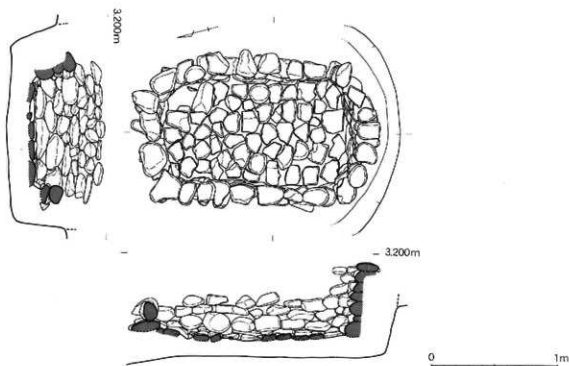
(192) 土 城195

土城195(第573図)は、調査区南東隅に位置する。石積みと石敷きが見られるもので、このような土壇は、本土壇と土壇196の2基のみである。

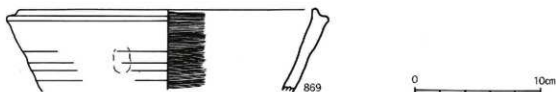
石積みを行う前の掘り方については、南端の部分しか確認できなかったが、楕円形基調を呈するものと思われる。掘り方は南北方向に長軸をとるもので、その規模は長さ2.3m、幅1.8mと推定される。掘り方の床面は石敷きの下0.15～0.2mで、石積みの最高所から測ると0.75～0.8mに達する。四周の壁の石積みは、0.2～0.3mの扁平な川原石を6～7段平積みしたもので、最も残りの良い部分で、石敷きの床面から0.55～0.6mである。下部ほど大きな石材を使っている。石積みの壁背後には、控え積みなどはまったく確認されていない。床面は、やはり0.1～0.25mの扁平な石を用い整然と敷きつめている。石積みの内法は長方形基調を呈し、長さ1.45m、幅0.8mを測る。本遺構の石については、礎及び石敷き部分とも火熱を受けた痕跡が残る。しかし、土壇内からはまとまった焼上などはほとんど確認されておらず、内部で何らかの火を燃やす行為を行った後に、きれいに片づけられたものと理解される。本遺構の性格については明確にしないが、同様なものが大分市利久保遺跡からも確認されている。遺物もほとんど検出されなかったが、遺物から14世紀代に位置付けられる。

・出土遺物

869(第574図)は土鍋で、口縁下の鈎が退化したものであろう。14世紀代に下るものと思われる。



第573図 八坂中遺跡土壇195



第574図 八坂中遺跡土壇195出土土器

### (193) 土壇196

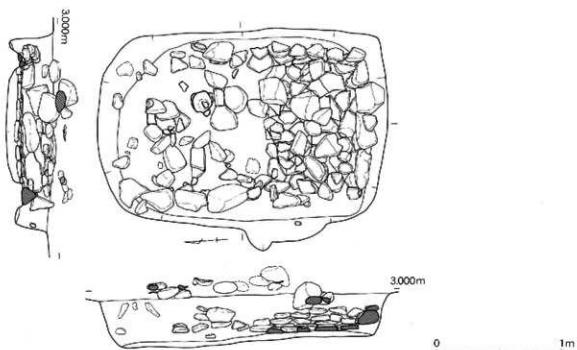
土壇196 (第575図) は、溝1の西側数mに位置する。土壇は、本来土壇195と同様な石積みや石敷きをもつものであったと思われるが、多くの部分は旧状を留めない。石積みが良好に残るのは、南辺から東辺にかけての部分である。3～4段分しか残っていないが、南辺では0.3mほどの大型の石材が基底部に利用されていることが分かる。これに対し、東辺では基底部でもあまり大型の石材は利用されていない。床面の石敷きについては、南壁から0.8mほどしか残存していない。石材については、本土壇も土壇195と同様に火を受けている。本土壇の掘り方は長方形基調を呈するもので、長さ2.2m、幅1.55mを測り、深さは検出面から0.4mである。

本遺構の時期は、14世紀前半に位置付けられる。

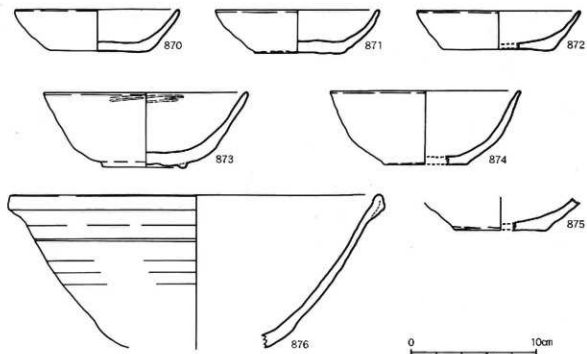
#### ・出土遺物

870～872は土師質土器である。870、872は体部が斜方向に直線的にのびる。これに対し、871は底部がやや円盤高台状を呈し、体部が内湾気味に口縁にいたる。以上は14世紀初前後のものであろう。873～875は瓦器である。このうち873は、糸切りの後押し出しがなされ、底部に低い高台が付される。体部に内外面には不鮮明ながらハラミガキがみられる。13世紀後半か。874、875は東国東型瓦器椀で、底部は糸切りの平底である。13世紀後半～14世紀初。876は東播磨系の須恵器こね鉢で、口縁が下縁状を呈する。





第575图 八坂中遺跡土壇196



第576图 八坂中遺跡土壇196出土土器